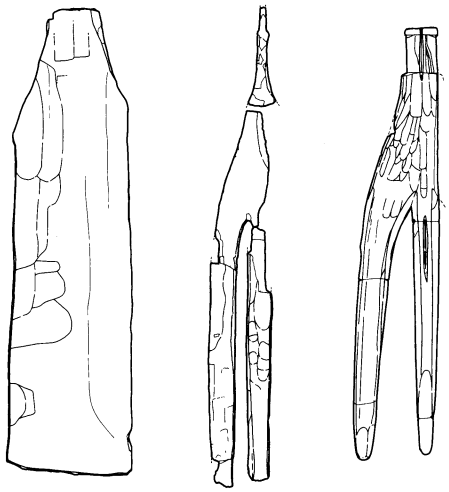
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(57)

—九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ—

楠元・城下遺跡



2003年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

自然流路 1 木製品出土状況

楠元遺跡出土の木製品

序　文

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査は，西鹿児島駅緊急整備事業に伴う調査として平成５年に開始しましたが，諸般の事情で中断をし，平成８年度から再開しました。

建設計画地内の遺跡は鹿児島市から出水市まで21か所であり，関係機関との協議により，事前の記録保存調査を実施し，平成13年５月に全ての調査が終了しました。

本報告書は21か所の遺跡のうち川内市に所在する楠元遺跡・城下遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

楠元遺跡は縄文時代，弥生時代，古代・中世・近世の複合遺跡です。特に弥生時代の木製品が県内で初めてまとまって出土し，稲作を始めた人々の生活を知る上で重要な発見となりました。

楠元遺跡に居住した人々の縄文時代から近世までの多くの遺物は，当時の生活を偲ばせます。ここにその調査成果をまとめました。本報告書が県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただく一助となれば幸いです。

発刊にあたり，日本鉄道建設公団九州新幹線建設局をはじめ，ご協力をいただいた川内市の関係部局，関係諸機関，そして，調査に参加された方々に対し，厚くお礼を申し上げます。

平成15年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　井　上　明　文

報告書抄録

ふりがな	くすもと いせき
書　　名	楠元遺跡
副書名	九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	第Ⅵ集
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	57
編著者名	川口雅之・山元真美子・加藤ゆかり・東和幸・長﨑慎太郎
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4461　鹿児島県国分市上之段1175番地1
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査起因
楠元遺跡（くすもといせき）	鹿児島県川内市百次町楠元	462021	6-124	31°47′	130°19′42″	19990506～19991108	790㎡	九州新幹線鹿児島ルート建設

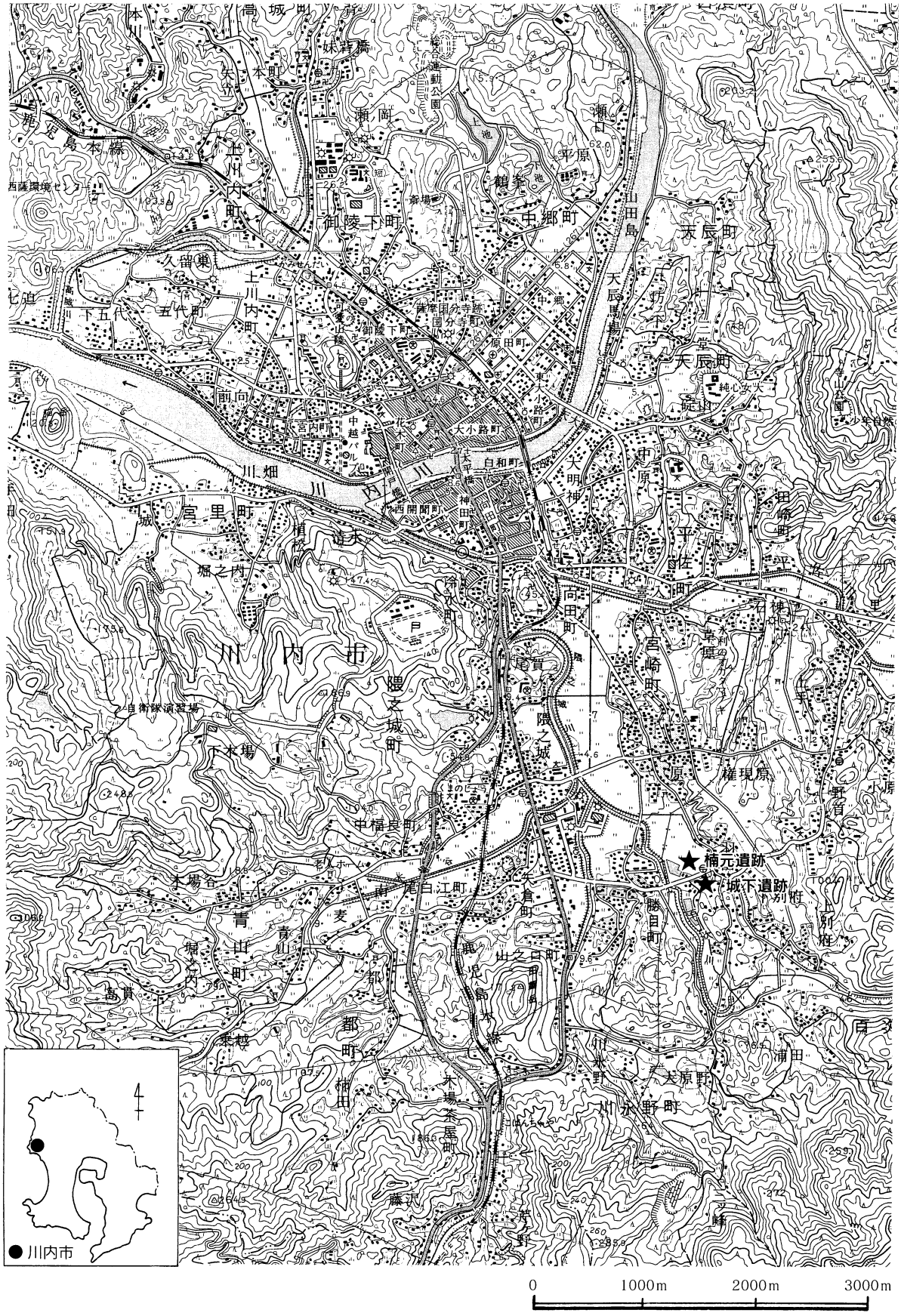
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
楠元遺跡	遺物散布地	縄文時代後期		市来式土器・北久根山式土器・鐘崎式土器・西平式土器・スクレーパー・石斧・礫器・磨石・敲石・石皿	
	集落跡	弥生時代終末～古墳時代初頭	竪穴住居跡2軒・屋外炉2基・土坑10基・溝状遺構2条・自然流路1条	中津野式土器・石斧・木製品（曲柄鍬・丸木弓・容器など）	
		古墳時代	自然流路1条	壺・高坏	
		古代・中世	自然流路3条 溝状遺構3条 集石遺構1基	土師器・白磁	
		近世	溝状遺構1条 自然流路1条	薩摩焼・磁器・染付	パンケース220箱

報告書抄録

ふりがな	しろしたいせき
書　　名	城下遺跡
副書名	九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	第Ⅵ集
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	57
編著者名	川口雅之・加藤ゆかり・山元真美子
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4461　鹿児島県国分市上之段1175番地1
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査起因
城下遺跡（しろしたいせき）	鹿児島県川内市百次町城下	462021	6-199	31°46′56″	130°19′42″	19990902～19991206	470㎡	九州新幹線鹿児島ルート建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城下遺跡	遺物散布地	古墳時代・平安時代前期		土師器・須恵器	
		中世		土師器・青磁・陶器・白磁	
		近世		薩摩焼・平佐焼・伊万里焼・ガラス製品・ふいごの羽口・金属製品・土錘・古銭	パンケース15箱



遺跡位置図（1：50000）

例　言

1．本報告書は，平成11年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが日本鉄道建設公団九州新幹線建設局の受託事業として実施した九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本書に用いたレベル数値は，海抜絶対高に基づく。
3．遺物番号は通し番号とし，本文・挿図・図版の番号は一致する。
4．遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局　監修）2001年度版に従った。
5．本報告における執筆分担は以下の通り
　第１章（川口）
　楠元遺跡
　第１章　第１・２節（川口）
　　第３節　弥生時代の遺構（川口）・縄文土器（加藤）・石器（東）・弥生土器（山元）・木製品（川口）・古代・中世・近世の調査成果（川口）
　第３章（川口）
　第４章（川口・加藤・山元）
　城下遺跡（川口）
6．本報告書に掲載した遺物の縮尺はそれぞれの挿図内に提示してある。竪穴住居跡が60分の１，屋外炉・土坑が30分の１，溝状遺構が40分の１を原則とする。土器・土師器・陶器・染付は３分の１，石鏃・スクレーパーなどの剥片石器が５分の４，礫器・磨石が３分の１，木製品が４分の１，鉄製品が２分の１を原則とする。
7．遺物の実測・製図のうち，土器の一部と石器を九州文化財研究所，木製品を埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
8．本報告に使用した写真図版のうち，発掘調査の撮影は前田・川口が行い，遺物撮影については鶴田静彦・福永修一・横手浩二郎が行った。
9．縄文土器は鹿児島大学助教授本田道輝氏，弥生土器は同大学助教授中村直子氏の指導を受けた。木製品については東京都立大学助教授山田昌久氏，陶磁器については坊津町教育委員会橋口亘氏の指導を受けた。
10．木製品の樹種同定については鹿児島大学講師寺床勝也氏に依頼した。
11．遺跡周辺の地形については鹿児島大学教授森脇広氏の指導を受けた。
12．楠元遺跡のプラントオパール分析・花粉分析・放射性炭素年代測定・種子同定分析・ＤＮＡ分析・樹種同定分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し，分析結果を第２章に掲載した。
13．木製品・金属製品の保存処理，顔料の分析については鹿児島県立埋蔵文化財センター永濵功治が行った。
14．出土した遺物は報告書作成後，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し活用する予定である。

目　　次

第１章　発掘調査の経過
第１節　調査に至るまでの経過……1
第２節　調査の組織……1
第３節　調査の概要と調査経過……3
第４節　報告書作成業務の経緯……8
第５節　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要　…9
第２章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境　……12
第２節　歴史的環境　……13

楠元遺跡

第１章　発掘調査の成果
第１節　発掘調査の方法　……21
第２節　遺跡の層位　……22
第３節　発掘調査の成果　……26
1　縄文時代の調査成果　……26
2　弥生時代から古墳時代初頭の調査成果　……98
3　古墳時代の調査成果……214
4　古代の調査成果……215
5　中世の調査成果……219
6　近世の調査成果……221
第２章　同定・分析
第１節　楠元遺跡出土土器に付着した赤色 顔料について　……227
第２節　楠元遺跡の自然科学分析報告（H11）……228
第３節　楠元遺跡の自然科学分析報告（H14）……251
第４節　楠元遺跡の出土種子の分析結果について（H14）……257
第３章　遺跡の残存状況……262
第４章　発掘調査のまとめ……263

城下遺跡

第１章　発掘調査の概要
第１節　発掘調査の方法……323
第２節　遺跡の層位……324
第３節　発掘調査の成果……324
1　古墳時代の出土遺物……324
2　古代の出土遺物……324
3　中世の出土遺物……327
4　近世の出土遺物……329
第２章　遺跡の残存状況……336
第３章　発掘調査のまとめ……336

表　目　次

第１表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要　……9
第２表　周辺の遺跡一覧表　……17

楠元遺跡

第３表　円盤形土製品観察表　……65
第４表　縄文土器観察表……66～72
第５表　石器観察表　……95～97
第６表　１号竪穴住居跡柱穴計測表……103
第７表　２号竪穴住居柱穴計測表……106
第８表　１号竪穴住居跡出土土器観察表……109
第９表　２号竪穴住居跡出土土器観察表……110
第10表　１号竪穴住居跡出土石器観察表　……110
第11表　２号竪穴住居跡出土石器観察表　……110
第12表　炉跡１出土土器観察表　……116～117
第13表　炉跡１出土石器観察表　……117
第14表　炉跡２出土土器観察表　……117
第15表　土抗１出土土器観察表　……120
第16表　土抗出土石器観察表　……124
第17表　溝状遺構１出土土器観察表　……124
第18表　自然流路１出土土器観察表　……172～176
第19表　自然流路１出土石器観察表　……177
第20表　自然流路１出土木製品観察表……178～181

第21表　分類別弥生土器出土一覧表 ……194
第22表　溝状遺構２出土土器観察表……206～209
第23表　溝状遺構出土石器観察表 ……209
第24表　溝状遺構２出土木製品観察表……210～211
第25表　自然流路２出土遺物観察表 ……214
第26表　自然流路３出土遺物観察表 ……217
第27表　自然流路４出土遺物観察表 ……217
第28表　溝状遺構３遺物観察表 ……221
第29表　溝状遺構４・５観察表 ……221
第30表　自然流路５出土遺物観察表 ……221
第31表　自然流路６出土遺物観察表 ……224
第32表　溝状遺構６遺物観察表 ……224

同定・分析

第33表　試料の一覧及び分析試料 ……228
第34表　放射性炭素年代分析結果 ……231
第35表　珪藻分析結果 ……232
第36表　花粉分析結果 ……235
第37表　植物珪酸体分析結果 ……236
第38表　種実同定結果 ……238
第39表　試料表一覧及び分析試料 ……239
第40表　放射性炭素年代測定結果 ……252
第41表　種実同定結果 ……253
第42表　試料一覧 ……257
第43表　遺跡一覧表 ……265
第44表　木製品出土遺跡 ……269

城下遺跡

第１表　出土古銭観察表……333
第２表　出土土器観察表……333～335

挿図目次

第１図　楠元遺跡トレンチ配置図　１……4
第２図　楠元遺跡トレンチ配置図　２……5
第３図　遺跡の位置及び周辺遺跡図 ……16

楠元遺跡

第４図　グリッド配置図 ……21
第５図　土層柱状模式図 ……22
第６図　土層断面図 ……23
第７図　遺構配置図 ……27
第８図　縄文後期土器出土状況 ……29
第９図　縄文土器分類模式図（１）……30
第10図　縄文土器分類模式図（２）……31
第11図　縄文土器分類模式図（３）……32
第12図　縄文土器分類模式図（４）……33
第13図　縄文土器　Ⅰ類 ……35
第14図　縄文土器　Ⅱa類（１）……36
第15図　縄文土器　Ⅱa類（２）……37
第16図　縄文土器　Ⅱb-1類（１）……39
第17図　縄文土器　Ⅱb-1類（２）……40
第18図　縄文土器　Ⅱb-1類（３）・Ⅱb-2類（１）……41
第19図　縄文土器　Ⅱb-2類（２）……43
第20図　縄文土器　Ⅱb-2類（３）……44
第21図　縄文土器　Ⅱb-2類（４）……45
第22図　縄文土器　Ⅱb-2類（５）・Ⅴ類（１）……46
第23図　縄文土器　Ⅱc類……48
第24図　縄文土器　Ⅱd類（１）……49
第25図　縄文土器　Ⅱd類（２）……50
第26図　縄文土器　Ⅲ類 ……52
第27図　縄文土器　Ⅳ類・Ⅴ類（２）・Ⅵ類（１）……54
第28図　縄文土器　Ⅵ類（２）……55
第29図　縄文土器　Ⅶ類 ……56
第30図　縄文土器　Ⅷ類・Ⅸ類 ……58
第31図　縄文土器　Ⅹ類 ……59
第32図　縄文土器　Ⅺ類 ……60
第33図　縄文土器　底部Ⅰ・Ⅱ類 ……61
第34図　縄文土器　台付皿形土器（１）……62
第35図　縄文土器　台付皿形土器（２）……63
第36図　縄文土器　台付皿形土器脚部 ……64
第37図　縄文土器　円盤形土製品 ……65
第38図　縄文土器　（早期～晩期）……73
第39図　出土石器　１ ……75
第40図　出土石器　２ ……76
第41図　出土石器　３ ……78
第42図　出土石器　４ ……79
第43図　出土石器　５ ……80
第44図　出土石器　６ ……81
第45図　出土石器　７ ……82
第46図　出土石器　８ ……83
第47図　出土石器　９ ……84
第48図　出土石器　10 ……85
第49図　出土石器　11 ……86
第50図　出土石器　12 ……87
第51図　出土石器　13 ……88
第52図　出土石器　14 ……89

第53図　出土石器　15 ……90
第54図　出土石器　16 ……91
第55図　出土石器　17 ……92
第56図　出土石器　18 ……93
第57図　出土石器　19 ……94
第58図　弥生時代終末～古墳時代初頭遺構配置図 ……99
第59図　弥生土器分類模式図　1 ……100
第60図　弥生土器分類模式図　2 ……101
第61図　1号竪穴住居跡 ……102
第62図　1号竪穴住居跡出土土器 ……103
第63図　1号竪穴住居跡出土石器（1）……104
第64図　1号竪穴住居跡出土石器（2）……105
第65図　2号竪穴住居跡 ……106
第66図　2号竪穴住居跡出土土器 ……107
第67図　2号竪穴住居跡出土石器（1）……108
第68図　2号竪穴住居跡出土石器（2）……109
第69図　炉跡1 ……112
第70図　炉跡1　出土土器（1）……113
第71図　炉跡1　出土土器（2）……114
第72図　炉跡1　出土石器 ……115
第73図　炉跡2及び出土遺物 ……116
第74図　土坑1遺物出土状況 ……118
第75図　土坑1　出土土器 ……119
第76図　土坑1・土坑7　出土石器 ……121
第77図　土坑2～10 ……123
第78図　溝状遺構1及び出土遺物 ……125
第79図　自然流路1 ……128
第80図　自然流路1　出土土器（1）……131
第81図　自然流路1　出土土器（2）……132
第82図　自然流路1　出土土器（3）……133
第83図　自然流路1　出土土器（4）……134
第84図　自然流路1　出土土器（5）……135
第85図　自然流路1　出土土器（6）……136
第86図　自然流路1　出土土器（7）……139
第87図　自然流路1　出土土器（8）……140
第88図　自然流路1　出土土器（9）……141
第89図　自然流路1　出土土器（10）……142
第90図　自然流路1　出土土器（11）……143
第91図　自然流路1　出土石器（1）……145
第92図　自然流路1　出土石器（2）……146
第93図　自然流路1　出土石器（3）……147
第94図　自然流路1　出土石器（4）……148
第95図　自然流路1　出土石器（5）……149
第96図　自然流路1　出土石器（6）……150
第97図　自然流路1　出土石器（7）……151
第98図　自然流路1　出土石器（8）……152
第99図　抗列2（1）……154
第100図　抗列3（2）……155
第101図　抗列3（1）……157
第102図　抗列3（2）……158
第103図　抗列4（1）……159
第104図　抗列4（2）……160
第105図　抗列5 ……161
第106図　自然流路1　出土木製品（1）……163
第107図　自然流路1　出土木製品（2）……164
第108図　自然流路1　出土木製品（3）……165
第109図　自然流路1　出土木製品（4）……166
第110図　自然流路1　出土木製品（5）……167
第111図　自然流路1　出土木製品（6）……168
第112図　自然流路1　出土木製品（7）……169
第113図　自然流路1　出土木製品（8）……170
第114図　自然流路1　出土木製品（9）……171
第115図　溝状遺構2 ……183
第116図　溝状遺構2　出土土器（1）……186
第117図　溝状遺構2　出土土器（2）……187
第118図　溝状遺構2　出土土器（3）……188
第119図　溝状遺構2　出土土器（4）……190
第120図　溝状遺構2　出土土器（5）……191
第121図　溝状遺構2　出土土器（6）……192
第122図　溝状遺構2　出土土器（7）……193
第123図　溝状遺構2　出土石器（1）……195
第124図　溝状遺構2　出土石器（2）……196
第125図　溝状遺構2　出土石器（3）……197
第126図　溝状遺構2内杭（1）……199
第127図　溝状遺構2内杭（2）……200
第128図　溝状遺構2内杭（3）……201
第129図　溝状遺構2内杭（4）……202
第130図　溝状遺構2内杭（5）……203
第131図　溝状遺構2　出土木製品（1）……204
第132図　溝状遺構2　出土木製品（2）……205
第133図　A-12・13区出土石器・木製品 ……212
第134図　1地点遺構配置図 ……213
第135図　自然流路2・出土遺物 ……214
第136図　自然流路3・出土遺物 ……215
第137図　自然流路4　出土遺物 ……215
第138図　自然流路3　集石遺構 ……216
第139図　集石遺構 ……218
第140図　溝状遺構4・5　出土遺物 ……219
第141図　自然流路5　出土遺物 ……219
第142図　溝状遺構3及び出土遺物 ……220
第143図　溝状遺構4・5 ……222
第144図　自然流路6　出土遺物 ……224

第145図　溝状遺構６　出土遺物……224
第146図　溝状遺構６・自然流路６……225
第147図　模式柱状図及び分析層位……229
第148図　主要珪藻化石群衆の層位分布……234
第149図　主要花粉化石群衆の層位分布……236
第150図　植物珪酸体群衆の層位分布……237
第151図　遺跡の残存状況図……262

城下遺跡

第１図　グリッド配置図……323
第２図　基本土層柱状模式図……324
第３図　土層断面図……325
第４図　古墳時代・古代の出土遺物……326
第５図　中世の出土遺物（１）……327
第６図　中世の出土遺物（２）……328
第７図　近世の出土遺物（１）……330
第８図　近世の出土遺物（２）……331
第９図　出土古銭……332
第10図　遺跡の残存範囲……336

図版目次

楠元遺跡

図版１　楠元遺跡航空写真……273
図版２　上　調査前風景……274
下左　３地点土層断面
下右　２地点土層断面
図版３　台付皿……275
図版４　上　縄文土器出土状況……276
下　１号竪穴住居跡
図版５　上　２号竪穴住居……277
下左　２号竪穴住居跡土坑
下右　台石出土状況
図版６　上　炉跡１……278
下左　炉跡１炭化層・焼土
下右　炉跡１土器出土状況（No 578）
図版７　上左　杭列１出土状況（自然流路１）……279
上右　杭列５出土状況（自然流路１）
下左　曲柄又鍬出土状況
下右　曲柄又鍬未製品出土状況
図版８　上左　農具未製品出土状況（自然流路１）……280
上右　ひょうたん出土状況（自然流路１）
中　溝状遺構２遺物出土状況
下左　木製品出土状況（溝状遺構２）
下右　曲柄平鍬出土状況（溝状遺構２）
図版９　上左　溝状遺構２完掘……281
上右　杭出土状況（溝状遺構２）
下　溝状遺構２土層
図版10　上　A-11～12区樹根出土状況（弥生～古墳）……282
下　石組遺構（古代）
図版11　上　溝状遺構３（中世）……283
下左　作業風景（自然流路１掘り下げ）
下右　作業風景（木製品取り上げ）
図版12　上　溝状遺構６……284
下　溝状遺構６石列
図版13　縄文土器　１……285
図版14　縄文土器　２……286
図版15　縄文土器　３……287
図版16　縄文土器　４……288
図版17　縄文土器　５……289
図版18　縄文土器　６……290
図版19　縄文土器　７……291
図版20　縄文土器　８……292
図版21　縄文土器　９……293
図版22　縄文土器　10……294
図版23　縄文土器　11……295
図版24　縄文土器　12……296
図版25　縄文土器　13……297
図版26　出土石器　１……298
図版27　出土石器　２……299
図版28　出土石器　３……300
図版29　出土石器　４……301
図版30　出土石器　５……302
図版31　出土石器　６……303
図版32　出土石器　７……304
図版33　出土石器　８……305
図版34　出土石器　９……306
図版35　出土石器　10……307
図版36　出土石器　11……308
図版37　出土石器　12……309
図版38　出土石器　13……310
図版39　自然流路１　甕……311
図版40　自然流路１　壺……312
図版41　自然流路１・溝状遺構２　出土土器（甕・壺）……313
図版42　上左　溝状遺構２　壺……314
上右　自然流路２　壺

中　溝状遺構２　小型丸底壺
下　自然流路１・溝状遺構２出土土器（匙状土製品他）
図版43　自然流路１・溝状遺構２出土土器（鉢・高坏）……315
図版44　上　曲柄鍬……316
下　曲柄鍬・横鍬
図版45　上　農具未製品……317
下左　鍬の柄
下右　丸木弓
図版46　上　掘り棒……318
下　用途不明木製品
図版47　上左　容器……319
上右　ひょうたん
下　建築材・用途不明木製品
図版48　上左　用途不明木製品……320
上右　建築材の可能性がある木製品
下　加工のある杭（溝状遺構１）

城下遺跡

図版１　上　土層断面図……339
下　３トレンチ遺物出土状況
図版２　上　遺物出土状況……340
下　作業状況
図版３　出土遺物（１）……341
図版４　出土遺物（２）……342
図版５　上　出土遺物（３）……343
下　出土遺物（４）
図版６　上　出土遺物（５）……344
下　出土遺物（６）

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会文化課（以下県文化課）は，埋蔵文化財の保護・活用を図るため，工事着手前に当該事業区内における埋蔵文化財の有無，およびその取り扱いについて各開発関係機関と協議し諸開発との調整を行っている。

日本鉄道建設公団九州新幹線建設局は，九州新幹線鹿児島ルート建設を計画し，事業予定区の埋蔵文化財の有無について，県文化課（平成８年４月以降文化財課）に照会した。それを受けて県文化課は，平成４年12月に事業予定地内の分布調査を実施し，楠元・城下遺跡を含む21か所の遺跡を確認した。同年，西鹿児島駅舎建設予定地にある武遺跡については，遺跡の確認・全面調査が行われた。

その後，日本鉄道建設公団九州新幹線建設局，県教育庁文化財課，県立埋蔵文化財センターの三者で遺跡の取り扱いについて協議を行い，平成８年度から平成10年度にかけて用地取得等条件の整った遺跡から確認調査を行うと共に，川内市大原野遺跡，前畑遺跡の全面調査を行った。さらに，確認調査の結果を受けて平成11年度から平成13年度にかけて本格的な全面調査が実施された。

確認調査は鹿児島県教育委員会が日本鉄道建設公団からの受託事業として実施し，発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが行った。

楠元・城下遺跡の確認調査は平成10年9月17日～30日，平成10年11月4日～24日の２回に分けて行った(実働23日)。確認調査で多くの遺構・遺物が確認されたために，楠元遺跡の全面調査を平成11年５月６日～同年11月８日（実働110日），城下遺跡の全面調査を平成11年９月２日～同年12月６日（実働36日）に行った。

第２節　調査の組織

１　確認調査の組織（平成10年度）

事業主体	日本鉄道建設公団九州新幹線建設局		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永　和人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	尾﨑　進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	立神　次郎
発掘調査担当者	〃	主任文化財主事	彌榮　久志
	〃	文化財主事	前田　誠
調査事務担当者	〃	主事	前屋敷裕徳
	〃	主事	政倉　孝弘

2　全面調査の組織（平成11年度）

事業主体　日本鉄道建設公団九州新幹線建設局

調査主体　鹿児島県教育委員会

調査企画調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永　和人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木　友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸﨑　勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	立神　次郎
	〃	主任文化財主事	彌榮　久志
発掘調査担当者	〃	文化財主事	前田　誠
	〃	文化財調査員	川口　雅之
調査事務担当者	〃	主事	今村孝一郎
	〃	主事	溜池　圭子
現地指導	鹿児島大学	教授	上村　俊雄
	〃	教授	森脇　広
	〃	助教授	本田　道輝
	〃	助教授	中村　直子
	東京都立大学	助教授	山田　昌久

3　報告書作成事業の組織（平成14年度）

事業主体者　日本鉄道建設公団九州新幹線建設局

調査主体者　鹿児島県教育委員会

調査企画調整　鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上　明文
調査企画者	〃	次長兼総務課長	田中　文雄
	〃	調査課長	新東　晃一
	〃	課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮　久志
担当者	〃	文化財研究員	川口　雅之
	〃	文化財調査員	加藤ゆかり
	〃	文化財調査員	山元真美子
調査事務担当	〃	総務係長	前田　昭信
	〃	主査	脇田　清幸
	〃	主事	池　珠美
現地指導	鹿児島大学	助教授	本田　道輝
	〃	助教授	中村　直子
	〃	講師	寺床　勝也

第３節　調査の概要と調査経過

１　確認調査の概要

楠元・城下遺跡の確認調査は平成10年９月17日～30日，同年11月４日～24日に実施した。以下各遺跡ごとに概略を述べる。

楠元遺跡（第１図）

楠元遺跡の確認調査は合計10か所のトレンチを設定して実施した。北側の１トレンチでは遺物包含層は確認されなかった。また，２トレンチの北側は削平されていたことから全面調査の北限を２トレンチまでとし，南限については古墳時代の樹木が多く残っていた６トレンチまでとした。７～10トレンチでは自然木が少量出土したのみで遺構・遺物は確認されなかった。10トレンチについては橋脚工事の必要性が生じたため，トレンチを拡張して橋脚部分の全面調査を行った。２・３トレンチでは自然流路・屋外炉跡が検出され，４～６トレンチでは弥生時代から古墳時代を中心とする多量の遺物が出土した。特に６トレンチでは古墳時代の樹木が良好な状態で残っておりトレンチを拡張して調査を行った。しかし，湧水が多く土層の堆積が複雑であったことや，13区～18区までが未買収であったことなども関連して，各トレンチ間の土層の対応関係や遺物包含層の時期特定，遺構と遺物の出土状況などが検討されないまま全面調査へと移行した。このことは，全面調査に大きな支障をきたすこととなった。

城下遺跡（第２図）

用地買収の遅れや，調査工程の都合により，トレンチを設定し掘り下げることができたのは調査区の北端に位置する１トレンチと２トレンチの２か所のみであった。調査の結果，２枚の遺物包含層が確認され，古代から近世の土師器，陶磁器類が出土した。また，Ⅳ層上面で溝状遺構の可能性のある落ち込みを検出した。

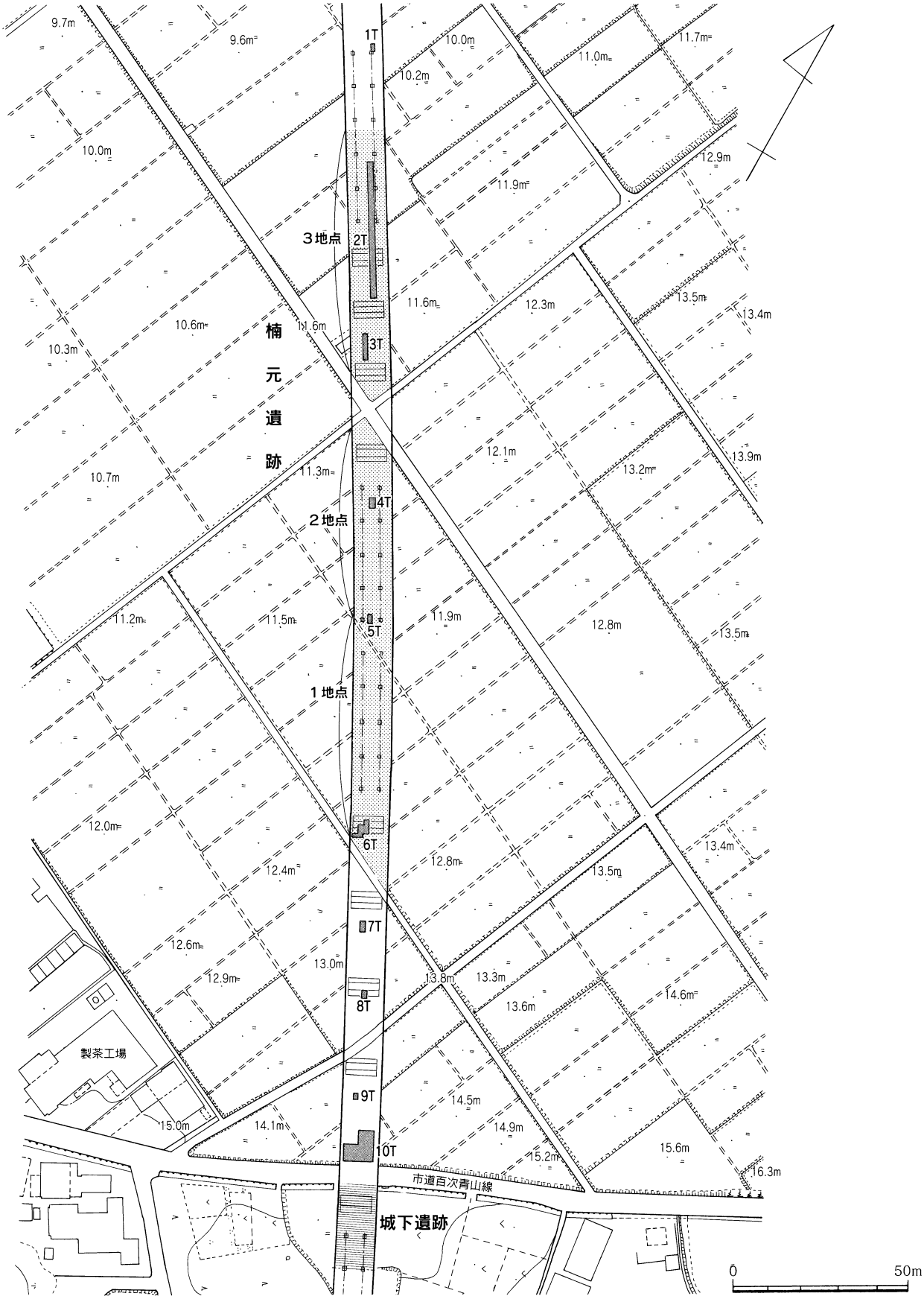
平成10年度の確認調査によって遺跡の様相を知ることができたのは北端の一部であった。当初，城下遺跡の調査対象面積は3,300㎡であり，正確な全面調査範囲を確定するための確認調査及び，全面調査は平成11年度に実施した。

２　全面調査の概要

楠元遺跡の全面調査は平成11年５月６日～11月８日，城下遺跡の調査は同年９月２日～12月６日に行った。以下各遺跡の調査について概略を述べる。

楠元遺跡（第１図）

調査区は現道によって３地区にわかれており，南から１地点，２地点，３地点と呼称して調査を行った。現道部分は周辺住民の農業用道路であり，橋脚の高架部分になることから調査範囲から除外した。発掘調査は橋脚工事の都合により３地点の南部と２地点から開始した。３地点の調査中に工事工程が急きょ変更し１地点の調査を開始することとなった。２地点では予想以上に大量の木製品・土器が出土し，調査期間の延長が必要となり，８月４日に日本鉄道建設公団九州新幹線建設局と協議を行った。協議の結果，当初７月31日であった調査終了日が10月31日に変更となった。１地点の調査終了後，調査途中であった３地点の調査を



第１図　楠元遺跡トレンチ配置図（１：1600）

第２図　城下遺跡トレンチ配置図　（１：1500）

行い，最後に２地点の調査を行った。調査時に未買収地が残っていたことや，開発部局との調整が十分になされなかったことから調査地点が虫食い状態に分かれ発掘調査が難航した。このことは，確認調査からの課題であった各地点の土層の堆積状況の把握や遺構検出を困難なものとした。さらに，調査期間が農繁期と重なり水田の水が調査区に集中して流れ込んだことから，水田が干上がってしまう問題が起きた。このような問題点は確認調査と全面調査の担当者間で十分な打ち合わせが行われなかったことが大きな原因の１つである。今後，沖積平野に立地する遺跡の調査方法，調査期間などについては十分に検討する必要がある。

城下遺跡（第２図）

城下遺跡の調査は，９月２日から開始した。平成10年度の確認調査が不十分であったので，まず遺跡の範囲を把握するための確認調査を楠元遺跡の全面調査，上野城跡の確認調査と並行して行った。平成10年度に調査を行った地点より南側に７本の確認トレンチを設定し調査を行った。トレンチを設定した地点は，シラス台地の縁辺部に形成された谷部に立地し，現在は水田として利用されていた。谷底に位置する４～８トレンチは，３ｍ以上掘り下げても基盤層まで到達することはできなかった。また，３トレンチの南側はシラス台地の末端部にあたるが削平のために遺構は検出されなかった。各トレンチの調査の結果，３トレンチより南側は遺構が存在せず，遺物の出土が希薄なことから全面調査は２トレンチより以北を中心に行った。全面調査は，楠元遺跡の調査終了を待って11月10日から開始した。後半は，上野城跡の全面調査と並行して調査を行い12月６日に調査を終了した。

楠元・城下遺跡の調査経過は日誌抄により以下略述する。

平成11年度

５月６日（木）～５月28日（金）

楠元遺跡　楠元遺跡発掘作業開始。発掘機材搬入。ＡＢ－12・13区，19・20区の表土を重機で剥ぎ，グリッド杭を設定する。ＡＢ－10～13区Ⅲ層を掘り下げ自然木を検出する。用水路設置部分を先行して調査を行う。ＡＢ－19区で近世の溝状遺構６を検出後，掘り下げ，写真撮影，図面作成を行う。３地点の表土剥ぎを行う。梅雨に入り室内作業が増える。

６月１日（火）～７月２日（金）

楠元遺跡　１地点を掘り下げ木材の検出を行う。雨が多く作業がはかどらない。３地点のＩｃ層から市来式土器，中津野式土器が大量に出土し，平板実測で取り上げを行う。確認トレンチで検出されていた屋外炉の写真撮影を行う。Ⅱ層上面で遺構検出を行い，自然流路３・溝状遺構３を掘り下げる。６月17日に自然流路３の調査方法について担当者間で検討した結果，遺物を１ｍメッシュを設定し取り上げ，周辺の遺構検出を行う。１地点の未買収地（ＡＢ－15～18区）にトレンチを設定し遺物包含層の状況を確認する。ＡＢ－20～24区（２地点）の表土剥ぎを行いⅡ層以下を掘り下げ。溝状遺構６，自然流路６を完掘し図面作成を行う。

７月５日（月）～７月28日（水）

楠元遺跡　１地点の未買収地（ＡＢ－13～18区）に先行トレンチを設定し掘り下げ，遺

物包含層を確認する。２地点（ＡＢ－20～23区）のⅣ層上面まで表土を剥いだ後掘り下げを行う。木製品大量に出土し，７月９日横鍬が出土する。３地点の遺構精査を行う。住居跡や土坑などを検出し，写真撮影後掘り下げを行う。

8月2日（月）～9月3日（金）

楠元遺跡　１地点（ＡＢ－14～18区）のⅢ層，Ⅳ層の掘り下げを開始。ＡＢ－17・18区周辺で市来式土器がまとまって出土し実測を行う。２地点（ＡＢ－21・22区）に先行トレンチを設定し遺物の出土状況を確認する。３地点の住居跡，土坑の掘り下げ，実測，航空写真撮影を行う。台風接近のために土手の補強や排水溝の整備を行う。８月４日に日本鉄道建設公団と楠元遺跡・城下遺跡・上野城跡の調査日程について協議を行う。楠元遺跡の調査期間については10月31日までの延長が決定する。８月３・４日に鹿児島大学本田道輝助教授，中村直子助教授の現地指導を受ける。８月11日鹿児島大学上村俊雄教授の現地指導を受ける。８月26日鹿児島大学森脇広教授の指導を受ける。８月24日南日本新聞社園田記者の取材を受ける。雨天が多く作業がはかどらない。

城下遺跡　９月２日発掘調査開始。雑草を払い境界杭を探す。重機で３トレンチ（２×40ｍ）の表土剥ぎを行う。

9月6日（月）～10月1日（金）

楠元遺跡　１地点ＡＢ－17・18区の市来式土器取り上げ。１地点の自然流路２，掘り下げ。２地点の溝状遺構２出土木製品実測，取り上げ。３地点の遺構調査終了後，埋め戻しを行う。上野城跡の確認調査を行う。台風によりプレハブ，仮設トイレ損壊のため復旧作業を行う。 雨が多く作業がほとんどできなかった。

城下遺跡　３トレンチⅠｂ・Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。近世の遺物が出土し，写真撮影・平板実測を行う。Ⅳ層上面で遺構精査を行う。遺構は確認されず。

10月4日（月）～10月28日（金）

楠元遺跡　１地点（ＡＢ－13区）の樹根，木製品の図面作成，取り上げ。土層断面図作成。２地点溝状遺構２，自然流路１の木製品実測，取り上げ。

城下遺跡　３トレンチ拡張区Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。遺物取り上げ後，遺構精査を行う。３トレンチ東壁沿いに下層確認トレンチを設定し掘り下げる。遺構，遺物は検出されず。遺跡の南側への広がりを調べるために確認調査開始。４～６トレンチを設定し，表土を重機で剥ぎⅡ層を掘り下げる。

11月1日（月）～12月6日（月）

楠元遺跡　２地点（ＡＢ－21・22区）溝状遺構２遺物取り上げ，実測終了。11月８日楠元遺跡の調査終了。

城下遺跡　上野城跡の全面調査開始のために２か所に分かれて作業を行う。３～６トレンチ遺物取り上げ，写真撮影。新たに７トレンチを設定し掘り下げ開始。３～７トレンチ土層断面実測，写真撮影後埋め戻し。確認調査が終了し全面調査開始。Ａ・Ｂ－１～３区表土剥ぎを行い，Ⅱ・Ⅲ層を掘り下げる。Ａ・Ｂ－１～３区，Ⅳ層上面で遺構精査。北壁，東西ベルト土層断面図作成。発掘機材を移動し，城下遺跡の調査終了。

第４節　報告書作成業務の経緯

１　報告書作成業務の経緯

楠元・城下遺跡の発掘調査報告書作成に伴う整理作業については，平成11年度の発掘調査中に，遺物の水洗・注記作業を並行して行い，本格的な整理作業を平成14年度に実施した。整理作業は鹿児島県立埋蔵文化財センターで平成14年４月～平成15年３月まで行った。

２　発掘調査および報告書作成業務従事者

（１）発掘作業従事者

有川シヅエ　岩月幸朗　内田政美　小倉司郎　勝田良巳　木佐貫千秋　窪園和子　坂下キヨ子　坂下富夫　坂元明美　﨑山晋太郎　﨑山智富　下野弘子　白石ミツ子　高江幸子　竹添富士子　武元又男　竹本美代子　立野芳明　時任由美子　中城洋子　中野愛子　中園尚美　新原尚子　新原康子　濵瀬昭子　濱田作也　原喜三郎　前原ヒデ子　宮本里見　盛岡イクコ　森木幸子　山﨑絹子　山﨑恵子　若松育子

（２）報告書作成従事者

市薗厚子　稲満和子　岩切孝子　大田雅子　児玉恭子　田代祐子　原口節子　日高千津子　堀ノ内鈴子〈50音順〉

発掘作業員の皆さん

整理作業員の皆さん

第５節　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要

九州新幹線鹿児島ルートの発掘調査は、平成５年５月12日より鹿児島市武遺跡から開始し、平成13年５月30日川内市京田遺跡で全てを終了した。

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査は、一覧表のとおりである。

第１表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要（１）

番	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物
1	茶屋ノ元	出水市境町	H10.7.2～3 H11.3.2～4 計5日間	240㎡	彌榮久志 前田　誠	縄文早期 縄文前期	塞ノ神式，轟式，磨製石斧，黒曜石
2	鳥越平	出水市境町	H8.8.5 計1日間	55㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層は確認されず。
3	鐙・安原	出水市安原町	H11.2.17,18 H11.2.24,25 H11.3.9 計5日間	60㎡	彌榮久志 前田　誠	縄文晩期 平安時代	研磨土器，黒曜石，土師器
4	榎木田 見入来 大坪	出水市美原町	H11.1.5～3.9 H11.5.6 ～12.3.31 H12.5.1 ～13.3.27 計420日間	27,247㎡	彌榮久志 前田　誠 濱崎一富 東　和幸 高岡和也 上床　真 森田裕之	縄文晩期 平安時代 鎌倉時代	縄文晩期埋設土器38基，平安期竈付竪穴住居跡1軒，掘立柱建物跡9棟，焼土遺構3基，溝状遺構30条，波板状遺構27条，上加世田式，入佐式，黒川式，土師器，須恵器，玉縁白磁滑石製石鍋，刻書土器鉄製品，石鏃，磨製石斧，打製土掘り具石匙，石皿，磨石，凹石，異形石器，玉類（勾玉6，管玉25，丸玉5，平玉3，垂飾品1，剥片46，未製品30）
5	宮野脇	出水市上鯖淵	H11.2.19 H12.2.20 計2日間	48㎡	彌榮久志 前田　誠 東　和幸	時代不明	包含層確認されず。
6	松ヶ迫	出水市武本	H8.8.6 計1日間	12,5㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層確認されず。
7	小松	出水市武本	H10.7.8～10 計3日間	108㎡	彌榮久志 前田　誠	縄文早期	土器，黒曜石
8	前畑	川内市城上町	H9.11.1 ～H10.3.31 H10.5.6 ～H10.12.24 H11.12.13 ～H12.2.24 計195日間	11,800㎡	長野眞一 上床　真 彌榮久志 前田　誠 宮田栄二 平木場秀男	旧石器時代 縄文早期 縄文前期 縄文後期 中世 近世	土坑(陥し穴含)25基，集石4基，竪穴状遺構1基，五輪塔，大型掘立柱建物跡７軒，ナイフ形石器，細石刃核，吉田式，石坂式，轟式，石鏃，石斧，石皿，磨石，敲石，土師器，青磁，白磁，染付薩摩焼

第１表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要（２）

番	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物
9	計志加里	川内市中郷町	H11.7.1～8.27 H12.5.23 ～H13.3.26 計218日間	5,900㎡	宮田栄二 平木場秀男 樋渡将太郎	縄文早期 縄文後期 縄文晩期 弥生時代 古墳時代 平安時代 中世	竪穴住居1軒，掘立柱建物跡5棟，土坑墓3基，円形周溝状遺構1基，土坑5基，中世掘立柱建物跡2棟，古道，溝状遺構，早期押型文土器，曽畑土器，磨製石鏃，打製石斧，錐，ピエス，スクレイパー，磨石石皿，石匙，石鏃，砥石，土師器，須恵器，瓦，青磁，白磁，滑石製品，刀子，青銅製品，紡錘車
10	京田 （薩摩国分寺下）	川内市中郷町	H11.6.1～20 H12.5.8～6.6 H12.9.4 ～H13.3.24 H13.4.9～5.31 計191日間	5,900㎡	宮田栄二 上之園健二 平木場秀男 川口雅之 徳田有希乃 樋渡将太郎	弥生中期 平安時代 中世 近世	弥生期水田跡，土留め状遺構，杭列，ウケ跡，ドングリピット，古代水田跡，弥生土器，三又鍬，二又鍬，大足，一本梯子，横架材，網枠，曲物，土師器，須恵器
11	原田・大島	川内市東大小路町	H10.11.26 H11.5.6 ～H12.3.24 H12.5.7 ～H13.3.19 計275日間	1,960㎡	宮田栄二 平木場秀男 樋渡将太郎	縄文晩期 弥生中期 古墳時代 平安時代 中世	弥生期竪穴住居跡4軒，土坑1基，古墳期竪穴住居跡1軒，平安期竪穴住居跡31軒（竈付2軒），掘立柱建物跡2棟，土坑墓1，中世竪穴住居跡1軒，掘立柱建物跡1棟，畠跡，弥生期甕・壷，石包丁，磨製石鏃，古墳期成川式，須恵器，大刀剣，鉄鏃，平安期土師器，須恵器，瓦，越州窯青磁，緑釉，陶器，転用硯，帯金具，石製丸鞆，玉類，土錘，金環，青銅製鈴，鉄製品
12	鍛冶屋馬場 春田	川内市平佐町	H10.11.25 H11.9.1～9.27 H12.5.9～6.15 H12.9.1 ～12.27 計103日間	2,850㎡	彌榮久志 前田　誠 宮田栄二 平木場秀男 川口雅之 徳田有希乃	古代 中世 近世	古代鍛冶炉6基，土坑2基，竪穴住居跡1軒，掘立柱建物跡4棟，畠跡，炉跡7基，越州窯系青磁，陶器壷，土師器，鉄滓，古銭，中世青磁，鉄製品（鎌，鋤先，紡錘車，鉄鏃），近世薩摩焼，平佐焼，伊万里焼，土師器，羽口，鉄滓
13	楠元 城下	川内市百次町	H10.9.17～30 H10.11.4～24 H11.9.2～12.6 H11.5.6～11.8 計209日間	1,800㎡	彌榮久志 前田　誠 川口雅之	縄文後期 弥生 古墳	弥生～古墳期竪穴住居跡2軒，炉跡2基，土坑10基，溝7条，縄文早期押形文・市来式・西平式・北久根山式，弥生～古墳時代の土器，木製平鍬，又鍬横鍬，鍬の柄，掘り棒，丸木弓，容器，櫂状木製品
14	上野城跡	川内市百次町	H11.12.1 ～3.24 H12.5.1 ～H13.3.29 計316日間	19,400㎡	前田　誠 川口雅之 前野潤一郎 切通雅子 徳田有希乃 彌榮久志	旧石器 縄文 古墳 中世	中世掘立柱建物跡30棟，土坑墓3基，方形竪穴建物跡5軒，溝4条，古道1条，畠跡剥片先頭器，ナイフ形石器，押形文，石坂式，阿高式，土師器，石皿，敲石，凹石，石鏃，土師器，須恵器，白磁青磁，短刀，古銭，滑石製石鍋，中世陶器，鉄鏃

第１表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要（３）

番	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	主な遺構・遺物
15	大原野	川内市百次町浦田	H8.10.1～29 H9.11.1 ～H10.3.31 計171日間	2,815㎡	青崎和憲 中原一成 長野眞一 国生　誠 上床　真	旧石器 縄文早期 縄文前期	ナイフ形石器，細石器，吉田式，石坂式条痕土器，轟式，石鏃，石皿，磨石，敲石，石斧
16	東下原	日置郡東市来町養母	H10.10.27～29 H10.12.1～18 H11.3.12 計20日間	248㎡	彌榮久志 前田　誠	旧石器 縄文早期 古墳 古代	古代焼土付土坑，細石刃核，成川式，土師器
17	上ノ平	日置郡伊集院町下神殿四区	H11.2.26 H11.10.1～25 H12.11.14 ～H13.3.29 計92日間	2,328㎡	彌榮久志 前田　誠 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道	旧石器 縄文後期 中世	縄文竪穴住居跡5軒，集石4基，中世溝1条，細石刃核，指宿式，磨製石斧，石鏃
18	山ノ脇 石坂 西原	日置郡伊集院町郡	H11.5.6～24 H11.6.4～30 H11.11.1 ～H12.3.24 H12.5.1 ～11.13 計184日間	1,900㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文草創期 縄文早期 縄文中期 古墳 中世	集石（草創期1基，早期3基，中期3基）中世溝，農具埋納土坑，掘立柱建物跡12棟縄文早期土器，船元式，成川式，土師器陶磁器（中国南部），滑石製石鍋
19	梅落	日置郡伊集院町郡	H11.5.19～21 H11.6.14～17 H12.6.19 ～7.14 計24日間	340㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文早期	集石，塞之神式，スクレイパー
20	尾崎	鹿児島市	発掘調査せず				遺跡は工事に触れず残存
21	武ＡＢＣ	鹿児島市武一丁目	H5.4.12～5.25 H5.5.21～7.2 H5.12.6 ～H6.2.21 H６.３.９～30	9,104㎡	彌榮久志 倉元良文 鶴田静彦	縄文前期 縄文中期 弥生中期	古墳住居跡27軒，土坑18基，溝2条ピット30，近世溝9条，轟式，深浦式，春日式船元式，山之口式，成川式，
22	寿国寺跡	鹿児島市武二丁目	H11.5.24 ～6.11 H11.7.1～9.28 H12.5.8～6.13 計175日間		上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	近世	陶器，磁器，瓦，木製品，金属製品，寿国寺跡のはん池（門前池）跡。
23	前市野原	串木野市	H10.12.15 計1日間	22㎡	彌榮久志 前田　誠	時期不明	追加調査で挿入。 包含層は確認されず。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

１　川内市の地形

川内市は薩摩半島の北西部北緯31度49分，経度は東経130度19分に位置している。東シナ海に面し，川内川を有する川内市は，古代以来陸上・水産交通の要所であり，北薩地方の経済，商業の中心地である。川内市の地形的特徴は，三方を山地で囲まれた盆地状の地形をなし，その中央部に熊本県白髪岳に源を発し，九州でも有数の長流である川内川とその支流によって形成された沖積平野が広がる。この平野は川内平野，川内盆地と呼ばれ，山地・台地が多く平野の少ない南九州において，大口盆地，出水平野，肝属平野などと肩を並べる穀倉地帯である。行政的には北及び北東は紫尾山（標高1067ｍ）に続く出水山地で阿久根市・東郷町と，東は上床山地で樋脇町と，南は東西に連なる冠岳山地と高江山地を境に串木野市と接し，これらの山地は川内川が注ぐ東シナ海側に開けている。山地の麓には，盆地の北側から東側にかけて権現原台地や国分寺台地などの標高20～30ｍ程の低いシラス台地が発達し宅地や畑地として利用されている。台地の縁辺部にはシラス台地特有の浸食谷が複雑に発達し，急崖をなして沖積平野へと移行する。標高が低く平野に面しているこれらの台地上では薩摩国分寺跡など多くの重要な遺跡が発見されている。平野の中央部を，九州でも有数の長流である川内川が西流し東シナ海に注いでいる。川内川は白和町付近で大きく西に流れを変え，その両岸には天辰町から高江町にかけて長さ約８㎞に渡って自然堤防が形成されている。自然堤防が最も発達した大小路町，向田町周辺は現在の川内市街地の中心部である。近年の発掘調査によって，多くの遺跡が存在することが明らかとなり，古代以来，人々の活動の中心地であったことをうかがわせる。川内川は，河口付近で大きく川幅を広げ，その両岸には川内砂丘が発達し，川内市の特徴的な地形の一つとなっている。

川内川によって形成された大小路町，向田町付近の沖積平野の周辺には，北から高城川，高江川，平佐川，隈之城川などの支流によって，狭小な谷底平野が発達している。その中の１つに隈之城町，宮崎町，百次町に広がる隈之城平野がある。平野は，川内市の南部に位置し，東を権現原台地，西を高江山地から延びる平ノ山などの平坦な台地に挟まれ南北に細長く（平野の幅は約800ｍ）川内川方向に開けている。この平野を網流状に流れる百次川，勝目川，木場谷川は，合流して隈之城川となり，さらに下流で平佐川と合流して川内川へと注いでいる。これらの河川によって形成された隈之城平野は，川内市の中でも有数の米所であり，平野を望む周辺の台地には旧石器時代から近世にかけての多くの遺跡が発見されている。遺跡の多くは，隈之城平野の開発の歴史と相まって営まれてきたと考えられ，楠元・城下遺跡もその中の１つである。

（１）楠元遺跡の周辺地形（第３図）

遺跡は川内市百次町楠元に所在し，ＪＲ鹿児島本線川内駅の南約3.4㎞の位置にある。遺跡は隈之城平野の東端にあたる山間部よりに立地し，遺跡の約250ｍ西を流れる百次川によ

って形成された小扇状地に立地している。調査区周辺の標高は11m程で台地から百次川に向かって緩やかに傾斜している。調査区周辺は東側のシラス台地側から延びる扇状地礫層堆積以前に形成された台地が存在し地形に起状がみられる。台地の上層には扇状地礫層が，さらにその上位にはフラッドローム層が堆積し，ここの低地をつくる堆積物の基本構成となっている。台地を中心に微高地が形成され，その周辺に広がる扇状地礫層からは伏流水が豊富に湧き出ている。このような地理的特徴は遺跡の形成にも大きく影響しており，特に弥生時代においては，微高地上に居住域がその周辺の低地部には自然流路や溝跡が検出され当時の土地利用のあり方を考える上で重要である。調査区における地形については第３章２節で詳しく述べる。

（2）城下遺跡

遺跡は川内市百次町城下に所在し，ＪＲ鹿児島本線川内駅の南約3.6kmの位置にある。遺跡は権現原台地の南部に形成された浸食谷に隣接するシラス台地の末端部に位置し，台地が緩やかに傾斜をしながら扇状地へと移行する標高15m程の傾斜面に立地する。地形は南から北，つまり台地から平野へ緩やかに傾斜していくが，調査区の西側半分は谷部にあたるために西側へ落ちている。遺構検出面の地形は，後方の台地より供給されたシラスの２次堆積によって形成されている。調査区周辺における地形の傾斜はシラス堆積以前の礫層の地形に影響を受けていると思われる。

第２節　歴史的環境

肥沃な川内平野を有し，交通の要所でもあった川内市は古代以来，政治，文化，経済の中心地であった。川内という地名は，古代において薩摩国の設置に伴い薩摩国府が置かれた地域が川内川の内側にあるから「川内」，対岸に属する地域を「川外」と呼んだことに由来するといわれ，本県における奈良時代・平安時代の歴史を知る上で欠かすことのできない地域である。また，それだけでなく楠元町馬立遺跡において県内で初めて旧石器時代の尖頭器が発見され，本県における旧石器時代研究の出発点となった地域でもある。近年の発掘調査では，中福良町成岡遺跡，百次町上野城跡から剥片尖頭器，ナイフ形石器，細石刃などが発見され，川内平野における資料の蓄積が進みつつある。

縄文時代になると，西海岸沿いを介した交流の活発さを示す遺物が多くの遺跡で発見されている。川内平野において縄文時代の中心を担う時期は後期である。分布調査でも多くの遺跡が発見されており最も華やかな時期である。1987年に調査が行われた陽成町麦之浦貝塚では，在地の土器である市来式土器に伴って，鐘崎式土器や骨角器（かんざし，垂飾品）が発見された。貝塚に接して検出された土坑墓にはサメ歯で作られた耳飾りが副葬されており縄文時代の墓制を考える上で重要な発見となった。1999年に調査が行われた楠元遺跡でも多くの市来式土器に伴って北久根山式土器，鐘崎式土器が出土した。遺構は検出されなかったものの，多くの石器が出土し，平野部における遺跡の様相が明らかとなった。縄文時代晩期になると遺跡数は減少する。2001年に調査が行われた城上町計志加里遺跡では黒川式土器や晩期の壷形土器

が出土しており，弥生時代を担う人々の存在を確認することができる。

弥生時代前期は五代町若宮遺跡で石包丁，石鎌が採集されているのみで，弥生時代の開始期における遺跡はほとんどみつかっていない。川内地域において，遺跡数が増加してくるのは中期後半以降である。五代町外川江遺跡では後期の内向花文鏡が，麦之浦貝塚では後漢鏡片が出土し，弥生時代においても重要な地域であったことがうかがえる。百次町楠元遺跡では，終末頃の河川跡や溝跡から多くの木製品が出土し注目された。2002年に調査が行われた中郷町京田遺跡では，中期後半頃の水田跡や川跡に伴って多くの木製品が出土した。これらの数少ない平野部の調査は川内地域における稲作の広がりを示すだけでなく，南九州における稲作文化の解明に繋がる重要な発見となった。

古墳時代の川内地域は，川内川流域を中心に分布する在地性の強い地下式板石積石室墓と畿内系の高塚古墳が重複する地域である。上川内町横岡古墳では７基の地下式板石積石室墓が発見された。石室には鉄剣・刀子・鉄鏃・銅製鞘口などが副葬されていた。高塚古墳としては前方後円墳の可能性がある端稜，円墳の可能性がある安養寺丘古墳・船間島古墳などがあり，御釣場古墳・若宮古墳からは石棺が出土している。また，中福良町成岡遺跡では竪穴住居跡が19棟，麦之浦貝塚では16棟の竪穴住居跡がみつかっている。

大宝元年（701年）大宝律令が制定され，これにより中央・地方の官制が規定された。それを受けて翌702年には薩摩国府が御領町・国分寺町に広がる台地上に置かれた。また，奈良時代末には，薩摩国府に隣接する形で薩摩国分寺が建立され，薩摩国における政治，文化の中心地となった。1968～1970年の発掘調査によって国分寺跡の寺域や，伽藍配置などが明らかとなり，国分寺創建時の瓦を焼いた鶴峯窯跡の発掘調査も行われた。2002年に調査が行われた京田遺跡は，薩摩国分寺跡に隣接する低湿地に立地している。調査では，告知札と呼ばれる木簡が県内で初めて出土し，古代の地方行政のあり方や，土地支配を考える上で重要な発見となった。国分寺台地から谷を１つ挟んだ台地上に立地する計志加里遺跡では，方形周溝墓や，古道が発見され，薩摩国府・国分寺跡との関係が注目される。また，川内川北岸の自然堤防上に立地する大島遺跡では，多くの竪穴住居跡が発見され，高城郡の中心部を構成する集落の様相が明らかとなった。薩摩郡と呼ばれた川内川以南に目を移すと，中福良町西ノ平遺跡では多数の掘立柱建物跡が検出され薩摩郡の郡衙に比定されている。西ノ平遺跡の眼前に広がる隈之城平野は，条里制に関わる地名が残っていることから，条里地割が復元されている。大島遺跡の対岸に立地する鍛冶屋馬場遺跡では鍛冶炉が発見され多くの鉄製品が出土した。このように，川内平野全域で多くの遺跡の調査が行われ，様々な視点での社会復元が可能となった。

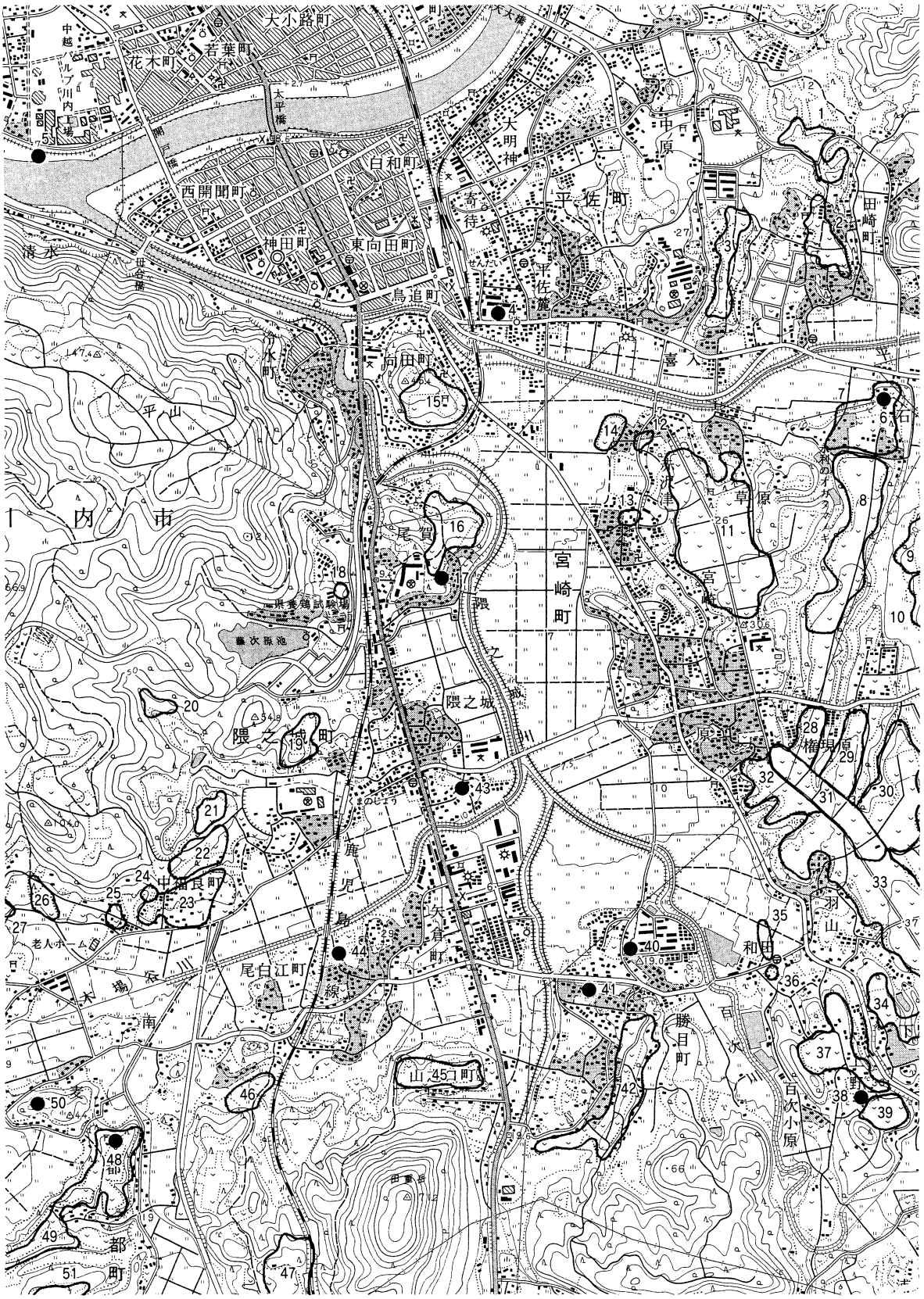
鎌倉時代から室町時代にかけては，島津氏，渋谷氏などの下向してきた鎌倉武士に，在地領主である武光，薩摩氏を加え川内は領地支配をめぐる争いが絶えることがなかった。これらの諸氏は南北朝の動乱を挟んで激しく争い，それに伴って多くの山城が築かれた。1999～2000年に上野氏の居城である上野城跡の調査が行われた。調査の結果，多くの掘立柱建物跡や方形竪穴建物跡，土坑墓などが発見され中世山城の解明に繋がることが期待される。これらの争乱は戦国時代末期の元亀元年（1570年）に島津氏による三州統一と同時に終息を向かえる。その後，天正15年（1587年）豊臣秀吉の島津氏追討に伴い，平佐城において激しい戦いが繰り

広げられた。この戦いは，豊臣側と島津側の和睦によって終わりを向かえ，大小路町太平寺には和睦石が残されている。このような争乱の歴史も川内の地理的な重要性を示しているといえる。

江戸時代には薩摩藩のもとで，商業が発達した。その中心地は向田町で，水陸交通の要衛として賑わった。天明年間（1781～1788年）には，北郷家の家臣伊地知団右衛門李甫が天辰町に磁器窯を開いた。焼かれた磁器は平佐焼と呼ばれ，県内各地に流通するほど隆盛を誇った。近年，新窯の調査によって窯の形態や作業小屋，石垣の存在が明らかとなっている。また，近世，近代において鍛冶も盛んに行われており，天辰町吉原遺跡，平佐町鍛冶屋馬場遺跡では鍛冶に関連する遺構が検出されている。川内川は平佐焼や鍛冶に関わる原料の搬入，製品の搬出にも積極的に利用され，商業だけでなく工業の発展にも大きな役割を担っていたのである。

参考文献

鹿児島県教育委員会『薩摩国府・国分寺跡』1975
鹿児島県教育委員会『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（28）1983
鹿児島県教育委員会『外川江遺跡　横岡古墳』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（30）1984
川内市教育委員会『麦之浦貝塚』1987
川内市教育委員会『川内市文化財基礎調査報告書（埋蔵文化財）』川内市埋蔵文化財報告書（2）1992
鹿児島県教育委員会『計志加里遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（38）2002
鹿児島県教育委員会『鍛冶屋馬場遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（39）2002
川内郷土史編さん会『川内市史　上巻』1976
川内市歴史資料館『川内市文化財要覧』1985
河口貞徳『日本の古代遺跡』38鹿児島 保育社 1988



第３図　遺跡の位置及び周辺遺跡図　（１：25000）

第２表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物	備考
1	原口	田原町原口・外園	台地	縄文～江戸	土器，須恵器，染付	
2	大明原	田崎町大明原	台地	縄文～江戸	土器，染付，石鏃	
3	喜入原	平佐町喜入	台地	縄文～江戸	土器，須恵器，染付	
4	平佐城	平佐町藤崎・庵ノ城・寄持	丘陵	鎌倉～戦国		空堀跡，土塁跡
5	田中原	陽成町田中原	河岸段丘	鎌倉～室町	土器，青磁，白磁	
6	石神城	永利町石神	丘陵	不詳		堀切跡
7	赤殿原	宮崎町赤殿原	微高地	古墳～室町	土器，土師器	
8	石神原Ｂ	永利町石神原	台地	古墳～室町	土器，須恵器，青磁	
9	若宮北	永利町西永崎・東永崎ほか	台地	縄文～室町	土器，須恵器，青磁，石鏃	
１０	若宮南	永利町若宮前・大堀ほか	台地	縄文～室町	土器，須恵器，青磁，石鏃	
１１	宮崎北原	宮崎町出居原・下原ほか	台地	古墳～室町	土器，須恵器，陶器	
１２	瀬戸口	宮崎町瀬戸口	台地下	縄文～平安	土器，土師器，石鏃	
１３	赤殿原	宮崎町赤殿原	微高地	古墳～室町	土器，土師器	
１４	赤沢津	宮崎町赤沢津	微高地	縄文～古墳	並木式土器，須恵器，石斧	
１５	日暮丘	向田町鉢本・諏訪平ほか	丘陵	古墳～江戸	土器，須恵器，染付	
１６	尾賀台	隈之城町尾賀原・古寺・後原ほか	丘陵	縄文～室町	土器，須恵器，染付石鏃	一部域貝塚
１７	栫城	隈之城町尾賀	丘陵	不詳		堀切跡
１８	池尻	隈之城町池尻	丘陵斜面	古墳	須恵器	
１９	西ノ口	隈之城町西ノ口	台地	古墳	土器	
２０	湯之谷	隈之城町湯之谷	丘陵	平安	土師器	
２１	上ノ原	中福良町上ノ原	台地	縄文～戦国	土器，須恵器，青磁，染付	昭和 55 年発掘調査
２２	西ノ平	中福良町西ノ平	台地	旧石器～江戸	土器，土師器，青磁，（細石刃核）	昭和 55 年～ 59 年発掘調査
２３	成岡	中福良町成岡	台地	旧石器～江戸	土器，須恵器，青磁，（細石刃）	昭和 55 年～ 59 年発掘調査
２４	金剛院跡	中福良町石原		鎌倉		層塔，宝塔
２５	立石Ａ	中福良町立石	丘陵	縄文～室町	土器，内黒土師器，青磁	

第２表　周辺の遺跡一覧表

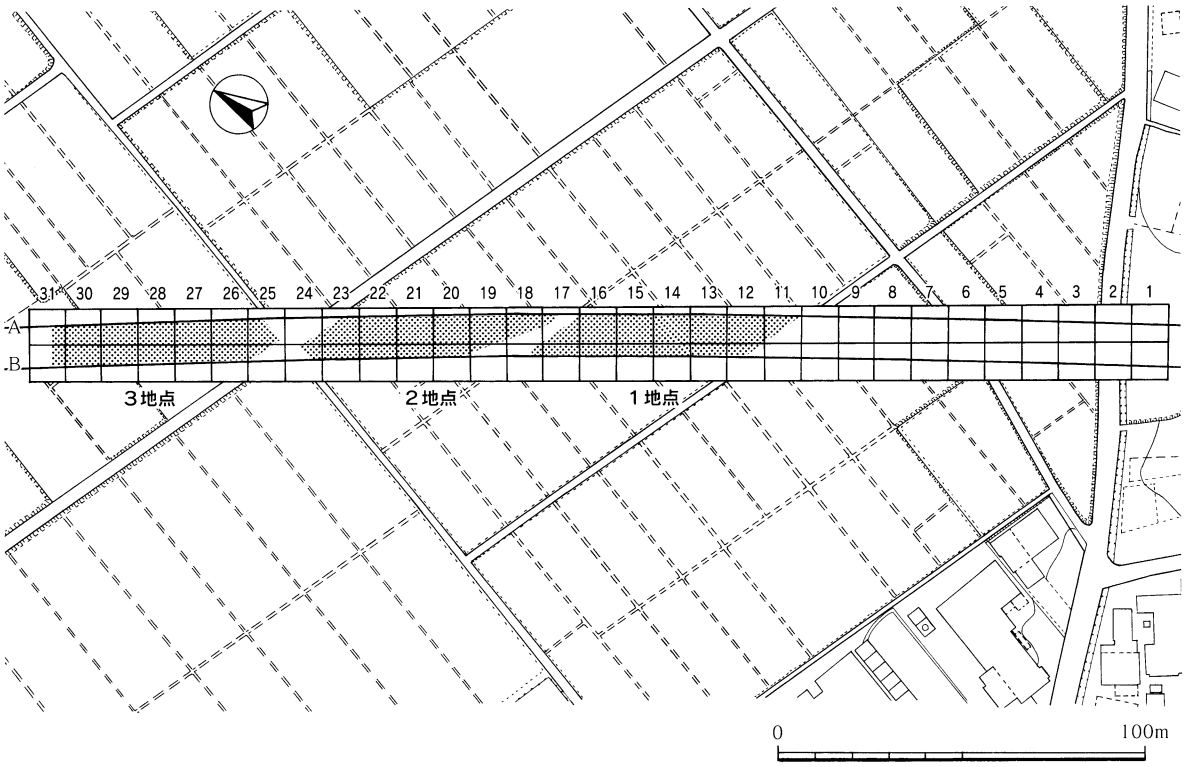
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物	備考
２６	立石Ｂ	中福良町立石	丘陵	縄文～室町	土器，石鏃，黒曜石	
２７	集	中福良町集	丘陵	縄文～室町	土器，陶器，黒曜石	
２８	上中原	永利町上中原	台地	古墳～室町	土器，土師器	
２９	権現原	平佐町権現原	台地	古墳～室町	土器，青磁，染付	
３０	鎮守原	宮崎町鎮守原	台地	古墳～室町	土器，須恵器，青磁	
３１	宮崎南原	宮崎町大堀	台地	古墳～室町	土器，須恵器，青磁	
３２	三本松	宮崎町三本松	台地	古墳～室町	土器，内黒土師器，陶器	
３３	百次原	百次町六反・森原ほか	台地	古墳～室町	土器，内黒土師器	
３４	別府原	百次町別府原	台地	古墳～室町	土器，須恵器，青磁，染付	
３５	楠元	百次町楠元	平野	縄文～近世	土器，木製品石斧，石鏃，磨石，陶磁器	平成 10 ～ 11 年発掘調査
３６	城下	百次町城下	台地末端部	縄文～近世	土器，土師器，須恵器陶磁器，鉄製品	平成 10 ～ 11 年発掘調査
３７	上野	百次町上野	台地	古墳～江戸	土器，染付	上野城跡
３８	上野氏三代の墓	百次町 2383 番地		鎌倉		宝塔，五輪塔
３９	大畠	百次町大畠	台地端	古墳～江戸	土器，青磁，染付	平成３年発掘調査
４０	小城	勝目町小城	平地	不詳		消滅
４１	栫城	勝目町栫	丘陵	不詳		「東ノ丸」・「東陣」などの字名あり
４２	勝目原	勝目町栫・集・勝目道・白木原ほか	台地	古墳～江戸	土器，須恵器，青磁，染付	
４３	二福城	隈之城町城	丘陵	鎌倉～戦国		曲輪跡
４４	矢倉城	矢倉町矢倉城	平地	不詳		消滅
４５	山口原	山之口町山口原	台地	古墳～江戸	土器，青磁，染付	
４６	四反畑	尾白江町四反畑	微高地	平安～室町	内黒土師器，青磁，染付	
４７	瀬戸山	木場茶屋町瀬戸山	丘陵	古墳～江戸	土器，須恵器，青磁	
４８	都城	都町都原	丘陵	不詳		空堀跡
４９	都原	都町都原・山口	台地	平安～室町	内黒土師器，青磁，染付	
５０	総徳城	都町麦・灰原・門前・屋敷田	丘陵	不詳		堀切り跡
５１	霜月田	都町霜月田	台地	古墳～室町	土器，青磁，染付	

楠　元　遺　跡

第１章　発掘調査の成果

第１節　発掘調査の方法

全面調査は確認調査の際に設定した10mグリッドをもとに実施した。（第４図）グリッドには調査区の南から東西にＡ・Ｂ，南北に１～31区の名称を付し，このグリッドを基準に遺構実測，遺物の取り上げを行った。調査対象区であるＡ・Ｂ－11～31区は農道によって３つに分断されており，南から各調査区ごとに１地点，２地点，３地点と便宜的に呼称して調査を行った。発掘調査は重機で表土を除去した後，人力で遺物包含層を掘り下げ遺構検出を行った。掘削と並行して壁沿いに先行トレンチを設定し土層の堆積状況の把握に努めた。調査区の周囲が水田であるために湧水が多く，遺構調査の際には壁沿いに排水用の側溝を巡らせ，水中ポンプで24時間水を汲み出しながら調査を行った。しかし，土層の堆積状況が把握できないうちに掘削を行ったためにいくつかの遺構は適正な検出面で捉えることができなかった。２地点で大量に出土した木製品については，直射日光を避けるためにタオルで覆い休日も定期的に水をかけ乾燥を防ぎながら取り上げを行った。取り上げた木製品は現場で水洗し選別を行った後，ＰＴＳ袋に真空パックを行い保管した。調査期間は梅雨と重なり，さらに平成11年度は雨天，台風の多い年であった。調査区周辺の水路から水が溢れ，排水が間に合わず調査区が水没し壁面が崩壊することが度々あり，層序の把握や遺構の調査を困難なものとした。発掘調査期間中はまさに水との戦いであった。



第４図　グリッド配置図（１：2000）
１グリッドは10m×10m

第２節　遺跡の層位

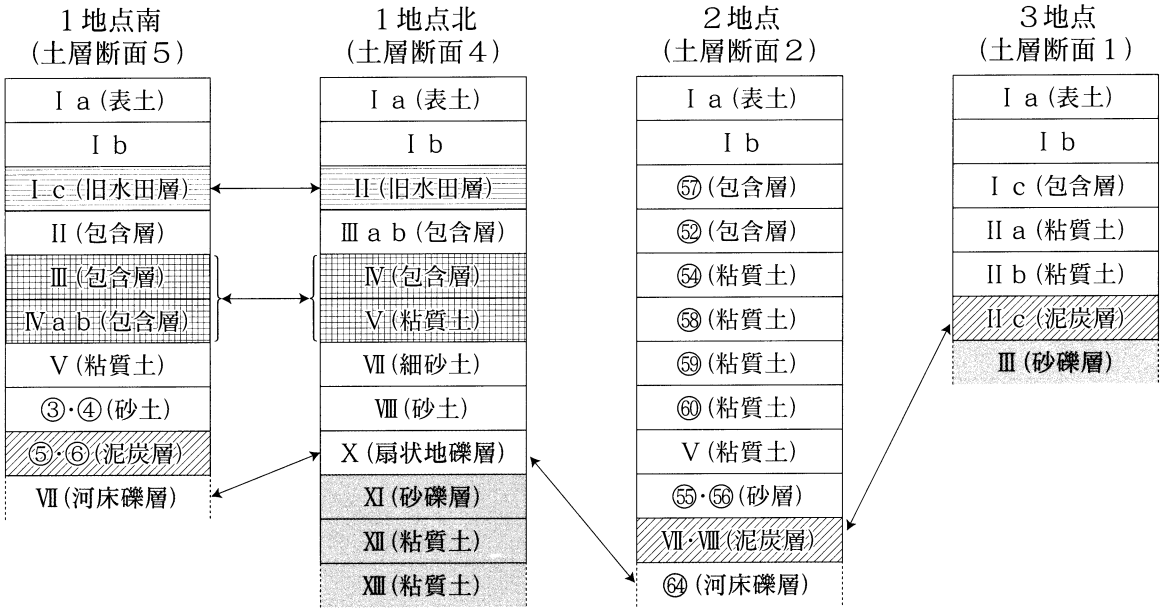
楠元遺跡の土層は各地点によって複雑に堆積している。調査地点によって基本土層が異なることからまず，遺跡全体の層序について触れた後に各地点の遺物包含層について説明を行う。

１　扇状地の成立に関わる土層（第６図）

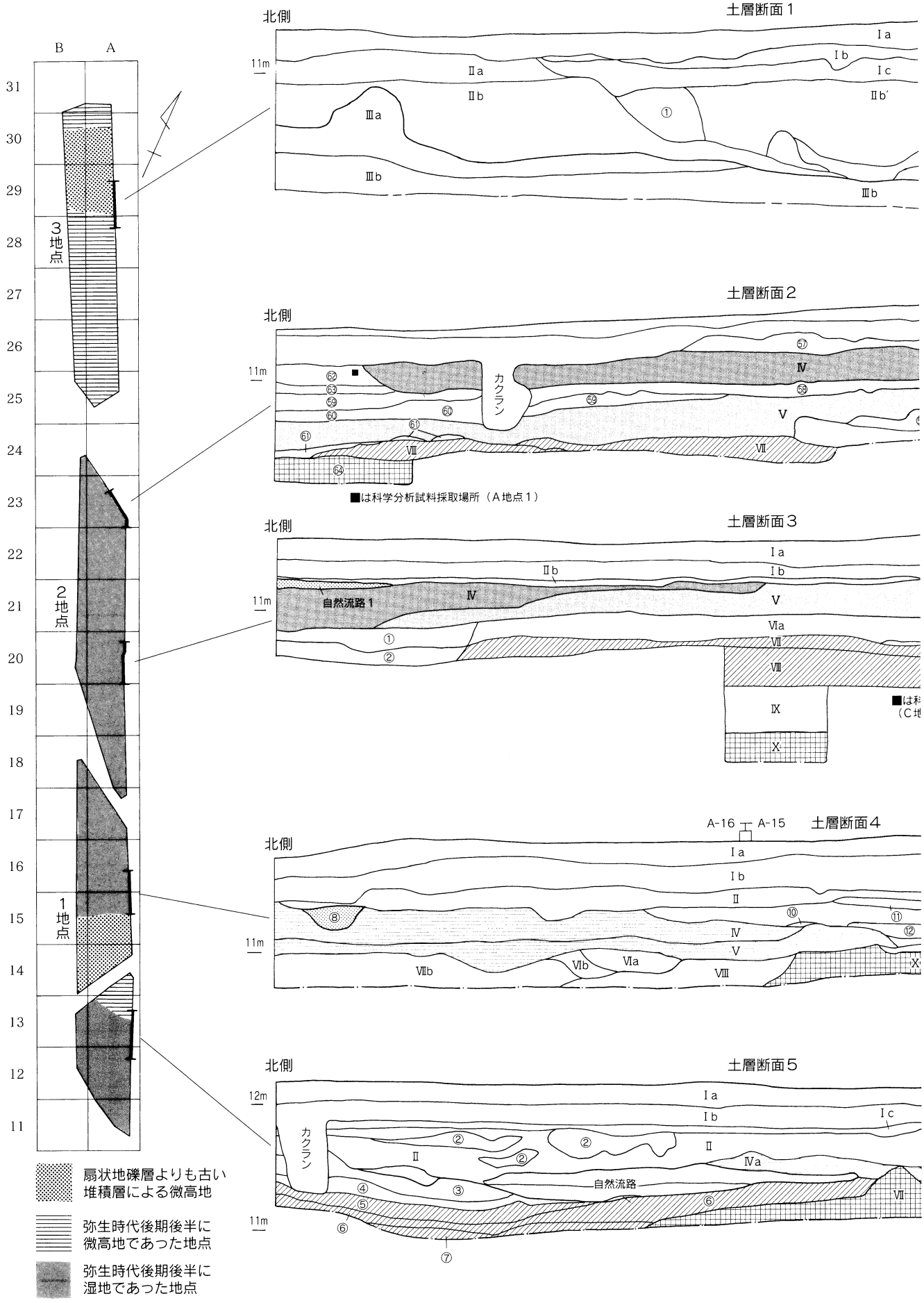
楠元遺跡の基盤層は，百次川によって運ばれた河床礫層（土層断面４・Ｘ層）とそれよりも古い東側のシラス台地から延びる砂礫層（土層断面１・Ⅲ層）からなる。砂礫層は３地点北側と１地点の中央部で低い微高地を形成しその周囲を扇状地礫層が取り巻くように堆積しており，調査区における地形の起伏はこの砂礫層の地形に起因していると考えられる。砂礫層と河床礫層の上面には，３地点の北部と１地点の中央部の微高地を除く調査区全域に泥炭層（土層断面２・Ⅷ層）が堆積している。標高が低く河床礫層に覆われている１地点の北側から２地点にかけては泥炭層が流失している箇所がある。そのような場所は泥炭層上面に砂層のクロスラミナが複雑に発達しており流水の影響を強く受ける地点である。泥炭層の放射性炭素年代値は13080年±80年前でありこの時期に微高地を除く調査区周辺が静穏な環境下におかれたことが推測される。

２　泥炭層以後の堆積（第６図）

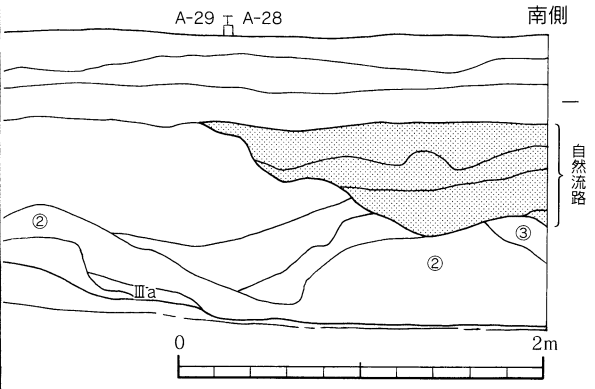
泥炭層より上位の堆積物は，３地点などの微高地と標高の低い２地点では大きく異なる。前者は主に百次川の氾濫によって供給されたと思われる厚い粘質土（土層断面１・II層）が安定して堆積しているのに対し，後者は粘質土と砂層が複雑に重なり，絶えず流水の影響を強く受けながら堆積したことがうかがえる。そのために，標高差のある２・３地点間と，特に流水の影響を強く受けた１・２地点間の土層の対応関係は明らかにすることができなかった。３地点では微高地が徐々に拡大していく状況が観察でき，特に弥生時代後期後半以降は大きな洪水層もないことか



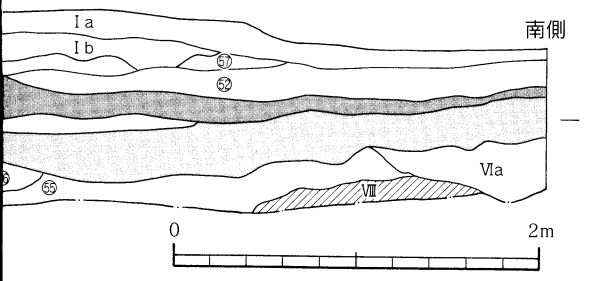
第５図　土層柱状模式図


B
A
31
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
3地点
2地点
1地点
扇状地礫層よりも古い堆積層による微高地
弥生時代後期後半に微高地であった地点
弥生時代後期後半に湿地であった地点
土層断面1
北側
11m
Ⅰa
Ⅰb
Ⅰc
Ⅱa
Ⅱb
Ⅱb′
Ⅲa
Ⅲb
①
土層断面2
北側
11m
カクラン
Ⅳ
Ⅴ
Ⅶ
Ⅷ
■は科学分析試料採取場所（A地点1）
土層断面3
北側
11m
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱb
自然流路1
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵa
Ⅶ
Ⅷ
Ⅸ
Ⅹ
土層断面4
A-16
A-15
北側
11m
Ⅰa
Ⅰb
Ⅱ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵa
Ⅵb
Ⅶb
Ⅷ
土層断面5
北側
12m
11m
Ⅰa
Ⅰb
Ⅰc
カクラン
Ⅱ
Ⅳa
自然流路
Ⅶ

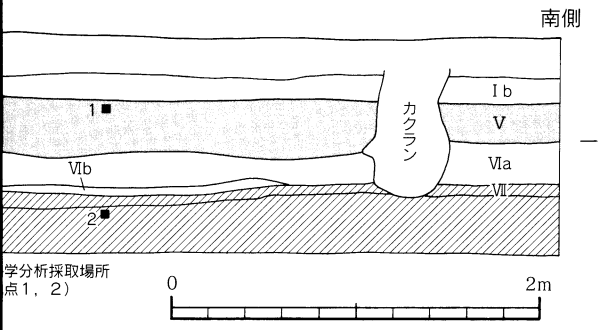
第



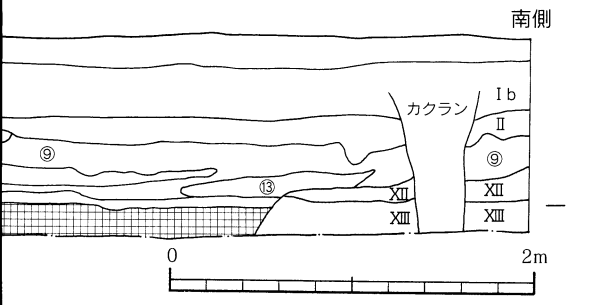
土層
Ⅰa…表土
Ⅰb…灰色砂質土　現水田の基盤層
Ⅰc…灰褐色粘質土　縄文後期～中世までの遺物を含む。
Ⅱa…灰色粘質土　粘性が弱く鉄分を多く含む。
Ⅱb…淡灰色砂質土　1～2㎝の軽石を多く含む。
Ⅱb′…淡灰色砂質土　砂粒を含まない。
Ⅲa…砂礫層　灰色粘質土に3～12㎝の礫，粗砂を多く含む。
Ⅲb…灰色の粗砂土に2～10㎝の礫を多く含む。
}扇状地礫層以前の堆積物
①…灰色粘質土に3～10㎝の円礫，角礫を多く含む。　②…淡黄色粘質土
③…灰色粘質土　細砂を含むために粘性が弱い。



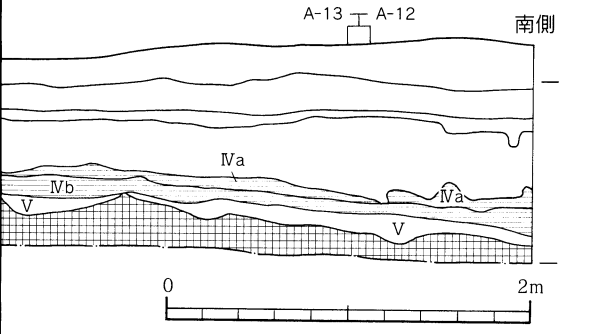
土層
Ⅳ…灰色粘質土　鉄分，軽石を少量含む。
Ⅴ…黒褐色粘質土　粘性が強くしまりがよい。
Ⅵa…灰褐色砂土　1㎜以下のきめの細かい砂によって構成される。
Ⅶ…暗灰色泥炭層
Ⅷ…黒色泥炭層
52…灰黄褐色粘質土（弥生～中世の遺物を含む）　55…灰色粘質土　しまりがよく粗砂を多く含む
56…灰色砂質土　57…褐色砂質土（弥生～中世の遺物を含む）　58…灰黄褐色粘質土
59…褐灰色粘質土　60…黒褐色粘質土　61…にぶい褐色砂土　62…黒褐色砂質土
63…褐灰色粘質土　64…黄灰色砂礫層　扇状地礫層　10～20㎝大の礫と粗い砂粒で構成。



土層
Ⅱb…暗灰色粘質土
Ⅵb…褐色砂土　Ⅵaよりも粗い粗砂で構成。薄いレンズ状に堆積。
Ⅸ…青灰色粘質土　砂粒を多く含むために粘性が弱い。
Ⅹ…青灰色礫層　扇状地礫層。
①…暗灰色砂土　②…暗灰黄色砂土　①よりもきめが粗い。
Ⅳ・Ⅴ・Ⅵa・Ⅶ・Ⅷ層は土層断面2を参考。



土層
Ⅱ…灰色粘質土　上部に鉄分の付着が多くみられる。中世～近世の遺物を含む，耕地整理以前の水田層。
Ⅳ…暗褐色粘質土　しまりがよく5㎜大の炭化物を多く含む。縄文後期～弥生時代の遺物を少量含む。
Ⅴ…Ⅳ層よりも細砂を多く含むのでしまりが弱い。縄文後期～弥生時代の遺物を少量含む。
Ⅵa…茶褐色砂質土
Ⅵb…灰褐色砂土
Ⅶb…淡緑色砂土　1㎜以下の細砂粒で構成される。
Ⅷ…灰白色砂土　粗い砂粒で構成されている。5㎜大の円礫を所々に含む。
Ⅹ…灰白色砂礫層　扇状地礫層。
Ⅻ…淡黄色粘質土　しまりがよく粘性が強い。
XIII…灰色砂土　粗砂と灰色粘質土で構成。
}扇状地礫層以前の堆積物
⑧…溝状遺構5の埋土。　⑨…暗褐色砂質土　自然流路の埋土。細砂で構成された小さなクロスラミナが多数確認できる。　⑩～⑬…茶褐色砂土



土層
Ⅰc…土層断面図4のⅡ層に対応
Ⅱ…暗褐色粘質土　Ⅲ層との境には砂層が堆積。中世の遺物を少量含む。
Ⅳa…褐色粘質土　木片，種実，木の葉などの有機質を多く含んでいる。弥生時代の遺物と共に，多くの樹根が検出された。
Ⅳb…茶褐色粘質土　Ⅲ層，Ⅳ層よりも粘性が強くしまりがよい。弥生時代の遺物を少量含む。
Ⅴ…明茶褐色粘質土　粘性が強く，灰白色の砂粒を少量含む。
Ⅶ…灰褐色砂礫層　扇状地礫層。
①・②白色砂土　自然流路の埋土。　③灰茶褐色砂質土　土層断面4のⅦ層と対応。
④茶褐色粘質土　⑤・⑥・⑦茶褐色泥炭層

6図　土層断面図

ら，百次川の河道が固定し氾濫源から離れた安定した地域となる。２地点では弥生時代後期後半頃の堆積層である62層の珪藻，花粉分析から微高地周辺に湿地が広がることが予想され，湿地林や河畔林を構成するハンノキ属の樹根が残存していることもこのような湿潤な環境を反映している。このことから，楠元遺跡では弥生時代後期には水害から安全な微高地と流水の豊富な湿地・小流路とが近接していたことが読みとれ当時の人々の土地利用のあり方を知る上で重要な遺跡である。発掘調査では微高地上に住居群が，低地部には溝状遺構が検出されている。調査区全体に広がるＩｂ層は近年の耕地整理の際に敷き詰めた水田の基盤層である。耕地整理によって微高地は大きく削平され現状から旧地形を推察することは困難である。

３　遺跡包含層と遺構検出面

（１）１地点（第５図）

ＡＢ－13区の微高地を境に南北で層序に違いがみられる。遺物包含層は現在の水田の基盤であるＩｂ層より下位に堆積している。１地点南のＩｃ層，１地点北のII層は耕地整理が行われる以前の水田層と思われ，近世から近代かけての遺物が出土した。１地点南のII層，１地点北のIII層は古代から中世にかけての遺物包含層である。１地点北において古代・中世の遺構はIV層上面で検出した。１地点南のIII層と１地点北のIV・Ｖ層は縄文時代後期から古墳時代の遺物包含層である。特に縄文時代後期の遺物はＡＢ－16・17区のIV層下部からVII層上面で集中して出土している。１地点北はVII層以下が無遺物層となり，Ｘ層で扇状地礫層となる。扇状地礫層の上面に泥炭層はみられず，砂層が堆積している。微高地となるＡＢ－15区付近ではXII層以下の砂礫層が扇状地礫層より下にもぐり込み微高地を形成している状況が確認できた。１地点南はＶ層以下が無遺物層となりVII層で扇状地礫層に至る。泥炭層はＡ－13区付近にのみ堆積している。

（２）２地点（第５図）

Ｉｂ層以下㊼・㊷層が中世から弥生時代にかけての遺物包含層である。包含層からは，出土量は多くないものの各時代の遺物が混在して出土した。弥生時代の自然流路はIV層及びＶ層から掘り込まれている。IV層より下層は有機質を多く含む粘質土（㊽～㊿・(62)層）が堆積している。このような土壌は２地点が湿潤な環境であったことをうかがわせ，科学分析の結果をよく反映している。なお，Ｖ層の放射性炭素年代測定値はBP5510年±310年である。

泥炭層（VII・VIII層）上面には砂層（㊺・㊻層）が部分的に堆積し，泥炭層以下は河床礫層（(64)層）が２地点全域に広がっている。

（１）３地点（第５図）

遺物包含層であるＩｃ層からは縄文後期から中世にかけての遺物が出土した。II層より下位は無遺物層である。弥生時代，中世の遺構はII層上面で検出された。弥生時代の遺構は，検出面から浅いことからＩｃ層堆積時（中世）に攪乱されたと思われる。Ｉｃ層は耕地整理の際に削平されている。II層の直下に堆積しているIII層（泥炭層）は，３地点の中でも南側に堆積し，III層（砂礫層）によって微高地が形成される北側には堆積していない。

第３節　発掘調査の成果

楠元遺跡では縄文時代早期から近世にかけての遺構・遺物が検出された。その中でも主体となる時期は縄文時代後期と弥生時代終末から古墳時代初頭である。縄文時代後期の遺構は検出されなかったが，市来式土器，鐘崎式土器，北久根山式土器に伴って多くの石器が出土し，土器の共伴関係だけでなく平野部の遺跡における生業のあり方を考える上で重要な発見となった。

弥生時代の遺構としては竪穴住居跡２軒，炉跡２基，土坑10基，溝状遺構２条，自然流路１条が検出された。特に注目されることは，低地部から検出された自然流路・溝状遺構から多くの木製品が出土したことである。遺構からは曲柄又鍬，曲柄平鍬，掘り棒，丸木弓，容器などが出土し，本県で初めて弥生時代における木製品のセット関係が明らかとなった。また，微高地には住居跡が，隣接する低地部には水田跡の存在が確認され，居住域と生産区域の立地についても重要な成果を得ることができた。遺構からまとまって出土した土器は，弥生時代から古墳時代の過渡期のものであり土器編年における良好な資料になると思われる。

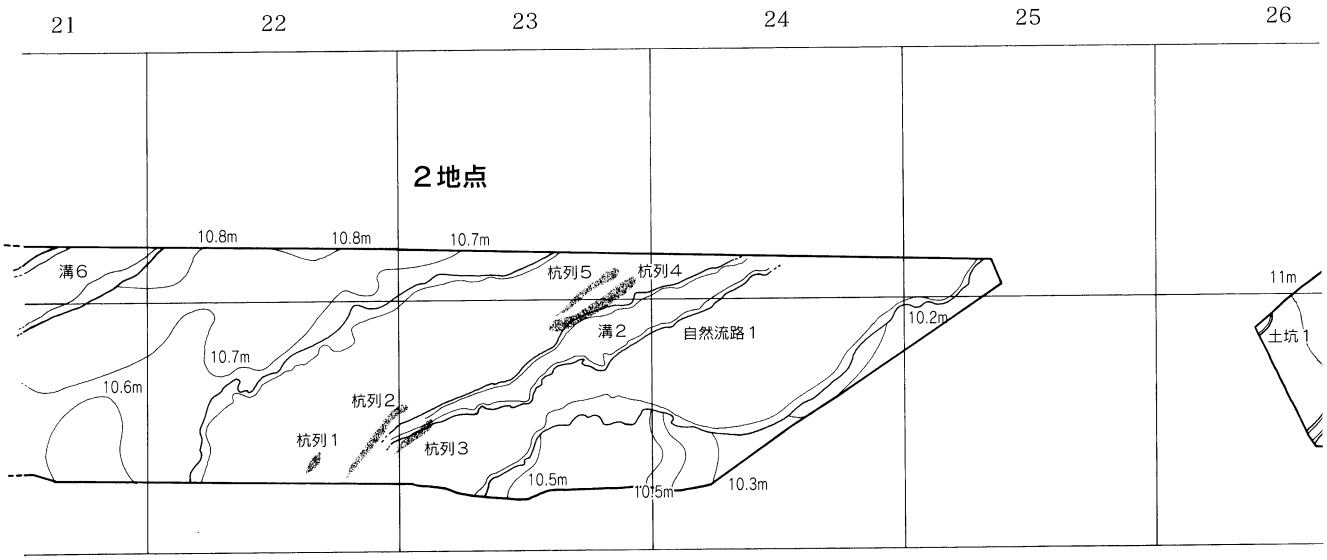
遺構・遺物の説明については各時代ごとに行う。包含層からは総重量146kgの土器が出土したが細片が多いことから遺構内出土の土器を中心に分類し紹介する。また，弥生時代の遺構から出土した縄文土器については縄文時代の調査成果の中で報告している。包含層や古代・中世・近世の遺構から出土した石器は，縄文時代の調査成果の中で紹介し，弥生時代の遺構から出土している石器は各遺構ごとに紹介した。

１　縄文時代の調査成果

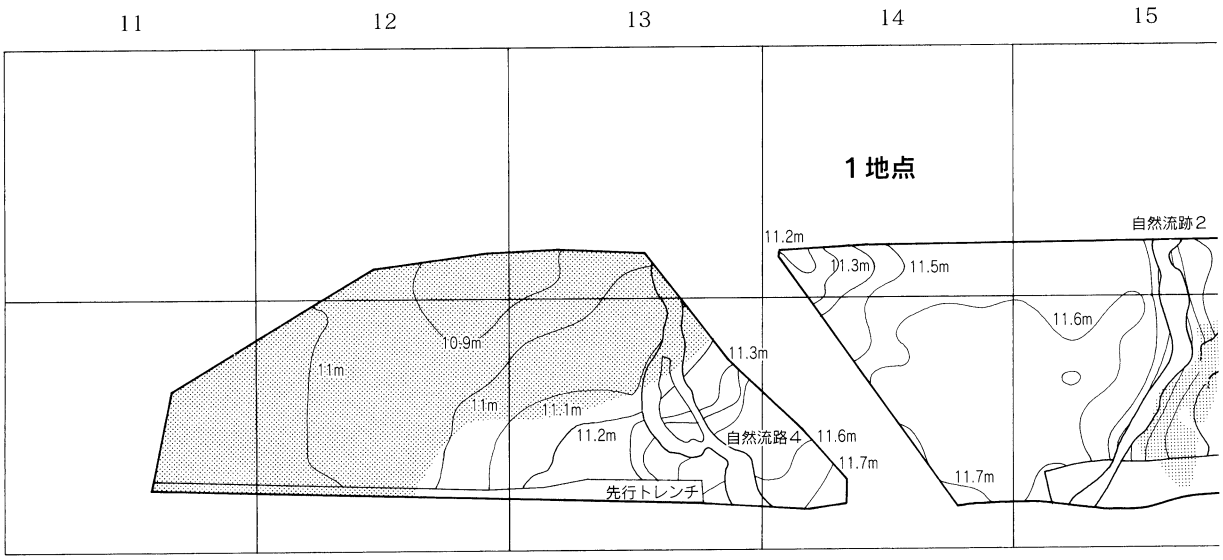
中心となる遺物は市来式土器，北久根山式土器，鐘崎式土器，西平式土器などの縄文時代後期土器とそれに伴う石器である。遺物のほとんどはＡＢ－17・18区とＡＢ－25・26区の２か所で集中して出土した。ＡＢ－17・18区ではⅣ層下部からⅦ層上面にかけて遺物が集中して出土したために，部分的に遺物を取り上げ遺構検出を行った（第８図）。遺構が検出されなかったことや標高の低い北側ほど遺物が濃密に分布することから，遺物集中域は標高の高い南側からの自然堆積によって形成されたと考えられる。ただし，土器の磨滅が少なく，石皿，台石などが出土していることを考えると遺物の供給先はそれほど遠くないことが想定され，廃棄により堆積した可能性も残されている。ＡＢ－25・26区ではＩｃ層より弥生時代，古墳時代，中世の遺物と混在した状態で出土した。土器の説明については，各層，各地点間で土器を比較した結果，型式や時期に大きな違いがみいだせなかったことから分類ごとに行なう。

（１）縄文土器の分類

本遺跡からは早～晩期に該当する縄文土器が出土しているが，後期に該当するものがほとんどである。そこで，ここでは後期に該当する土器を中心に形態及び文様，特に口縁部形態によってＩ類～ＸＩ類，そして底部，台付皿形土器の13類に分類し，他の時期の土器については一括して述べることにした。以下，各分類について述べる。

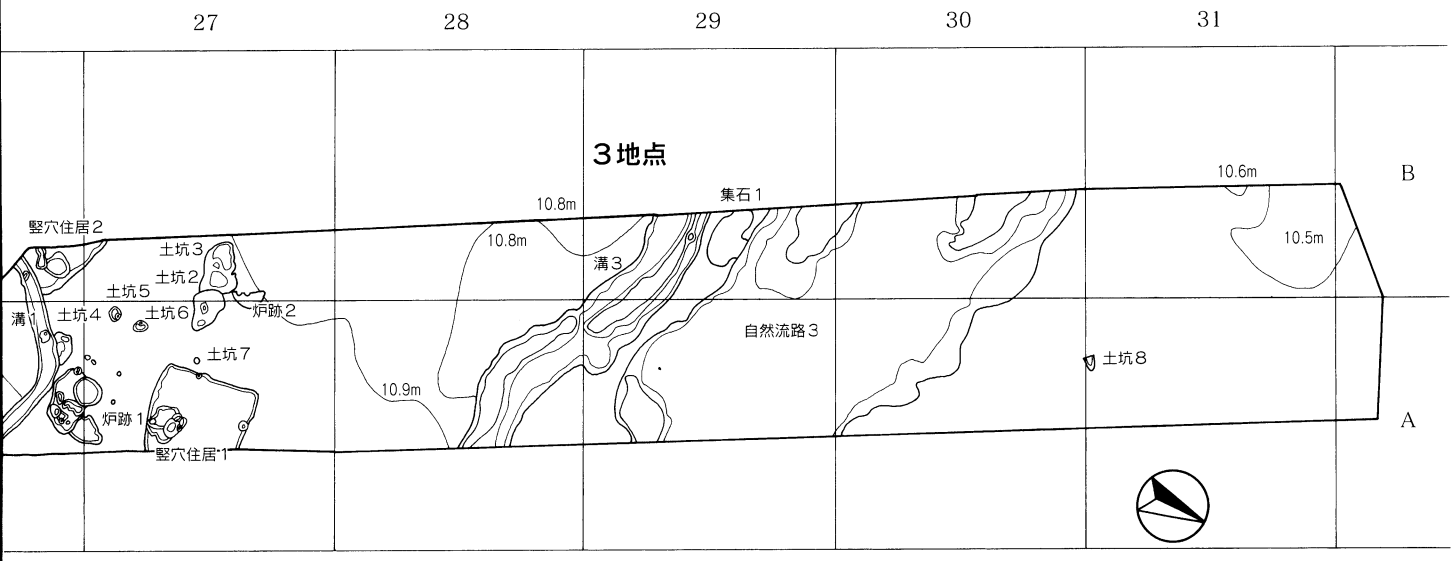


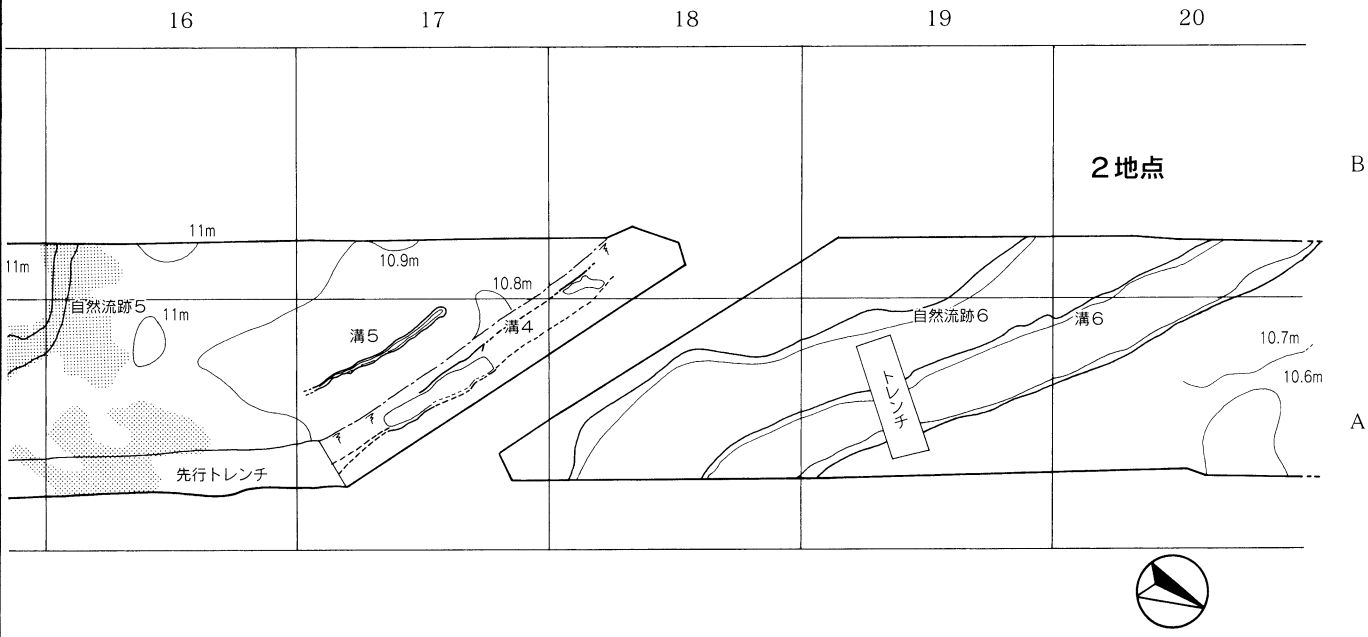
自然流路1内の杭列



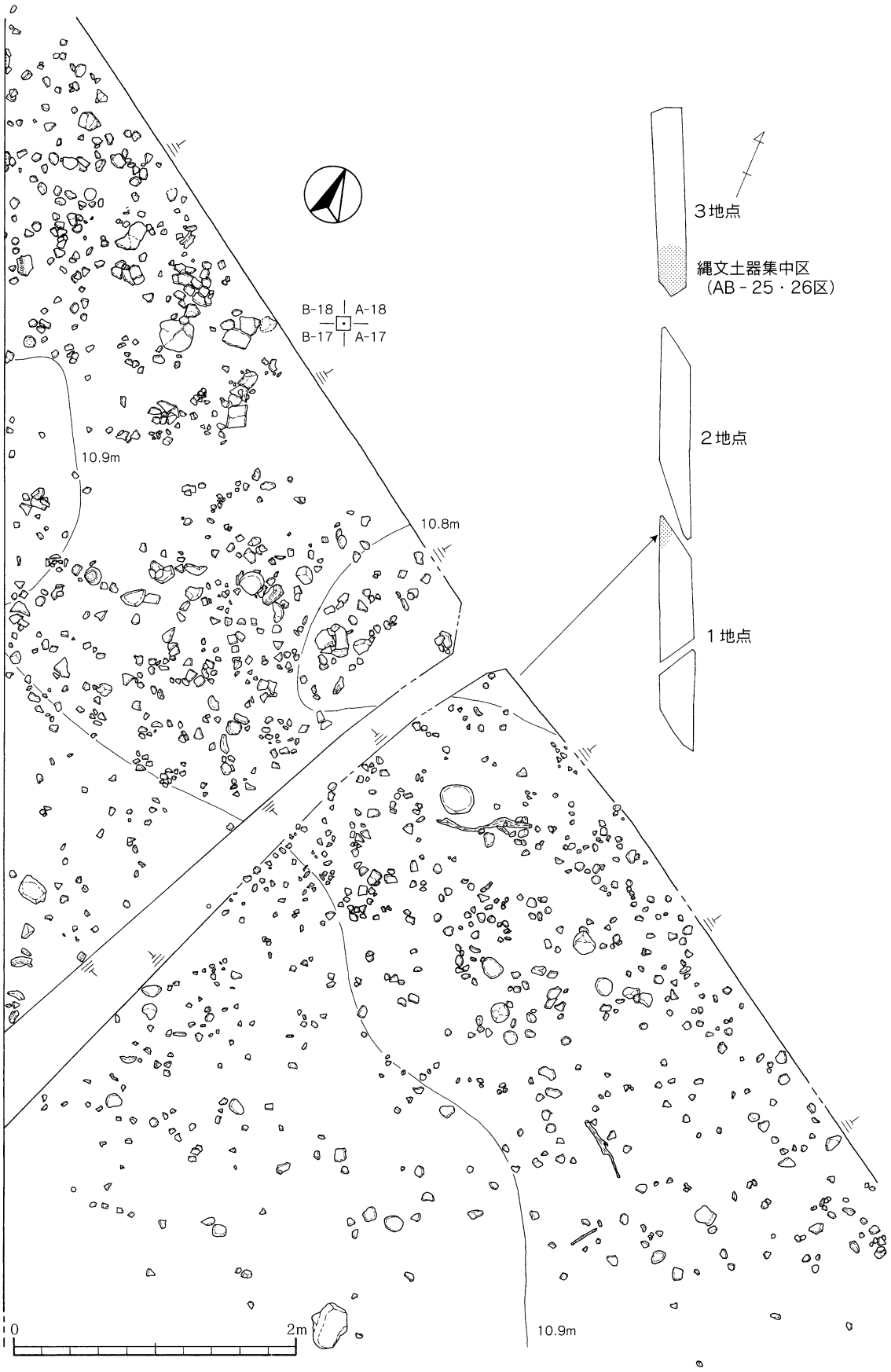
樹根が残っていた地区

第7図　遺構 配置[

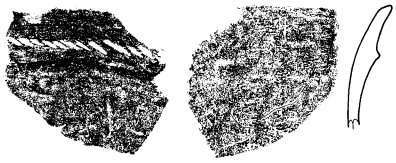




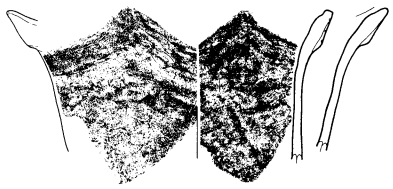
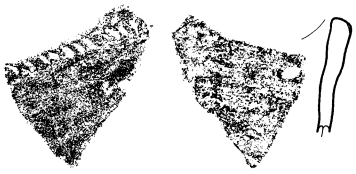
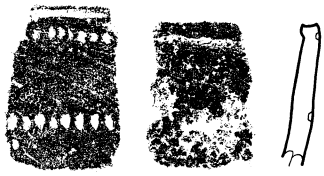
図（1グリッドは10m×10m）



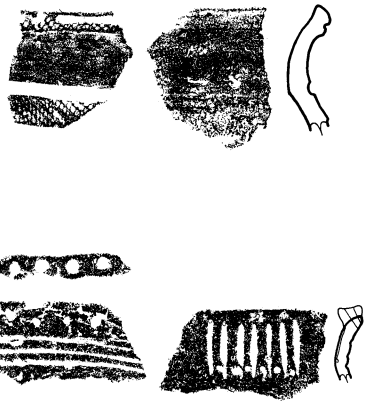
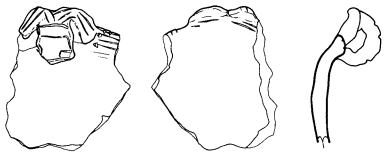
第８図　縄文後期土器出土状況

Ⅰ類　松山式土器（第13図　1～25） 標識遺跡；上屋久町一湊字松山　一湊遺跡 器形；口縁部上面が拡張し，そこに文様を施す。口縁部が外反するものが多い。 文様；口唇部に刺突文や貝殻刺突文・あるいは沈線文が施される。単一文様を繰り返すものや沈線文と貝殻刺突文や刺突文を組み合わせるものもある。 調整；ナデ・貝殻条痕・工具不明の条痕	
Ⅱ類　市来式土器 標識遺跡；鹿児島県日置郡市来町川上　市来貝塚 Ⅱａ類　市来式土器（第14・15図　26～55） 器形；口縁部を肥厚させて，断面三角形を呈する。口縁部に文様を施すが，文様帯幅が狭い。 文様；口縁部文様帯に刺突文や貝殻刺突文・沈線文が施される。単一な文様を繰り返すものや沈線文と貝殻刺突文や刺突文を組み合わせるものがある。 調整；ナデ・貝殻条痕・工具不明の条痕	
Ⅱb-１類　市来式土器（第16～18図　56～96） 器形；口縁部が断面三角形を呈するものの間延びしたものや「く」字状になる。口唇部は舌状を呈する。 文様；口縁部文様帯に刺突文や貝殻刺突文・沈線文が施される。単一な文様を繰り返すものもあるが沈線文と貝殻刺突文を組み合わせたものが多い。 調整；ナデ・貝殻条痕・工具不明の条痕	
Ⅱb-２類　市来式土器（第18～22図　97～148） 器形；口縁部が断面三角形を呈するものの間延びしたものや「く」字状になる。口唇部が平坦面をもつもの，あるいは断面かまぼこ状を呈するもの。 文様；口縁部文様帯に刺突文や貝殻刺突文・沈線文が施される。単一な文様を繰り返すものもあるが，沈線文と貝殻刺突文や刺突文を組み合わせたものが多い。 調整；ナデ・貝殻条痕・工具不明の条痕	

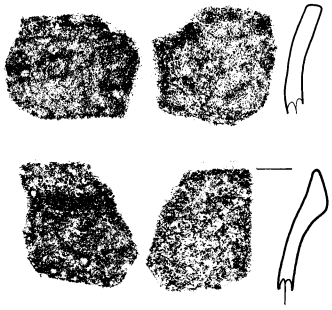
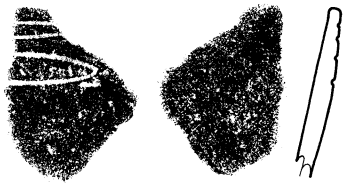
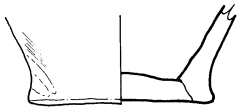
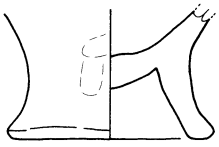
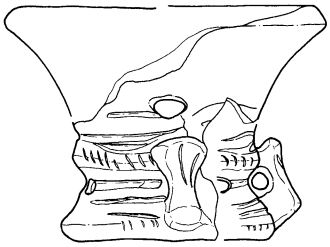
第９図　縄文土器分類模式図（１）

IIｃ類　市来式土器（第23図　150～165） 器形；口縁部断面が，三角形あるいは「く」字状を呈さず，方形に近い形態を呈するもの。口唇部が平坦になるものが多い。 文様；口縁部文様帯に刺突文や貝殻刺突文・沈線文が施される。単一な文様を繰り返すものが多い。沈線文と貝殻刺突文や刺突文を組み合わせたものもある。 調整；ナデ・貝殻条痕・工具不明の条痕	
IIｄ類　市来式土器（第24・25図　166～203） 器形；口縁部断面が肥厚し，IIｂ，IIｃ類に類似するが特殊なもの。 文様；口縁部文様帯に刺突文や貝殻刺突文・沈線文が施される。 調整；ナデ・貝殻条痕・工具不明の条痕	
Ⅲ類　草野式土器（第26図　204～221） 標識遺跡；鹿児島県鹿児島市下福元町草野貝塚 器形；II類と器形・施文方法は類似するが，口縁部肥厚が弱く，口唇部が丸身をおびるか平坦面をもつ。 文様；刺突文や貝殻刺突文・沈線文が施される。単一な文様を繰り返す。 調整；ナデ・貝殻条痕・工具不明の条痕	
Ⅳ類　小池原上層式土器（第27図　222） 標識遺跡；大分市小池原貝塚 器形；胴部がはり，胴部にも文様を施すものである。 文様；太い沈線文と幅の広い磨消縄文が施される。 調整；内外面ミガキ 備考；１点のみの出土である。	
Ⅴ類　御手洗Ｃ式土器（第27図　223） 標識遺跡；熊本県菊池郡合志町御手洗遺跡 器形；口縁部から胴部にかけて直行する。 文様；口唇部に１条の沈線文が施され，外面に刺突文が施される。 調整；１点のみの出土である。	

第10図　縄文土器分類模式図（２）

Ⅵ類　鐘崎式土器（第27・28図　224～250） 標識遺跡；福岡県宗像郡玄海町上八遺跡 器形；鉢形を呈し，口唇部は平坦となる。 文様；口唇部に刺突文と沈線文を施し，口縁部下には磨消縄文が施される。 調整；内面にミガキ 備考；橋状把手と突起をもつものがある。	
Ⅶ類　白浜・浜ノ洲タイプ（第29図　251～262） 標識遺跡；白浜タイプ—長崎県福江市白浜貝塚 浜ノ洲タイプ—熊本県三角町浜ノ洲貝塚 器形；鉢形を呈し，口縁部が平坦となる。口縁部がⅥ類に比べて間延びし，口唇部と口縁部文様帯の間の無文帯が長くなる。 文様；磨消縄文あるいは沈線文が施される。また，沈線文端に円形の刺突文が施される。 調整；内面にミガキ整形が施される。 備考；橋状把手をもつものがある。	
Ⅷ類　北久根山式土器（第30図　263～271） 標識遺跡；熊本県熊本市北久根山遺跡 器形；口縁部がやや肥厚し，口縁部断面形が緩やかな三角形を呈し，胴部が張る。口縁端部にM字の粘土紐貼付を持つものがある。 文様；口縁部に沈線文や篦状工具による刺突文が施される。 調整；内面にナデ整形が施される。 備考；橋状把手をもつものがある。	
Ⅸ類　西平式土器（第30図　272～274） 標識遺跡；熊本県竜北町西平貝塚 器形；口縁部が断面三角形を呈して内弯し，胴部へ直行する。 文様；口縁部に沈線文が施される。 調整；内面にナデ整形が施される。	

第11図　縄文土器分類模式図（3）

X類　無文土器（第25・31図　195・275～296） 無文の土器を一括してとりあげる。 器形；口縁部が肥厚して断面三角形を呈し肥厚するものや，口縁部が直行する。 文様；無文 調整；ナデ整形や工具不明の条痕	
XI類　型式不明土器（第32図　297～303） 型式不明の土器を一括して取り上げた。	
底部 I類（第33図　304～315） 器形；深鉢や鉢の底部。平底あるいはやや上げ底気味の平底になる。 調整；ナデ整形	
II類（第33図　315～320） 器形；深鉢や鉢の脚台。 調整；ナデ整形	
台付皿形土器 皿部（第34・35図　321～326） 脚部（第35・36図　326～342） 器形；皿部・脚台ともに沈線文や刺突文などを組み合わせて文様が施される。赤色顔料を塗布されたものがある。皿部に穿孔を脚部に透かしをもつものがある。 調整；ミガキ，ナデ整形がみられ，丁寧なつくりとなる。	

第12図　縄文土器分類模式図（4）

（2）縄文土器

Ⅰ類（第13図 1～25）

口縁部がやや外反し，口唇部が平坦あるいはやや丸身を帯びるものである。口唇部に沈線文，刺突文がある。

1・2はヘラ状工具による刻目が斜位に施される。3～7は貝殻腹縁による刺突文（貝殻刺突文）が施されている。3・6・7は斜位に，4は横位や斜位に，5は横位にそれぞれ施されている。8・9はヘラ状工具による縦位の刺突文である。

10～13は沈線文のみが施され，14～24は沈線文と貝殻刺突文，沈線文と刺突文など2種類を組み合わせて施文している。10・13は1条の沈線文を，11・12は2条の沈線文が施される。また，10・12・13は口縁部がやや内湾している。

14～16は1条の沈線文を挟んで，その上下に刺突文あるいは貝殻刺突文が施されている。16は1条の沈線文があり，その上には横位の貝殻刺突文，沈線文下には斜位の貝殻刺突文が施され，口縁部はやや内湾する。

17～19・21は2条の沈線文があり，その間に刺突文や貝殻刺突文が施される。20・22・23も沈線文と貝殻刺突文の組合せであるが，22・23は縦位に沈線文が施される。特に22は沈線文と貝殻刺突文が交互に施され，また口縁部が波状口縁となる。24はやや波状口縁を呈し，頂部に縦位の沈線文が3条施され，そこから横位の沈線文が施されている。

25は唯一口縁部内面にも施文されるもので，内面には3条の沈線文を，口唇部には斜位の刻目が施されている。波状口縁を呈し，内面文様は頂部に施されている。

Ⅱ類（第15～25図 26～203）

口縁部の形態によってa類～e類の5種に分類できる。主に貝殻刺突文や沈線文，刺突文などによって文様を構成しており，単一あるいは組み合わせて文様が施される。

Ⅱa類（第14・15図 26～55）

口縁部が断面三角形を呈し，Ⅰ類の文様施文部が口縁部に移行したようなものである。口縁部文様帯の幅が狭いものが多く，主に単一の文様が施されたものが多い。

26～32は工具による刺突文が施されており，31は内外面に貝殻条痕が残る。

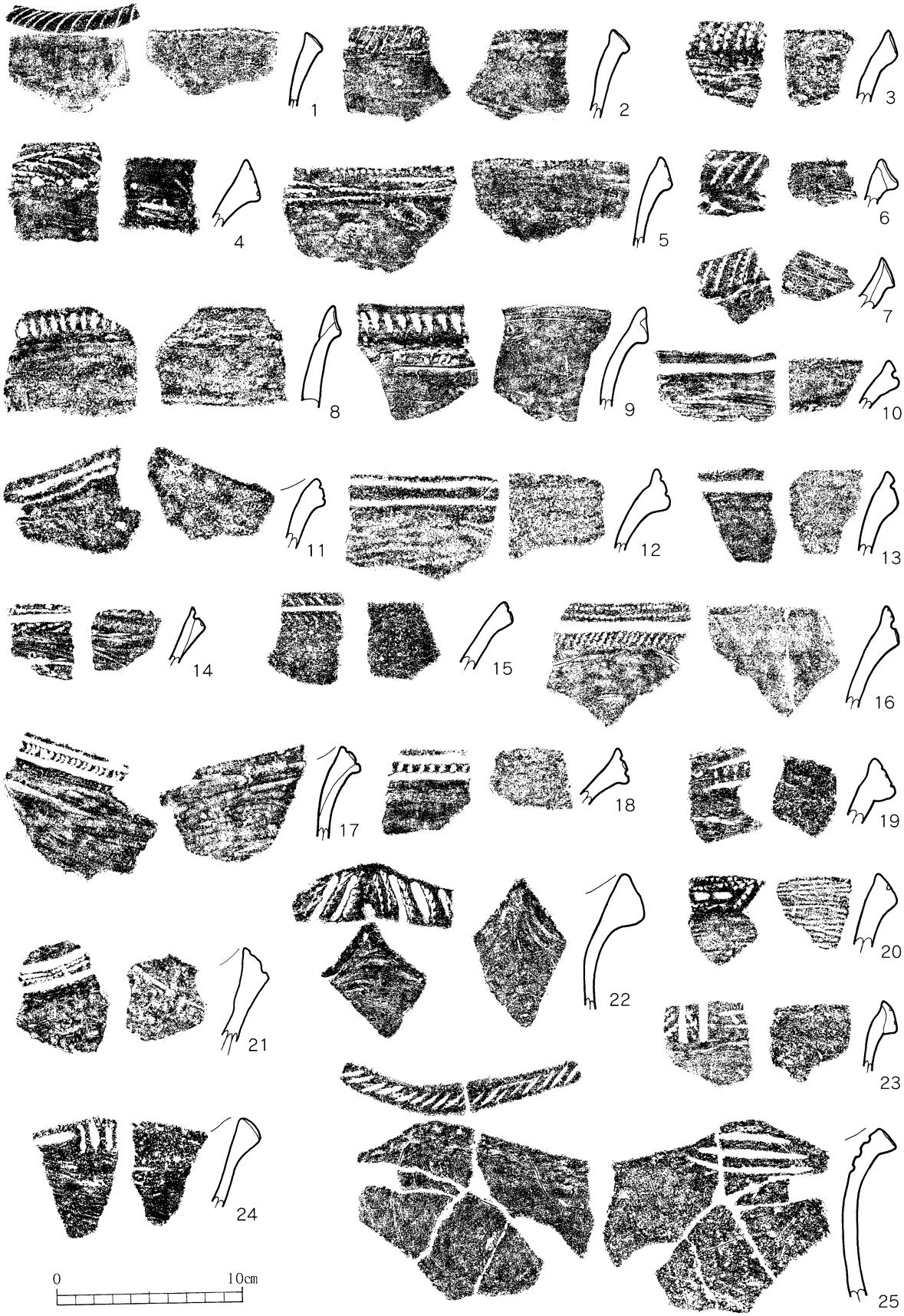
33～35は斜位の貝殻刺突文が施されている。33・34は口縁部がやや内湾する。

36は円形の刺突文が施されている。37・38は縦位の刺突文が施され，38は口唇部に平坦面をもち，その中央がやや窪んでいる。

39～41は貝殻による刺突文が施され，39は横位に2条の貝殻刺突文を，40は縦位の貝殻刺突文を，41は斜位の貝殻刺突文がそれぞれ施されている。42はヘラ状工具による斜位の刺突文が施され，口縁部が外に張り出す。43・44は口縁部が丸身を帯びて，肥厚するもので，43は胴部がやや張り，縦位の刺突文が施される。

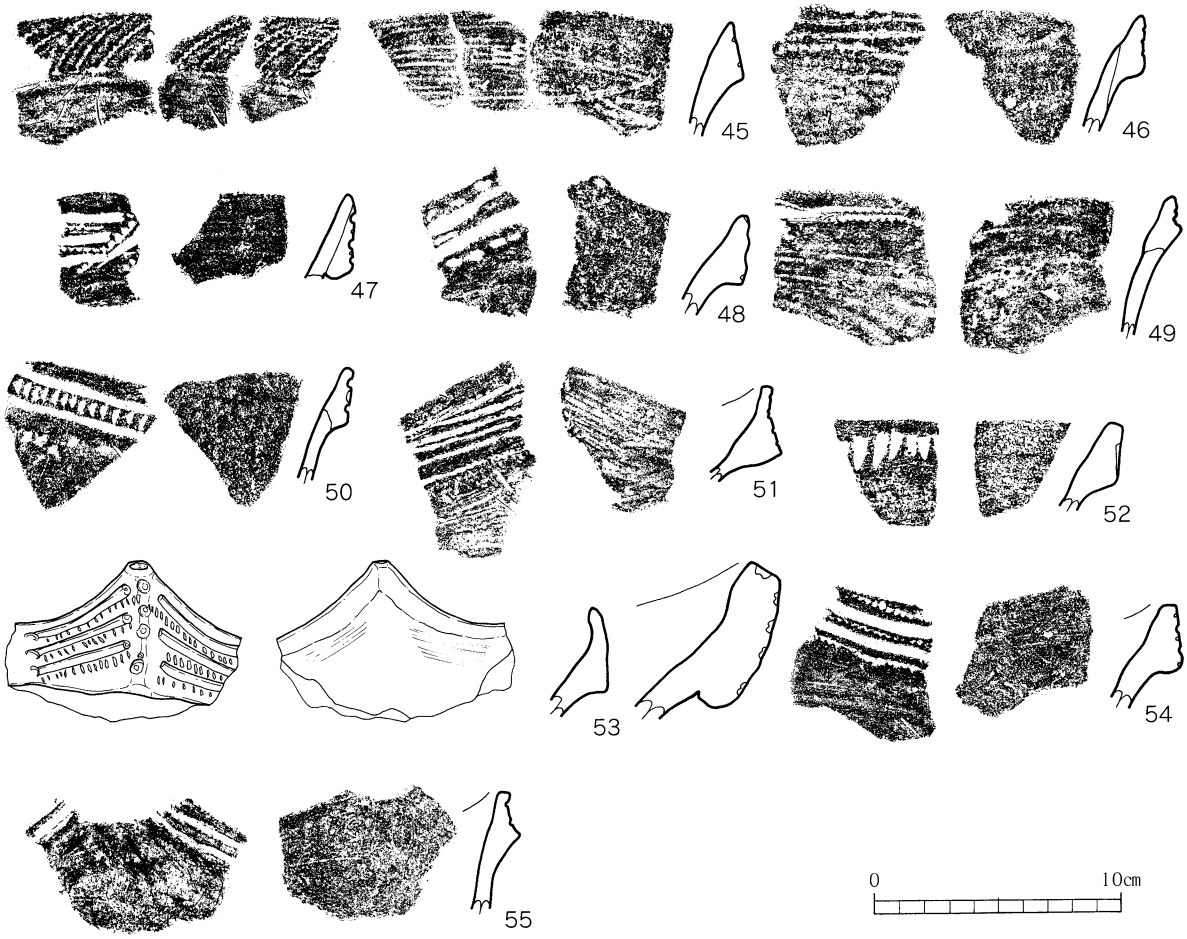
45・46・49は外面または内面に貝殻条痕が残る。45は口縁部に斜位の，46・49は横位の貝殻刺突文がそれぞれ施されている。47・48は沈線文と貝殻刺突文を組み合わせている。

50は2条の沈線文があり，その間に刺突文が施される。51は口縁部がやや内湾するもの



第13図　縄文土器　Ⅰ類

第14図　縄文土器　Ⅱa類（1）



第15図　縄文土器　Ⅱa類（２）

で，文様帯の幅が比較的広く，数条の沈線文が施されている。内外面には貝殻条痕が残る。52は口唇部がやや平坦面で，縦位の刺突文が施される。

53～55は波状口縁を呈する。53は上面観が方形を呈するようなものである。波頂部には竹管文を縦位に施し，波頂部を中心に文様が展開している。口縁部には３条の沈線を施し，その下に刻目を，そして沈線端には竹管文をそれぞれ施す。口縁部はやや内湾する。54は２条の沈線文とその上下に貝殻刺突文を施す。55は２条の沈線文を施す。

Ⅱb類

口縁部が断面三角形を呈するが，Ⅱa類よりも間延びするもの，または口縁部が外反し，「く」字状となるものである。口唇部形態により２類に分け，口唇部が舌状を呈するものをⅡｂ－１類，口唇部が平坦面をもつもの，あるいは断面かまぼこ状を呈するものをⅡｂ－２類とした。

Ⅱｂ－１類（第16～18図 56～96）

56・57は斜位の刺突文が施される。58・59は口縁部の肥厚が強く，沈線文と貝殻刺突文を組み合わせて文様を描いている。

60・61・64は斜位の貝殻刺突文が施される。61は口縁部が断面三角形を呈し，若干口縁部が内湾するものである。62は沈線文と円形の刺突文を組み合わせて施文し，内外面にナデの調整痕が残る。

63・65は口縁部が断面三角形を呈しつつ間延びしたものであり，斜位の貝殻刺突文が施され，その上下に短沈線文が施されている。66は２条の貝殻刺突文が横位に施される。

67・68は文様帯下端に，70は文様帯上下端に刺突文が施される。69は斜位の貝殻刺突文が施され，外面には貝殻条痕が残る。71は数条の貝殻刺突文が施され，口縁部断面の肥厚は弱い。

72・73は比較的文様帯の幅が広いものである。72は文様帯下端に斜位の刺突文を，その上に数条の沈線文が施される。73は文様帯の上下端に斜位の刺突文が相対するように施される。

74・77・78は斜位の貝殻刺突文があり，その上下に横位の貝殻刺突文が施される。75は２条の沈線文とその上下に刺突文が施される。76は貝殻刺突文が山形に施され，その上下に斜位の貝殻刺突文が施されている。

79・80は沈線文と刺突文を組み合わせて文様が施される。81は刺突文が施される。82・85は１条の沈線文とその上下に刺突文が施される。

83・84は沈線文と貝殻刺突文を組み合わせて施文する。83は２条の沈線間に斜位の貝殻刺突文が施され，84は沈線文と横位の貝殻刺突文を交互に２段描いている。なお，83は接合部から剥離したと考えられる。

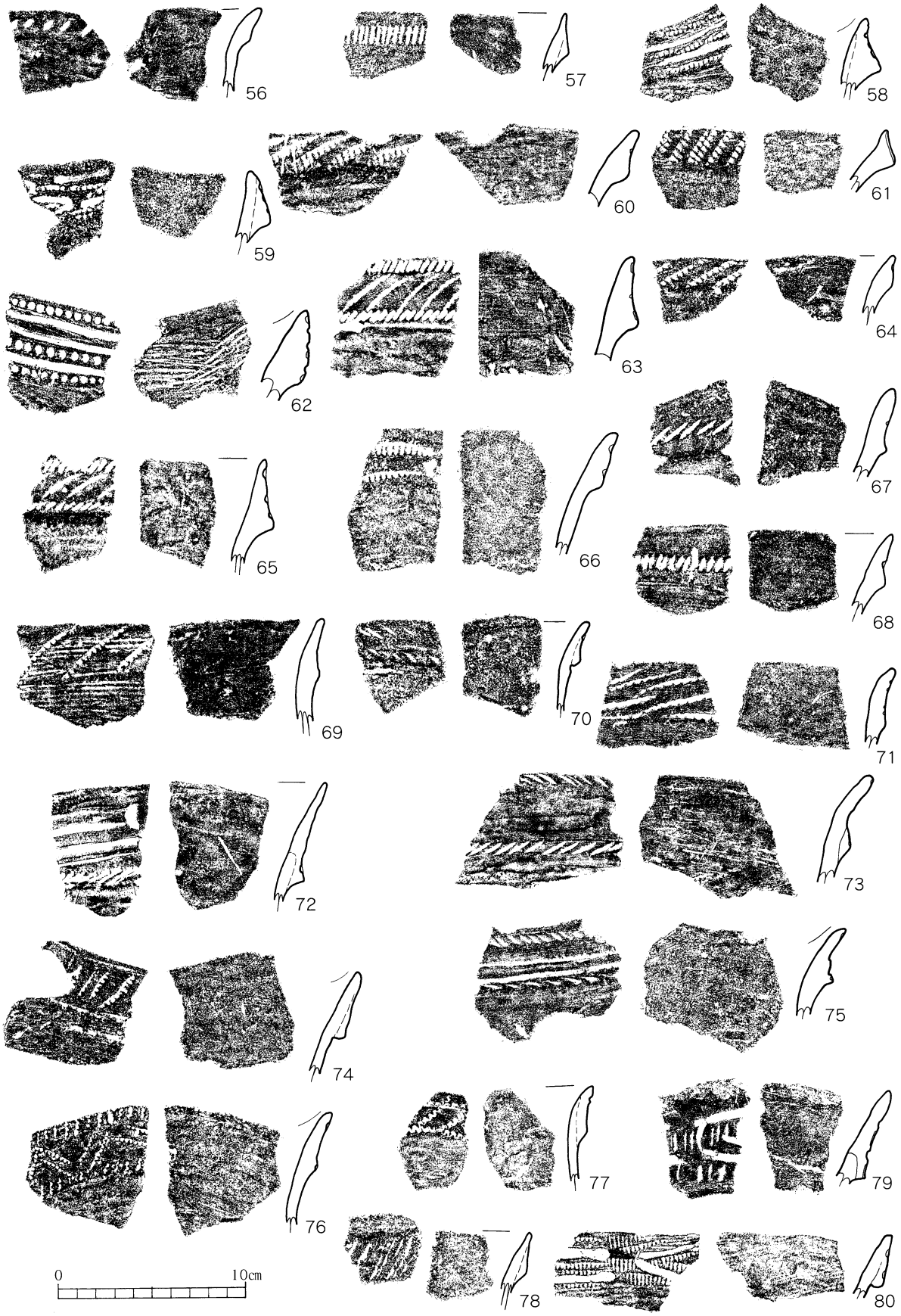
86は波状口縁を呈し，斜位の貝殻刺突文が施される。87は沈線で円形に文様を描く。88は浅い凹線文を施し，その工具痕が認められる。また，口縁部上端に円形の刺突文が施される。89は波状口縁を呈し，円形の刺突文が施される。

90は文様帯上下端に縦位の刺突文が施され，その間に斜位の貝殻刺突文が施されている。91は刺突文を組み合わせて文様を描いており，内面に貝殻条痕が残る。92は横位の貝殻刺突文が施される。93は波状口縁であり，口縁部は外反して文様帯部分が突起し，そこに浅い刺突文が施されている。94も波状口縁を呈し，内外面に貝殻刺突文が施されている。95は波状口縁を呈するもので，斜位の貝殻刺突文があり，その上下に刺突文が施される。96は口縁部が外反し，口縁部上端に斜位の刺突文が施される。

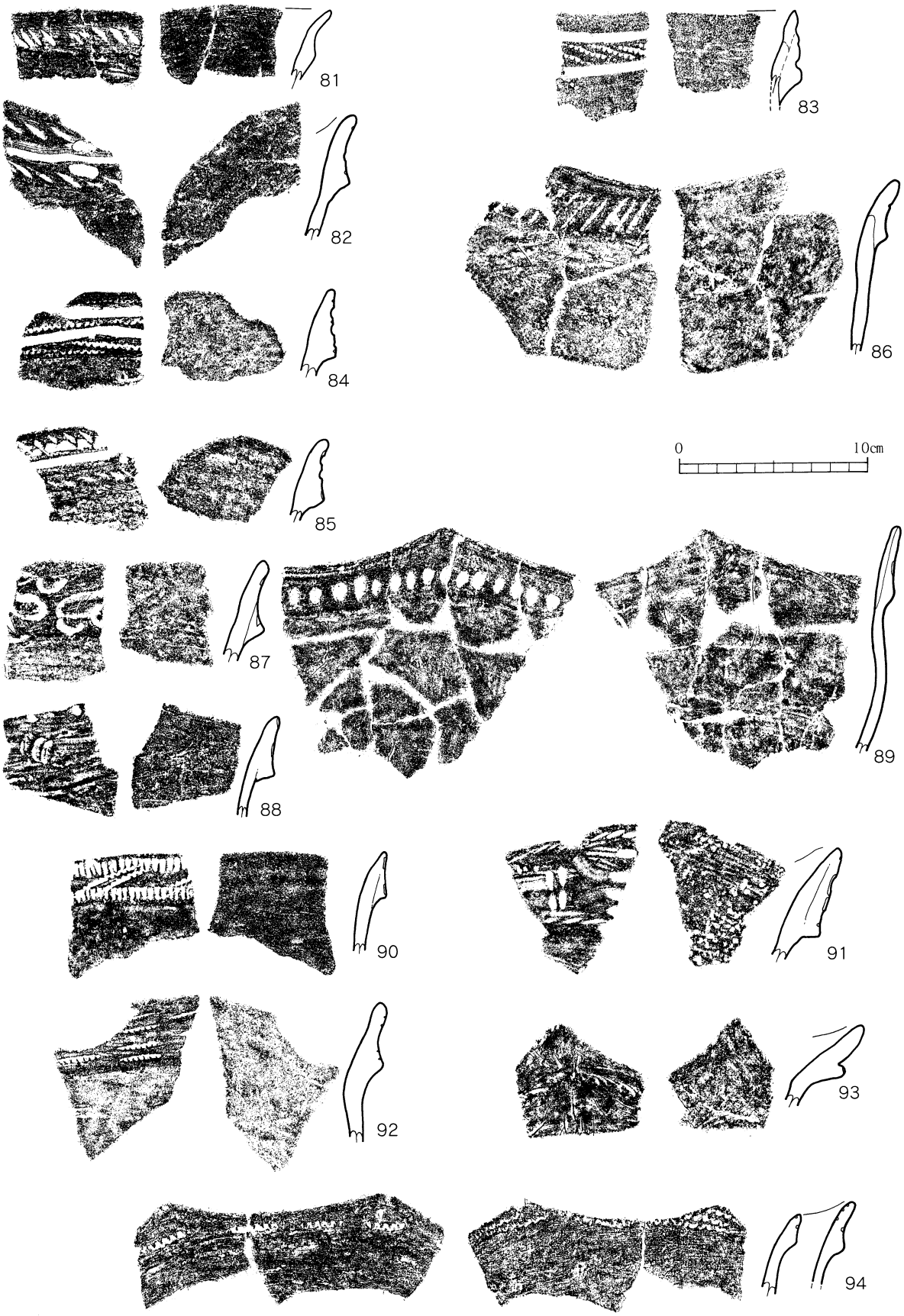
Ⅱｂ－２類（第18図～第22図　97 ～148）

97は沈線文とその上下に刺突文が施される。98～102は数条の沈線文があり，その上下に刺突文が施され，100は太い沈線文である。103は４つの円形の刺突文が施され，数条の貝殻刺突文を組み合わせて文様を構成している。104は文様帯下端に連続した斜位の刺突文を描く。

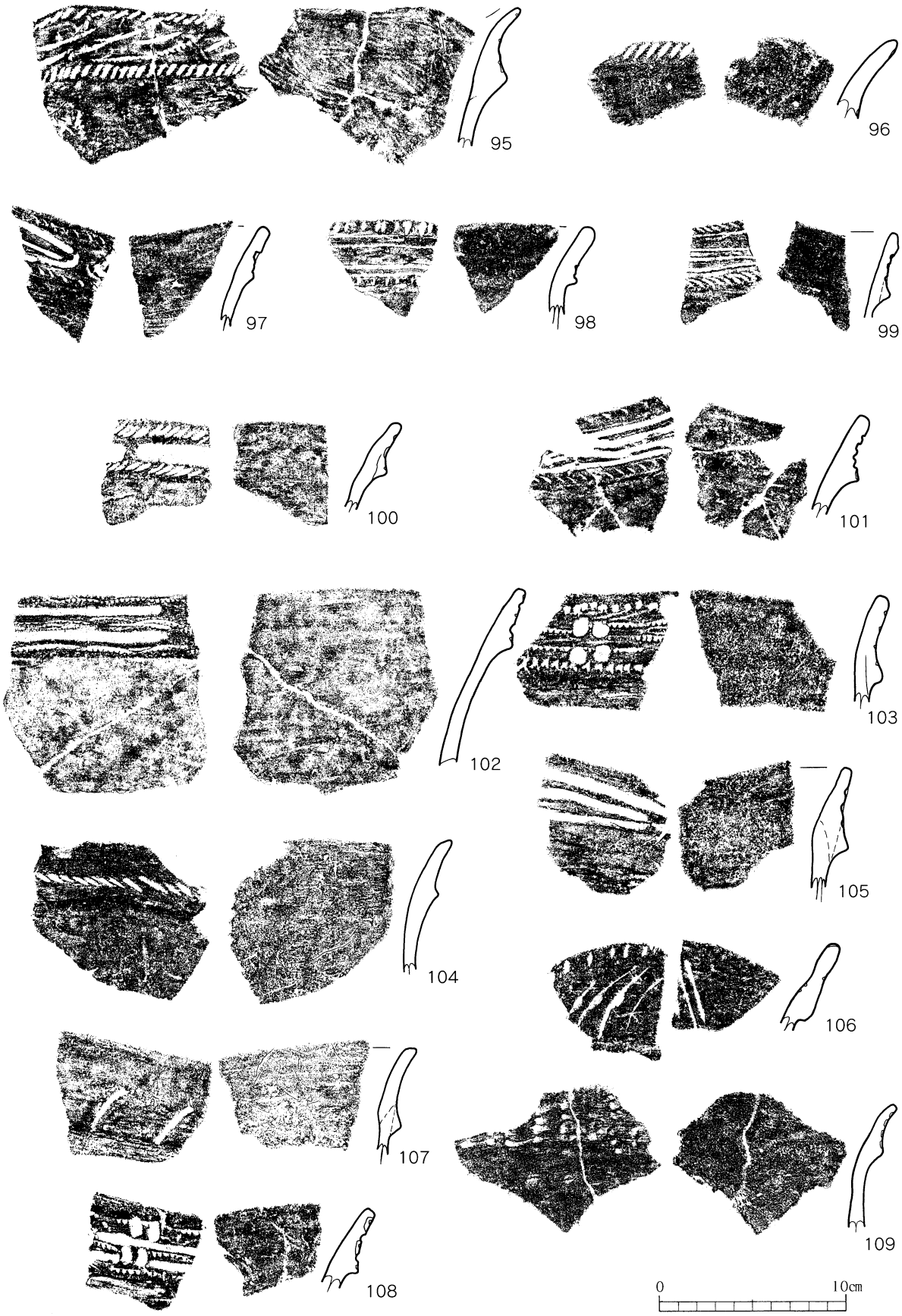
105～109はやや波状口縁を呈するものである。105は３条の太い沈線文が施され，文様帯下端に刺突文が施されている。106は内外面に文様を描き，外面は斜位の沈線文と口縁部上端に刺突文，内面には斜位の沈線文が施される。108は円形の刺突文と沈線文，貝殻刺突文を組み合わせて文様を構成している。109は４段に円形の刺突文が施され，連続す



第16図　縄文土器　Ⅱb－1類（1）



第17図　縄文土器　Ⅱb－１類（２）



第18図　縄文土器　Ⅱb－1類（3）・Ⅱb－2類（1）

る。

110は文様帯の幅が狭く，斜位の刺突文が施される。111・113は浅い沈線文が施される。112は屈曲部に横位の貝殻刺突文が１条施されている。115は文様帯の幅が広く，文様帯上下端に貝殻刺突文が施され，その間に数条の沈線文がある。114は数条の沈線文を施し，また波状口縁を呈する可能性がある。116は文様帯下端に刺突文を施し，119は数条の細い沈線文が施される。

117・118・120は貝殻刺突文と沈線文を組み合わせて文様が施される。117は横位の貝殻刺突文とその下に１条の沈線文が施され，118は２条の沈線間に斜位の貝殻刺突文が施される。120は文様帯の幅が広く，数条の沈線文とその下に横位の貝殻刺突文が施され，また口唇部にも２条の貝殻刺突文が施される。

121・122は刺突文と沈線文を組み合わせて文様を構成する。121は波状口縁を呈し，頂部には突起がつき，数条の沈線文と文様帯下端及び口唇部に刺突文が施される。122は文様帯を２段構成し，数条の沈線文とその上下に斜位の刺突文が施される。123は文様帯下端に刺突文が施され，また粘土紐を貼り付けて，その部分に刺突文が施されている。

124・125は口唇部と文様帯下端に刺突文があり，その間に２条の沈線文が施されており，また125は波状口縁を呈する。126は文様帯上下端に貝殻刺突文が施され，その間に斜位の貝殻刺突文が施される。127は文様帯上下端に刺突文が施あり，その間に幅広の板状工具で凹線文が施されている。128は波状口縁を呈し，文様帯下端に刺突文が施される。また，断面が深い「く」字状を呈する。

129・130は数条の沈線文とその上下に刺突文が施され，また130は波状口縁気味になる。131は斜位の貝殻刺突文が施される。132は浅い貝殻刺突文が施される。

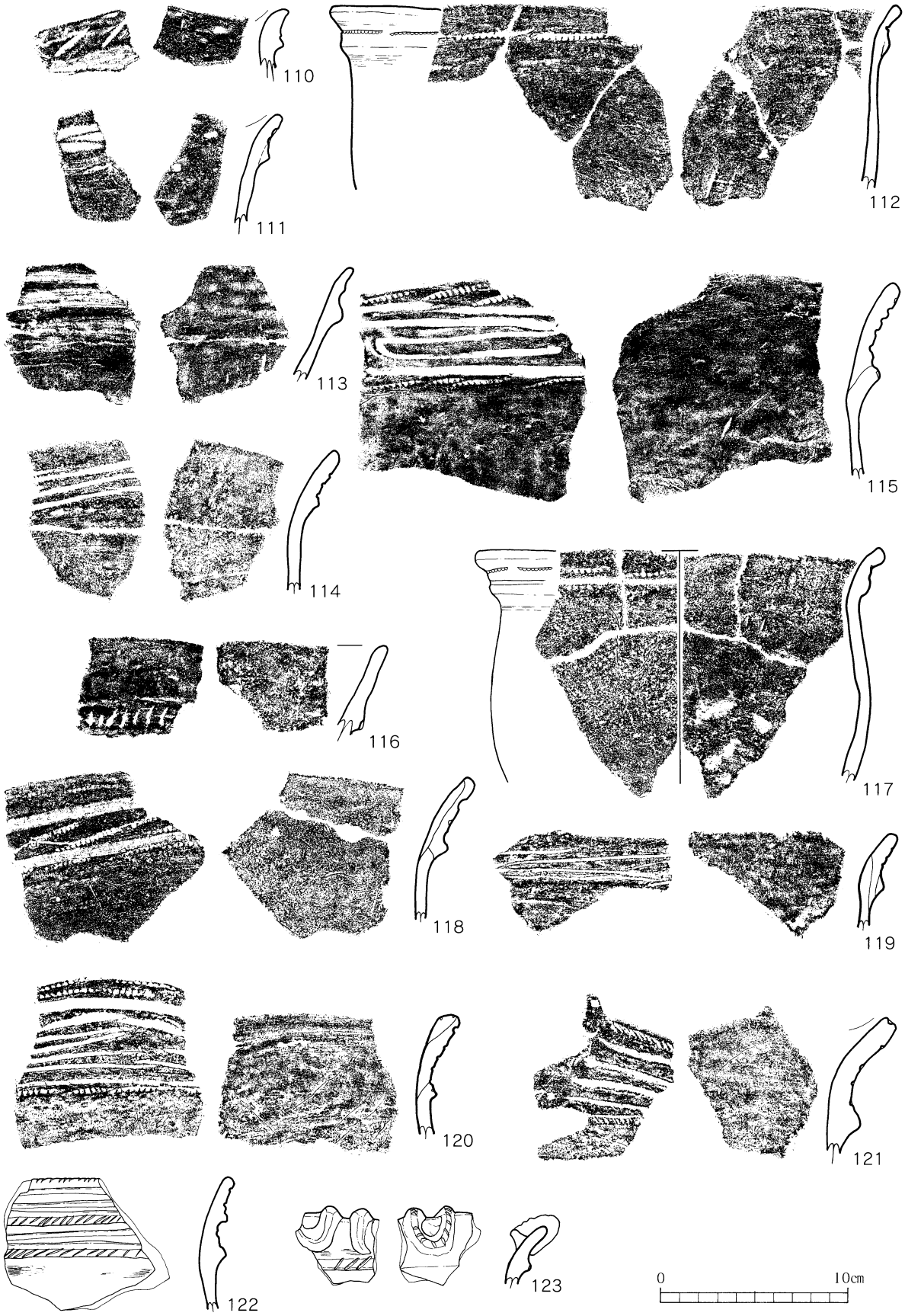
133・134は貝殻刺突文と沈線文を組み合わせて文様が施され，133は数条の沈線文とその上下に貝殻刺突文が施されている。134は横位の貝殻刺突文と沈線文が交互に施され，口縁端部が若干内湾する。

135・136は貝殻刺突文を，137斜位の刺突文がそれぞれ施される。136は波状口縁を呈し，135・137は口縁部断面形が方形に近く，また僅かに外反する。138は数条の沈線文とその上下に刺突文が施される。139は貝殻刺突文が斜位に施され，貝殻押圧文が縦位に施される。また，貝殻条痕が内外面に残る。

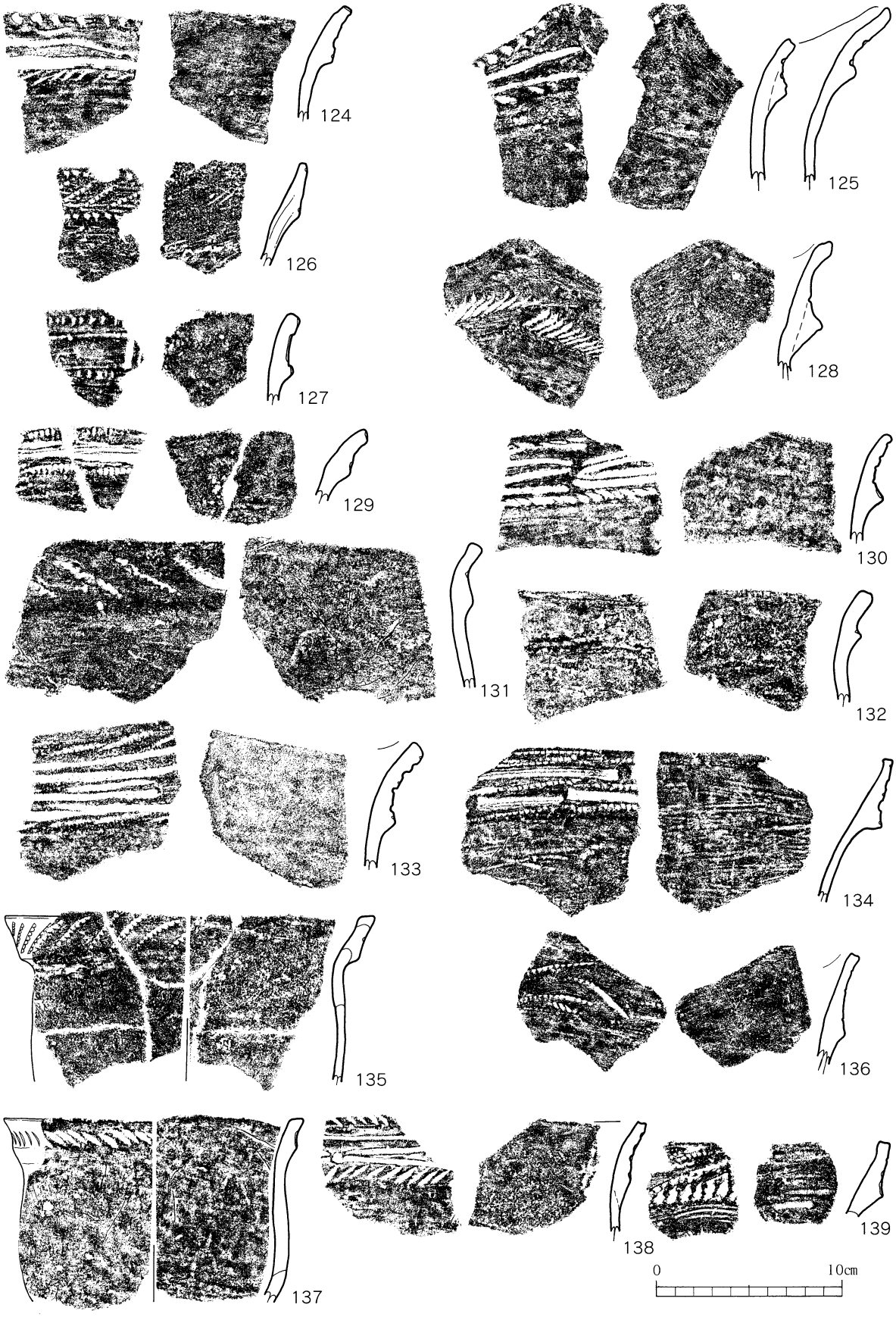
140は口径が大きく，沈線文と竹管文が施される。141は波状口縁を呈し，頂部には２段の橋状把手を作り出す。文様は頂部を中心に展開し，沈線文と刺突文で構成されている。また，頂部内面に沈線文が施されている。142は文様帯上下端に刺突文が施され，その間に沈線文を「ハ」字状に描いている。

143は数条の沈線文とその下に横位の貝殻刺突文が施され，波頂部および間隔をおいて円形の刺突文が施されている。また，頂部内面に数条の貝殻刺突文が施され，内面には板ナデ痕が残る。144は数条の沈線文を施し，文様帯下端に刺突文を施す。

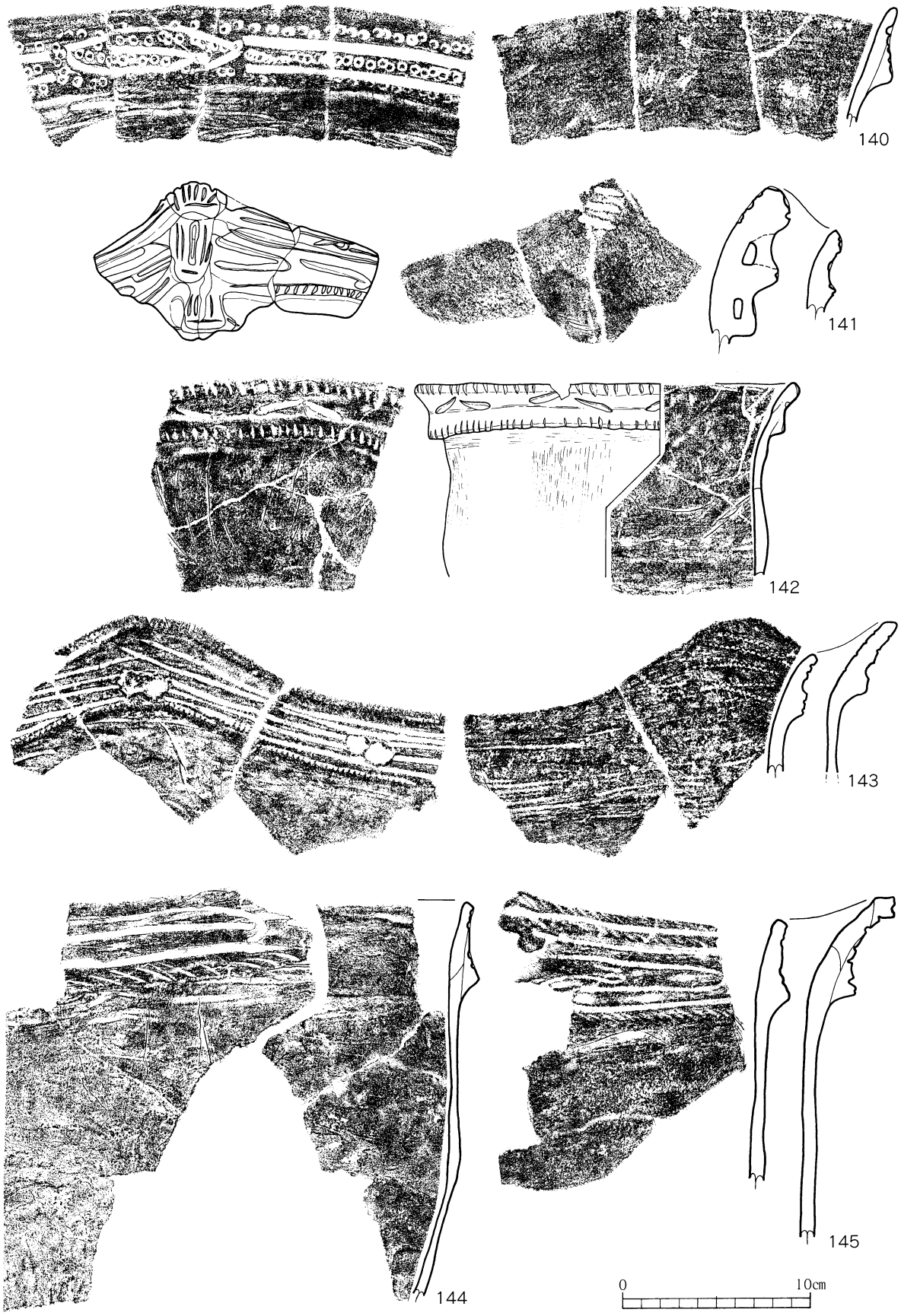
145は波状口縁を呈する。数条の沈線文が施され，文様帯下端には刺突文が施される。頂部には粘土紐を貼り付け，１条の沈線文を描き，その上下に刺突文が施されている。146は



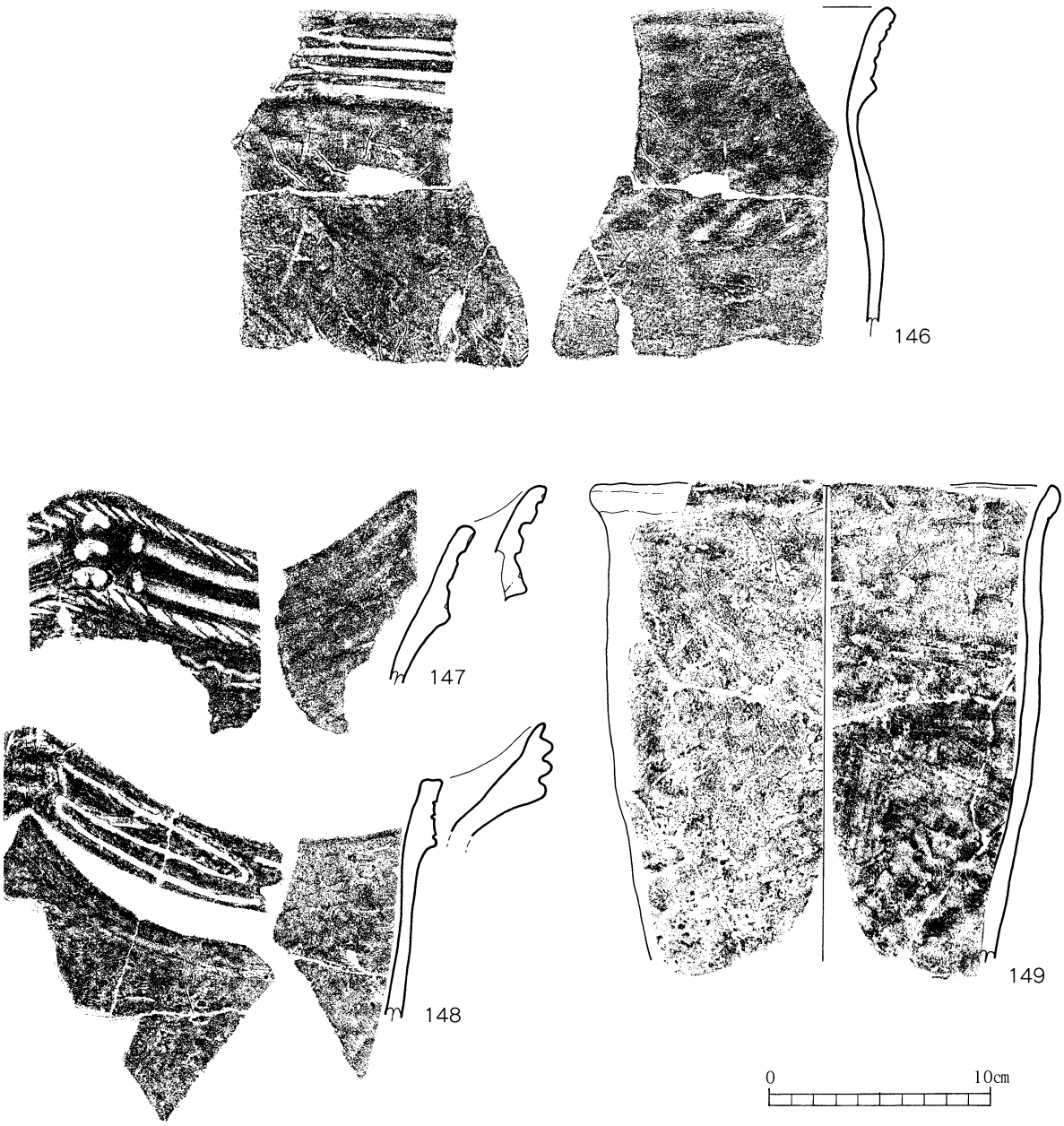
第19図　縄文土器　Ⅱb－２類（２）



第20図　縄文土器　Ⅱb－２類（３）



第21図　縄文土器　Ⅱb－２類（４）



第22図　縄文土器　Ⅱb－２類（５）・Ｘ類（１）

４条の沈線文が施され，胴部は張る．

147は波状口縁を呈し，波頂部には縦位に三つの円形の刺突文をそれぞれ２つ組み合わせて文様を描き，２条の沈線文と文様帯上下端に刺突文が施される。148は波状口縁を呈し，上部から見ると方形を呈するような形となる。沈線文がS字状に施される。また頂部には張り出しがあり，削って段をなしている。

Ⅱｃ類（第23図 150～165）

口縁部の断面が，三角形あるいは「く」字状を呈さず，方形に近い形態を呈するもので，

口唇部が平坦になるものが多い。

150・151は口縁部断面形態が小さな方形を呈するものである。150は浅い刺突文が施され，151は口唇部と口縁部に刺突文が施されている。152は文様帯をはっきりせず，数条の沈線文が施されている。153は波状口縁を呈し，数条の沈線文とその上下に刺突文が施される。154は口縁部上端に刺突文を，その下に２条の沈線文が施されている。155は斜位の貝殻刺突文が施される。

156は４条の沈線文とその上下に刺突文が施され，157～159は数条の沈線文が施される。160・161は沈線文が施され，また160は波状口縁を呈する。162・163は貝殻刺突文が施され，162は若干波状口縁を呈する。163・164・165は口縁部が断面方形を呈しながら丸身を帯びるもので，164は２条の沈線が施され，165は浅い貝殻刺突文が施されている。

Ⅱｄ類（第24～25図 166～203）

Ⅱａ～Ⅱｃ類と器形・形状は類似するものの，どの類にもあてはまらないもの，あるいは特殊なものを一括して取り上げる。

166は口縁部が肥厚し，１条の沈線文とその上に斜位の刺突文が施される。167・168は口縁部が肥厚し，また丸みを帯び，貝殻刺突文が施される。168は内面に貝殻条痕が残り，上部は横位に，下部は斜位に調整が行われている。169は口縁部が外反し，断面三角形を呈さないもので，文様は細く，数条の沈線文とその上下に斜位の刺突文が施される。170は口縁部下部がわずかに肥厚し，沈線文が施されている。171は数条の貝殻刺突文が施され，172は２条の沈線文とその上下に連点文が施される。

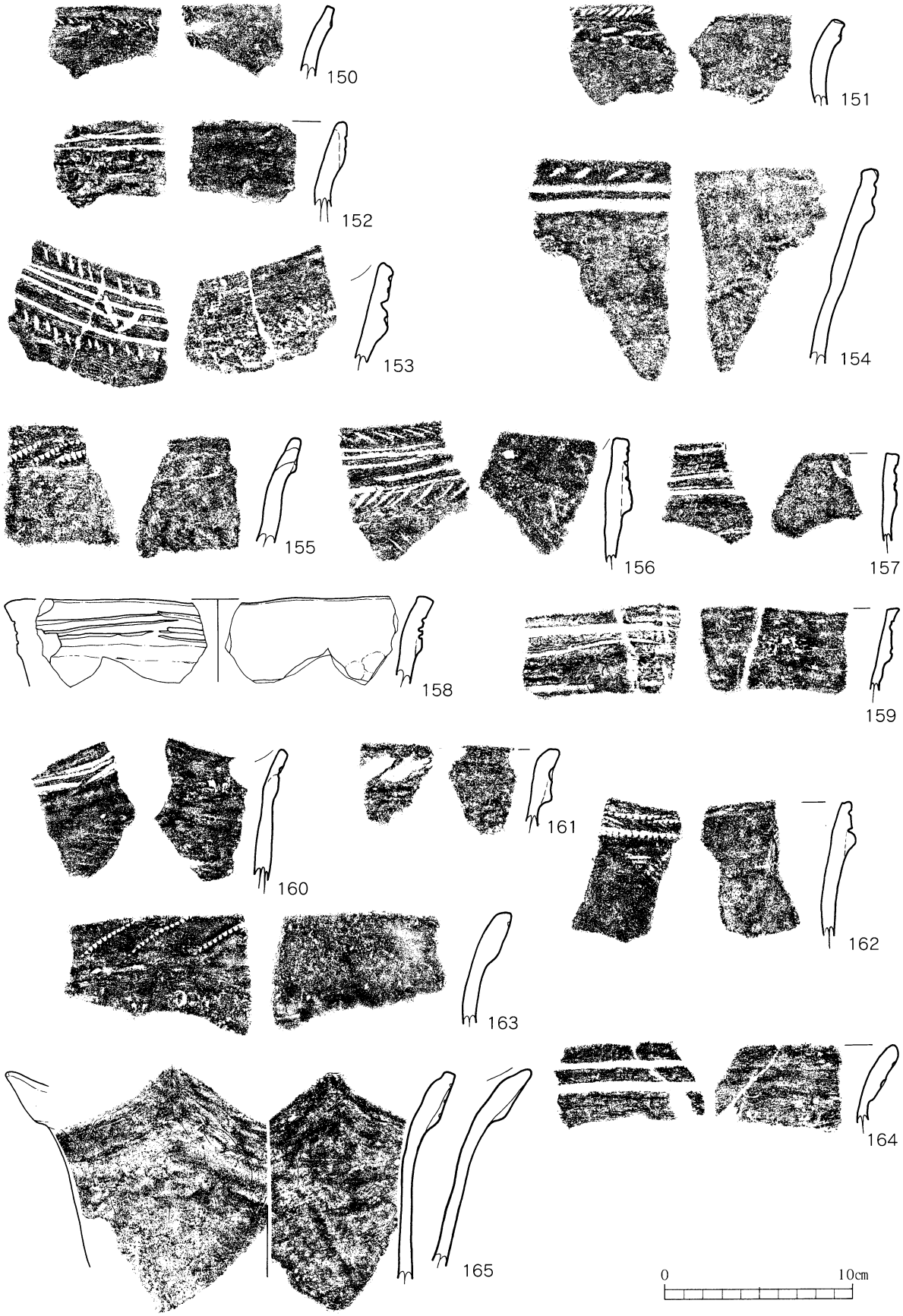
173・174は口縁部が肥厚し，断面が方形に近い形態を呈する。173は波状口縁を呈し，２条の沈線文と口縁部上端に刺突文が施される。174は口縁部がやや内湾し，文様は板状工具で円のような文様が施されている。175は口縁部内面に段があり，外面には２条の沈線文とその上に刺突文が施される。

176は波状口縁となり，頂部には内外面に沈線文が施されており，外面には貝殻刺突文を組み合わせる。また内面には曲線的な文様を描く。比較的新しい段階に入るものと思われる。177は口縁部の肥厚が弱く，沈線文と口縁部上端に刺突文が施される。178は数条の浅い沈線文が，そして口唇部には刺突文が施されている。179は僅かに肥厚し，間延びした形状を呈するもので，沈線文と刺突文を交互に組み合わせて文様が施される。

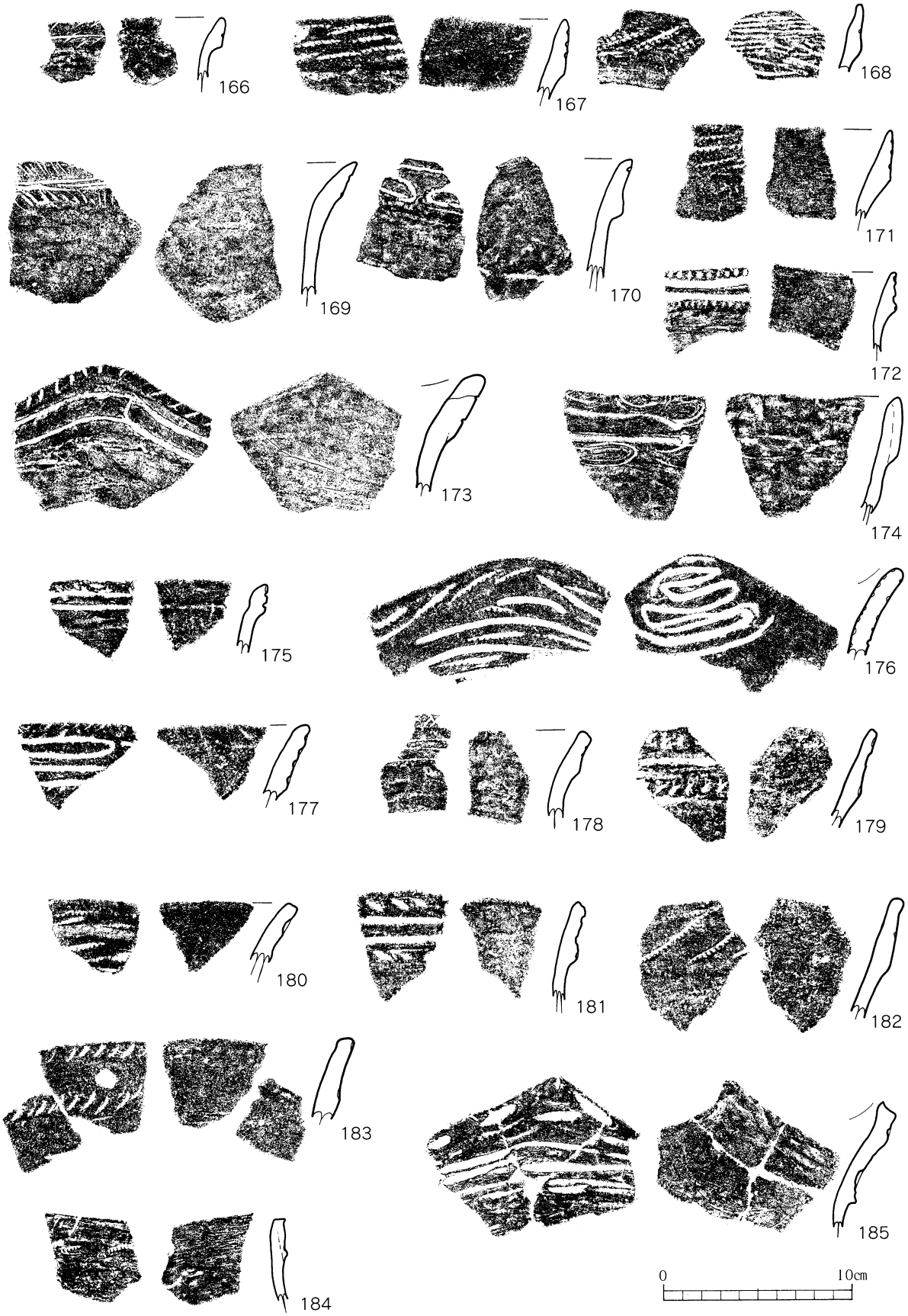
180・182・184は貝殻刺突文が施される。181は２条の沈線文があり，その上下に刺突文が施される。183は文様帯上下端に刺突文が施される。なお，口縁部に円形の空洞部分があるが，人為的なものではないと考えられる。

185は波状口縁を呈するものである。また特異な口縁部形態のもので，僅かに肥厚し，やや内湾する。文様は波状口縁に沿って短沈線文が施され，その他に数条の沈線文と貝殻刺突文が施される。

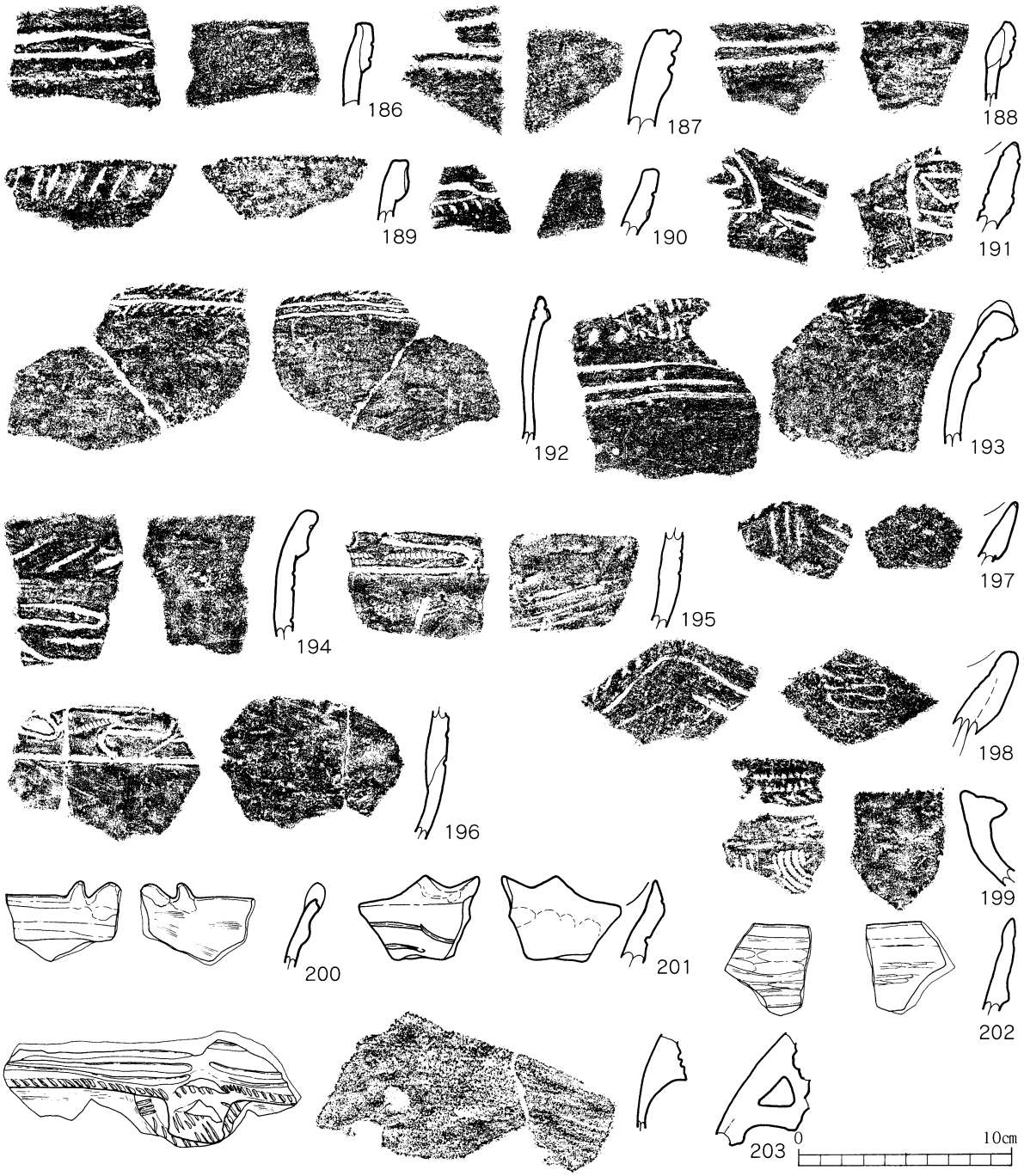
186・187は口縁部断面が方形に近い形を呈する。186～188は沈線文が施され，また187は口唇部にも沈線文が施される。189は刺突文が施される。190・191は口縁部が僅か



第23図　縄文土器　Ⅱc類



第24図　縄文土器　Ⅱd類（1）



第25図　縄文土器　Ⅱd類（2）

に肥厚し，沈線文と刺突文が施される。191は内外面に幾何学的な沈線文が施され，また外面の文様帯下端と口唇部に刺突文を施す。

192は口縁部文様帯の幅が狭く，断面三角形を呈する口縁部から胴部へまっすぐのび，Ⅱa類に類似するものである。内外面共に文様をもち，外面は１条の沈線文とその上下に刺突文が施され，内面には２条の沈線文と口縁部上端に刺突文が施される。内面にナデ調整痕が

認められる。

193は口縁部上端に粘土紐を貼り付けた突起状のものをもつ。文様は数条の沈線文が施され，口縁上端部には円形の刺突文が施される。また粘土紐を貼り付けそこに２段の刺突文が施されている。

194～196は胴部にまで文様が及ぶものである。195・196は文様の構成から指宿式土器とも考えられるが，市来式土器の器形を呈する194が，195・196と類似する文様を持つことから，市来式土器の可能性があるとしてここで取り上げた。194は口縁部に斜位の刺突文が施され，胴部には曲線的な沈線文が施されている。195・196は胴部片であるが，曲線的な沈線文とその内側に貝殻刺突文が施されている。

197・198は波状口縁を呈し，沈線文と口縁部上端に刺突文が施される。また，198は内面にもS字状の沈線文が施されている。199は口縁部が断面三角形に近い形を呈しつつ，口縁部から胴部へと強く外反している。口唇部に貝殻刺突文が施され，胴部には貝殻腹縁部によって，半円状に文様が施される。

200・201はともに口縁部に山形突起をもつものである。200は粘土紐を貼り付け，２か所の突起部を作る。201は口縁部に沈線文が施され，内面には指頭圧痕が残る。

202は内外面にミガキのような痕跡を残すものである。

203は橋状把手部である。刺突文と沈線文を組み合わせて文様が施されている。

Ⅲ類（第26図 204～221）

口縁部が弱く肥厚し，口縁部が丸みを帯びるか平坦面をもつものである。

204は口唇部に１条の沈線文が施される。205～207は口唇部に円形の刺突文が施され，206・207は内外面に貝殻条痕が残る。208・209は口唇部が平坦面をもち，若干丸みを帯びるもので，208は口縁部上端に，209は口唇部にそれぞれ刺突文が施される。

210は口唇部に刺突文をもち，口縁部断面が若干三角形を呈している。211は口唇部に数条の沈線文が施され，また口縁部は肥厚して丸みを帯びる。212は口唇部に貝殻刺突文が施される。

213は口縁部が肥厚し，口唇部に１条の沈線文が施される。214は口唇部が平坦となり，そこに斜位の刺突文が施される。

215・216は口唇部にそれぞれ２条の沈線文が施される。216～219は口縁部が肥厚し，丸みを帯びる。217は斜位の刺突文が施される。218は口唇部に１条の沈線文があり，口縁部上端には斜位の刺突文が施される。219は胴部が張る器形で，口唇部に斜位の刺突文が施される。

220は口唇部が平坦になり，２条の貝殻刺突文が施される。221は口縁部が肥厚し，斜位の貝殻刺突文が施される。

Ⅳ類（第27図 222）

胴部１点のみの出土であるが，本遺跡出土の磨消縄文系土器の中で最も古く位置づけられると思われるものである。太めの沈線文と磨消縄文が施されている。１点のみの出土で

第26図　縄文土器　Ⅲ類

あり，しかも胴部片ということで断定はできないが，小池原上層式土器と位置づけて良いものであろう。

Ⅴ類（第27図 223）

口縁部から胴部にかけて直行するもので，口唇部に１条の沈線文が施され，外面には間隔を開けて2条の刺突文が施されている。

Ⅵ類（第27・28図 224～250）

口縁部が肥厚し，頸部で強く外反し胴部が張り出すものである。口縁部・頸部・胴部に文様が

施され，磨消縄文と刺突文・沈線文などが施される。器面は内外面ともにミガキ調整が行われている。

224は口唇部に刺突文があり，胴部には磨消縄文が施され鉤状に描くものである。橋状把手をもち，上部に窪みをもつ。橋状把手にＳ字状の沈線文が施されており，これは鐘崎式土器の古い段階にみられるものである。

225～233は口唇部に１条ないし２条の沈線文と刺突文を組み合わせている。そして，頸部から胴部にかけて磨消縄文が施されている。225～227が頸部への外反が強いものであるのに対し，228～233は緩やかに胴部へと続き，口縁部の肥厚も弱い。

234～238は胴部片である。234・237はＳ字状に沈線文が施されており，237には欠損しているものの把手が付いていたことが分かる。

239～241も口縁部から緩やかに胴部へと続く器形であるが，磨消縄文は施されず，沈線文のみによって文様が構成されている。

242は橋状把手がついており，口縁部から把手にかけてＳ字状の沈線文が施されている。また胴部に描かれた文様は次の段階の北久根山式土器で見られるようになる文様であることから，この土器は鐘崎式土器から北久根山式土器への過渡期に位置づけられると思われる。

243～246は鐘崎式土器に伴う把手あるいは突起部分である。鐘崎式土器は橋状把手と突起部がそれぞれ２つづつあり，それらがそれぞれお互いに向き合う形で配置され，そして口縁部文様もその４か所を中心に展開していると考えられる。

243は口唇部に斜位の刺突文が施され，１条の沈線文が橋状把手部では２条に分かれ1条は曲線的に描かれる。胴部には２条の沈線文が施される。244～246は穿孔が施されるものである。244は口唇部に刺突文があり，胴部に沈線文が施される。245・246は口唇部に縦位の沈線文と曲線的な沈線文が施され，類似した文様構成をもつものである。

247～249は浅鉢形土器である。247は口唇部及び頸部にそれぞれ沈線文が施される。249は橋状把手をもち，文様が橋状把手を中心に展開している。口唇部は把手部付近に刺突文が施される。胴部では橋状把手部下にS字状が沈線文を施される。248は無文のものである。250は底部であり，１点のみの出土である。

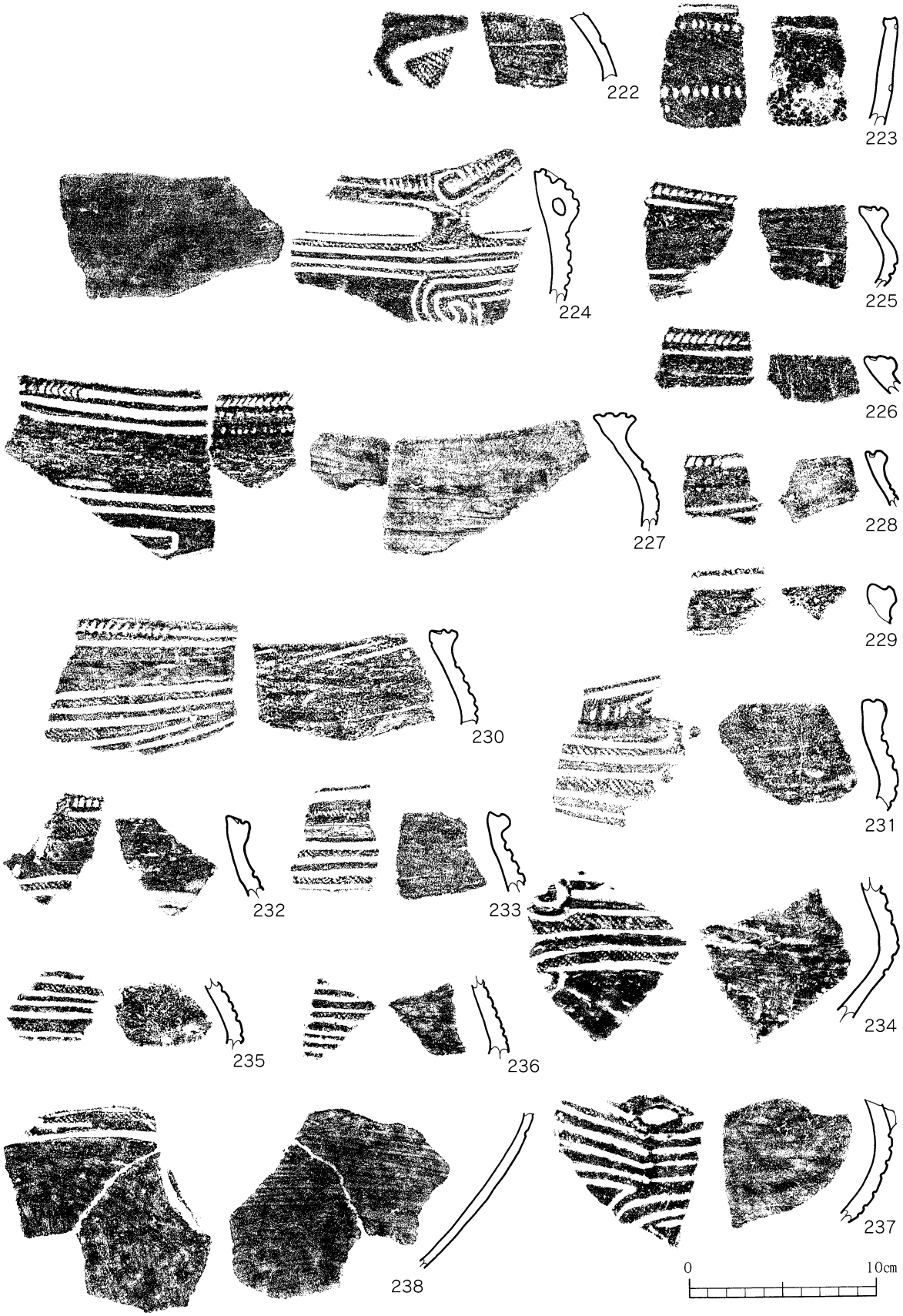
Ⅶ類（第29図 251～262）

Ⅵ類に器形・文様などが類似するものである。しかし，Ⅵ類に比べて口縁部が間延びし，文様帯の幅が広くなる。また文様にも特徴的なものがあるため，ここでは類を別にして取り上げる。

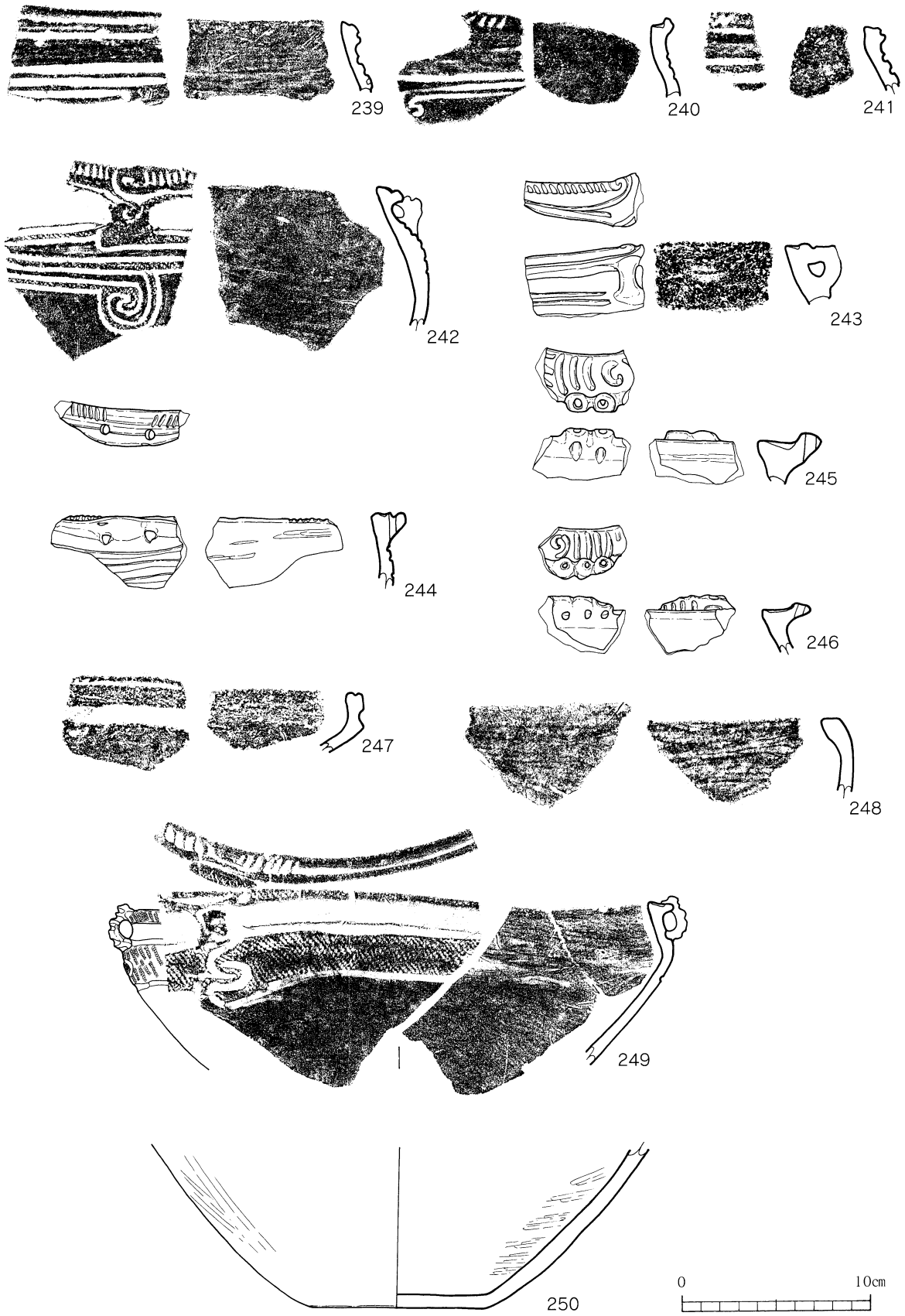
251は，口縁部の橋状把手が付く部分である。橋状把手の上端部が欠損しているが，この部分が膨らみをもち，瘤状のものがついていたのではないかと思われる。この橋状把手を中心に文様は展開し，橋状把手部分には沈線文と磨消縄文によって構成され，また沈線端には円形の刺突文が施されている。そして橋状把手から離れるにつれて，口唇部には刺突文が施され，口縁部には磨消縄文が施されている。

252は胴部片であるが，沈線文のみによって構成され，渦巻状の文様が施されている。

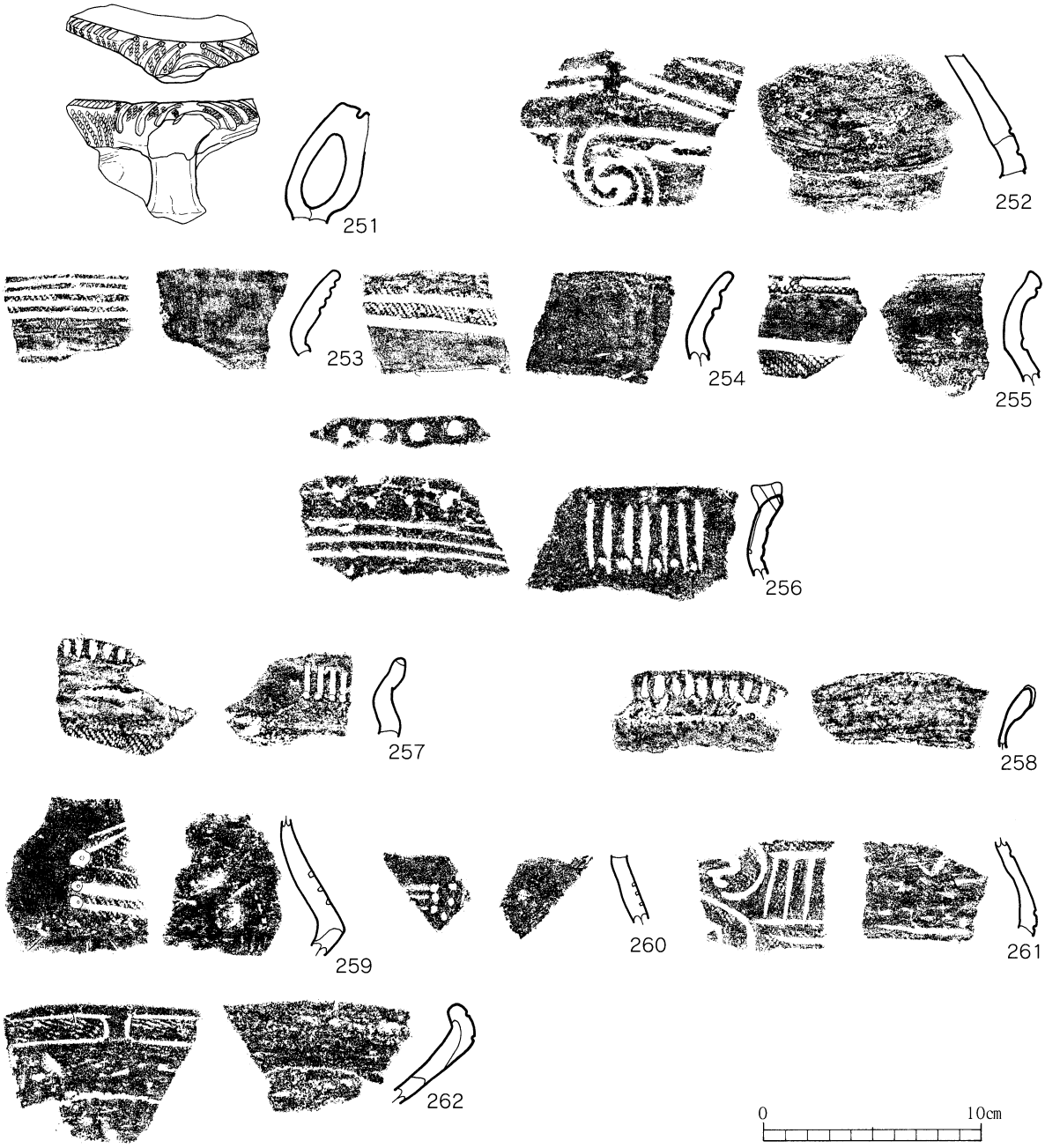
253～255は口縁部がやや外反しており，沈線文と磨消縄文が施されている。253は4条の



第27図　縄文土器　Ⅳ類・Ⅴ類（2）・Ⅵ類（1）



第28図　縄文土器　Ⅵ類（２）



第29図　縄文土器　Ⅶ類

沈線文と磨消縄文が，254は２条の沈線文と磨消縄文がそれぞれ口縁部に施されている。255は口縁部と頸部に沈線文と磨消縄文が施されている。

256・257は内外面共に文様が施されたものである。256は口縁部内面に粘土紐を貼り付け，その上面に穿孔が施されている。頸部には３条の沈線文が施され，内面には縦位に７条の沈線文が施されている。内面の沈線端と沈線間に円形の刺突文がある。257は口縁部が「く」字状になり，やや内側に入る。内外面に文様をもち，内面には縦位の沈線文とその下端には円形の刺突文が施される。口唇部には刺突文があり，胴部外面に磨消縄文が施

される。

258は口縁部が肥厚し，口唇部に粘土紐を貼り付け，そこに刺突文が施される。

259～261は胴部片である。259・260は沈線文と磨消縄文が施され，沈線端に円形の刺突文が施される。261は沈線文と磨消縄文で幾何学的な文様が施されている。

262は浅鉢形であり，口縁部に方形に沈線文を描き，その中に貝殻刺突文が施され擬似縄文と思われる。

Ⅷ類（第30図 263～271）

口縁部が肥厚し，胴部が張るものである。

263は器壁が厚く，頸部で強く外反し胴部へいたる。口縁部に粘土紐を貼り付け，そこにM字状の沈線文が施されていたと思われる。口縁部上端に斜位の刺突文と，その下に数条の沈線文が施される。

264・266・267は斜位の刺突文が施され，265は刺突文下に２条の沈線文が施される。267は口縁部が弱い断面三角形を呈し，若干内湾する。

268は波状口縁となり，頂部と考えられる箇所に粘土紐を貼り付け，M字状の沈線文が施される。頂部以外には斜位の沈線文が施されている。269は若干波状口縁を呈し，M字状に粘土を貼り付け，そこに沈線文が施されている。口縁部内面に沈線文が，口唇部に刺突文が施される。また橋状把手をもつ。

270・271は口縁部が断面三角形を呈し，やや内湾する。270は波状口縁となり，頂部に縦位の沈線文を，その横には沈線文が楕円形状に施され，その間に円形の刺突文が施されている。271は２条の沈線文とその上下に刺突文が施されている。

Ⅸ類（第30図 272～274）

口縁部が断面三角形を呈して内湾し，胴部へ直行するものである。

272は口縁部に数条の沈線文が施される。274はこの類に属すると考えられる浅鉢の底部であり，やや上げ底気味になる。

Ⅹ類（第22・31図 149・275～296）

無文土器である。

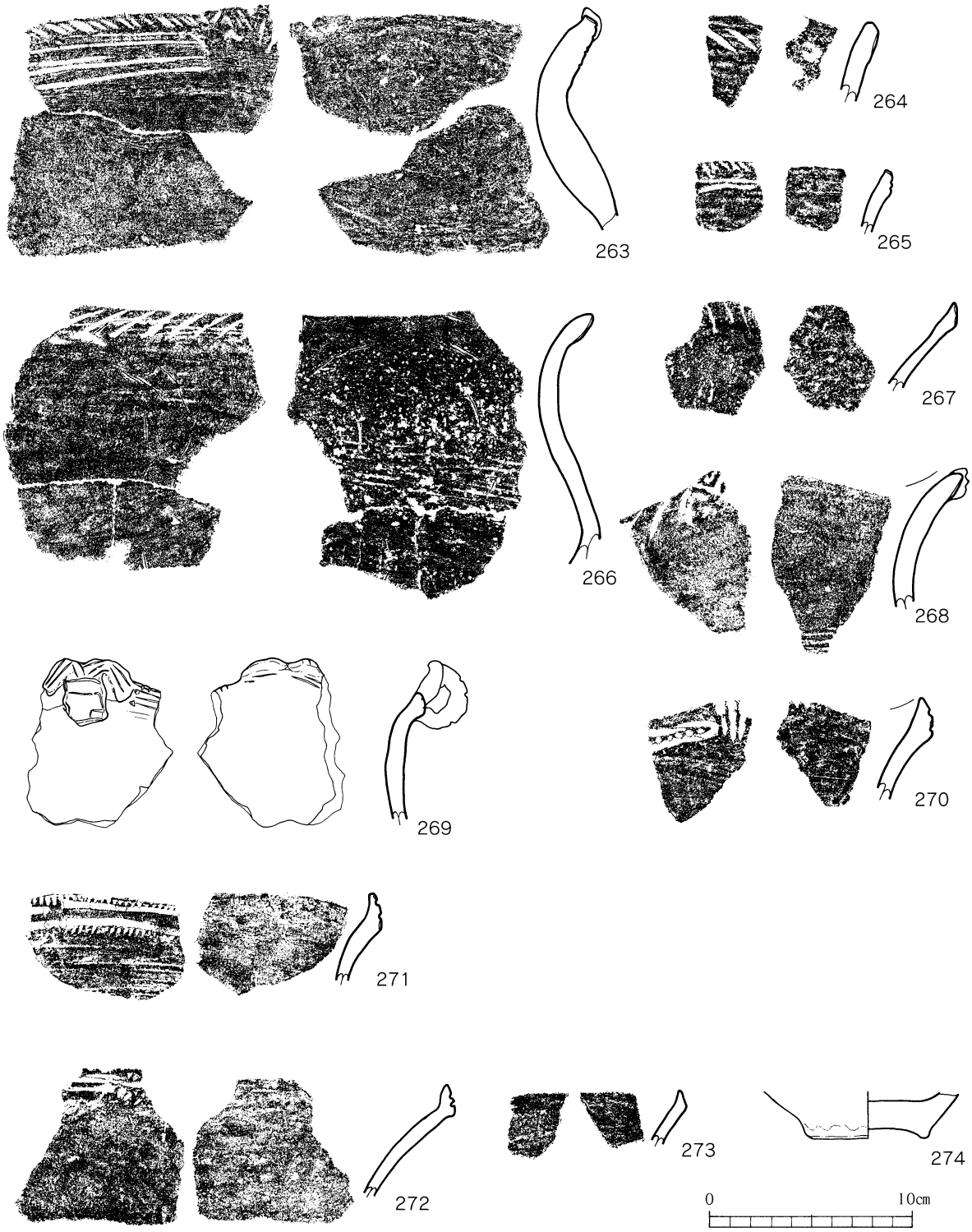
149・275～285は口縁部が断面三角形を呈していることから，市来式の無文土器である可能性が考えられる。149の口径は22cmである。278は内面に，280は外面にそれぞれは貝殻条痕が認められる。

286・287は口唇部に平坦面をもち，胴部に向かって直行している。287は，内面にミガキのような調整痕がみられる。288は口縁部先端がすぼまり，289も同様の器形が考えられる。290は口縁部が外反する。

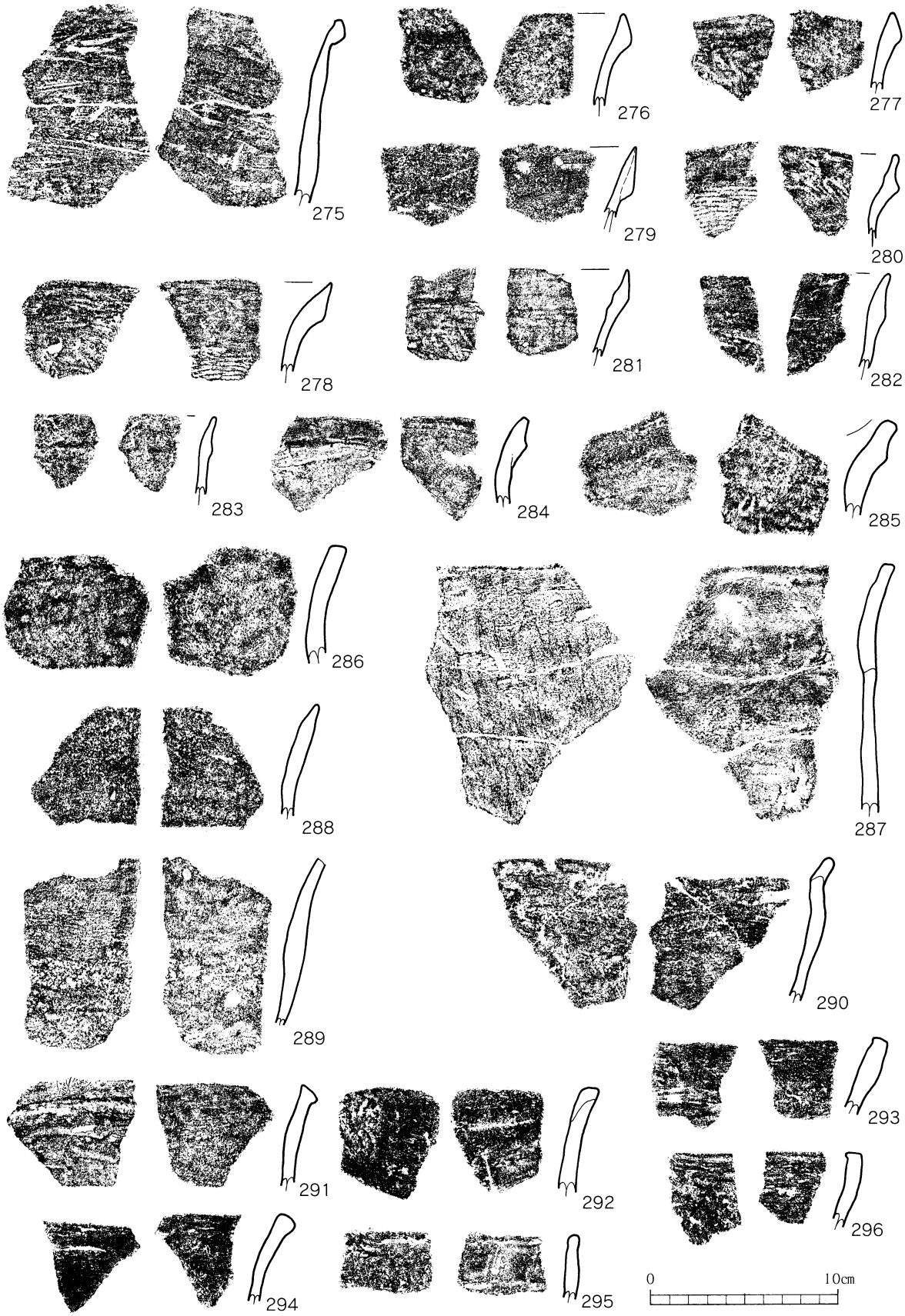
291は口縁部が断面三角形に近い形をしており，また292～296は口唇部に平坦面をもち，口縁部が直行する。291～296は草野式の無文土器の可能性がある。

Ⅺ類（第32図 297～303）

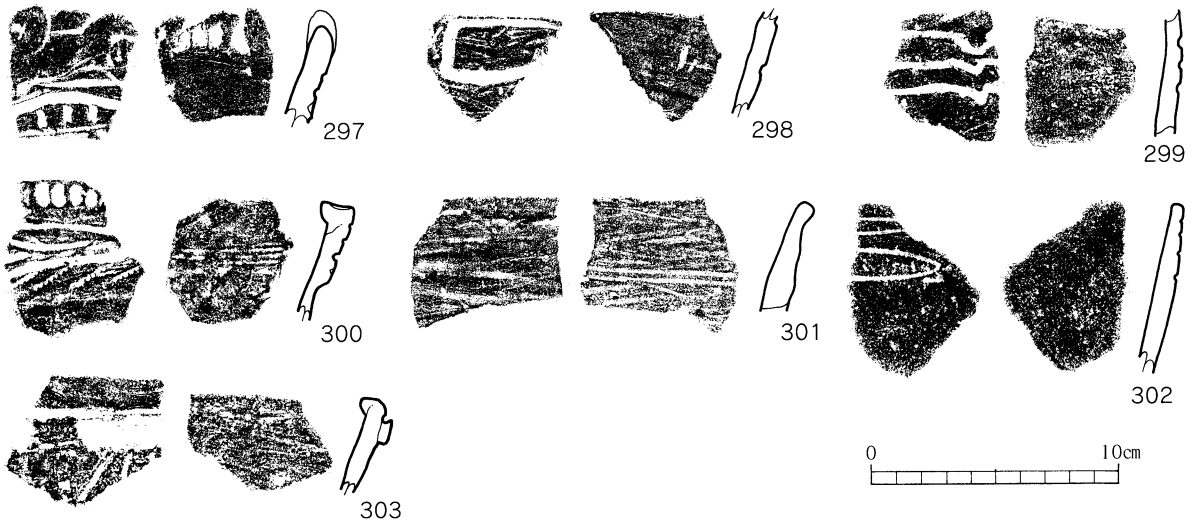
297は沈線間に列点文が施され，擬似縄文を描いている。口唇部には粘土紐をねじり込みながら貼り付けている。これらの手法は後期前半にみられるものである。



第30図　縄文土器　Ⅷ類・Ⅸ類


275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
0
10cm

第31図　縄文土器　X類



第32図　縄文土器　XI類

298は半裁竹管状の工具で逆「コ」字状に描くものであり，おそらく草花形文様の指宿式土器であると考えられる。299は３条の沈線文が施されるもので，後期前半のものと考えられる。300は口縁部を肥厚させ，斜位の貝殻刺突文を施す。口唇部はさらに内側へ断面三角形状に肥厚させ，その上面に凹点が施されている。類例がなく確実な位置づけは難しいが，貝殻刺突文が市来式土器に類似すること，そして口縁部及び口唇部の肥厚が九州西海岸側の土器にみられることから，その両者の折衷形とも考えられる。

301は内外面に貝殻条痕が残り，無文の土器である。

302は口縁部が直行し，曲線的な沈線文がみられる。

303は口唇部が内面に張り出し，口縁部には粘土紐を貼り付け，その粘土紐直上に１条の沈線文が施される。なお，貼り付けた部分が一部剥離している。

底部

平底あるいはやや上げ底気味になるものをＩ類とし，脚台状のあるものをII類とした。

Ｉ類（第33図 304～315）

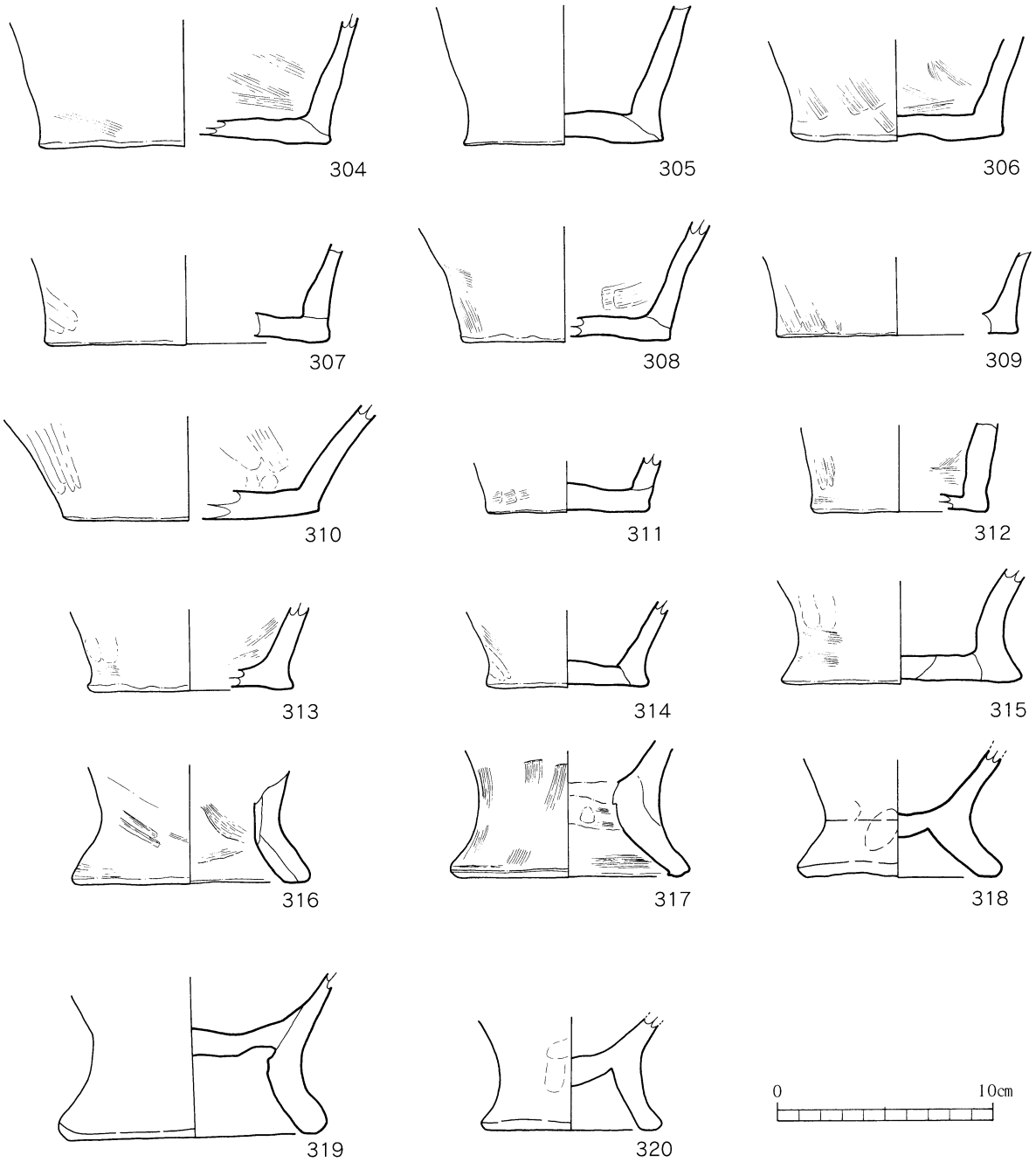
304・309は内外面にヘラナデ調整痕がみられる。305・306は底部の中央部分が凹んでいるものであり，306は内外面にヘラナデ調整痕が残る。307は上げ底気味になり，外面にはナデ調整痕が残る。308も上げ底気味になり，内外面にヘラナデ調整痕が残る。

310・311は底部内面の中央部へしだいに器壁が厚くなるもので，310は外へ大きく開きながら胴部へといたる。内面にはヘラナデ調整痕，内底面部には指頭圧痕，外面にはナデ調整痕が残る。312は底面は比較的薄く，胴部は厚みを持ち，内外面にナデ調整痕が残る。

313・314・315は張り出し部をもつものである。

II類（第33図 316～320）

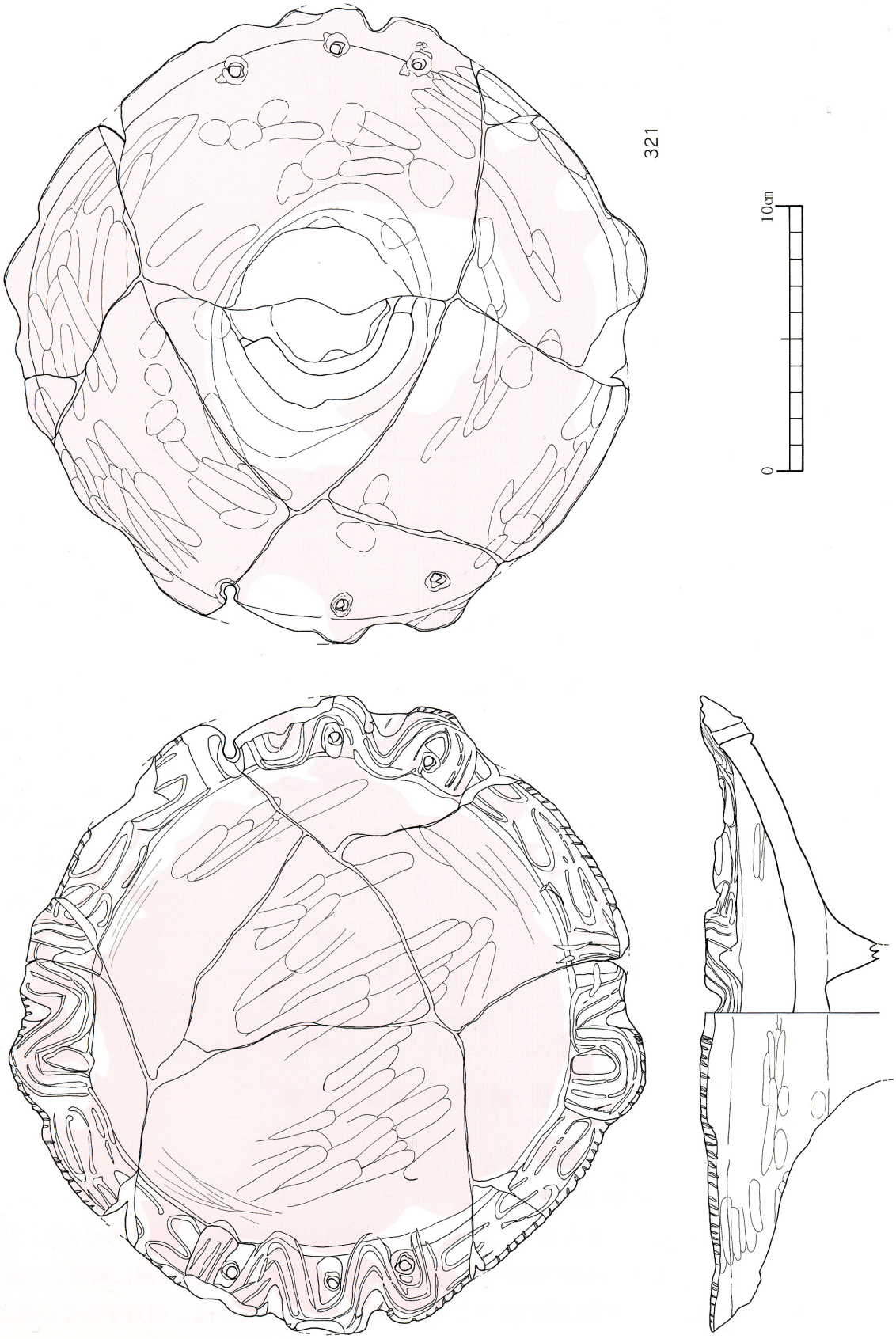
脚台である。316・317は内外面に調整痕が残る。318・319・320は脚台内面天井部が残る。



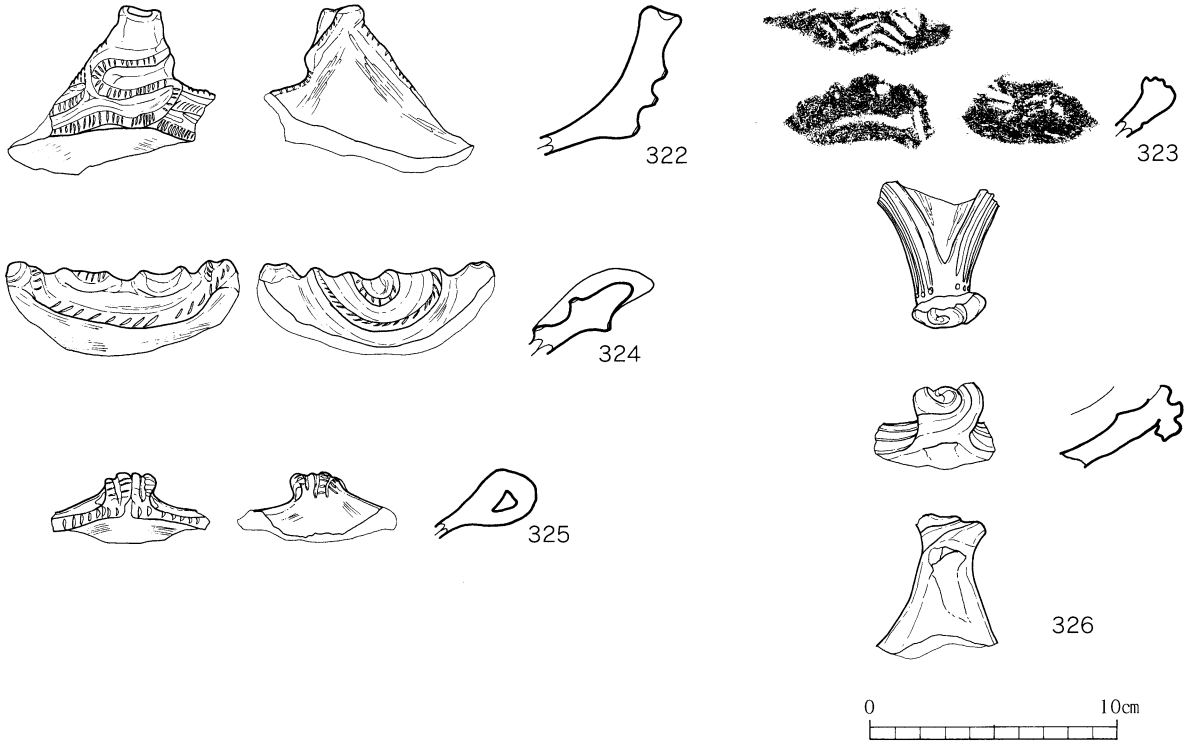
第33図　縄文土器　底部Ⅰ・Ⅱ類

台付皿形土器(第34～36図 321～328)

321は脚部が欠損しているものの，直径24cmの皿部がほぼ完形になるものである。内外面共に丹が塗られており，ほぼ全面に塗布されていたと思われる。内面は縁に刺突文を施し，文様帯部分は４か所の粘土紐の貼付け部を中心に文様が展開している。相対する２か所にそれぞれ３つの穿孔が施され，それと直交する２か所にはM字状の粘土紐貼付けがある。文様は沈線文によって構成され，S字状の文様が展開する。内外面共にヘラナデ調整痕が残り，



第34図　縄文土器　台付皿形土器（1）



第35図　縄文土器　台付皿形土器（２）

脚部外面付近には指頭圧痕も多く見られる。

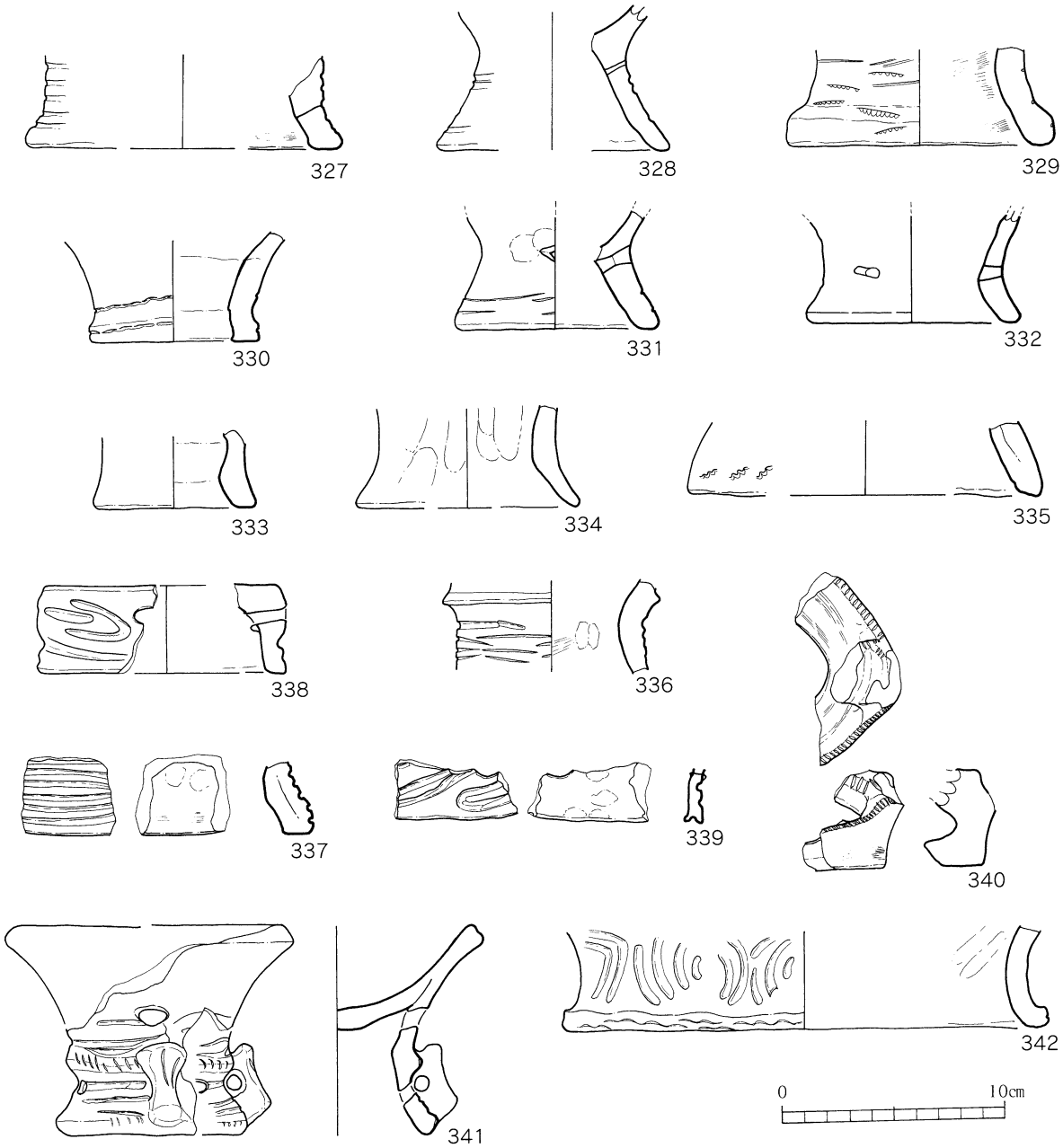
322は突起部分と思われ，頂部には窪みが作られている。内面に文様はなく，辺縁部に刺突文が施されるのみである。外面には粘土紐をS字状に貼り付け，そこに刺突文が施されている。323は外面に1条の沈線文，内面及び口唇部には沈線文がM字状に施されている。作りは粗雑なものである。324は外面から内面へ粘土紐を貼り付け，２か所に山形の突起部を作る。文様は粘土紐に刺突文が施される。

325・326は磨消縄文系土器の台付皿形土器と考えられる。325は橋状把手状になり，そこに刺突文が施されている。326は形状が広がらず皿部が小さくなると考えられる。沈線文と沈線端に円形の刺突文が施されており，この文様については猪の肩甲骨を模倣したものではないかと思われる。

脚部（第36図 327～342）

ここでは，脚部を一括して取り上げた。沈線文や穿孔などの文様をもつ脚部であるが，台付皿形土器の脚部とみなした。ただ，同時期の深鉢などの脚部にも簡素ではあるが、施文されるものがあるため，深鉢等の脚部である可能性もありうる。

327・328は横位の沈線文が施される。329・330・335は貝殻刺突文が施されるものである。331・332は穿孔が認められる。いずれも穿孔は相対する位置にもう一つ穿孔があった可能性が強い。



第36図　縄文土器　台付皿形土器脚部

333～334は，深鉢の可能性も強いが，ここでは台付皿形土器に伴うものとして取り上げた。

336・337は脚の一部と思われ，数条の沈線文が施されている。338・339は太い沈線文によって曲線的な文様が施されているものである。338は欠損しているものの穿孔がみられ，339は器壁が薄い。

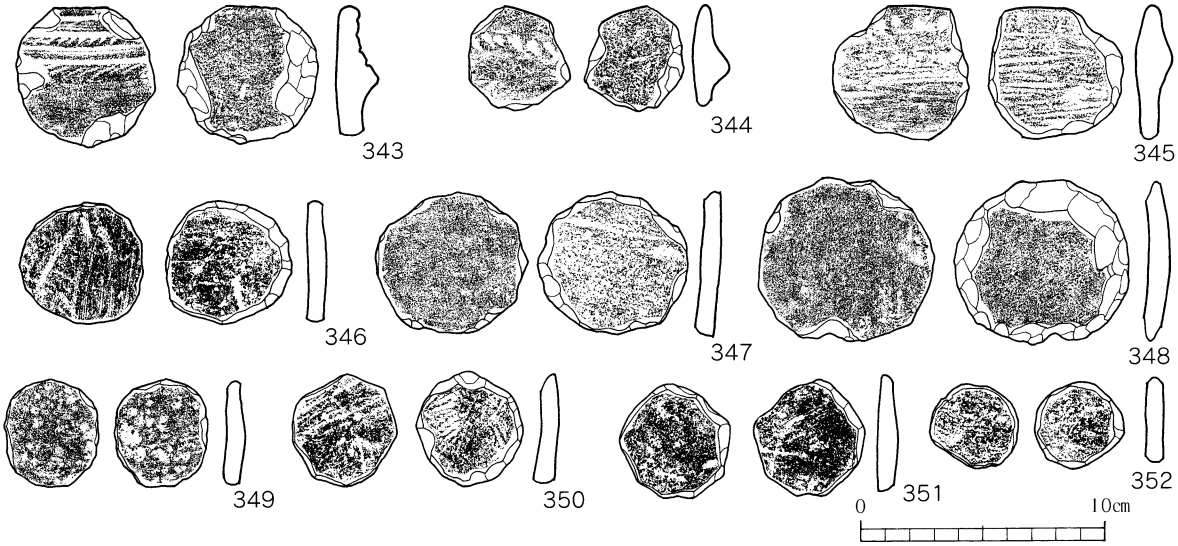
340は脚部上端に刻目が施される。ドーナツ状の底になり，その底部から橋状につくられた部分がある。

341は脚部及び皿部が一部残存している。脚部に橋状把手がつき，縦位の刺突文が施されている。脚部は脚部下端および，皿部への移行部分に刺突文が施され，その間に沈線文が施されている。皿部には文様が施されず，穿孔がある。

342は底部として考えると径が比較的大きくなることから，口縁部の可能性もあるが，作りが粗雑であるためここで取り上げた。沈線文を曲線状に描き、貝殻刺突文が施される。

円盤形土製品（第37図）

全部で10点の円盤形土製品が出土した。いずれも破損した土器の破片を利用したものであり、周縁を細かく打ち欠くことによりほぼ円形に仕上げてある。343～345は口縁部破片を使用したもので、いずれも市来式土器の特徴である断面三角形状の文様帯をもつ。他の７点も器面調整が市来式土器に類似していることから縄文時代後期中半に該当する。大きさは3.2～7.2cmに、重さは11～47ｇにおさまる。



第37図　縄文土器　円盤形土製品

第３表　円盤形土製品

図番号	番号	出土区	層位	取上番号	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g
37	343	A20	Ⅱa		5.68	5.80	1.60	39.65
37	344	A27	Ⅰc		4.15	4.20	1.27	19.94
37	345	B30	Ⅱa		5.47	5.58	1.50	40.03
37	346	AB28,29	1	自然流路３	4.98	5.04	0.88	25.48
37	347	AB17,18,19		自然流路６	5.80	6.23	0.94	38.61
37	348	A29	Ⅱa		6.50	7.20	0.86	46.93
37	349	A16A17	1	溝状遺構４	4.40	3.90	0.66	14.59
37	350	AB28AB29	1	自然流路３	4.60	4.30	0.80	16.58
37	351	B26		炉跡２	4.70	4.50	0.90	19.51
37	352	B26		土坑３	3.45	3.20	0.87	11.39

第４表　縄文土器観察表

挿図番号	番号	出土地		器種	型式	部位	色調		調整		胎土					文様
		区	層				内面	外面	内面	外面	焼成	石英	角閃石	長石	その他	
13	1	B-18・土器溜	Ⅳ	深鉢	松山式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口唇部に斜位刺突文
13	2	B-16	Ⅳ	深鉢	松山式	口縁部	灰黄	にぶい黄橙	ナデ	条痕	良	○	○			口唇部に斜位沈線文
13	3	RI4		深鉢	松山式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐		ナデ	良	○	○			口唇部に斜位貝殻刺突文
13	4	B-17	Ⅳ	深鉢	松山式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	条痕	条痕	良	○			白色	口唇部に貝殻刺突文と刺突文
13	5	A-17	Ⅳ	深鉢	松山式	口縁部	浅黄橙	橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口唇部に横位貝殻刺突文
13	6	B-17・土器溜	Ⅳ下	深鉢	松山式	口縁部	褐灰	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○			白色	口唇部に斜位貝殻刺突文
13	7	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	松山式	口縁部	灰黄	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口唇部に斜位貝殻刺突文
13	8	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	松山式	口縁部	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口唇部に縦位刺突文
13	9	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	松山式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口唇部に縦位刺突文
13	10	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	松山式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	貝殻条痕	良		○	○		口唇部に一条の沈線文
13	11	A26・SC2	Ⅰ	深鉢	松山式	口縁部	浅黄橙	浅黄橙			良	○	○			口唇部に二条の沈線文
13	12	A-17	Ⅲ	深鉢	松山式	口縁部	浅黄橙	にぶい橙		貝殻条痕	良			○	白色	口唇部に二条の沈線文
13	13	A-17・土器溜	Ⅷ	深鉢	松山式	口縁部	灰黄	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良		○		白色	口唇部に一条の沈線文
13	14	A-17	Ⅳ	深鉢	松山式	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○	○			口唇部に一条の沈線文と下に斜位貝殻刺突文
13	15	A-17	Ⅳ	深鉢	松山式	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐		条痕	良	○			白色	口唇部に一条の沈線文と上下に刺突文
13	16	A-17	Ⅳ	深鉢	松山式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口唇部に一条沈線文と上下に横位・斜位の貝殻刺突文
13	17	RI4		深鉢	松山式	口縁部	灰黄褐	黄灰	ミガキ？	ミガキ？	良	○	○		白色	口唇部に二条の沈線文と刺突文
13	18	B-17	Ⅲ	深鉢	松山式	口縁部	にぶい黄橙	灰褐		ナデ	良	○	○		白色	口唇部に二条の沈線文と円形刺突文
13	19	B-18	Ⅳ	深鉢	松山式	口縁部	にぶい黄橙	灰白		ナデ	良	○	○		白色	口唇部に二条の沈線文と刺突文
13	20	B-17	Ⅳ	深鉢	松山式	口縁部	にぶい橙	橙	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○	○	○		口唇部に貝殻刺突文と刺突文
13	21	A-17	Ⅳ	深鉢	松山式	口縁部	灰黄	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○			口唇部に二条の横位貝殻刺突文と上下に沈線文
13	22	RI4		深鉢	松山式	口縁部	褐灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口唇部に縦位沈線と貝殻刺突文
13	23	A-17	Ⅳ	深鉢	松山式	口縁部	橙	にぶい黄橙		ナデ	良	○	○		白色	口唇部に縦位沈線文と横位・斜位の貝殻刺突文
13	24	B-18・土器溜	Ⅶ	深鉢	松山式	口縁部	浅黄	にぶい黄褐	条痕	ナデ	良	○	○	○		口唇部に縦位・横位の三条の沈線文
13	25	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	松山式	口縁部	橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	良		○		白色	口唇部に斜位の刺突文/内面に二条の沈線文
14	26	B-17・土器溜	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙	条痕	条痕	良	○	○		白色	口縁部に斜位刺突文
14	27	B-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	灰白	灰白	ナデ	ナデ	良	○				口縁部に刺突文
14	28	A-25・26	Ⅱa	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位刺突文
14	29	RI4		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐			良				白色	口縁部に縦位刺突文
14	30	B-17・土器溜	Ⅳ下	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良		○	○		口縁部に刺突文
14	31	A-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	灰褐	にぶい黄橙	貝殻条痕	貝殻条痕	良				黒雲母	口縁部に縦位刺突文
14	32	A-22・23 SD1		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ		良	○	○		白色	口縁部に円形刺突文
14	33	B-18・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○		○		口縁部に斜位貝殻刺突文
14	34	B-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
14	35	A-17	XⅣ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に斜位貝殻刺突文と沈線文
14	36	A-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に刺突文
14	37	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐			良		○	○	白色	口縁部に縦位刺突文
14	38	A26・SC2	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	普	○		○		口縁部に縦位刺突文
14	39	A-29	Ⅱa	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に横位二条の貝殻刺突文
14	40	B-17・土器溜	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	貝殻条痕	良	○			白色	口縁部に縦位貝殻刺突文
14	41	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻条痕		良	○	○			口縁部に斜位貝殻刺突文
14	42	B-18	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	灰白	にぶい黄橙	ナデ	条痕	良	○			白色	口縁部に斜位刺突文
14	43	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	灰白	にぶい褐	条痕	条痕	良	○	○			口縁部に縦位刺突文
14	44	RI4		深鉢	市来式	口縁部	黄灰	黄褐	条痕	条痕	良	○				無文
15	45	A-17・土器溜	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	橙	橙	貝殻条痕	ナデ	良			○	白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
15	46	A-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐			良	○			白色	口縁部に横位貝殻刺突文
15	47	B-17,	Ⅲ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい黄橙	貝殻条痕	ナデ	良	○	○			口縁部に沈線文と貝殻刺突文
15	48	A26・SC2	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	普	○	○			口縁部に沈線文と下に刺突文

挿図番号	番号	出土地		器種	型式	部位	色調		調整		胎土					文様
		区	層				内面	外面	内面	外面	焼成	石英	角閃石	長石	その他	
15	49	RI4		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	条痕	良	○	○			口縁部に二条の貝殻刺突文
15	50	B-17・土器溜	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい褐			良	○	○	○	白色	口縁部に二条の沈線文と間に縦位刺突文
15	51	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	褐灰	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○	○			口縁部に沈線文数条
15	52	AB-17・18・19 RI1	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	黒褐	ナデ		良	○	○		白色	口縁部に縦位刺突文
15	53	RI8	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	普	○			黒雲母	口縁部に三条の沈線文と沈線文下に刺突文・竹管文
15	54	AB-28・29 RI1	Ⅱ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に横位貝殻刺突文と二条の沈線文
15	55	AB28・29 RI1	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	灰褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に二条沈線文
16	56	B-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	灰白	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に斜位刺突文
16	57	B-16	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良		○		黒雲母	口縁部に斜位刺突文
16	58	A-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙			良		○	○	白色	口縁部に横位貝殻刺突文と沈線文
16	59	A-17・土器溜	Ⅳ下	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐			良	○	○		白色	口唇部に横位貝殻刺突文と沈線文
16	60	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に斜位貝殻刺突文
16	61	B-18	Ⅶ上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙			良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
16	62	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口縁部に円形刺突文と沈線文
16	63	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻条痕		良		○			口縁部に斜位貝殻刺突文と上下に沈線文
16	64	A-17	XⅣ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○		○		口縁部に斜位貝殻刺突文
16	65	A-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ		良				黒雲母	口縁部に斜位貝殻刺突文と上下に刺突文
16	66	RI4		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰白	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に二条の横位貝殻刺突文
16	67	AB-17・18・19 RI3		深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に斜位刺突文
16	68	B-18	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	貝殻条痕	良	○			白色	口縁部に縦位刺突文
16	69	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	貝殻条痕	良	○			白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
16	70	B-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい橙			良	○	○	○	白色	口縁部に上下斜位刺突文
16	71	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に数条貝殻刺突文
16	72	B-17・土器溜	Ⅳ下	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	褐灰	ナデ	ナデ	良				白色	口縁部に浅い沈線文と下に斜位刺突文
16	73	RI4		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に斜位刺突文
16	74	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文と上下に横位貝殻刺突文
16	75	A-22 RI8	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に二条の沈線文と上下に刺突文
16	76	B-18	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	黒	褐灰	ナデ	ナデ	良				白色	口縁部に貝殻刺突文
16	77	B-17	Ⅳ下	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に横位・斜位貝殻刺突文
16	78	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙		ナデ	良		○	○	白色	口縁部に横位・斜位貝殻刺突文
16	79	SD1		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ		良	○	○			口縁部に沈線文と斜位刺突文
16	80	B-18	Ⅱ	深鉢	市来式	口縁部	褐灰	褐灰	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○				口縁部に刺突文と沈線文
17	81	B-18	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位刺突文
17	82	AB-17・18・19 RI3		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐			良	○	○			口縁部に一条沈線文と上下に刺突文
17	83	B-17	Ⅶ上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文と上下に沈線文
17	84	A26・SC2	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	褐	板ナデ		良	○		○		口縁部に横位貝殻刺突文と沈線文
17	85	RI4		深鉢	市来式	口縁部	褐灰	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に一条沈線文と上下貝殻刺突文
17	86	B-18・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	明褐灰	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
17	87	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい赤褐	にぶい赤褐		ナデ	普	○	○		白色	口縁部に沈線文
17	88	RI4		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に浅い凹線文と円形刺突文
17	89	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良		○		白色	口縁部に円形刺突文
17	90	RI4		深鉢	市来式	口縁部	明褐	灰黄褐		ナデ	良	○	○			口縁部に斜位貝殻刺突文と縦位刺突文
17	91	RI8	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐黄褐	灰黄褐	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○	○			口縁部に刺突文
17	92	RI1	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰黄	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に横位貝殻刺突文
17	93	AB28・29 RI1	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口縁部に浅い刺突文
17	94	RI4		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○				口縁部内外面に貝殻刺突文
18	95	A-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰白	貝殻条痕	ナデ	良		○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文と上下に刺突文
18	96	A26・SC・	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口縁部に斜位刺突文
18	97	B-17	Ⅶ上	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	にぶい黄橙	条痕	ナデ	良		○		白色	口縁部に沈線文と上下に刺突文

挿図番号	番号	出土地		器種	型式	部位	色調		調整		胎土					文様
		区	層				内面	外面	内面	外面	橄欖	石英	角閃石	長石	その他	
18	98	A-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に二条の沈線文と上下に縦位刺突文
18	99	B-18	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に四条の沈線と上下に斜位刺突文
18	100	A26・SC2	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	橙	橙	ナデ	条痕	良		○		白色	口縁部に斜位刺突文と沈線文
18	101	AB28・29 RI1	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に沈線文と上下に刺突文
18	102	B-18・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	橙	にぶい橙	条痕	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に二条の沈線文と上下に横位貝殻刺突文
18	103	A-22 RI8		深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	普	○	○		白色	口縁部に数条貝殻刺突文と円形刺突文
18	104	A-16	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	褐灰	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位刺突文
18	105	B-18・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい黄褐		ナデ	良	○	○		白色	口縁部に三条の沈線文と刺突文
18	106	A27・SD5	Ⅱ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	良		○	○	白色	口縁部内外面に沈線文/口唇部に刺突文
18	107	A-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙			良				白色	口縁部に縦位沈線文
18	108	B-29	Ⅰc	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に貝殻刺突文・沈線文・円形刺突文
18	109	RI1	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に円形刺突文
19	110	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に斜位貝殻刺突文
19	111	B-18	Ⅶ上	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に浅い沈線文
19	112	B-18・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	褐灰	灰黄褐	条痕		良		○		白色	口縁部に一条横位貝殻刺突文
19	113	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	褐灰	ナデ	ナデ	良		○			口縁部に浅い沈線文
19	114	B-17	Ⅲ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	橙	条痕	条痕	良		○	○	茶白	口縁部に数条の沈線文
19	115	RI4		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良			○		口縁部に沈線文と上下に横位貝殻刺突文
19	116	B-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	褐灰		ナデ	良	○	○		白色	口縁部に縦位刺突文
19	117	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	浅黄橙	にぶい橙	条痕		良	○	○		白色	口縁部にの沈線文と上下に横位貝殻刺突文
19	118	A-17・土器溜	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	橙		ナデ	良	○	○		白色	口縁部に沈線文と上下に斜位貝殻刺突文
19	119	B-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	浅黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良		○		茶白	口縁部に数条の沈線文
19	120	B-18	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	条痕	ナデ	良	○	○			口縁部に沈線文と横位貝殻刺突文/口唇部に貝殻刺突文
19	121	A-17	Ⅲ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	褐灰	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に数条の沈線文と上下に刺突文/口唇部に刺突文
19	122	B-17	Ⅲ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	灰褐	ナデ	ナデ	良		○		白色	口縁部に数条の沈線文と斜位刺突文
19	123	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に刺突文
20	124	RI4		深鉢	市来式	口縁部	褐灰	褐灰	ナデ	条痕	良	○	○			口縁部に沈線文と刺突文/口唇部に刺突文
20	125	A-18	Ⅱ	深鉢	市来式	口縁部	褐灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に二条の沈線文と上下に刺突文
20	126	AB28・29 RI1	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻条痕	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
20	127	A27・SD5	Ⅱ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ナデ		良	○	○		白色	口縁部に回線文と刺突文
20	128	B-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位刺突文
20	129	A27・SD5	Ⅱ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に沈線文と刺突文
20	130	RI1	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	橙	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に沈線文と上下に刺突文
20	131	A-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○				口縁部に浅い斜位貝殻刺突文
20	132	A16・17・SD4	Ⅱ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	普	○	○			口縁部に貝殻刺突文
20	133	B-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	灰白	灰黄	ナデ	ナデ	良		○		白色	口縁部に数条沈線文と上下に斜位の貝殻刺突文
20	134	A-22・23 SD1		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄褐	貝殻条痕	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に横位の貝殻刺突文と沈線文
20	135	A-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	褐灰	灰褐		ナデ	良	○	○		茶白	口縁部に斜位貝殻刺突文
20	136	B-18・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	浅黄橙	灰白	ナデ	条痕	良		○		白色	口縁部に貝殻刺突文
20	137	A-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	黄灰	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に斜位刺突文
20	138	A-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	灰白	灰黄褐		ナデ	良		○		白色	口縁部に沈線文と上下に斜位刺突文
20	139	RI4		深鉢	市来式	口縁部	褐灰	褐灰	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○	○			口縁部に横位、斜位貝殻刺突文
21	140	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい褐	ナデ	貝殻条痕	良	○	○	○	白色	口縁部に沈線文と竹管文
21	141	B-18	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口縁部に沈線文と刺突文/内面に沈線文/橋状把手
21	142	B-18・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	黒褐	にぶい赤褐	条痕	条痕	良	○	○		白色	口縁部に沈線文と上下に刺突文
21	143	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	灰黄褐	貝殻条痕	板ナデ	良	○	○		白色	口縁部に沈線文と横位貝殻刺突文と円形刺突文/内面に貝殻刺突文
21	144	B-18	Ⅶ上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	褐灰	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に数条沈線文と下に斜位刺突文
21	145	B-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	褐灰	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部及び口唇部に数条沈線文と上下に斜位刺突文
22	146	A-17・泥炭層	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰褐	ナデ	ナデ	良		○			口縁部に四条の沈線文

挿図番号	番号	出土地		器種	型式	部位	色調		調整		胎土					文様
		区	層				内面	外面	内面	外面	地成	石英	角閃石	長石	その他	
22	147	RI4		深鉢	市来式	口縁部			ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に二条の沈線文と上下に斜位貝殻刺突文・円形刺突文
22	148	A-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	灰白	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部にS字状の沈線文
22	149	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	明褐	条痕	条痕	良		○	○	白色	無文
23	150	A-29	Ⅱa	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に浅い刺突文
23	151	RI8	Ⅱ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	暗灰黄	ナデ	ナデ	良	○	○		黒色	口縁部上端に刺突文
23	152	B-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に数条の沈線文
23	153	B-18・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に数条の沈線と上下に斜位刺突文
23	154	B-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐			良	○			白色	口縁部に二条の沈線文と上端に斜位刺突文
23	155	A16・17・SD4	Ⅱ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	褐灰	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
23	156	A-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐		ナデ	良	○	○			口縁部に四条の沈線と上下に斜位刺突文
23	157	B-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	褐灰	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に四条の沈線文
23	158	RI1	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口縁部に数条の沈線文
23	159	B-17・土器溜	Ⅳ下	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	褐灰	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に数条の沈線文
23	160	A-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に沈線文
23	161	B-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	黄灰	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に縦位沈線分
23	162	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ		良		○		白色	口縁部に横位貝殻刺突文
23	163	A-16	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○		○	白色	口縁部に斜位貝殻刺突文
23	164	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	条痕	ナデ	良	○			白色	口縁部に二条の沈線文
23	165	B-18・土器溜	Ⅶ上	深鉢	市来式	口縁部	褐灰	褐灰	ナデ	ナデ	良		○		白色	口縁部に浅い貝殻刺突文
24	166	B-18・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	灰黄褐		ナデ	良	○	○			口縁部に一条の沈線文と上下に斜位の刺突文
24	167	A-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	褐灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口縁部に縦位貝殻刺突文
24	168	RI4		深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	灰黄褐	貝殻条痕	ナデ	良	○	○			口縁部に斜位貝殻刺突文
24	169	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に二条の沈線文と上下に斜位刺突文
24	170	B-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	黄灰	ナデ	ナデ	良	○				口縁部に沈線文
24	171	A-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰黄	ナデ		良	○			白色	口縁部に数条横位貝殻刺突文
24	172	B-18・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰白	ナデ	条痕	良	○			白色	口縁部に二条の沈線と上下に連点文
24	173	A16・17・SD4	Ⅱ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に二条の沈線文/口唇部に刺突文
24	174	A-17・土器溜	Ⅳ下	深鉢	市来式	口縁部	灰白	灰白		ナデ	良	○				口縁部に沈線文
24	175	A-17・土器溜	Ⅳ下	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	黄灰	ナデ	ナデ	良		○	○	白色	口縁部に二条の沈線文と刺突文
24	176	A-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	黄灰		ナデ	良	○	○			口縁部に沈線文と斜位貝殻刺突文/内面に沈線文
24	177	B-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	黄灰			良			○	白色	口縁部に沈線文と上下に斜位刺突文
24	178	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	褐灰		ナデ	良	○				口縁部に数条の浅い刺突文と横位沈線文
24	179	A-26・SC2		深鉢	市来式	口縁部	明褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に刺突文と沈線文
24	180	A-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄褐	灰黄褐	ナデ		良				白色	口縁部に横位貝殻刺突文
24	181	B-18	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	褐灰	灰黄褐		ナデ	良	○			白色	口縁部に二条の沈線文と上下に斜位刺突文
24	182	A26・SC2	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	普	○	○			口縁部に貝殻刺突文
24	183	AB28・29 RI1	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐			普	○	○		白色	口縁部に刺突文
24	184	B-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に斜位貝殻刺突文
24	185	B-16	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に短い沈線文と貝殻刺突文／口唇部に刺突文
25	186	A-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に二条の沈線文
25	187	AB28・29 RI1	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	褐灰色	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口唇部と口縁部に沈線文
25	188	B-18	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	褐灰	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に二条の浅い沈線文
25	189	A-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○			白色	口縁部に斜位刺突文
25	190	A-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良		○		白色	口縁部に沈線文と下に刺突文
25	191	A-27	Ⅰc	深鉢	市来式	口縁部	赤褐	赤褐			良	○	○			口縁部内外面に沈線文と刺突文
25	192	B-18・土器溜	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	にぶい橙	条痕	ナデ	良	○			白色	口縁部に沈線文と上下に斜位刺突文/内面に二条沈線文
25	193	RI4		深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に浅い沈線文と円形刺突文
25	194	B-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に斜位貝殻刺突文/胴部に沈線文
25	195	A-17.	Ⅳ	深鉢	市来式	胴部	灰黄褐	にぶい黄橙	条痕	ナデ	良	○	○			胴部に貝殻刺突文と沈線文

挿図番号	番号	出土地		器種	型式	部位	色調		調整		胎土					文様
		区	層				内面	外面	内面	外面	焼成	石英	角閃石	長石	その他	
25	196	A-17	XⅣ	深鉢	市来式	胴部	灰黄褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	胴部に貝殻刺突文と沈線文
25	197	A27・SD5	Ⅱ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に沈線文/口唇部に刺突文
25	198	B-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄褐			普					口縁部に沈線文と上下刺突文／内面に沈線文
25	199	A-17	XⅢ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口唇部に横位貝殻刺突文/胴部に貝殻による沈線文
25	200	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	黄灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○		○		
25	201	AB28・29 RI1	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口縁部に沈線文
25	202	B-17・土器溜	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	褐灰	ミガキ？	ミガキ？	良			○	白色	
25	203	A28・29 RI	Ⅰ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい褐	褐灰	ナデ	ナデ	良	○	○	○		沈線文と斜位刺突文/橋状把手
26	204	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	草野式	口縁部	橙	灰黄	ナデ	ナデ	良	○	○	○		口唇部に一条沈線文
26	205	A-17・土器溜	Ⅳ下	深鉢	草野式	口縁部	灰白	灰白	ナデ	ナデ	良		○	○		口唇部に円形刺突文
26	206	A-17	Ⅶ上	深鉢	草野式	口縁部	黄灰	にぶい橙	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○			白色	口唇部に円形刺突文
26	207	B-17	Ⅶ	深鉢	草野式	口縁部	灰白	浅黄橙	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○			黒雲母	口唇部に円形刺突文
26	208	B-17	Ⅶ	深鉢	草野式	口縁部	にぶい黄褐	灰黄	ナデ	ナデ	良	○	○	○		口縁部上端に斜位刺突文
26	209	B-10		深鉢	草野式	口縁部	橙	灰黄褐	ナデ	条痕	良	○	○		白色	口唇部に斜位刺突文
26	210	RI4		深鉢	草野式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	貝殻条痕	ナデ	良		○	○		口唇部に刺突文
26	211	B-17	Ⅲ	深鉢	草野式	口縁部	橙	橙			良	○	○	○	白色	口唇部に数条の沈線文
26	212	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	草野式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良		○	○		口唇部に斜位貝殻刺突文
26	213	B-16	Ⅳ	深鉢	草野式	口縁部	灰黄	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口唇部に一条の沈線文
26	214	AB28・29 RI1	Ⅰ	深鉢	草野式	口縁部	黒褐	黒褐	条痕	条痕	普	○	○		白色	口唇部に斜位刺突文
26	215	A-16	Ⅳ	深鉢	草野式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口唇部に二条の沈線文
26	216	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	草野式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口唇部に二条の沈線文
26	217	A-22・23 SD1		深鉢	草野式	口縁部	黄褐	黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口唇部に斜位刺突文
26	218	A-17	Ⅳ	深鉢	草野式	口縁部	にぶい黄橙	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口唇部に一条の沈線文と斜位貝殻刺突文
26	219	B-16	Ⅳ	深鉢	草野式	口縁部	灰黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口唇部に斜位刺突文
26	220	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	草野式	口縁部	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	条痕	良	○		○		口唇部に二条貝殻刺突文
26	221	B-18	Ⅳ	深鉢	草野式	口縁部	黄灰	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に斜位貝殻刺突文
27	222	A-17	Ⅶ	鉢	小池原上層式	胴部	黄灰	灰白	ミガキ		良		○	○	黒雲母	磨消縄文/沈線文
27	223	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	御手洗A式	口縁部	灰黄	灰白	ナデ	ナデ	普	○	○			口縁部に刺突文/口唇部に一条の沈線分/外面二乗刺突文
27	224	A-16	Ⅳ	鉢	鐘崎式	口～胴部	灰黄	灰黄	ミガキ	ミガキ	良				黒雲母	口唇部に刺突文/磨消縄文/橋状把手/S字状の沈線文
27	225	AB-17・18・19・RI3		鉢	鐘崎式	口縁部	黄灰	にぶい黄橙	ミガキ		良		○		白色	口唇部に沈線文と刺突文/磨消縄文
27	226	AB28・29 RI1	Ⅰ	鉢	鐘崎式	口縁部	灰黄	浅黄	ナデ		良		○		白色	口唇部に沈線文と刺突文
27	227	B-18・土器溜	Ⅶ	鉢	鐘崎式	口縁部	褐灰	褐灰	ミガキ	ミガキ	良		○		白色	口唇部に沈線文と刺突文/磨消縄文
27	228	RI4		鉢	鐘崎式	口縁部	灰黄	灰黄	ミガキ	ミガキ	良		○	○		沈線文と口唇部沈線文内に刺突文
27	229	B-18・土器溜	Ⅶ	鉢	鐘崎式	口縁部	灰白	灰白	ミガキ	ミガキ	良		○		白色	口唇部に沈線文
27	230	AB-17・18・19・RI3	Ⅶ	鉢	鐘崎式	口縁部	にぶい黄褐	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	良	○			白色	磨消縄文/口唇部に刺突文と沈線文
27	231	AB-17・18・19・RI3		鉢	鐘崎式	口縁部	灰	灰	ミガキ	ミガキ	良		○	○	白色	磨消縄文/口唇部に沈線文
27	232	AB28・29 RI1	Ⅰ	鉢	鐘崎式	口縁部	黒褐	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	良		○		白色	口唇部に三条の沈線文と刺突文/磨消縄文
27	233	A-28	Ⅰc	鉢	鐘崎式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ミガキ	ミガキ	良		○	○		磨消縄文/口唇部に一条の沈線文
27	234	RI4		鉢	鐘崎式	胴部	黄灰	灰	ミガキ	ミガキ	良	○	○		白色	磨消縄文/口唇部に沈線文
27	235	RI4		鉢	鐘崎式	胴部	黄灰	黄灰			良		○		白色	磨消縄文/S字状沈線文
27	236	A-17・土器溜	Ⅶ	鉢	鐘崎式	胴部	黒褐	黒褐	ミガキ		良		○			磨消縄文
27	237	A-16	Ⅳ	鉢	鐘崎式	口～胴部	灰黄褐	灰黄褐			良	○	○		白色	磨消縄文/S字状沈線文
27	238	B-18・土器溜	Ⅶ	鉢	鐘崎式	胴部	褐灰	にぶい褐	ミガキ	ミガキ	良		○		白色	磨消縄文
28	239	RI4		鉢	鐘崎式	口縁部	にぶい黄橙	灰	ミガキ		良		○	○	白色	口縁部に沈線文
28	240	A-17	Ⅳ	鉢	鐘崎式	口～胴部	黄灰	灰黄	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に沈線文と口唇部に刺突文
28	241	A-17・土器溜	Ⅶ上	鉢	鐘崎式	口縁部	にぶい褐	橙			良		○	○	白色	口縁部に沈線文
28	242	RI4		鉢	鐘崎式	口～胴部	黄灰	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	良		○	○	黒雲母	磨消縄文／口唇部に沈線文/橋状把手/S字状沈線文
28	243	A-28	Ⅰc	鉢	鐘崎式	口縁部	灰黄	灰黄	ナデ		良		○	○	白色	口唇部に沈線文と斜位刺突文/橋状把手/胴部に二条沈線文
28	244	B-17	Ⅲ	鉢	鐘崎式	口縁部	灰黄	黄灰			良	○	○		白色	磨消縄文/口唇部に刺突文と穿孔，突起/胴部に沈線文

挿図番号	番号	出土地		器種	型式	部位	色調		調整		胎土					文様
		区	層				内面	外面	内面	外面	焼成	石英	角閃石	長石	その他	
28	245	A-17・土器溜	Ⅳ	鉢	鐘崎式	口縁部	黄灰	黄灰	ミガキ		良	○	○		白色	沈線文/口唇部に刺突文と穿孔，突起/継位沈線文
28	246	A28・29 Rl・	Ⅰ	鉢	鐘崎式	口縁部	灰白	灰白	ミガキ	ミガキ	良	○	○			口唇部に沈線文/突起に3つの穿孔/継位沈線文
28	247	A-17・土器溜	Ⅶ上	浅鉢	鐘崎式	口縁部	にぶい黄褐	浅黄橙			良		○	○	白色	沈線文
28	248	A-17・土器溜	Ⅶ	浅鉢	鐘崎式	口縁部	にぶい黄橙	黄灰	ミガキ	ミガキ	良		○	○	白色	無文
28	249	A-17・泥炭層	Ⅷ	浅鉢	鐘崎式	口縁部	褐灰	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	良				白色	橋状把手/磨消縄文/口唇部に刺突文と一条沈線文
28	250	B-17・土器溜	Ⅶ	鉢	鐘崎式	胴～底部	黄灰	灰黄	ミガキ	ミガキ	良	○	○		白色	
29	251	A-26・SC2	Ⅰ	深鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	灰	暗灰黄	ミガキ	ミガキ	良		○		白色	橋状把手/磨消縄文/口唇部に刺突文
29	252	A-22・Rl8	Ⅱ	鉢	白浜・浜ノ須	胴部	黄灰	黄灰	ミガキ		良				白色	胴部に沈線文
29	253	A-26	Ⅱ上	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	黄灰	灰黄	ミガキ	ミガキ	良		○		白色	磨消縄文/四条沈線文
29	254	AB28・29 Rl1	Ⅰ	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	褐灰	褐灰	ミガキ	ミガキ	良		○		白色	磨消縄文/二条沈線文
29	255	A-17	Ⅳ	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	黄灰	灰黄	ミガキ	ミガキ	良	○	○		輝石	磨消縄文/沈線文
29	256	AB28・29 Rl1	Ⅰ	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	灰	にぶい黄			良		○		白色	口縁部内外面に三条沈線文/口縁部上面に穿孔
29	257	A-30	Ⅱa	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	暗灰黄	黄灰	ミガキ	ミガキ	良				茶白	磨消縄文/刺突文・円形刺突文
29	258	B-17・土器溜	Ⅶ	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	灰黄褐	褐灰	ミガキ	ミガキ	良		○	○	黒雲母	縦位刺突文
29	259	A28・29 Rl1	Ⅰ	鉢	白浜・浜ノ須	胴部	灰黄	黄灰		ミガキ	良		○		白色	磨消縄文・円形刺突文
29	260	A-17	Ⅳ	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	黒褐	黒褐			良				白色	胴部に沈線文・円形刺突文
29	261	A-28	Ⅰc	鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ		良		○		白色	磨消縄文・沈線文
29	262	A-25・SK-1		浅鉢	白浜・浜ノ須	口縁部	灰黄	灰黄	ナデ	ミガキ	良		○		白色	口縁部に沈線文と貝殻刺突文による擬似縄文
30	263	B-26 SC3		深鉢	北久根山式	口～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○	○		口唇部に斜位刺突文/口縁部に沈線文
30	264	A-17・土器溜	Ⅳ	深鉢	北久根山式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐			良		○	○	白色	口縁部に斜位刺突文
30	265	A-17	Ⅳ	深鉢	北久根山式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	口縁部に二条の沈線文/口唇部に刺突文
30	266	B-26 SC3		深鉢	北久根山式	口～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	条痕	条痕	良		○	○	黒雲母	口縁部上端に斜位刺突文
30	267	A-17・土器溜	Ⅳ	深鉢	北久根山式	口縁部	浅黄橙	灰白	ナデ	ナデ	良			○		口唇部に斜位刺突文
30	268	A-26	Ⅱ	深鉢	北久根山式	口縁部	灰白	明褐灰			良				黒雲母	口縁部波状部に斜位沈線分と斜位刺突文
30	269	A-25 SK1	Ⅰ	深鉢	北久根山式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○			口縁部に沈線文/橋状把手/刺突文
30	270	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	北久根山式	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	条痕	条痕	良	○	○			口縁部に沈線文・円形刺突文
30	271	Rl4		鉢	北久根山式	口縁部	灰黄褐	黄灰	ナデ	条痕	良	○	○			口縁部に二条の沈線文と上下に刺突文
30	272	A-26	Ⅰc	鉢	西平式	口縁部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	口唇部に沈線文
30	273	A-17・土器溜	Ⅶ上	鉢	西平式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良		○	○		無文
30	274	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	西平式	底部	黄褐	にぶい橙		ナデ	良		○	○	白色	
31	275	B-18	Ⅲ	深鉢	市来式	口～胴部	灰黄褐	黄灰	条痕	条痕	良	○	○		白色	無文
31	276	A－17・土器溜	Ⅳ下	深鉢	市来式	口縁部	灰	灰白			良				白色	無文
31	277	B-17	Ⅳ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	にぶい橙		貝殻条痕	良	○	○	○	白色	無文
31	278	A－17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	市来式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	貝殻条痕	ナデ	良	○	○			無文
31	279	A-17	ⅩⅣ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい橙			良	○	○	○	白色	無文
31	280	A-17	ⅩⅣ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄	灰黄褐	貝殻条痕	貝殻条痕	良	○				無文
31	281	B-17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	条痕	良	○			白色	無文
31	282	B－17	Ⅶ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい橙	条痕	条痕	良	○	○		茶白	無文
31	283	B-17	Ⅲ	深鉢	市来式	口縁部	灰黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	無文
31	284	Rl4		深鉢	市来式	口縁部	褐灰	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	良	○	○			無文
31	285	Rl8	Ⅰ	深鉢	不明	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	無文
31	286	Rl4		深鉢	不明	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙		ナデ	良	○	○		茶白	無文
31	287	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	不明	口縁部	にぶい黄橙	にぶい褐	ナデ	ミガキ？	良	○	○	○	白色	無文
31	288	SD1		深鉢	不明	口縁部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	無文
31	289	SD1		深鉢	不明	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙			良	○	○	○	白色	無文
31	290	A16・17・SD4		深鉢	不明	口縁部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	普	○	○			無文
31	291	Rl4		深鉢	草野式	口縁部	灰黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	無文
31	292	B-18・土器溜	Ⅶ	深鉢	草野式	口縁部	灰黄褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	無文
31	293	A-26・SC2	Ⅰ	深鉢	草野式	口縁部	橙	にぶい黄橙	条痕	条痕	良	○	○			無文

挿図番号	番号	出土地		器種	型式	部位	色調		調整		胎土					文様
		区	層				内面	外面	内面	外面	地成	石英	角閃石	長石	その他	
31	294	AB28・29 RI1	Ⅰ	深鉢	草野式	口縁部	にぶい橙	灰褐	ナデ	ナデ	良		○	○		無文
31	295	A16・17・SD4		深鉢	草野式	口縁部	褐灰	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	無文
31	296	B-17	Ⅶ	深鉢	草野式	口縁部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良		○	○	黒雲母	無文
32	297	B-17	Ⅲ	深鉢	不明	口～胴部	にぶい黄橙	にぶい黄褐	ナデ		良	○	○		白色	擬似縄文
32	298	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	指宿式	胴部	灰白	橙	ナデ	ナデ	良	○	○			胴部に沈線文
32	299	A-16・17		深鉢	不明	胴部	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○			胴部に三条沈線文
32	300	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	不明	口縁部	灰白	にぶい黄橙	貝殻条痕	ナデ	良			○		口縁部に沈線と斜位貝殻刺突文
32	301	B-17	Ⅳ	深鉢	不明	口～胴部	にぶい橙	にぶい橙	貝殻条痕	条痕	良	○	○		茶白	無文
32	302	B-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	不明	口縁部	にぶい黄橙	にぶい橙			良		○	○	白色	口縁部に沈線文
32	303	RI4		深鉢	不明	口縁部	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	良		○	○	白色	口縁に一条沈線文
33	304	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	不明	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良		○	○	白色	
33	305	A-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	不明	底部	橙	灰黄	ナデ	ナデ	良	○	○		茶色	
33	306	A-17・土器溜	Ⅶ上	深鉢	不明	底部	褐灰	にぶい橙	条痕	条痕	良	○	○		白色	
33	307	A-17	Ⅶ	深鉢	不明	底部	灰黄	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	
33	308	A-16	Ⅳ	深鉢	不明	底部	にぶい黄橙	褐灰	条痕	ナデ	良	○	○		白色	
33	309	A-25 SC1	Ⅰ	深鉢	不明	底部	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ	条痕	良	○	○		黒雲母	
33	310	B-18	Ⅶ	深鉢	鐘崎式	底部	にぶい黄橙	灰黄褐	ヘラナデ	ナデ	良	○	○		白色	
33	311	A-17	ⅩⅣ	深鉢	不明	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○			
33	312	B-17	Ⅶ	深鉢	不明	底部	にぶい黄橙	灰白	ナデ	ナデ	良		○		白色	
33	313	A-17・土器溜	Ⅵ	深鉢	不明	底部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○			
33	314	A-17	Ⅶ	深鉢	不明	底部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	
33	315	A-17	Ⅶ	深鉢	不明	底部	にぶい黄橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○	○		
33	316	B-18・土器溜	Ⅶ	深鉢	不明	底部	にぶい橙	黄灰	ナデ	条痕	普	○	○		白色	
33	317	A-17	Ⅶ	深鉢	不明	底部	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	普	○	○		白色	
33	318	B-17	Ⅶ	深鉢	不明	底部	黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	普	○	○		白色	
33	319	A-17	Ⅲ	深鉢	不明	底部	灰黄	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○			
33	320	A-17・土器溜	Ⅶ	深鉢	不明	底部	にぶい橙	にぶい橙		ナデ	良	○				
34	321			台付皿	不明	皿部			ナデ	ナデ	良	○	○	○		沈線文と刺突文/3つ一組の穿孔が2ヵ所/施朱
35	322	RI4		台付皿	不明	皿部	にぶい赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	良	○	○			刺突文
35	323	B-18・土器溜	Ⅶ	台付皿	不明	皿部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○			白色	一条沈線文/S字状沈線文
35	324	A28・29 RI1	Ⅰ	台付皿	不明	皿部	にぶい黄橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○			内外面に斜位連続刺突文
35	325	B-24 RI8	Ⅰ	台付皿	不明	皿部	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	沈線文縦位刺突文
35	326	A-17	ⅩⅢ	台付皿	不明	皿部	にぶい黄橙	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	良	○	○		白色	沈線文/円状刺突文
36	327	B-17・土器溜	Ⅶ	台付皿	不明	脚部	黒褐	にぶい黄橙	ナデ		良	○	○		白色	脚部に沈線文
36	328	A-29	Ⅰc	台付皿	不明	脚部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○			脚部に沈線文
36	329	B-17	Ⅲ	台付皿	不明	脚部	にぶい橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	脚部に貝殻刺突文
36	330	A-26	Ⅰc	台付皿	不明	脚部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○			脚部に斜位貝殻刺突文
36	331	B-18	Ⅶ上	台付皿	不明	脚部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	脚部に沈線文/穿孔
36	332	A-18・土器溜	Ⅶ	台付皿	不明	脚部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ		良		○	○		穿孔
36	333	A-17・土器溜	Ⅶ上	台付皿	不明	脚部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	
36	334	B-18	Ⅳ	台付皿	不明	脚部	灰黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	
36	335	A-17	ⅩⅣ	台付皿	不明	脚部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良		○	○	白色	脚部に貝殻刺突文
36	336	A-28	Ⅰc	台付皿	不明	脚部	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	脚部に沈線文
36	337	B-17	Ⅲ	台付皿	不明	脚部	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ		良	○	○		白色	脚部に沈線文
36	338	A-26	Ⅰc	台付皿	不明	脚部	橙	橙	ナデ	ナデ	良		○		白色	脚部に沈線文
36	339	B-18	Ⅲ	台付皿	不明	脚部	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	脚部に沈線文
36	340	B17・18・19 RI3		台付皿	不明	脚部	橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	良	○	○		白色	脚部に刺突文
36	341	B-17・土器溜	Ⅶ	台付皿	不明	皿～脚部	黄灰	橙	ナデ	ナデ	良	○	○	○	白色	脚部に沈線文と刺突文/橋状把手/脚部と皿部に穿孔
36	342	A-25 SC1	Ⅰ	台付皿	不明	脚部	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	○	○			脚部に貝殻刺突文と沈線文

縄文時代早期後半土器（第38図 353～356）

353・354は外面に楕円押型文，内面及び口唇部に山形押型文を施文する。外面の楕円は７×５㎜程度の粒をつくり出す。内面の山形押型文は大振りでシャープなものであり，口縁部内面に幅４cmで横位に施される。同一個体と考えられ，手向山式土器に該当するのではなかろうか。355は外反する口縁部をもち，口唇部は尖り気味に丸く収める。内外面にＬＲ単節の縄文を施すのが特徴である。南九州の縄文時代早期に縄文あるいは撚糸文が施される例は，平栫式土器・塞ノ神A式土器と五十市式土器がある。それと，寺師見國氏が紹介している永山式土器がある。この永山式土器は類例がほとんどなく，型式概念も明確でないが，内面にも縄文を施文することから，本遺跡出土土器も永山式土器との関係を指摘しておきたい。なお，宮之城町甫立原遺跡でも押型文土器に伴って，同様の縄文施文の土器が出土しているので，押型文土器の時期に併行するものと考えられる。

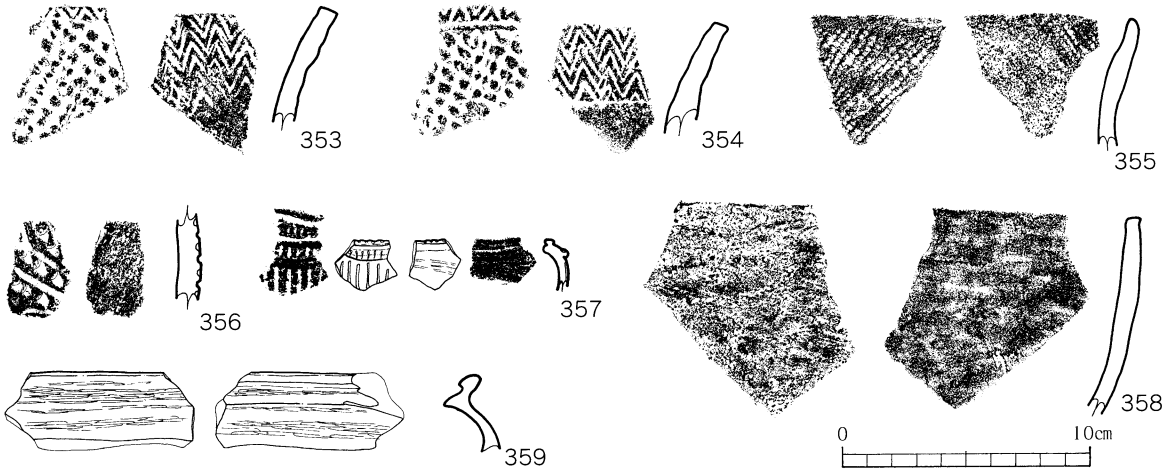
356は，沈線と連点を交互に繰り返す文様を描くものである。連点は半截竹管状の工具をやや斜めにして刺突するもので，このような施文方法は平栫式土器と考えられる。

縄文時代中期土器（第38図 357）

357は，春日式土器である。口縁部を大きく内湾させ，端部に２条の隆帯を貼り付け，その上にさらに刻目を施す。隆帯以下は縦位の沈線で埋めており，このような春日式土器は中期中半に位置付けられる前谷段階に該当すると考えられる。

縄文時代晩期後半土器（第38図 358・359）

358は深鉢形土器の口縁部である。ほぼ直口するもので，胴部上半でわずかに屈曲するタイプと考えられる。359は浅鉢形土器で，内外面とも丁寧に研磨されている。大きく内湾する胴部から，急に屈曲する短い口縁部に至る。口縁内面には１条の沈線が施されるが，口縁部と一体化している。以上の土器は，深鉢の口縁端部が肥厚しない点と，浅鉢の胴部が丸みをもち口縁部の屈曲が強いことから，黒川式土器の中でも古い段階のものであると考えられる。



第38図　縄文土器（早期～晩期）

以上，楠元遺跡出土の後期以外の縄文土器は出土点数もわずかであり，しかも同一個体と考えられるものがあることから，それぞれの時期に主体的な集落は営まれなかったことが窺える。土器自体に磨耗が見られないことから，上流からの流れ込みとは考えられず，少人数・短期間の生活が早期後半・中期中半・晩期後半にあったと思われる。これらは楠元遺跡が立地する環境と，出土した土器の時期の生活環境が一致することを示していると考えられる。逆に，それ以外の時期には生活環境が一致していなかったか，もしくは水位が上がって人が住める環境ではなかったことが窺える。楠元遺跡の環境がどのように変遷していったか明らかにするためには，楠元遺跡における各時期の地層堆積状況を調べるとともに，他の遺跡を含めた各時期の立地条件を追及することが今後の課題である。

（2）石器

楠元遺跡から出土した石器は総数338点であり，そのうち図示するのが可能な石器267点について掲載した。楠元遺跡で主に石器を使用した年代を考えると，縄文時代後期と弥生時代終末から古墳時代初頭に該当したと想定される。各石器一点一点についてどの時期に位置付けられるか断定することは不可能である。したがって，明らかに縄文時代の石器であると判断される石器であっても，弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構内から出土した石器については，そちらの頁で扱うこととする。なお，磨製石鏃１点については，弥生時代のものと考えられることから頁を改めて扱う。

石鏃（第39図 360～390）

基部の抉りが深いタイプ（360～367），基部の抉りが浅いタイプ（368～376），基部が水平になるタイプ（377～379），基部がわずかに膨らむタイプ（380～383）が見られる。376は五角形となるもので，晩期によく見られる。384・386～390は，石鏃を製作する途中で欠損したために放棄した未製品であると考えられる。黒曜石を中心にハリ質安山岩・チャート・鉄石英が使われている。385は石鏃としたが，半月形をした異形石器の可能性もある。

石錐（第40図 391～397）

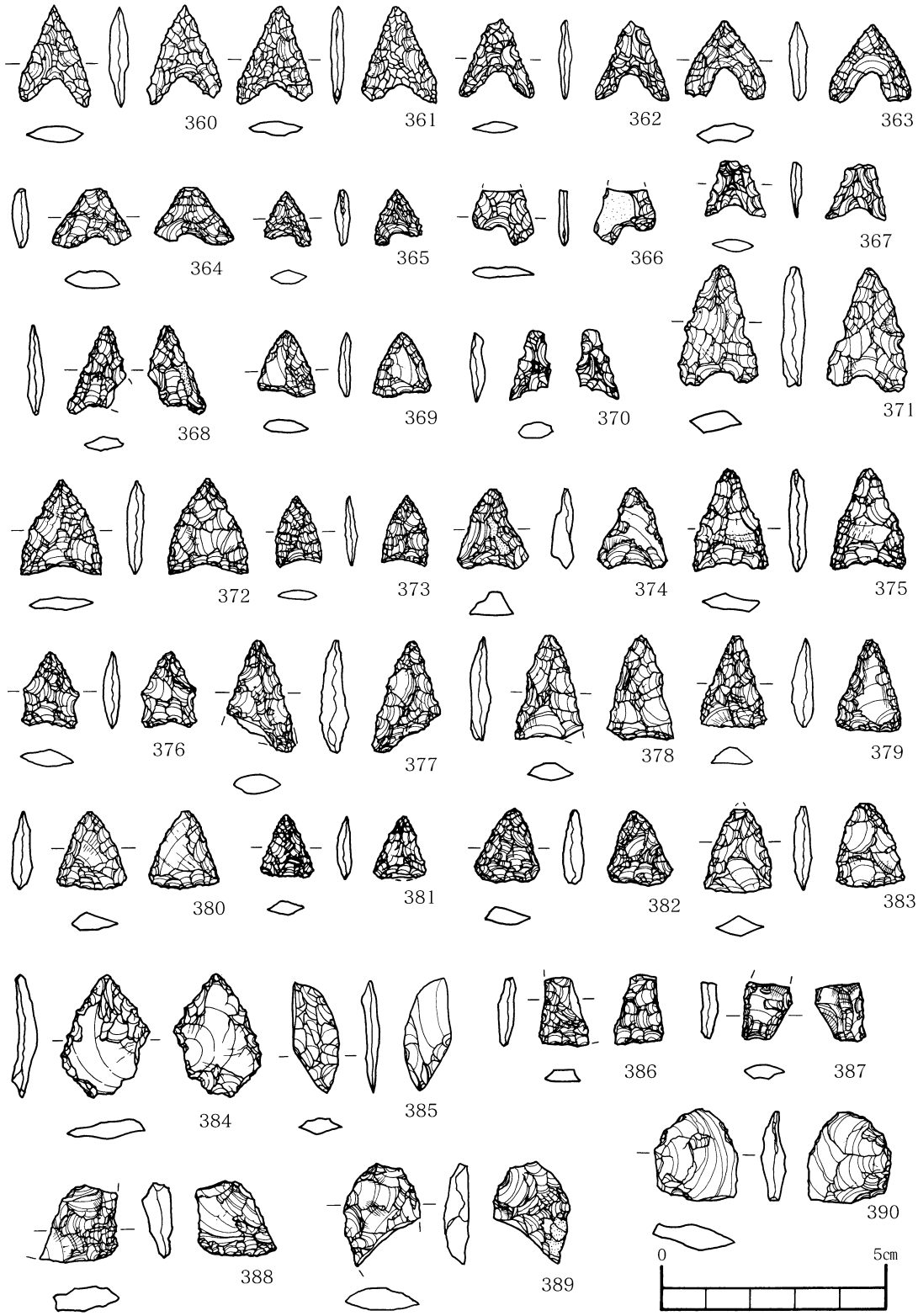
先端部をつくり出したものや剥片の一端を利用したものが見られる。錐部をつくり出したものは，柄部との境がはっきりするが，柄部の形状は一様でない。395の両側には微細な剥離が見られ，スクレイパーとしても使われている。なお，391・392・396は形状は石錐に似ているけれども，錐部の2次加工や錐としての使用痕が無いことから，錐ではない可能性もある。

抉入石器（第40図 398～400）

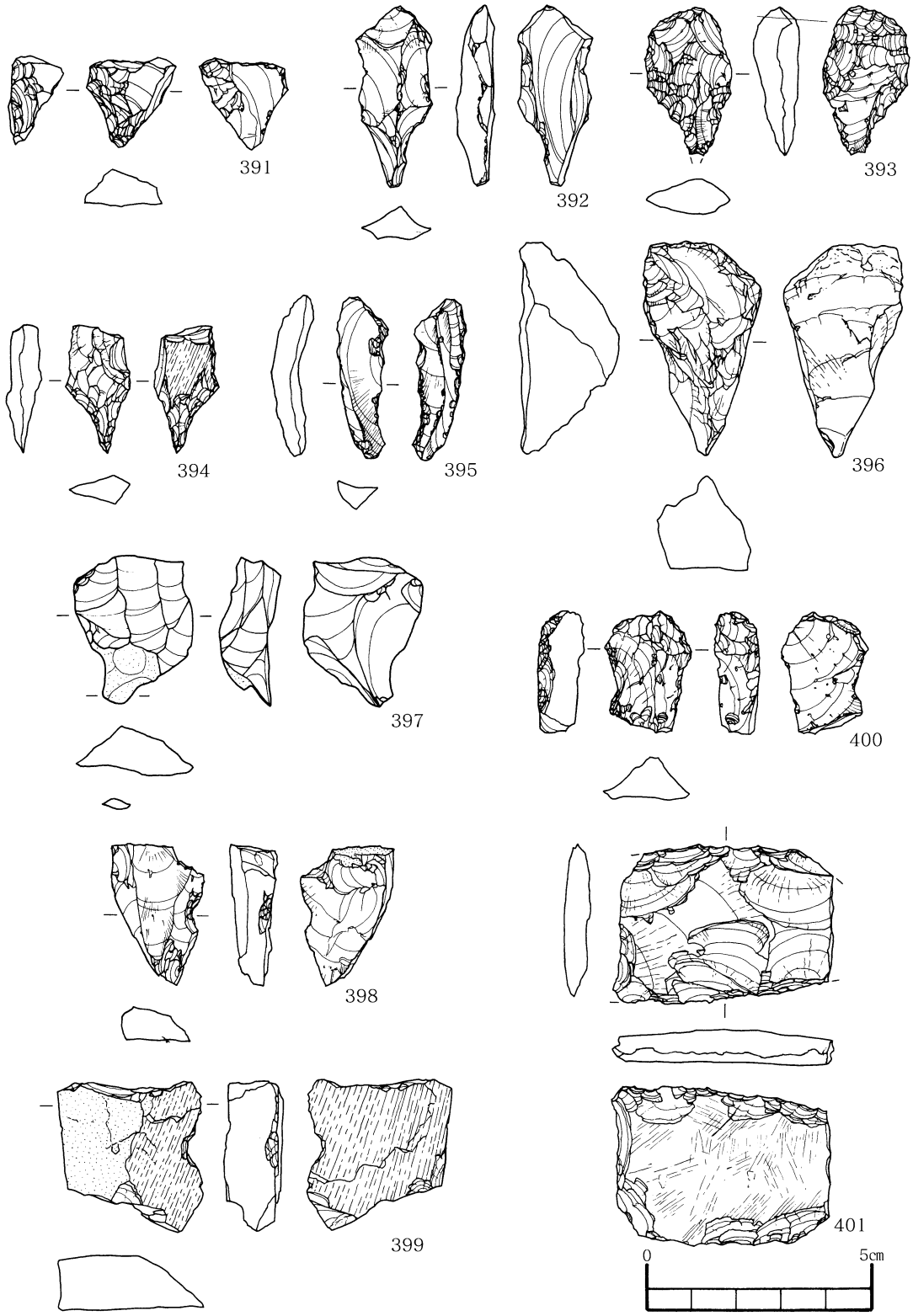
剥片の一部にノッチ状の剥離が見られるものである。いずれも厚みのある素材を利用している。剥離は一方向のみに見られ，棒状の対象物を削る場合，この面と反対側が前面となったと考えられる。刃部の幅は1cmに満たない点から，直径2cm以内の細い棒状のものを対象としていたと想定される。

石鎌（第40図401）

両端が欠けていて，形状は明らかではない。主要剥離面が滑らかであることと，細かな擦痕が観察されることから，こちらの面に対象物が当たったと考えられる。石鎌となっているが，現在の鉄鎌の様に引いて切るのではなく，穂摘み具としての機能が想定される。時期的にも縄文時代としているが，断定はできない。


360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
0
5cm

第39図　出土石器　1



第40図　出土石器　2

スクレイパー（第41～44図 402～433）

剥片の一部にやや細かな剥離を加えて刃部としている。石材も厚み・形状とも様々で定形化していない。419は刃部に両面剥離を加え，水平に仕上げている。両側面下部にも押圧剥離を加えていることから，石匙の未製品の可能性もある。423は良質なサヌカイトの剥片に，両面剥離が加えられている。

石匙（第44図 434）

両端が欠損していて形状は明らかではないが，丁寧な2次加工が施されている点から，石匙の一部であると考えられる。特に下面の方が細かな剥離が加えられている。

楔形石器（第44図 435～440）

両極から打撃された痕跡が見られるものであり，石核を利用したものと角錐状の剥片を利用したものがある。440の水晶以外は黒曜石を素材とする。

石核（第45・46図 441～459）

石材は表皮を残す小ぶりの黒曜石がほとんどである。剥片を剥ぎ取る方向もまちまちであり，剥ぎ取り易い部分から打撃を加えたと考えられる。

鑿形石斧（第47図 460・461）

460は蛇紋岩を素材とし，擦切技法で製作している。側面を両側から擦り切り，厚さ3mmになったところで切断している。他の例では切断面を残したままのものも見られるが，本例は丁寧に研磨している。刃部は図の右面が滑らかな曲線を描くのに対し，左面は砥ぎ直しされており，こちら側が対象面に当たったと想定される。擦切に使用した石器は475と考えられ，この場所で石斧が製作されたと想定される。461は刃部が欠けて断定はできないが，大きさや形状から同様な石器と考えられる。

磨製石斧（第47・48図 462～471）

462は打撃による剥離で薄く形を整えた後，刃部のみを研磨して砥いでいる。刃部は緩やかに湾曲していて，横斧と考えられる。残りは全て肉厚で，両刃と考えられる縦斧である。入念な敲打の後，研磨して仕上げてある。欠損品がほとんどであることから，近くで木の伐採あるいは木材の加工を行ったことが窺える。463は刃部が潰れており，最終的には敲打具として使われたと考えられる。464は図の左面右側の刃部の磨耗が著しく，こちら側が木に当たる回数が多かったと考えられるので，民具の事例から，右利きの場合こちら側が外側になっていたと想定される。472は安山岩製で研磨した部分も見られないので，礫器としておきたい。

楔（第49図 473）

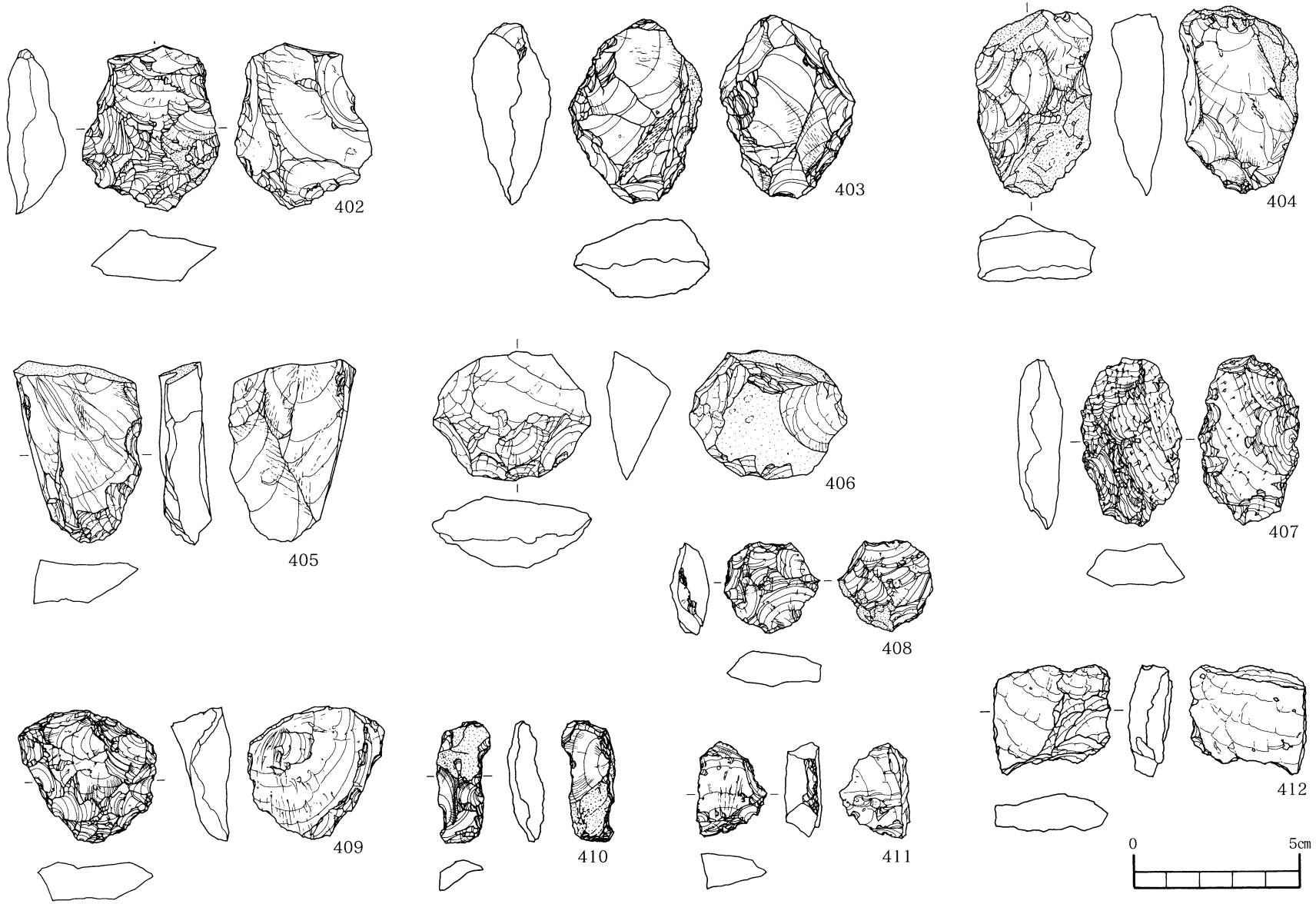
大型の安山岩礫を素材とし，上下端が薄くなった部分を利用している。特に下面は水平になり，細かな剥離が両面に見られる。木材の加工に利用したものと考えられる。

砥石（第49図 474）

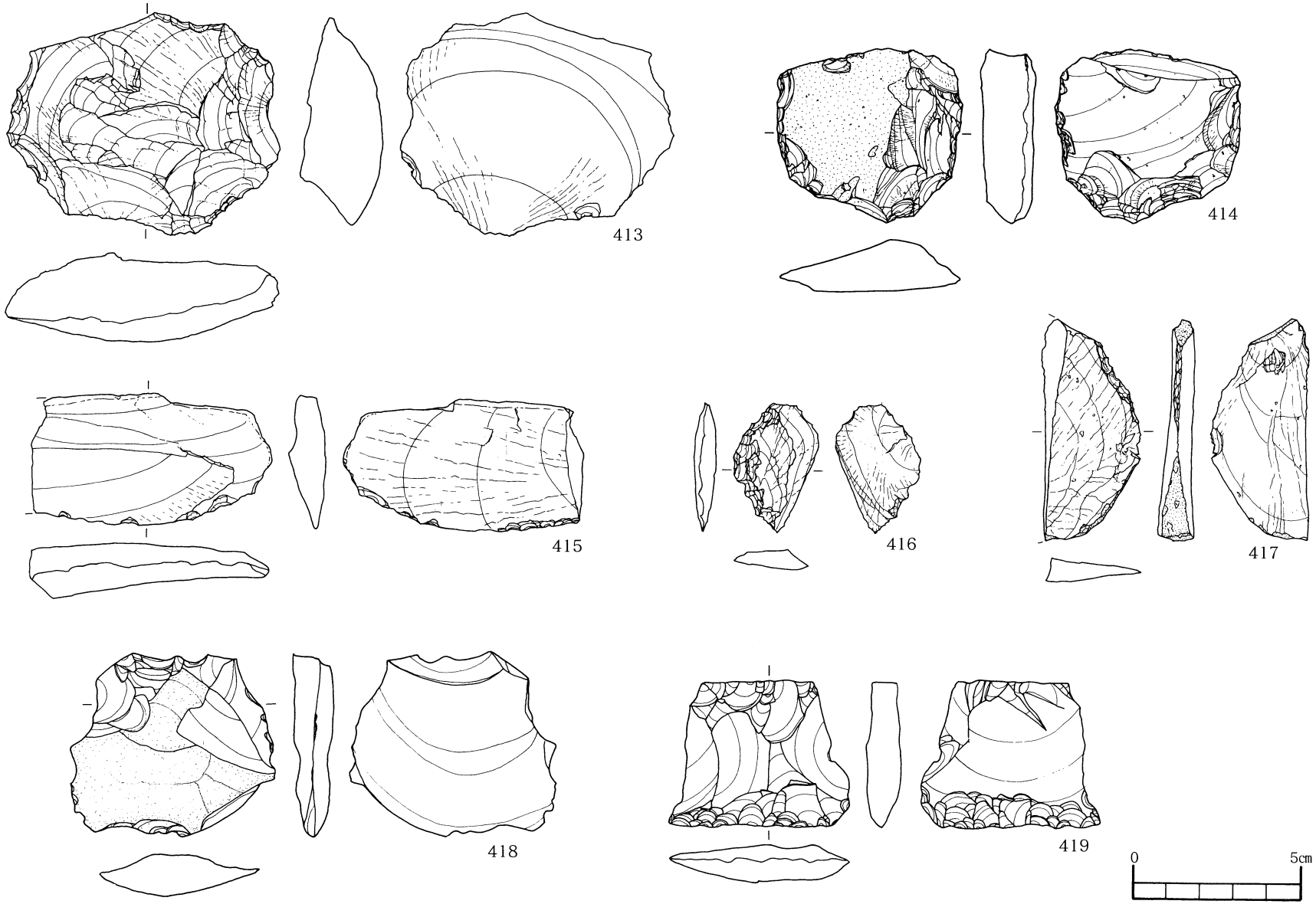
全体的に滑らかな石材であり，特に一部分だけを砥石として使用しているかどうかは断定できない。上面の湾曲部分が自然的でなかったことから注意を促すために砥石として取り上げた。

擦切具（第49図 475）

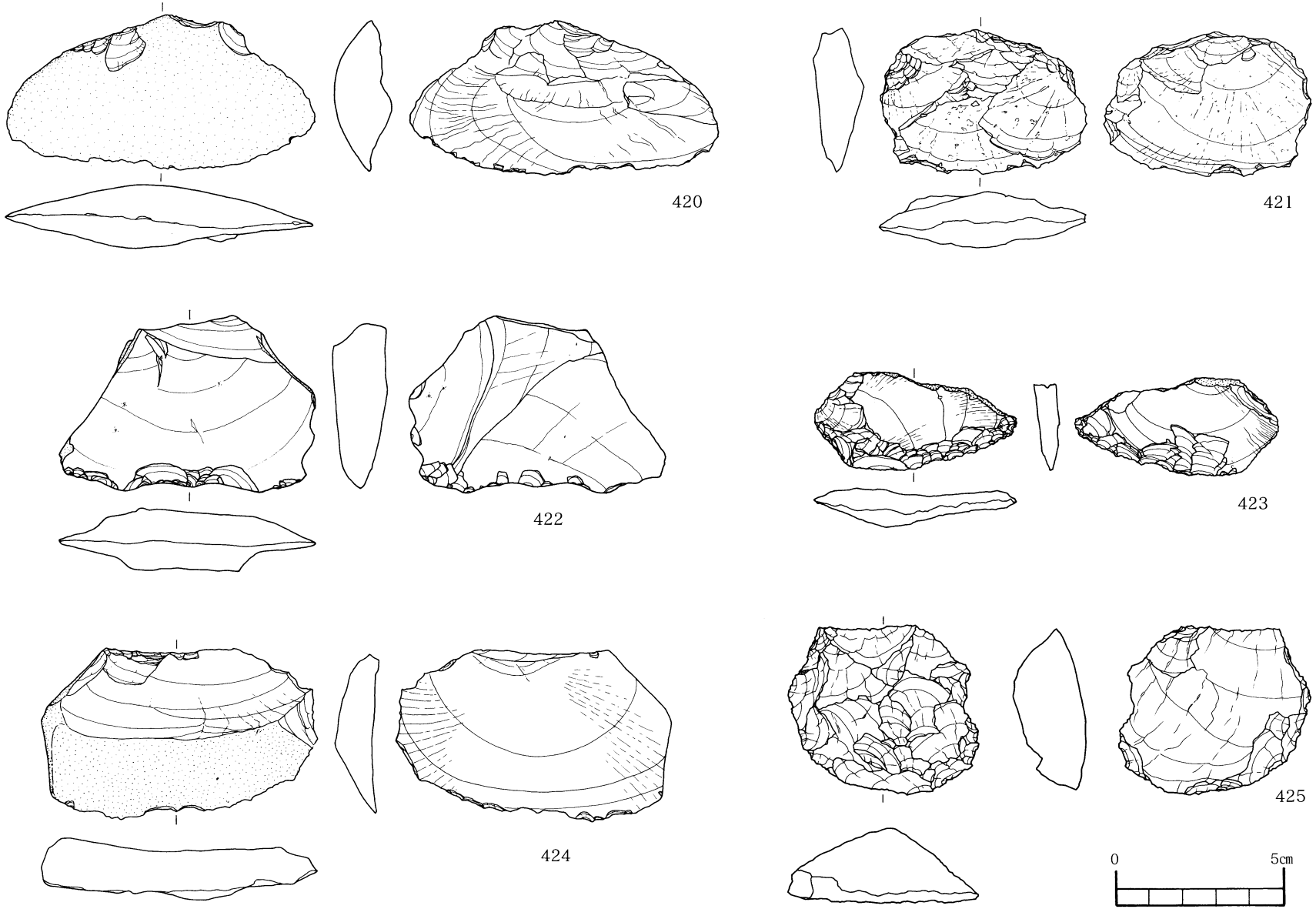
扁平な砂岩を利用し，下面が両刃状に擦り減っている。擦痕は横方向に観察され，前後に動かして使用したと考えられる。460の鑿形石器の側面に残る擦切痕と475の刃部の角度が



第41図　出土石器　3

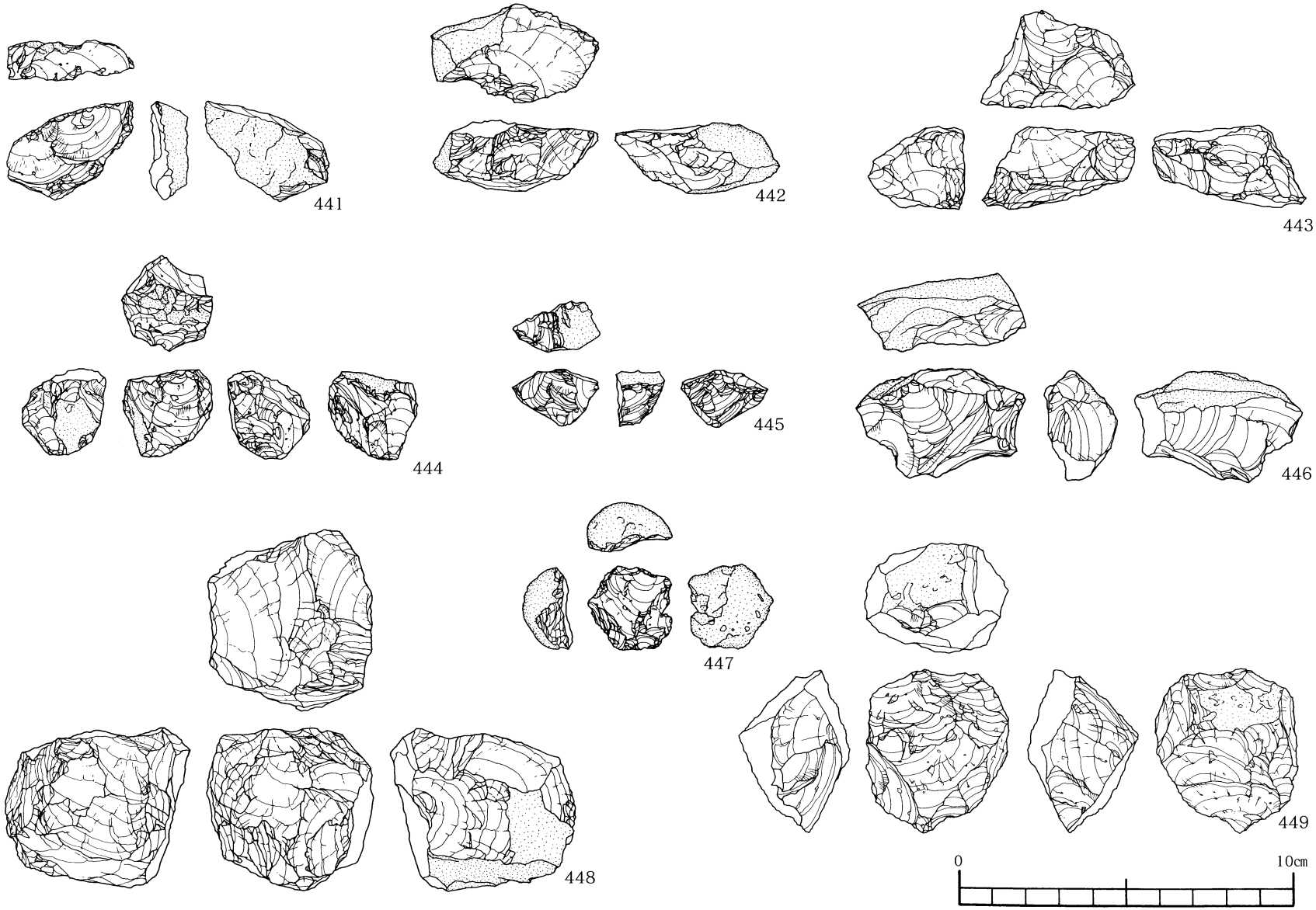


第42図　出土石器　4

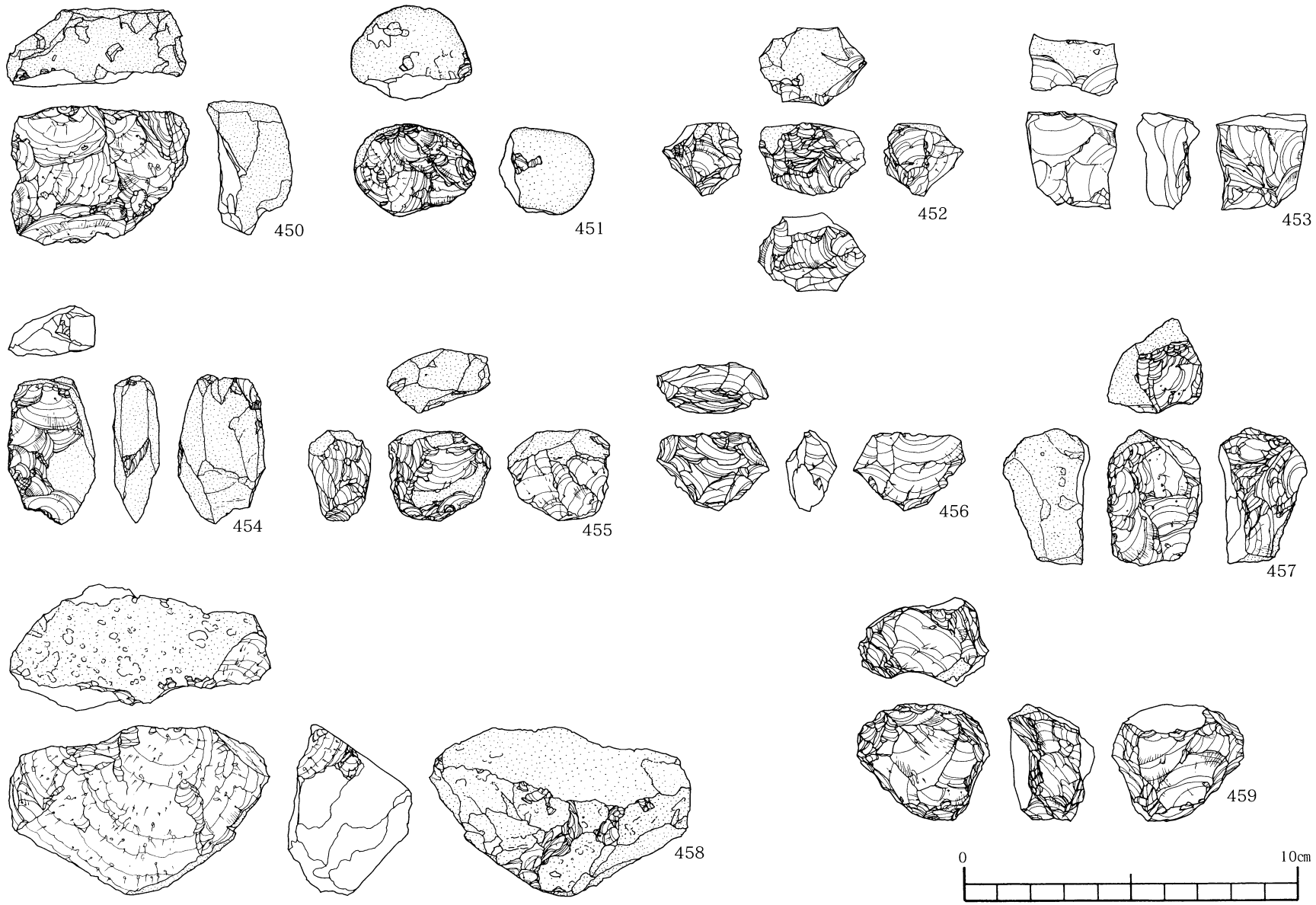


第43図　出土石器　5

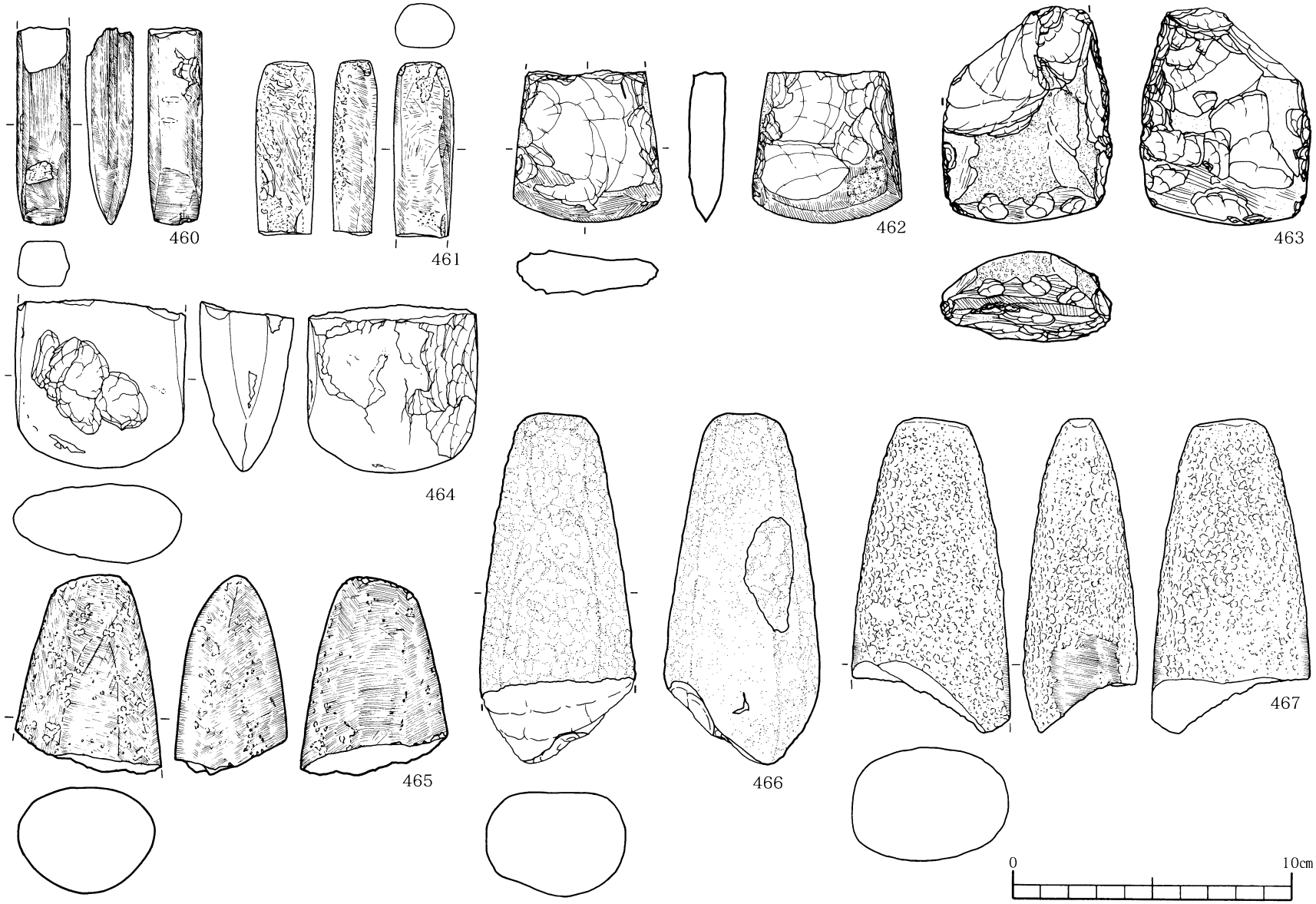
第44図　出土石器　6



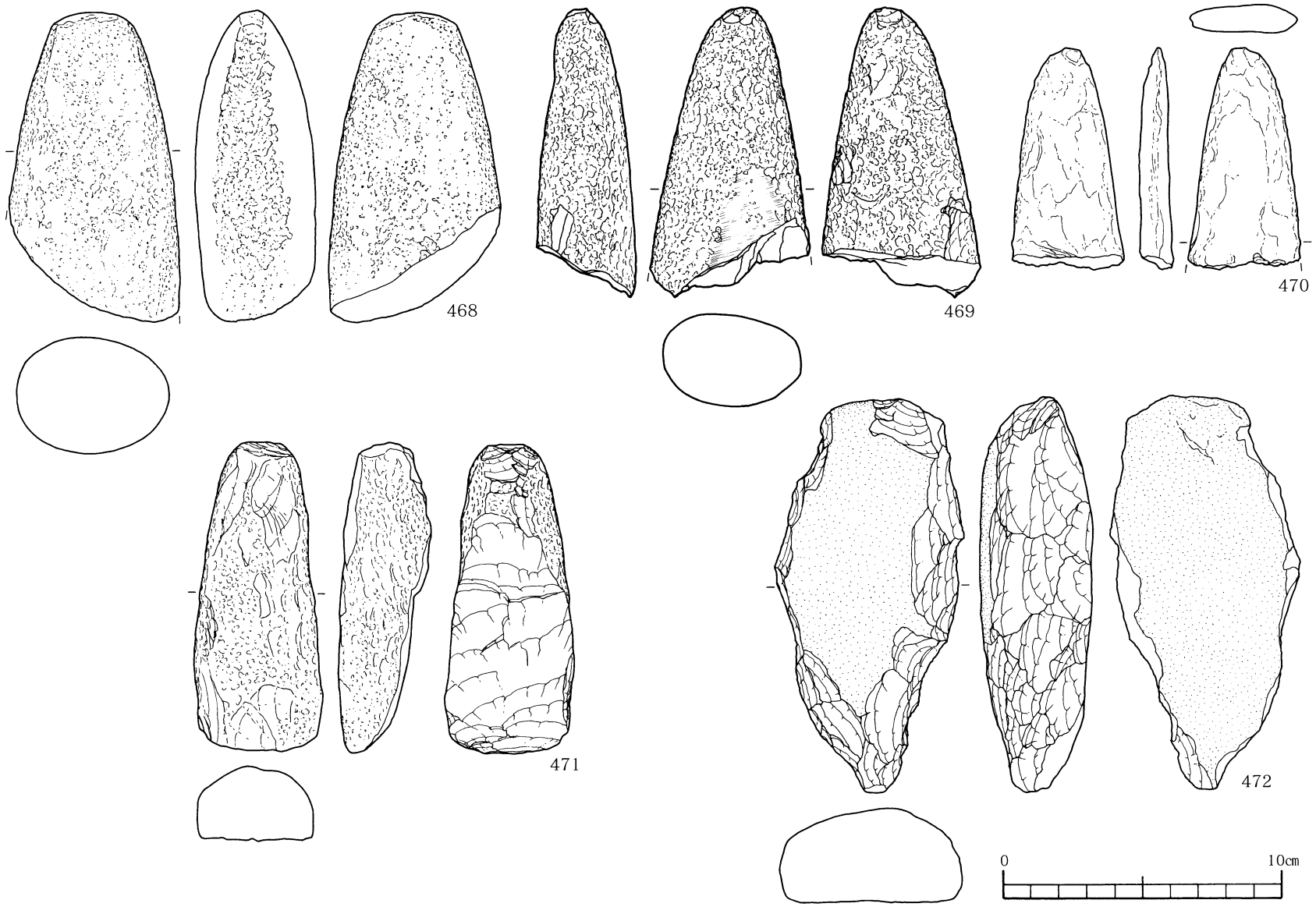
第45図　出土石器　7



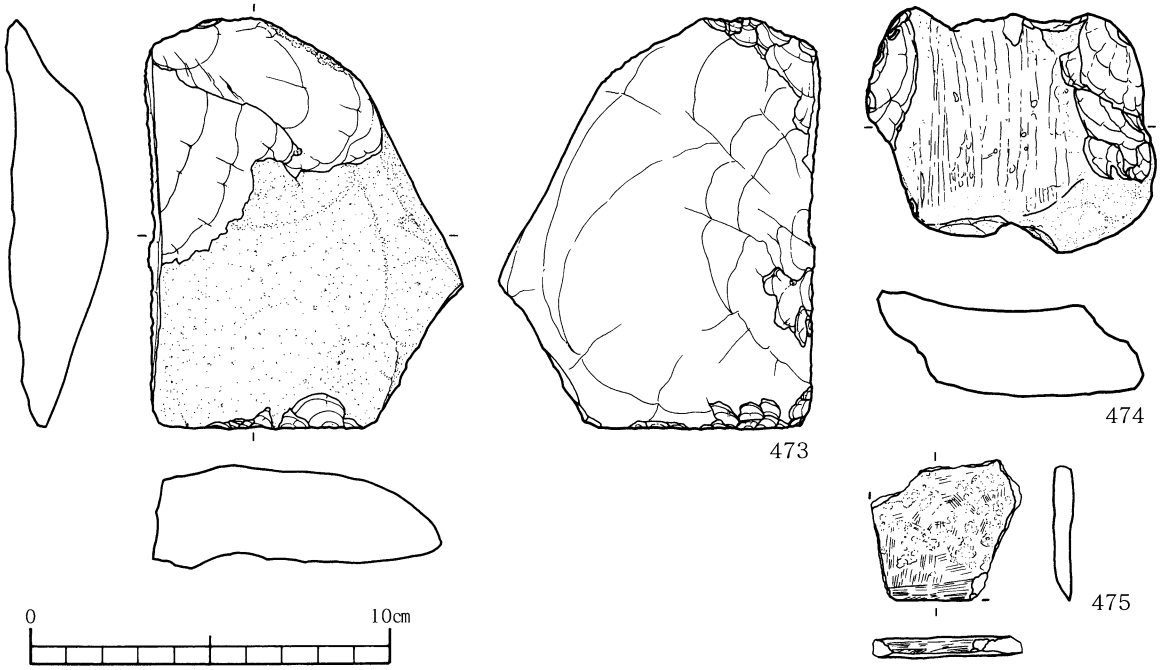
第46図　出土石器　8



第47図　出土石器　9



第48図　出土石器　10



第49図　出土石器　11

似ている。この様な擦切具が鑿形石器の製作に使用されたということは，河口貞徳氏や山崎純男氏によって指摘されている。

礫器（第50図 476～478）

礫皮面を大きく残しながらも，部分的に剥離して使用している。476は棒状のもので，両端の側面に剥離が見られる。477は安山岩礫を3方向から打撃を加え剥離している。残りの1方向は元々窪んでいる。錘として利用された可能性もある。

磨石（第51・52図 479～492）

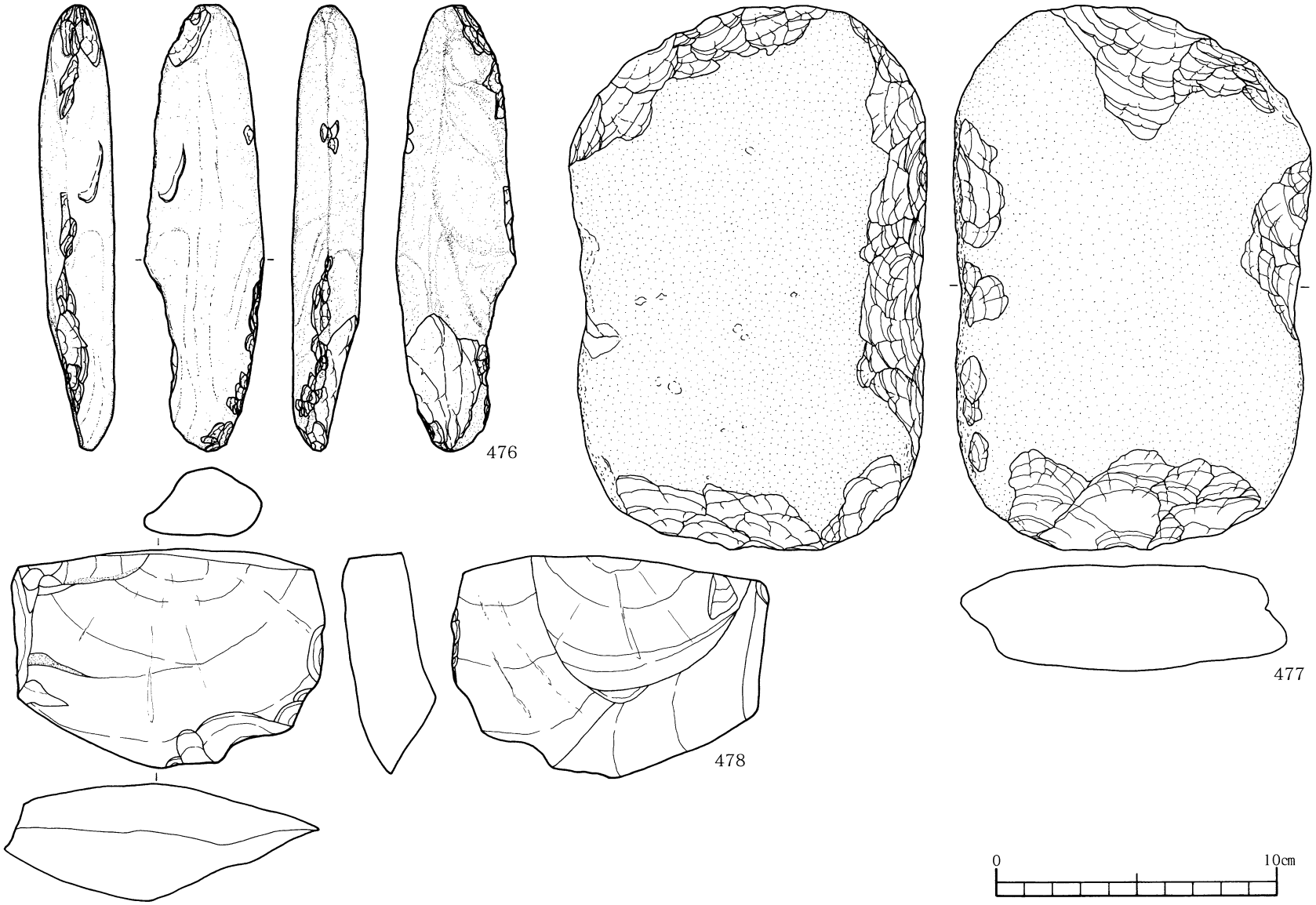
479～484は小型の磨石である。風化が著しいが全体的に磨られている。479・482・483はは一面が平坦となる特徴があり，縄文時代晩期に見られるもう少し扁平な小型の磨石とは目的の違いがうかがえる。485～491は大型の磨石である。掌を広げて握るほどの大きさであり，表裏ともよく使い込まれている。492は球形状の礫の下面のみを主に使用したためか，この部分のみ器面が細かく緩やかな曲面をもつ。

敲石（第52・53図 493～501）

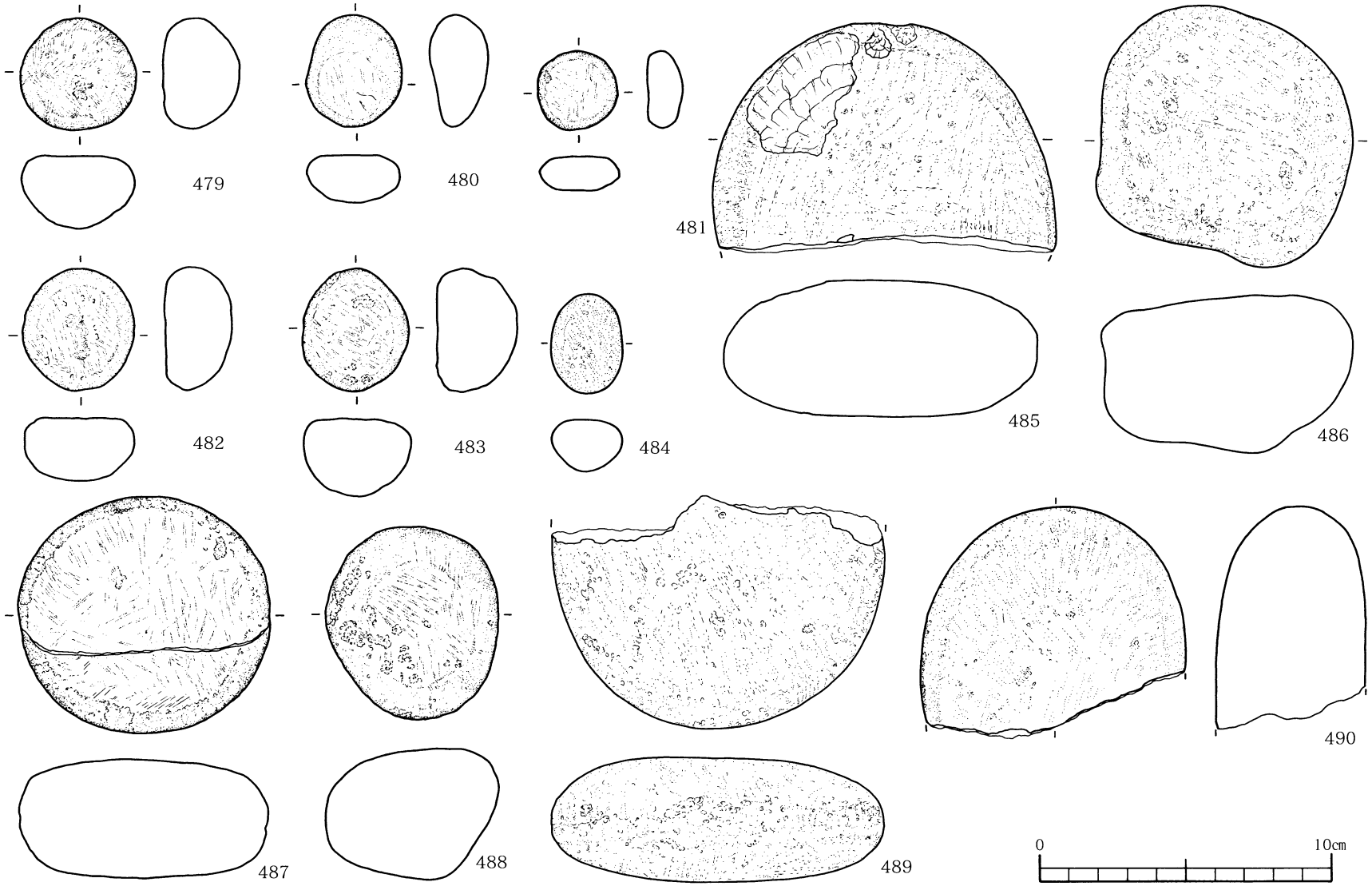
礫の一部に打撃痕が認められ，敲打具として利用していたことがうかがえる。493は上下両端を使用している。494は棒状の礫の先端に細かな敲打痕がみられる。495は断面が長方形をした大型の礫で，一方は折れているが，もう一方の面は使用による潰れが著しい。499は片手で握るには少し大きな球状の安山岩礫であり，下面に打撃痕が見られる。

砥石（第53図 502～507）

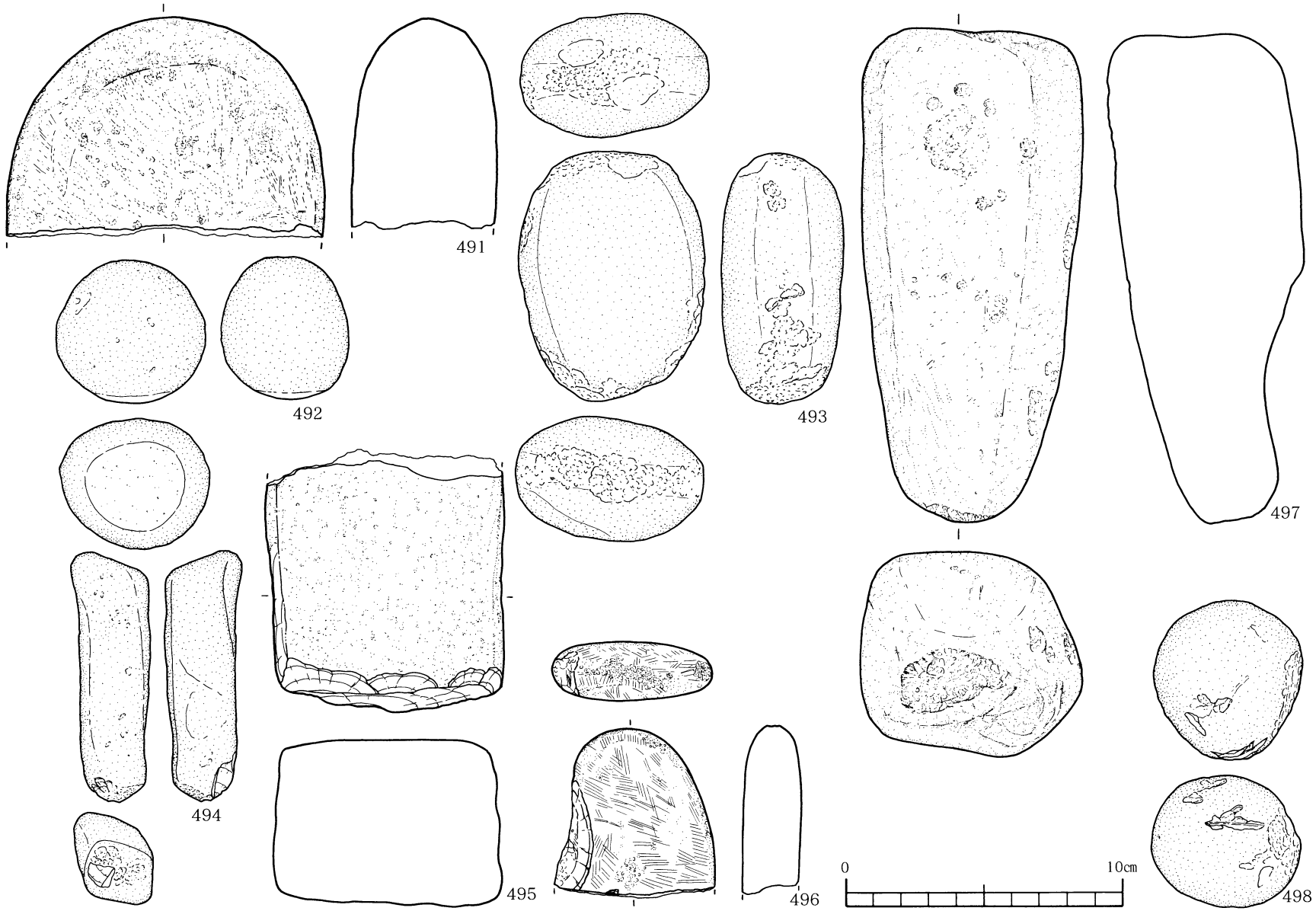
両面とも平坦に近い礫を利用し，片面あるいは両面を使用している。504は一面を使用し，わずかな凹凸はあるがほぼ平坦である。505は両面を使用し，一面は角度が付いているもののほぼ水平な面を持っている。擦痕が明瞭で金属を研いだ可能性もあり，縄文時代に限定しなくても良



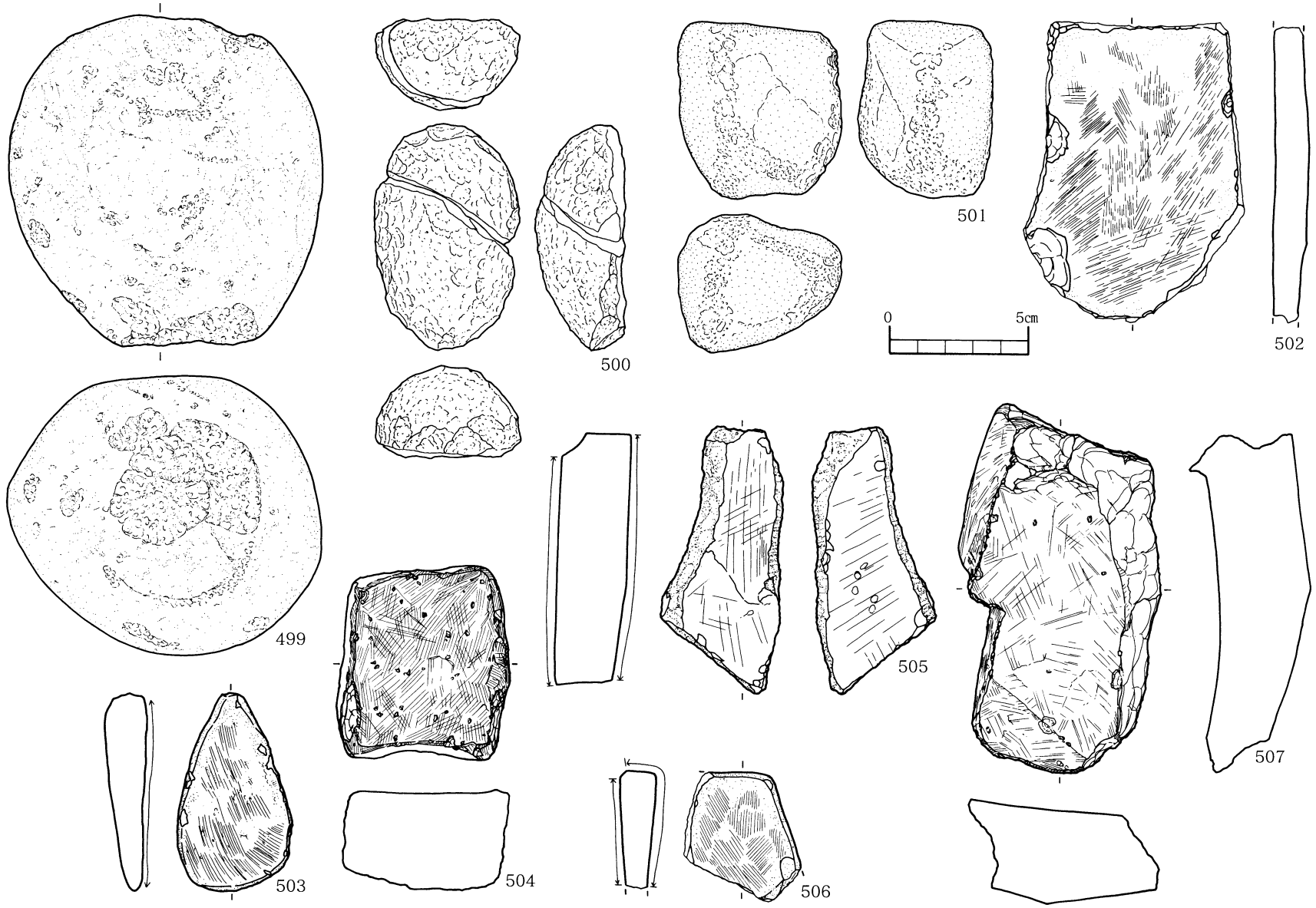
第50図　出土石器　12



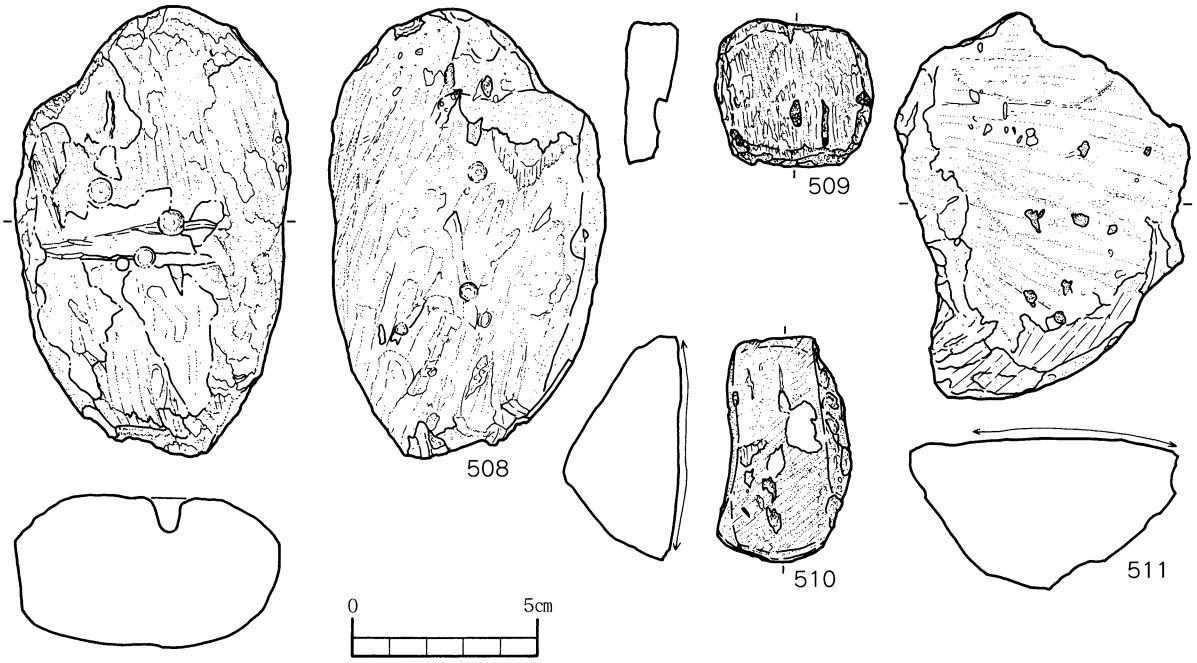
第51図　出土石器　13



第52図　出土石器　14



第53図　出土石器　15



第54図　出土石器　16

さそうである。506は扁平な砂岩を利用し，両面が使われている。一面はわずかに湾曲している。

軽石製品（第54図 508～511）

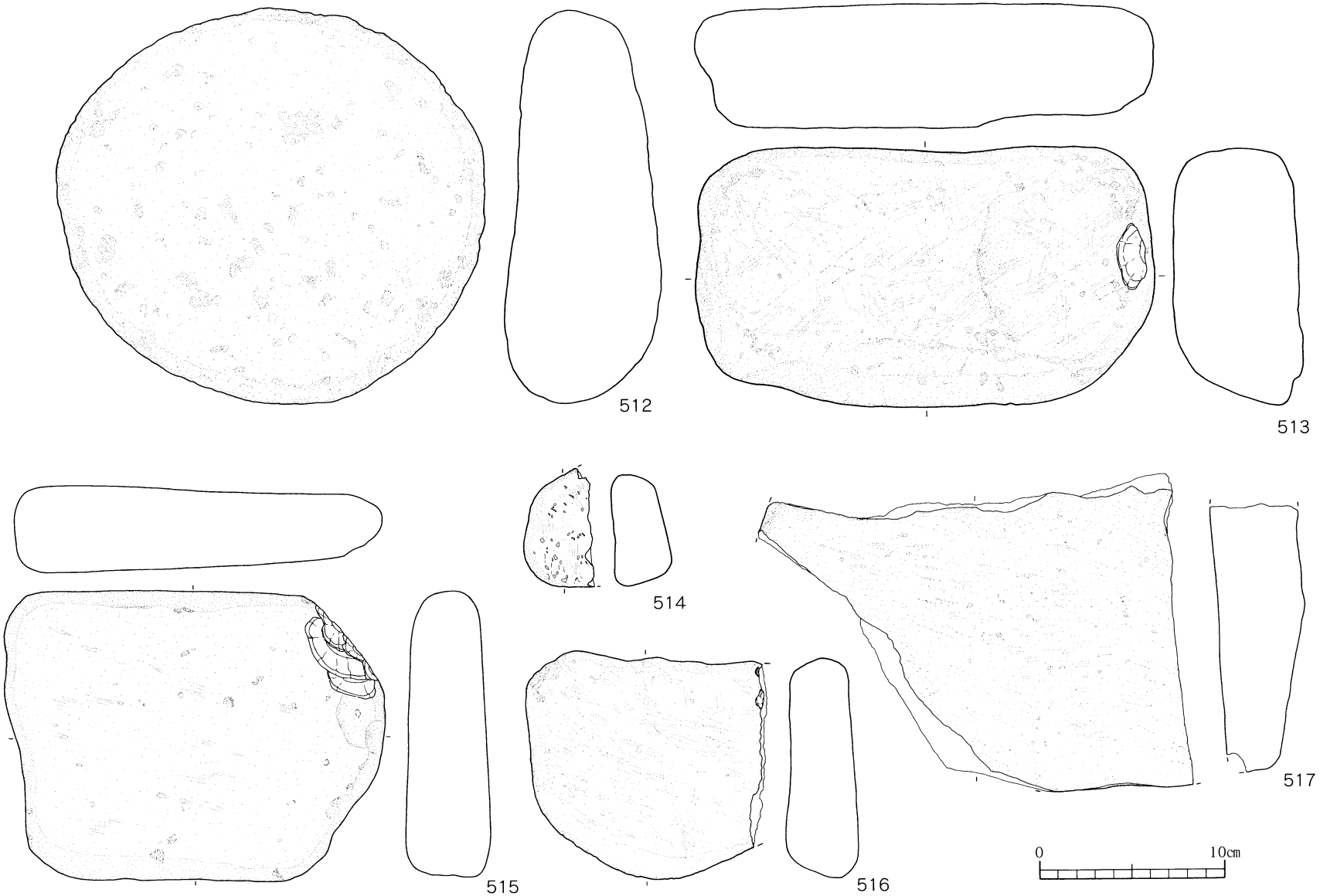
508は直径５～７mmの穴が３ヶ所に見られる。貫通はせず，深いもので９mmの深さをもつ。この面は黒く焼けている。大根占町道ノ迫遺跡でも市来式土器が使われた時期に同様な軽石製品が出土している。穴をあける行為に意味があるのではないかと考えられる。509は二面の平坦面があり，何かを磨くのに使われたと考えられる。510・511は一部に擦った痕跡があり，軽石製品そのものを作ることを目的としたというより，何かの対象物に対して，軽石を使用したことによってこの様な形の石器になったと考えられる。

台石（第55・57図 512・529）

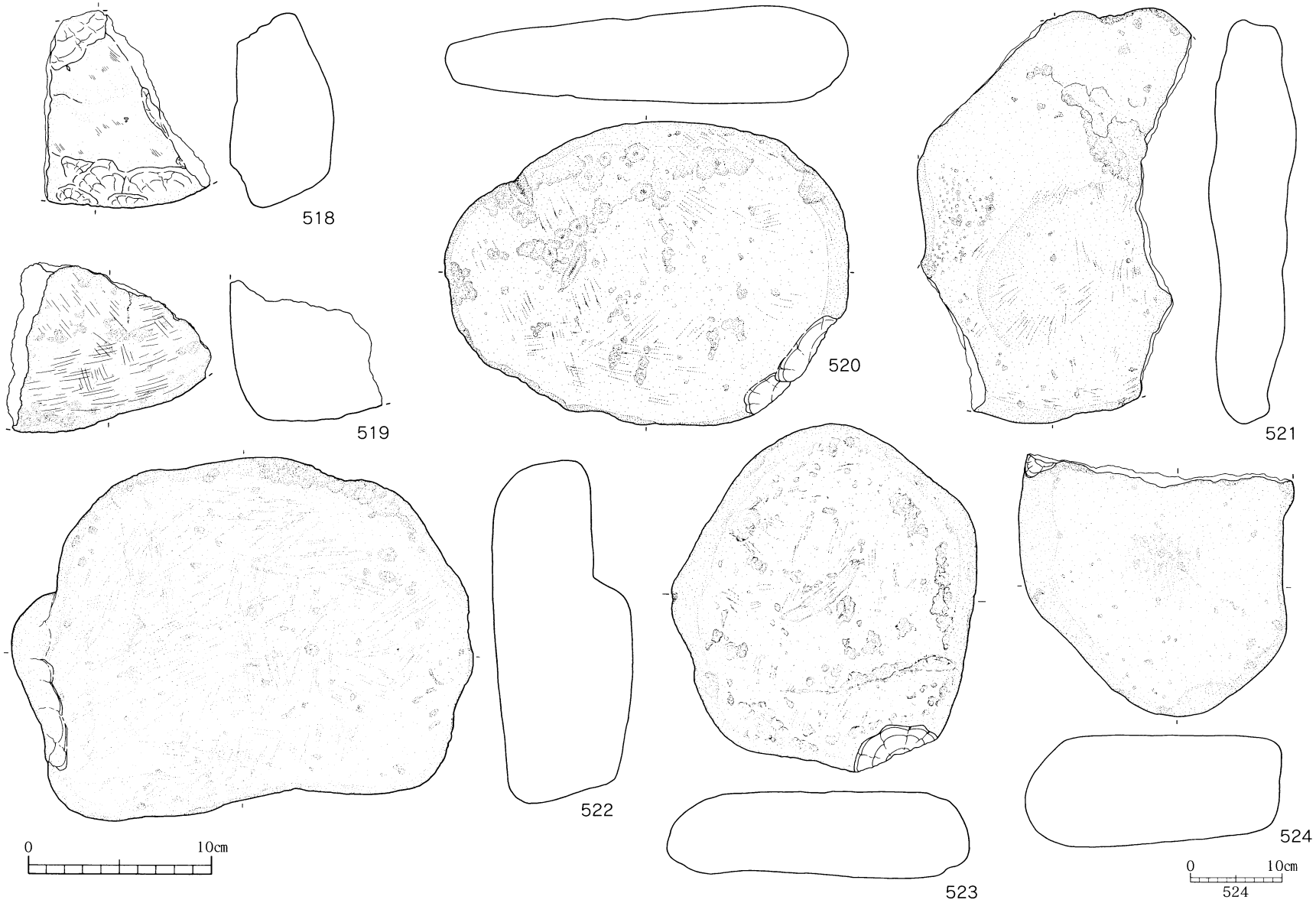
円形の安定した礫を利用し，遺構の床面に置かれた状態で出土した。様々な作業を行うための台であったと考えられる。512は中央部がわずかに窪み、かすかな擦り面がみられることから石皿としても使用されていたことがうかがえる。

石皿（第55～57図 513～528）

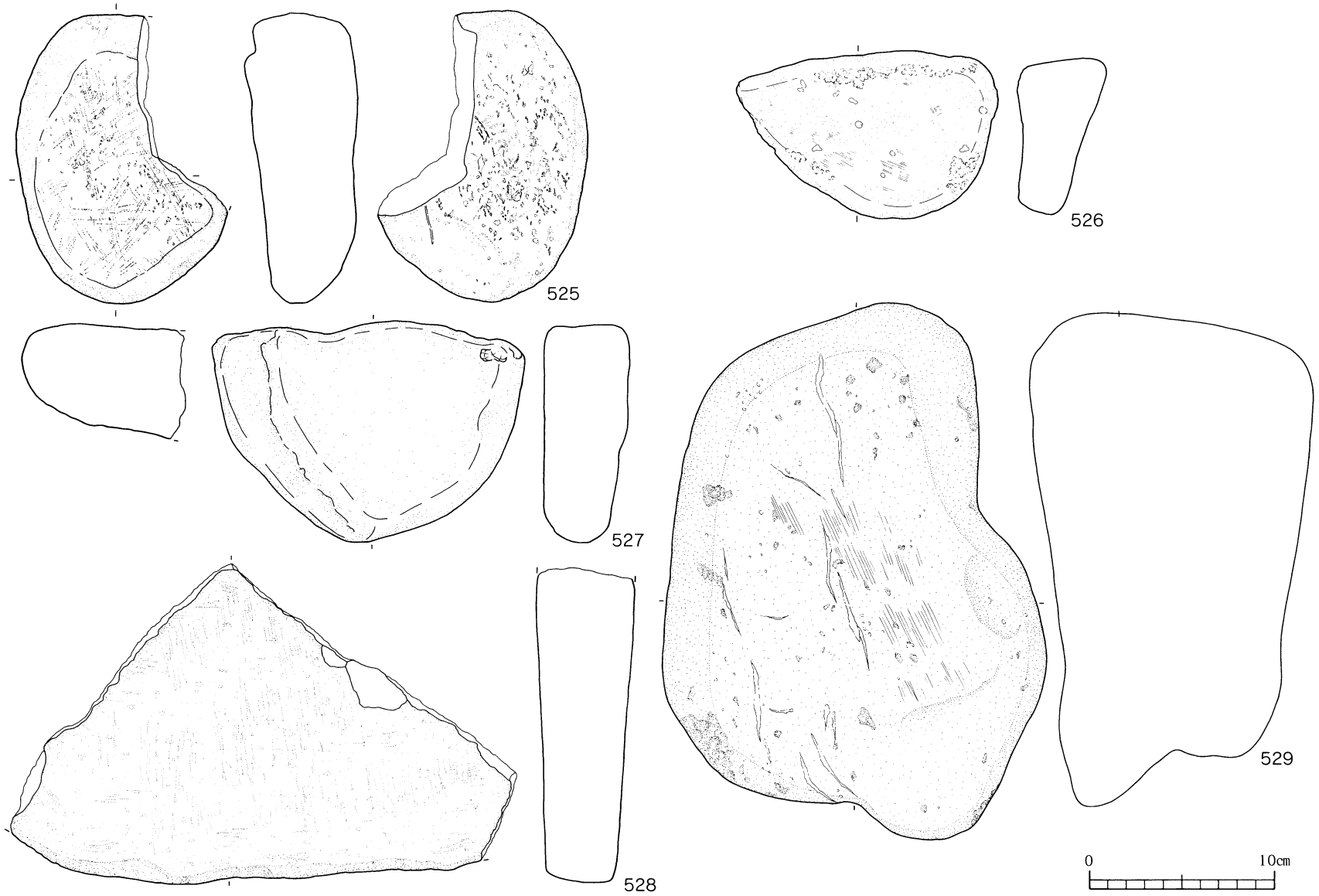
定形化した石皿ではなく，平坦な面を利用している。窪むほど使われてはいない。514は一面は平坦であり，もう一面は浅い窪みをもっている。515・528は扁平な安山岩の両面を使用している。524は大きな安山岩の両面を使用している。526は断面「U」字形となっており，手に持って使用したことも考えられる。



第55図　出土石器　17



第56図　出土石器　18



第57図　出土石器　19

第５表　石器観察表

図番号	番号	出土区	層　位	取上番号	器　種	長　さ　cm	幅　cm	厚　さ　cm	重　さ g	石　材	備　考
39	360		表採	－	石鏃	2.20	1.70	0.37	0.83	黒曜石（針尾系）	
39	361	1地点北	表採	－	石鏃	2.30	1.62	0.32	0.77	黒曜石（針尾系）	
39	362	B25 住1	北Ⅰ	－	石鏃	1.80	1.65	0.30	0.52	安山岩	
39	363	B17	Ⅳ	－	石鏃	1.70	1.80	0.40	0.79	黒曜石（上牛鼻）	
39	364	B16.17	Ⅳ	－	石鏃	1.30	1.70	0.35	0.54	黒曜石（針尾系）	
39	365	A25	Ⅱa	－	石鏃	1.20	1.00	0.30	0.26	黒曜石（針尾系）	
39	366	A26	Ⅱa	－	石鏃	(1.28)	1.30	0.24	0.32	黒曜石（腰岳系）	
39	367	A26	Ⅰc	－	石鏃	(1.20)	1.38	0.34	0.36	安山岩	
39	368	A28	Ⅲ	836	石鏃	2.00	(1.30)	0.40	0.53	黒曜石（桑ノ木津留）	
39	369	B13	Ⅲ	－	石鏃	1.45	1.20	0.23	0.37	玉髄	
39	370	B25	Ⅱa	－	石鏃	(1.50)	(0.45)	0.42	0.38	黒曜石(腰岳系)	
39	371	A17	Ⅳ	－	石鏃	2.70	1.80	0.50	1.95	安山岩	
39	372	A28	Ⅱ	955	石鏃	2.10	1.80	0.40	1.12	ハリ質安山岩	
39	373	B13	Ⅱa	－	石鏃	1.50	1.00	0.30	0.27	黒曜石（桑ノ木津留）	
39	374	A26	Ⅱa	－	石鏃	1.80	1.60	0.50	0.86	黒曜石（上牛鼻）	
39	375	B28 溝状遺構5	Ⅱ	－	石鏃	2.20	1.70	0.40	1.47	鉄石英	
39	376	A27	Ⅰc	－	石鏃	1.70	1.25	0.40	0.67	ハリ質安山岩	
39	377	B17	Ⅲ	－	石鏃	2.50	1.50	0.65	1.43	黒曜石	
39	378	A17	Ⅳ	－	石鏃	2.20	1.45	0.40	1.01	ハリ質安山岩	
39	379	A25	Ⅱa	－	石鏃	2.05	1.50	0.50	0.85	黒曜石（腰岳系）	
39	380	B28	Ⅰc	－	石鏃	1.70	1.50	0.45	0.92	ハリ質安山岩	
39	381	A29 自然流路3	Ⅰ	－	石鏃	1.40	1.20	0.35	0.43	黒曜石（上牛鼻）	
39	382	A17	Ⅲ	－	石鏃	1.60	1.45	0.50	0.90	黒曜石	
39	383	A26	Ⅱa	－	石鏃	1.90	1.50	0.40	0.91	ハリ質安山岩	
39	384	A17	Ⅳ	－	石鏃	2.70	1.80	0.40	204.00	鉄石英	
39	385	B28 溝状遺構5	Ⅱ	－	石鏃?	2.58	1.05	0.40	1.06	安山岩	半月形石器の可能性あり
39	386	A26	Ⅱa	－	石鏃未製品	1.50	1.10	0.30	0.51	黒曜石(腰岳系)	
39	387	A26	Ⅱa	－	石鏃未製品	1.30	1.10	0.40	0.52	黒曜石(腰岳系)	
39	388	B17	Ⅳ	－	石鏃未製品	0.70	1.70	0.70	1.57	黒曜石(腰岳系)	
39	389	A27?	Ⅰc?	－	石鏃未製品	2.20	1.70	0.50	1.74	黒曜石（針尾系）	
39	390	B17	Ⅶ	－	石鏃未製品	2.00	1.95	0.55	1.77	チャート	
40	391	A25	Ⅰc	－	石錐	2.00	2.00	1.10	3.36	鉄石英	
40	392	B26	Ⅱa	－	フレーク	4.10	1.65	0.90	3.48	珪質頁岩	
40	393	A26	Ⅰc	－	石錐	2.30	1.95	1.00	5.12	黒曜石（上牛鼻）	
40	394	A26	Ⅴ	－	石錐	2.90	5.00	0.80	2.24	タンパク石	
40	395	A27	Ⅰc	－	石錐	3.60	1.20	0.60	2.32	黒曜石（腰岳系）	
40	396	A13	Ⅱ	－	石錐	4.60	2.60	2.20	21.80	鉄石英	
40	397	A16	Ⅲ	－	石錐？	3.20	2.65	1.18	8.05	黒曜石（針尾系）	
40	398	A27	Ⅰb	－	抉入石器	2.70	1.90	1.10	4.48	黒曜石（腰岳系）	
40	399	B17	Ⅳ	－	抉入石器	3.25	2.10	1.10	6.30	ハリ質安山岩	
40	400	A25	Ⅰb	－	抉入石器	3.30	3.30	1.30	16.37	玉髄	
40	401	A26	Ⅱa	－	石鏃	4.72	3.58	0.73	17.70	頁岩	
41	402	A17	Ⅳ	－	スクレイパー	5.00	4.12	1.75	32.02	タンパクセキ	
41	403	B27	Ⅰc	－	スクレイパー	5.58	4.10	2.45	200.00	安山岩	
41	404	A29	Ⅱa	－	スクレイパー	5.55	3.45	2.15	38.67	ハリ質安山岩	
41	405	A27	Ⅰb	－	スクレイパー	5.40	3.70	1.50	29.72	安山岩	
41	406	A26	Ⅰc	－	スクレイパー	3.90	4.80	2.20	39.81	安山岩	
41	407	A17	Ⅶ	－	スクレイパー	5.15	3.05	1.32	20.25	黒曜石	
41	408	A26	Ⅰc	－	スクレイパー	2.85	2.95	1.20	8.29	黒曜石(腰岳系)	
41	409	A17	Ⅳ	－	スクレイパー	4.09	4.22	1.62	20.62	黒曜石（上牛鼻）	
41	410	溝状遺構5	Ⅱ	－	スクレイパー	3.70	1.65	1.00	4.55	黒曜石(腰岳系)	
41	411	A25	Ⅰb	－	スクレイパー	2.85	2.18	1.19	5.96	黒曜石（上牛鼻）	
41	412	A25	Ⅰb	－	2次加工のある別片	3.40	3.60	1.25	16.29	石英	
42	413	A26	Ⅰc	－	スクレイパー	6.60	8.20	2.68	147.10	安山岩	
42	414	A28	Ⅰc	－	スクレイパー	5.35	5.50	1.70	52.87	安山岩	黒色土
42	415	自然流路3	Ⅱ	－	スクレイパー	3.95	7.25	1.65	38.72	?	

図番号	番号	出土区	層　位	取上番号	器　種	長　さ　cm	幅　　cm	厚　さ　cm	重　さ　g	石　材	備　考
42	416	A26	Ⅱa	－	スクレイパー	3.80	2.52	0.65	5.68	頁岩	
42	417	A17	XⅣ	－	スクレイパー	6.50	2.92	1.00	17.65	安山岩	
42	418	1地点北	Ⅵ	665	スクレイパー	5.64	6.60	1.19	42.36	頁岩	
42	419	A27	Ⅰc	－	スクレイパー	4.30	5.45	0.80	25.20	安山岩	
43	420	A26	Ⅱ上面	－	スクレイパー	4.59	9.20	1.80	58.65	頁岩	
43	421	A11	Ⅰb	－	スクレイパー	4.30	6.19	1.65	40.02	安山岩	
43	422	自然流路3	Ⅰ	－	スクレイパー	5.18	7.60	1.80	63.84	安山岩（サヌカイト）	
43	423	A27	Ⅰb	－	スクレイパー	2.90	6.50	1.13	16.81	安山岩（サヌカイト）	
43	424	A26	Ⅰc	110	スクレイパー	5.10	8.37	1.50	62.84	安山岩	
43	425	1地点	Ⅵ	769	スクレイパー	5.00	5.30	2.10	54.00	安山岩（サヌカイト）	
44	426	A17	Ⅶ	－	スクレイパー	2.10	3.30	0.85	4.43	ハリ質安山岩	
44	427	A26	Ⅰc	－	スクレイパー	2.55	3.85	1.20	13.13	安山岩	
44	428	A23	Ⅱ	－	スクレイパー	2.80	3.80	0.65	8.65	黒曜石	
44	429	A25	Ⅱa	－	スクレイパー	3.18	2.45	1.32	8.94	安山岩	
44	430	B19	Ⅴ	－	スクレイパー	3.50	2.15	0.50	40.20	石英	
44	431	A26	Ⅰc	－	スクレイパー	3.20	1.92	1.00	4.87	ハリ質安山岩	
44	432	B27	Ⅰc	－	スクレイパー	4.08	3.00	1.05	12.26	玉髄	
44	433	A27	Ⅰb	－	ノッチドスクレイパー	4.10	3.00	1.70	17.00	黒曜石（上牛鼻）	
44	434	B28	Ⅰc	－	石匙	1.50	1.50	0.80	2.32	チャート	
44	435	A25	Ⅰc	－	楔形石器	2.20	3.10	1.00	6.14	黒曜石（上牛鼻）	
44	436	B25	Ⅱa	－	楔形石器	2.00	0.70	0.40	0.54	黒曜石（上牛鼻）	
44	437	B29	Ⅰc	－	楔形石器	2.50	2.00	1.20	5.67	黒曜石	
44	438	A17	Ⅲ	－	楔形石器	2.28	2.33	1.10	5.17	黒曜石（上牛鼻）	
44	439	A25	Ⅱa	－	楔形石器	2.85	2.20	1.10	7.05	黒曜石（上牛鼻）	
44	440	A23	Ⅱ	1016	楔形石器	1.75	0.80	0.70	1.14	水晶	
45	441	B28	Ⅰc	－	石核	2.50	4.30	1.25	9.93	黒曜石（針尾系）	
45	442	A26	Ⅰc	－	石核	2.53	4.25	2.29	32.73	黄褐色の頁岩	
45	443	A29,30	Ⅱa	－	石核	3.10	4.85	2.40	30.07	チャート	
45	444	A29	Ⅱa	－	石核	2.30	2.85	2.48	17.29	黒曜石（上牛鼻）	
45	445	A28	Ⅲ	－	石核	1.70	2.50	1.50	5.01	黒曜石（腰岳系）	
45	446	A17	Ⅳ	－	石核	3.10	4.90	2.17	34.67	安山岩（サヌカイト）	
45	447	A29	Ⅰb	－	石核	2.00	2.50	1.40	9.37	黒曜石（上牛鼻）	
45	448	A26	Ⅰc	－	石核	4.90	5.20	5.20	180.93	鉄石英	
45	449	B27	Ⅰc	－	石核	4.90	4.30	3.30	70.06	ハリ質安山岩	
46	450	溝状遺構3	Ⅱ	－	石核	4.10	5.40	2.80	55.67	黒曜石（上牛鼻）	
46	451	A17	Ⅰb	－	石核	2.80	3.70	2.80	31.09	黒曜石	
46	452	A17	Ⅵ	－	石核	2.30	3.20	2.20	14.81	黒曜石（上牛鼻）	
46	453	B25	Ⅱa	－	石核	2.90	2.70	1.60	10.97	頁岩	
46	454	溝状遺構5	Ⅱ	－	石核	4.40	2.60	1.35	16.07	黒曜石（腰岳系）	
46	455	B29	Ⅱa	－	石核	2.70	3.00	1.80	15.88	黒曜石（上牛鼻）	
46	456	B17	Ⅳ	－	石核	2.45	3.30	1.60	10.57	黒曜石？	
46	457	B17	Ⅳ	－	石核	4.12	2.91	2.52	28.38	黒曜石	
46	458	A27	Ⅰc	－	石核	5.10	7.70	3.70	111.38	黒曜石（日東系）	
46	459	B18	Ⅳ	－	石核	3.40	3.90	3.10	35.57	ハリ質安山岩	
47	460	B28	Ⅰc	－	鑿形石斧	(7.10)	1.95	1.75	40.54	蛇紋岩	
47	461	A26	Ⅰc	－	鑿形石斧	(6.30)	2.20	1.60	42.59	ホルンフェルス	
47	462	B17	Ⅲ	－	石斧	5.50	5.40	1.50	66.87	ホルンフェルス	1地点北
47	463	AB28 自然流路5	－	－	石斧片	7.75	6.00	3.20	189.96	頁岩	
47	464	自然流路3	Ⅱ	－	石斧	(6.00)	6.10	3.40	169.04	ホルンフェルス	
47	465	自然流路3	Ⅰ	－	石斧	(7.10)	5.10	4.00	176.72	ホルンフェルス	
47	466	自然流路5	－	－	石斧片	12.65	5.60	5.60	364.00	ホルンフェルス	
47	467	B30	Ⅱa	－	石斧	(11.30)	5.60	4.10	326.96	ホルンフェルス	
48	468	自然流路6	－	－	石斧	(11.20)	6.10	4.30	400.00	ホルンフェルス	
48	469	自然流路4	－	－	石斧	(10.90)	5.70	3.50	227.62	ホルンフェルス	1地点南
48	470	B28	Ⅰc	－	石斧	(8.00)	4.00	1.15	50.17	ホルンフェルス	
48	471	A20	Ⅲ	－	石斧	11.20	4.80	3.30	198.96	頁岩	2地点
48	472	出土地不明	表採	－	石斧	14.20	7.68	4.30	475.00	安山岩	

図番号	番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	備考
49	473	溝状遺構3	Ⅱ	－	楔	11.40	8.70	2.70	336.00	安山岩	
49	474	溝状遺構3	Ⅱ	－	砥石	6.70	7.70	1.50	166.00	凝灰岩	
49	475	自然流路5	－	－	擦切具	3.75	4.20	0.55	12.00	砂岩	
50	476	A25	Ⅰc	－	石鏃	1.50	1.25	0.30	0.37	頁岩	
50	477	PあるいはR18	Ⅰ	52	礫器	19.30	12.60	3.90	1388.00	安山岩	
50	478	A18	－	－	礫器	7.92	11.30	2.82	35.90	凝灰岩	暗キョ
51	479	B26	Ⅱa	－	小型磨石	4.10	4.00	2.70	50.00	安山岩	
51	480	A17	Ⅳ	－	小型磨石	4.10	3.25	2.00	35.43	頁岩	
51	481	A26	Ⅱ	－	小型磨石	2.75	2.90	1.25	14.59	安山岩	
51	482	A17	Ⅶ	－	小型磨石	4.50	3.80	2.30	44.00	安山岩	
51	483	A27	Ⅰb	－	小型磨石	4.44	3.65	2.78	47.24	安山岩	
51	484	溝状遺構5	Ⅱ	－	小型磨石	4.60	3.50	1.90	21.00	?	
51	485	B14	Ⅶ	－	磨石	8.60	11.80	5.10	726.00	凝灰岩	1地点北
51	486	B17土器溜	Ⅶ	－	磨石	9.70	8.80	5.80	720.00	安山岩	
51	487	A25	Ⅱ上面	－	磨石	8.70	8.70	4.30	486.00	砂岩	
51	488	B17	Ⅳ	－	磨石	7.10	6.00	5.80	272.00	安山岩	
51	489	1地点北	Ⅵ	704	磨石	8.60	11.40	4.60	628.00	安山岩	
51	490	溝状遺構6	－	－	磨石	8.20	9.20	5.20	566.00	安山岩	
52	491	溝状遺構3	Ⅱ	－	磨石	7.70	11.60	5.25	792.00	安山岩	
52	492	自然流路1	Ⅰ	－	磨石の可能性あり	5.30	5.50	4.70	141.60	安山岩	
52	493	溝状遺構6	－	－	敲石	9.10	6.80	4.50	390.00	安山岩	
52	494	B26	Ⅰb	－	敲石	8.90	3.10	2.95	102.00	安山岩	
52	495	B17土器溜	Ⅶ	－	磨石特殊	9.30	8.70	5.90	1000.00	安山岩	
52	496	溝状遺構3	Ⅱ	－	不明	(6.10)	5.80	2.10	121.00	頁岩	
52	497	B28 石組	－	3	敲石	17.00	8.00	6.41	1440.00	安山岩	
52	498	A27	Ⅰb	－	敲石	5.70	5.30	4.62	145.16	安山岩	
53	499	A17土器溜	Ⅳ	－	敲石	12.00	11.40	10.10	1900.00	安山岩	
53	500	2地点A20	Ⅳ	－	敲石	5.30	8.10	3.40	165.13	安山岩	表面ボロボロのため可能性があるにとどめる
53	501	A26	Ⅰc	138	敲石	6.30	6.10	4.82	251.00	安山岩	
53	502	AB29 RI	Ⅰ	－	砥石	11.00	8.20	1.35	166.00	凝灰岩	
53	503	B17土器溜	Ⅶ	－	砥石	7.15	4.15	1.55	51.00	安山岩	
53	504	溝状遺構6	Ⅰ	－	砥石	6.90	5.70	3.65	248.00	凝灰岩	
53	505	A17	Ⅷ	－	砥石	9.20	4.15	2.85	126.25	凝灰岩	泥炭層
53	506	B17	Ⅳ	－	砥石	5.10	4.20	1.30	30.00	砂岩	
53	507	溝状遺構6	Ⅰ	－	砥石	13.20	7.30	3.80	438.00	凝灰岩	
54	508	B17土器溜	Ⅶ	－	軽石製品	12.20	7.50	4.10	128.58	軽石	
54	509	B18土器溜	Ⅶ	－	軽石製品	3.90	4.25	1.45	9.48	軽石	
54	510	B18土器溜	Ⅶ	－	軽石製品	5.95	3.30	3.10	19.06	軽石	
54	511	自然流路6	Ⅰ	－	軽石製品	10.52	8.20	4.20	84.00	軽石	
55	512	A17	Ⅳ	－	台石	23.14	21.65	8.50	3400.00	安山岩	
55	513	B28 石組	－	4	石皿A	24.83	14.14	7.00	4600.00	安山岩	
55	514	溝状遺構3	Ⅱ	－	小型石皿A	6.50	3.70	3.40	106.00	安山岩	
55	515	A22	泥炭	－	石皿A	20.60	15.95	4.75	2900.00	安山岩	
55	516	A25	Ⅱa	－	石皿A	12.50	13.04	4.00	1100.00	安山岩	
55	517	A25	Ⅱ直面	－	石皿A	23.40	17.35	5.70	2900.00	凝灰岩	
56	518	A17土器溜	Ⅶ	－	石皿A	9.00	10.58	5.50	702.00	安山岩	
56	519	A25	Ⅱ直面	－	石皿A	11.10	9.34	10.10	1200.00	安山岩	
56	520	B28 石組	－	6	石皿	22.00	16.75	5.80	1900.00	安山岩	
56	521	B18土器溜	Ⅶ?	－	石皿A	22.95	14.90	4.90	2000.00	安山岩	
56	522	A25	Ⅱ直面	－	石皿A	25.25	20.03	8.00	5600.00	安山岩	
56	523	B28石組	－	5	礫	19.15	16.65	4.95	2000.00	安山岩	
56	524	B18石組	－	1	石皿A	28.80	30.00	13.00	18300.00	安山岩	
57	525	溝状遺構6	Ⅰ	－	石皿B・台石	15.90	10.80	6.30	1300.00	安山岩	
57	526	A17	Ⅳ	－	石皿B	14.20	8.60	5.40	892.00	安山岩	
57	527	B17土器溜	Ⅴ?	－	石皿B	16.90	11.30	4.60	1500.00	安山岩	
57	528	B28 石組	－	3	石皿B	27.30	17.50	5.30	3400.00	安山岩	
57	529	B29 石組	－	2	台石(擦痕有)	29.20	20.75	16.30	12200.00	安山岩	

2　弥生時代終末から古墳時代初頭の調査成果

弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構は３地点南側から２地点北部（ＡＢ－22区～26区）で検出された（第58図）。３地点は２地点よりも，地表面で約20㎝，弥生時代の遺構検出面（３地点のⅡ層と２地点のⅣ層）で約40㎝高い。

微高地となる３地点から竪穴住居跡２軒・炉跡10基・溝状遺構1条・土抗10基が検出され，低地部となる2地点では杭列を伴う溝状遺構と自然流路が１条づつ検出された。溝状遺構と自然流路からは多くの木製品が出土した。

３地点ではＩｃ層からⅡ層上面にかけて縄文時代後期から中世にかけての土器，石器が多量に出土した。弥生時代の遺物包含層は中世（Ｉｃ層堆積時）に攪乱されているために残存していなかった。遺構，遺物共にA・B－25・26区に集中して検出された。それより以北は中世の自然流路や耕地整理の際に削平されたと思われる。遺構検出面であるⅡ層上面の地形は南から北側へわずかに傾斜しているが，肉眼で識別できる程ではなくほとんど平坦に近い地形である。

２地点は本来Ⅳ層及びⅤ層上面が遺構検出面であるが，溝状遺構２・自然流路１を検出できたのはⅦ層の泥炭層上面であった。調査時に遺構の存在を想定していなかったために，複雑な土層の層序を把握せず掘り下げたことが原因となった。

（1）弥生土器の分類の説明

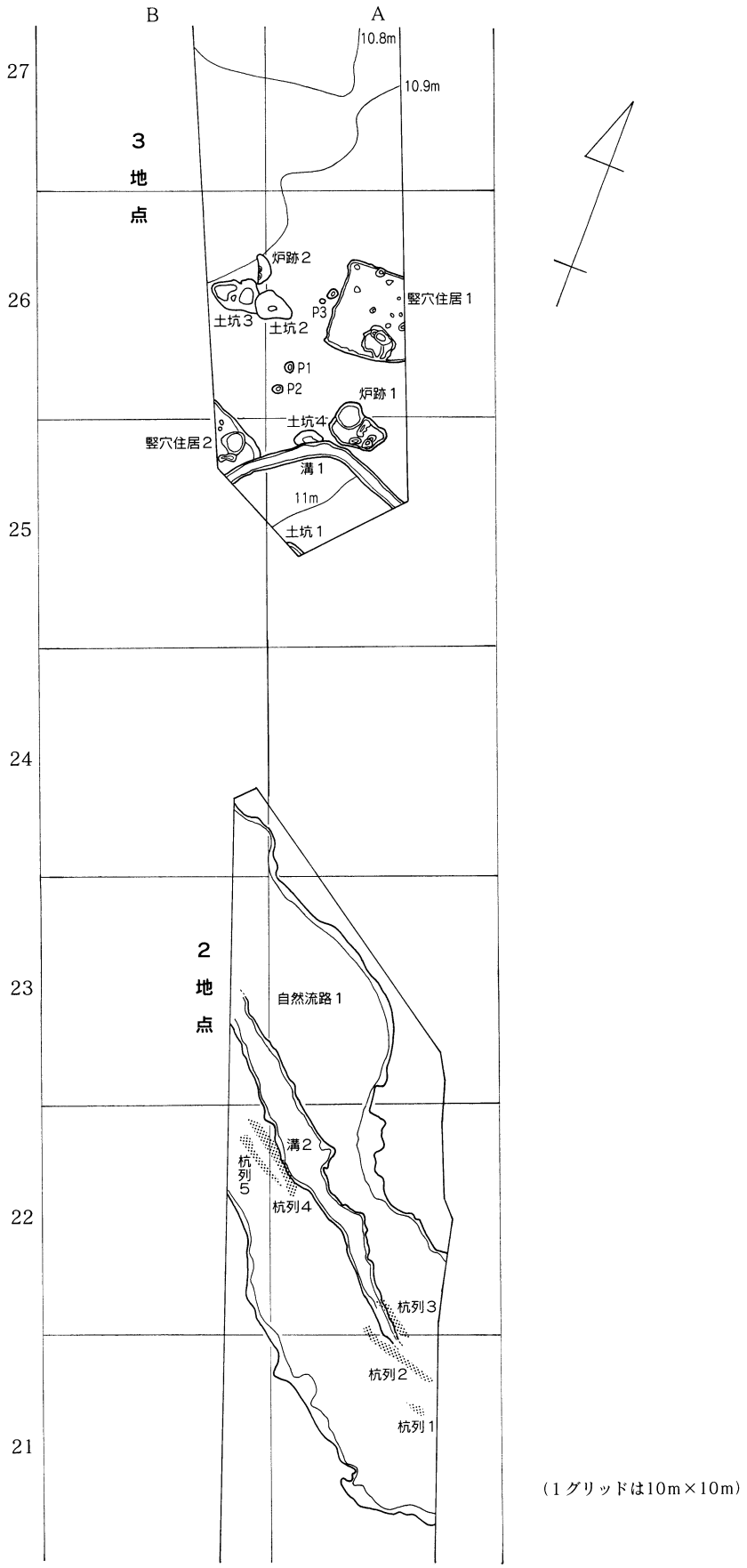
遺構から出土している土器の一部はこれまで中津野式土器と呼ばれてきた一群に該当し，南九州では弥生時代終末から古墳時代初頭に位置づけられている。甕形土器（以下甕と略す），壺形土器（以下壺と略す）を中心に型式分類を行った。分類の概念については第59・60図に示している。各遺構出土の弥生土器については分類をもとに説明を行う。

（2）石器の説明について

遺構からは弥生時代と縄文時代の石器が混在して出土しているため，遺構ごとにまとめて説明を行う。

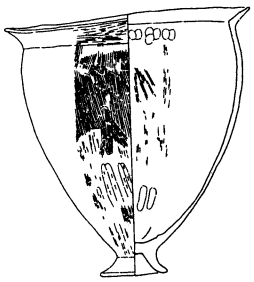
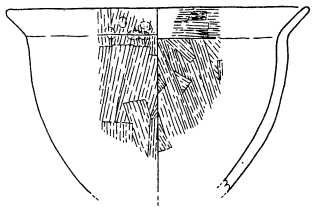
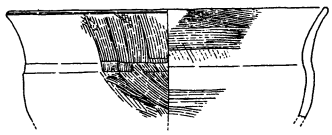
（3）木製品の説明について

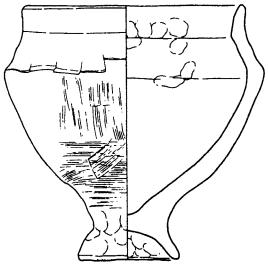
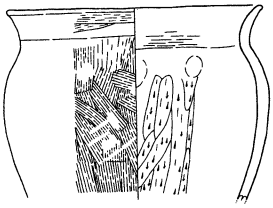
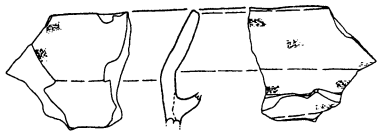
楠元遺跡では，総数331点の木製品が出土した。その多くは，杭や製材片の一部である。杭には芯持材を利用した丸杭と，割材を利用した割杭・角杭の２種類がある。後者の多くは伐採した原木を木口面で放射方向に分割して原材を得る「みかん割り」と呼ばれる方法によって獲得された断面三角形の割杭で，中には建築材を再利用したものもある。木製品の分類及び細部については，奈良国立文化財研究所『木器集成図録－近畿原始篇－』1993に従い，個々の木製品の計測値については観察表に掲載した。木製品の加工痕については，宮原晋一「石斧，鉄斧のどちらで加工したか－弥生時代の木製品について－」『弥生文化の研究10　研究の歩み』1988を参考に分類した。具体的には，鉄器の加工によるＡ種刃先痕（写真１）と石器の加工によるＢ種刃先痕の可能性がある工具痕（写真２）の確認を行った。その他に加工幅，刃こぼれ痕，加工痕の湾曲を観察し記載した。鍬や容器などは摩耗や腐食のために

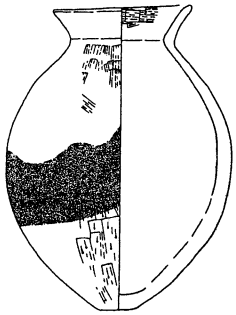
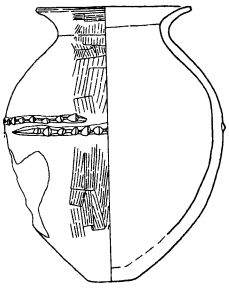
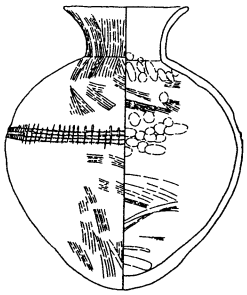


（1グリッドは10m×10m）

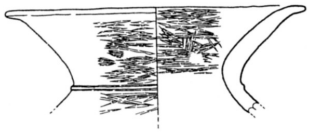
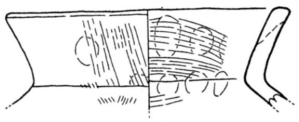
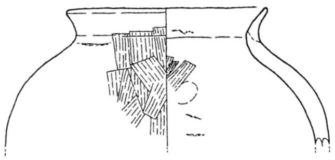
第58図　弥生時代終末～古墳時代初頭遺構配置図

甕　Ia　類	甕　Ib　類	甕　Ic　類
		
口縁：断面三角形を呈し，「く」字状に外反する。屈曲が強いために内面に稜が付く。 胴部：あまり張らず，底部に向かってすぼまる。 底部：小さめで，脚高が低い。	口縁：「く」字状に外反する。Ia類に比べ屈曲が弱い。 胴部：張らずに底部に向かってすぼまる。 調整：内外面丁寧なハケ目調整が施される。	口縁：Ia・b類に比べ傾きが弱く直立する。 胴部：張らずに底部に向かってすぼまる。 底部：口縁部に縦方向のハケ目が施され，胴部との境に段を持つ。

甕　II　類	甕　III　類	甕　IV　類
		
口縁：直立気味である。 胴部：上胴部で屈曲し，底部に向かってすぼまる。上胴部には稜が付く。	口縁：緩やかに外反する。 胴部：最大径は上胴部にあり，丸みを帯びる。口径よりも胴径が大きい。 調整：外面は丁寧なハケ目，内面はケズリ調整である。	大甕 口縁：直線的に外傾し，上胴部に上方に湾曲する断面三角形の突帯が付く。 調整：丁寧なナデ調整が施される。

壺　Ia　類	壺　Ib　類	壺　II　類
		
口縁：「く」字状に外反する。 胴部：やや張り気味で倒卵形を呈す。 底部：平底。	口縁：「く」字状に外反する。口唇部は平坦である。 胴部：最大径は上胴部付近にあり，断面三角形の刻目突帯が廻る。 底部：平底。 調整：ハケ目調整が施される。	口縁：頸部から直線的に立ち上がり，上方で大きく開く。 胴部：最大径が胴部中央にあり，球形に近い。 底部：丸底。 調整：ハケ目調整が施される。

第59図　弥生土器分類模式図1

壺　Ⅲ　類	壺　Ⅳa　類	壺　Ⅳb　類
		
口縁：「く」字状に大きく外傾し，端部は横に開く。 胴部：削りだしの多重突帯がつく。 調整：緻密なミガキ調整が施される。 その他：黒色で焼成は堅緻である。	口縁：短く直線的に外傾する。 調整：ハケ目後ナデ調整である。	口縁：短く外反し，先細りする。 胴部：張りが強く，丸みを帯びる。 調整：ハケ目が施される。 その他：焼成は堅緻である。

壺　Ⅴ　類
免田式（長頸壺） ヘラによる浅い下向きの重弧文が施される。

第60図　弥生土器分類模式図２

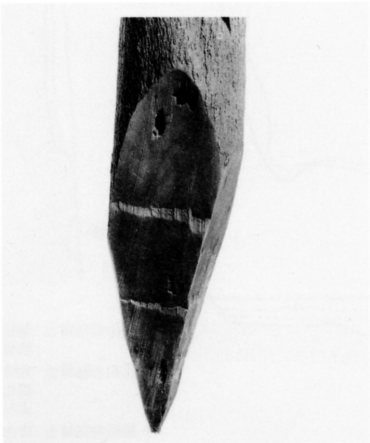


写真１　Ａ種刃先痕と凸状刃こぼれ痕

写真２　Ｂ種刃先痕の可能性がある加工痕

土層

① 暗灰色粘質土　粘性が強く1～3mm大の炭化物を多く含む。

② 灰褐色粘質土　粘性が強く1～3mm大の炭化物を多く含む。①層よりも色調が明るい。

③ 黒褐色粘質土　炭化物を大量に含む。土坑の埋土。

④ 暗褐色粘質土　3mm大の炭化物を少量含む。ピットの埋土。

第61図　1号竪穴住居跡

加工の種類を特定することはできず，加工痕が比較的よく残っている杭の先端部を対象とする結果となった。

（4）１号竪穴住居跡（第61図）

Ａ－26区で検出された。住居の東側が未調査なので全長を知ることはできないが，検出された大きさは南北4m，東西2.8mで竪穴の長さから推測すれば１辺が４ｍ程の方形住居になると考えられる。削平のために検出時の深さは６～10cm程で，特に北壁は残りが悪く壁の立ち上がりが明確でなかった。住居の床面に硬化面は形成されていない。南側の壁際に平面形が1.26×1.5m，深さ５～12cmの浅い土坑が検出された。土坑の平面形は不定形であり，床面の深さも一様でないことから複数の土坑が切り合っていると考えられる（第62図下）。土坑は埋土に多量の炭化物を含んでおり地床炉と思われる。住居に伴う柱穴は19基検出された。その多くは住居内の北側で検出され，規則的な配置ではない。Ｐ１，Ｐ２，Ｐ６，Ｐ10，Ｐ13は他の柱穴に比べ深いことから主柱穴の可能性が考えられる。柱穴の底面に硬化面は形成されていない。住居跡からは弥生時代終末の土器462点，石器19点が出土した。遺物は，埋土全体からまんべんなく出土しており床面直上からの出土はみられなかった（第62図上）。弥生土器は細片が多く接合資料は少ない。

第６表　１号竪穴住居跡柱穴計測表

遺構名	幅（cm）	深さ（cm）	調査時の遺構番号	備　考	遺構名	幅（cm）	深さ（cm）	調査時の遺構番号	備　考
Ｐ１	47 × 38	18	Ｐ１	２段掘り主柱穴	P11	20 × 14	4	Ｐ７	
Ｐ２	19 × 15	17	Ｐ２	主柱穴	P12	18 × 10	5	Ｐ２	
Ｐ３	21 × 20	5	Ｐ３		P13	25 × 21	26	Ｐ８	
Ｐ４	30 × 26	9	Ｐ５		P14	24 × 16	9	P13	
Ｐ５	20 × 18	11	Ｐ４	２段掘り	P15	24 × 11	11	P16	
Ｐ６	38 × 37	23	P12	主柱穴	P16	23 × 26	7	P15	
Ｐ７	25 × 22	6	P11		P17	19 × 11	5	ナシ	
Ｐ８	16 × 15	8	P10		P18	20 × 13	9	P14	
Ｐ９	19 × 18	12	Ｐ９		P19	45 × 44	8	P17	
P10	26 × 18	32	Ｐ６	主柱穴					

出土遺物

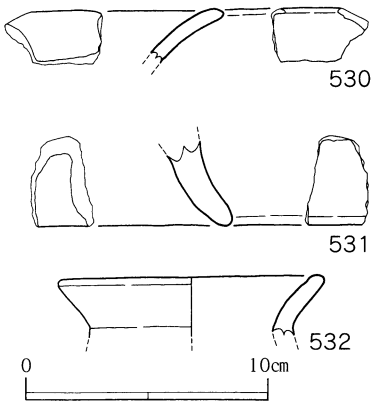
弥生土器３点，石器８点を図化した。

甕（第62図 530・531）

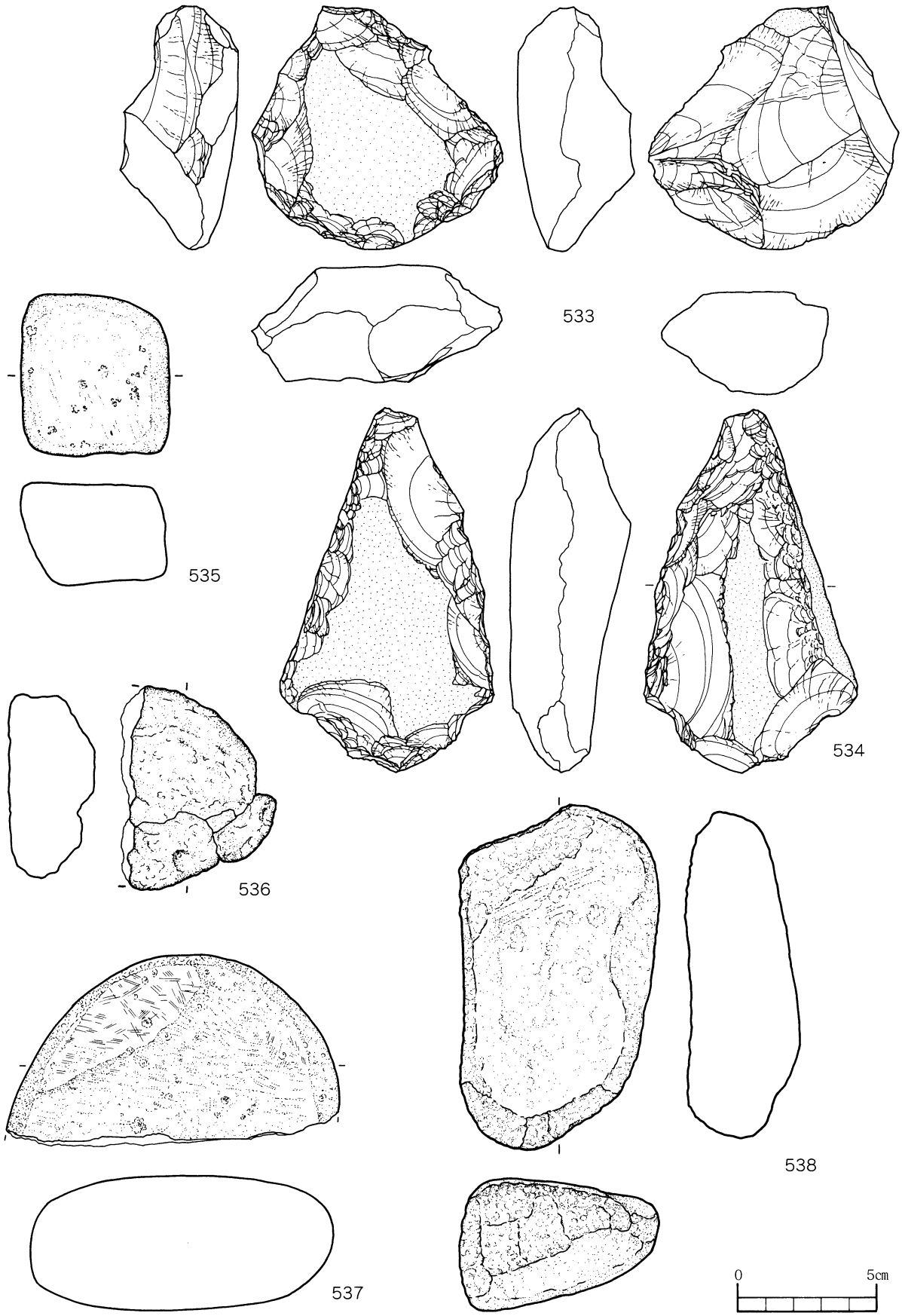
530は口縁部が外反し，口唇部はナデ調整により先細りしている。531は甕の底部である。調整は摩滅のため不明。色調は橙色を呈す。

壺（第62図 532）

口縁部は短く，端部は丸くおさまる。器面調整は横ナデである。



第62図　１号竪穴住居跡出土土器



第63図　1号竪穴住居跡出土石器（1）

礫器（第63図 533・534）

533は全方向から打撃を加えて剥離している。534は自然礫を二等辺三角形状に加工することを目的に大振りの剥離を加え，さらに細かく調整した様な痕跡が窺える。その上で，下面から打撃が加えられているので，磨製石斧の再利用か，磨製石斧を目的とした石材の再利用と考えられる。

磨石（第63図 535～537）

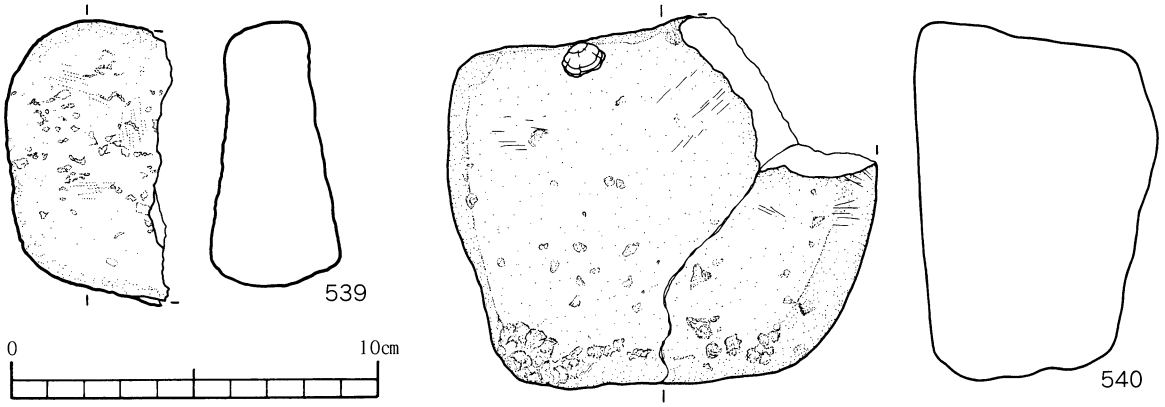
535は直方体状の安山岩小礫の1面を利用し，平坦面になっている。掌に収まる礫である。536は風化が著しいが，1面が平坦になるまで使い込まれている。537は両面が磨石として利用され，側面は敲石の機能を備えている。磨り面は特に側面との境あたりが磨滅が著しく，ここに一番力が加わったことが窺える。

敲石（第63図 538）

安山岩礫の端部を使用している。

石皿（第64図 539・540）

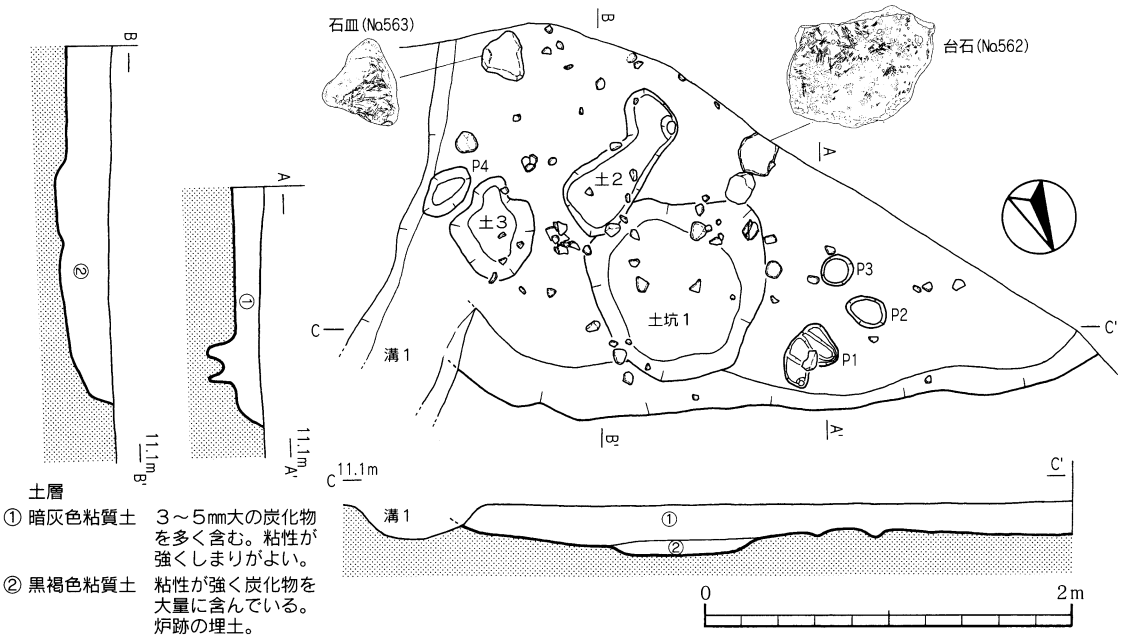
539は小型の安山岩礫の一部に磨滅した部分が見られる。540は平坦面をもつ安山岩礫の1面 が使用されている。



第64図　1号竪穴住居跡出土石器（2）

（5）2号竪穴住居跡（第65図）

B－25・26区の壁際で検出された。西側が調査区外に延び，南側を溝状遺構1に切られているために全長は不明であるが，1辺が3m程の方形住居であると推測される。検出された住居跡の大きさは南北3.45m，東西2m，検出面からの深さは24cmで比較的残りがよかった。床面に硬化面は形成されていない。住居内に3基の土坑と4基の柱穴が検出された。壁面に接して掘り込まれた土坑1は，埋土に多量の炭化物を含んでおり地床炉と考えられる。壁に隣接するという点は1号竪穴住居跡と共通しており，住居の構造を知る上で注目される。土坑2・3は平面形が不定形で浅く，深さは20cm以下である。住居内の埋土を水洗選別した結果，稲の種実が3点検出された。(分析結果は第2章に掲載)。住居内からは弥生時代終末の土器288点，石器24点が出土した。遺物の多くは埋土中からの出土であるが，調査区の壁際で台石と石皿が床面に据えられた状態で出土した。



第65図　2号竪穴住居跡

第7表　2号竪穴住居柱穴計測表

遺構名	幅(cm)	深さ(cm)	調査時の遺構番号	備　考	遺構名	幅(cm)	深さ(cm)	調査時の遺構番号	備　考
P 1	33 × 23	17	ナシ	2段掘り	P 3	18 × 16	7	ナシ	
P 2	23 × 16	8	ナシ		P 4	31 × 20	14	ナシ	

出土遺物

弥生土器13点，石器10点を図化した。

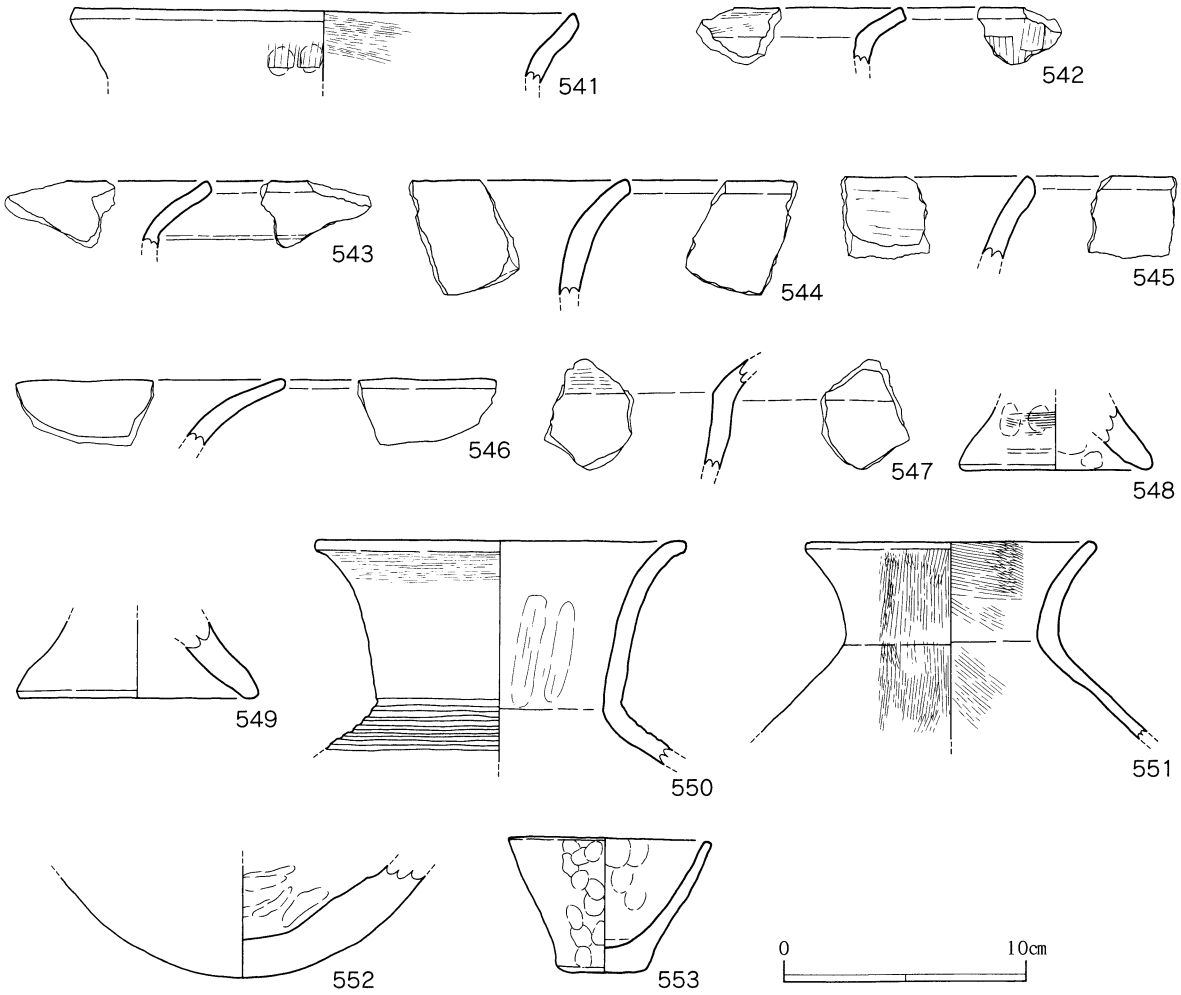
甕（第66図 541～549）

541～544は口縁が緩やかに外反し，端部が平坦になるものである。541は口唇部が先細りし，指で押さえたために口縁部外面がわずかに窪んでいる。542の口縁部は短く，他のものに比べ屈曲が強い。543は頸部を工具によって押さえているために，胴部との境に段をもつ。544は内外面ナデ調整である。545は口唇部に厚みがあり丸みを帯びる。546は外反する口縁部の先端が細くなっている。内外面の調整は摩滅のため不明である。547は口縁部先端が欠損している。屈曲が強く，内面にはあいまいな稜が見られる。

548・549は甕の底部である。548の外面はハケ目後ナデ，内面はナデ調整で，指頭圧痕が残る。549は前者に比べ厚みがあり，内外面横ナデが施される。

壺（第66図 550～552）

550は外傾する長い頸部から口縁部が弱く外反する。上胴部には2～3mm幅の浅いヘラ描き沈線が6条残る。内面は強いナデ調整が施され，指頭圧痕が縦方向に残る。551はⅠ類である。口縁部が薄く，外反が弱い。胴部の内外面に丁寧なハケ目調整が施されている。



第66図　2号竪穴住居跡出土土器

552は底部である。丸底を呈しており，内面は強いナデ調整が施されているために器面に凹凸が残る。外面の調整は摩滅のため不明である。

ミニチュア土器(第66図 553)

口径8.4ｃｍ，器高5.5ｃｍ，底径3.2ｃｍの小型の鉢形土器である。胴部は器壁が薄く直線的に開き，底部は平底で厚みがある。内外面ナデ調整が施され，指頭圧痕が多く残る。

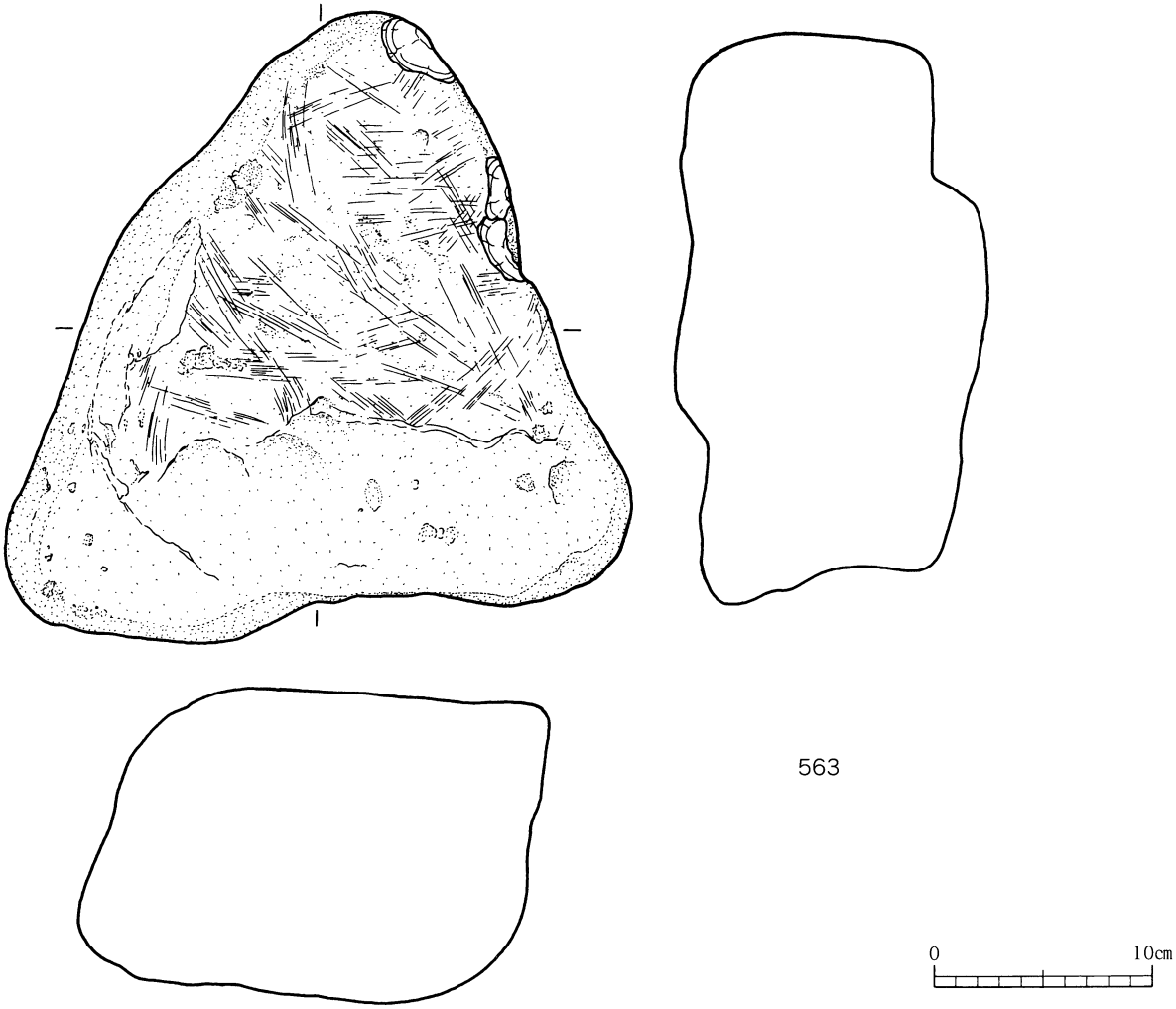
石鏃（第67図 554）

ハリ質安山岩を素材とし，側縁に段をつけて五角形鏃状に仕上げる。基部は浅い抉りをもつ。

砥石（第67図 555）

安山岩の小円礫を利用している。

第67図　2号竪穴住居跡出土石器（1）



第68図　2号竪穴住居跡出土石器（2）

敲石（第67図 556～559）

すべて安山岩礫が使われる。556は小円礫を利用し，一部に敲打痕が認められる。558は棒状になった部分の端部を利用している。溝状遺構1から出土した敲石と使用面が類似し，擂粉木のような使用が考えられる。

第8表　1号竪穴住居跡出土土器観察表　　（　）は復元径

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
62	530	弥生土器	甕	I		内:浅黄色2.5Y7/3 外:灰黄色2.5Y7/2	横ナデ	横ナデ	-	-	-	石英・角閃石を含む	良好	良好
62	531	弥生土器	甕			内:橙色5YR6/5 外:橙色5YR7/6	不明	不明	-	-	-	石英・小石を含む	良好	良好
62	532	弥生土器	壷			内:黄灰色2.5Y6/1 外:暗灰黄色2.5Y5/2	横ナデ	横ナデ	(10.9)	-	-	石英・角閃石を含む	良好	良好

石皿（第67・68図 560・561・563）

いずれも安山岩製である。563は台状の石を利用している.

台石（第67図 562）

扁平な安山岩を利用している。一面は平に磨り減っており，石皿としての機能も考えられる。

第９表　２号竪穴住居跡出土土器観察表　　（　）は復元径

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土	焼成	備考
66	541	弥生土器	甕			内:にぶい黄橙色7.5YR6/4 外:にぶい橙色7.5YR5/4	横ナデ ハケ目	横ナデ	(20・6)	-	-	石英・白い小石を含む	良好	
66	542	弥生土器	甕	床直		内:にぶい黄橙色10YR7/2 外:にぶい橙色7.5YR6/4	ナデ ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英・角閃石・長石を含む。白い小石を所々に含む。	良好	
66	543	弥生土器	甕	床直		内:にぶい黄橙色10YR7/2 外:にぶい黄色2.5Y6/3	横ナデ	横ナデ	-	-	-	石英・角閃石を多く含む。	良好	
66	544	弥生土器	甕			内:灰黄褐色10YR6/2 外:灰黄色2.5Y6/2	横ナデ	横ナデ	-	-	-	石英・角閃石を所々に含む。白い小石を多く含む。	良好	
66	545	弥生土器	甕			内:灰黄褐色10YR5/2 外:灰褐色7.5YR5/2	ナデ	ナデ	-	-	-	石英を含む	良好	
66	546	弥生土器	甕	床直		内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:浅黄橙色10YR8/3	磨滅	磨滅	-	-	-	石英を含む	良好	
66	547	弥生土器	甕			内:浅黄色2.5Y7/3 外:にぶい黄橙色10YR7/3	ナデ・磨滅・ハケ目	ナデ、磨滅	-	-	-	石英・角閃石を所々に含む。	良好	
66	548	弥生土器	甕	床直		内:にぶい黄橙色10YR7/4 外:橙色7.5YR7/6	ハケ目、ナデ	ナデ	-	(7.4)	-	石英を含む	良好	
66	549	弥生土器	甕			内:灰黄褐色10YR6/2 外:にぶい黄橙色10YR7/14	ナデ	ナデ	-	(9.0)	-	石英, 角閃石を所々に含む	良好	
66	550	弥生土器	壷			内:灰白色10YR7/4 外:にぶい橙色7.5YR7/4	ナデ	ハケ目・ナデ	11.4	-	-	石英・角閃石を所々に含む	良好	
66	551	弥生土器	壷			内:にぶい黄橙色10YR7/4 外:にぶい黄橙色10YR6/4	ハケ目・磨滅	ハケ目・磨滅	14.8	-	-	角閃石・長石を所々に含む	良好	
66	552	弥生土器	壷			内:浅黄橙色7.5YR8/4 外:浅黄橙色10YR8/3	磨滅	ナデ	-	-	-	石英を含む	良好	
66	553	弥生土器	ミニチュア土器			内:浅黄橙色7.5YR8/4 外:橙色7.5YR7/5	ナデ	ナデ	8.4	3.2	5.5	石英・角閃石を含む	良好	

第10表　１号竪穴住居跡出土石器観察表

図番号	番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	備考
63	533	A26 1号竪穴住居跡	-	123	礫器	8.80	10.00	4.40	350.00	凝灰岩	
63	534	A26 1号竪穴住居跡	-	-	礫器	13.00	7.80	4.40	388.00	頁岩	
63	535	1号竪穴住居跡	I	-	磨石	5.90	5.35	3.90	2.07	安山岩	
63	536	1号竪穴住居跡	-	70	磨石	5.30	7.40	3.40	160.00		
63	537	A26 1号竪穴住居跡	-	-	磨石	6.80	11.90	4.80	579.00	安山岩	
63	538	1号竪穴住居跡	-	18	敲石	11.90	7.20	4.70	524.00	安山岩	
64	539	A26 1号竪穴住居跡	-	157	小型石皿A	4.50	7.70	4.10	173.00	安山岩	
64	540	1号竪穴住居跡	I	-	石皿B	11.68	10.10	6.60	1.20	安山岩	

第11表　２号竪穴住居跡出土石器観察表

図番号	番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	備考
67	554	B26 2号竪穴住居跡	I	119	石鏃未製品	2.25	1.50	0.35	1.10	安山岩（サヌカイト）	
67	555	B26 2号竪穴住居跡	-	13	砥石	6.40	5.70	3.80	155.00	安山岩	
67	556	B26 2号竪穴住居跡	-	30	敲石	4.50	5.20	2.75	76.00	安山岩	
67	557	2号竪穴住居跡	-	18	敲石	4.70	4.80	3.70	83.00	安山岩	
67	558	B26 2号竪穴住居跡	-	31	敲石	7.80	3.90	3.30	112.00	安山岩	
67	559	B26 2号竪穴住居跡	-	322	敲石	8.70	5.00	4.90	222.00	安山岩	
67	560	B26 2号竪穴住居跡	-	7	石皿B	10.30	9.00	4.50	579.00	安山岩	
67	561	B26 2号竪穴住居跡	-	304	石皿B	18.00	13.82	6.83	2200.00	安山岩	
67	562	B26 2号竪穴住居跡	-	305	台石	32.00	22.50	6.80	5300.00	安山岩	
68	563	B26 2号竪穴住居跡	-	-	石皿B	28.70	28.60	14.40	15.20	安山岩	

（6）炉跡１（第69図）

平面形が不定形で，埋土に炭化物の層が形成されている土坑を炉跡とした。当初，削平のために竪穴住居内の地床炉のみが残った可能性を考えた。しかし，竪穴住居内に検出されている地床炉に比べ規模が大きいことや，地床炉にはみられない厚さ２ｃｍ程の炭化物の層が形成されていることから，地床炉よりも火の使用頻度が高く，用途が違うことが想定され炉跡とした。遺構の性格としては、調理場などが想定される。

Ａ－25・26区で検出された炉跡は，大きさが南北1.6ｍ，東西2.38ｍで平面形は不定形である。炉跡内の西側で検出された直径1.68ｍ程の円形を呈する土坑４は炉跡に切られていることから，炉跡以前に掘られたものである。炉跡内には，炭化物の層が3か所形成され，地点と層を変えて火を使用している。(第69図上)。最も古いものは土層断面図①の炭化層で床面直上に形成され，その直下には焼土が確認された。炉跡内の東西２か所にみられる土層断面図②③の炭化層は厚さ３～４ｃｍ程でⅡ層上面に形成されている。特に②の炭化層の断面は浅く凹み，その直上に壺２点，甕１点が出土している。その中でもNo578の壺は炭化層の上面から横転した状態で出土した。楠元遺跡出土の壺の中には煤が付着したものがあり，このような壺の用途を知る上で重要な発見となった。平面形が不定形で，床面に浅い土坑があることは火床の移動に伴う作り替えによる結果と思われる。また，炉跡の周辺には６基のピットが検出され，上屋の存在が考えられる（第69図下)。遺物の多くはⅠ層の上部から出土した。炉跡からは弥生終末の土器425点，石器11点が出土した。

出土遺物

弥生土器22点，石器7点を図化した。遺物番号20，31，32の弥生土器は炭化層の直上から出土したものである。

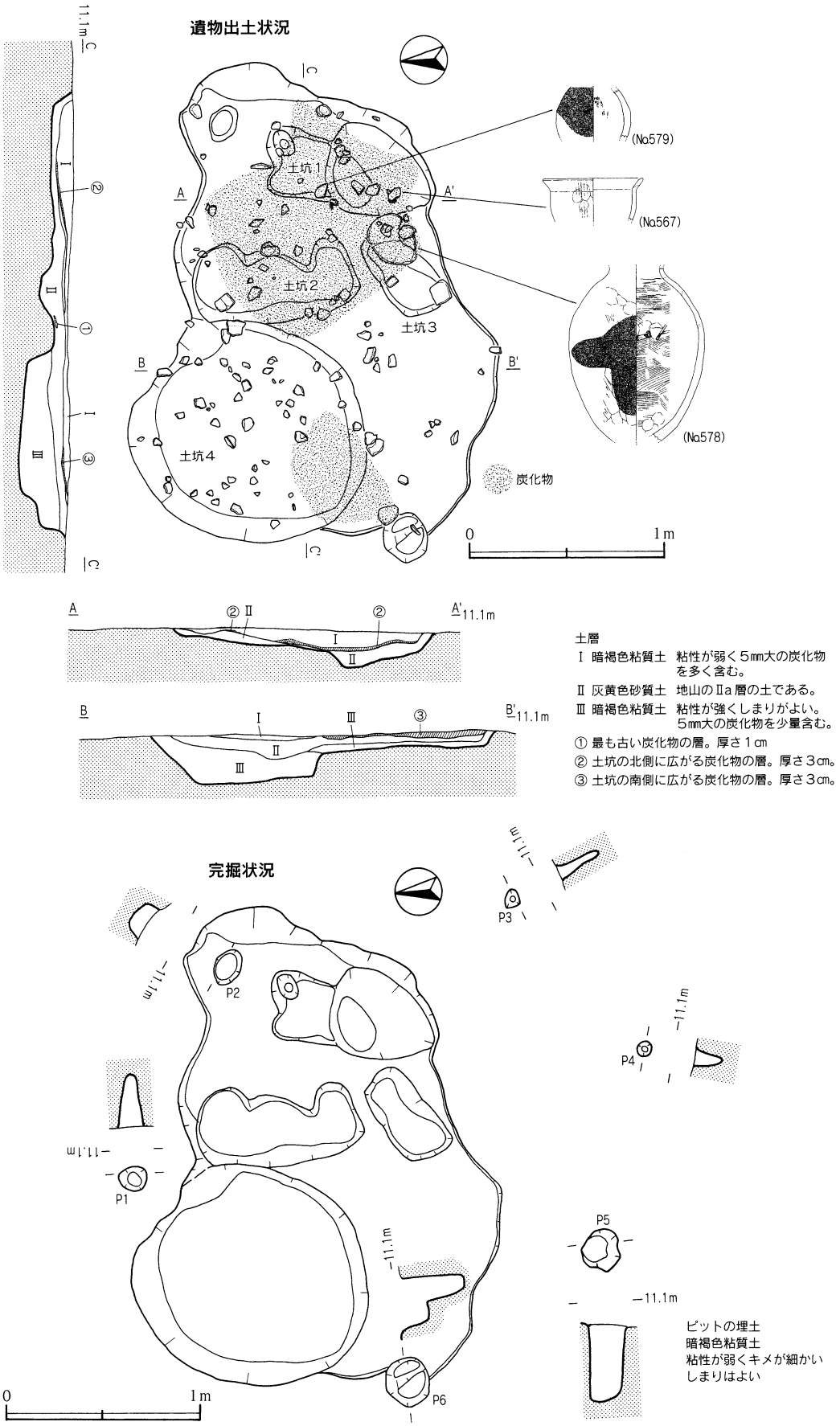
甕（第70図 564～574）

564～567はⅠｂ類に分類され，口縁は弱く外反し，胴部は膨らまずに底部へとすぼまる特徴を持つ。564の口唇部は平坦である。頸部から口縁に向かってハケ目調整が施されている。内面には煤が付着している。565～567の口唇部は丸く，内外面ナデ調整が施され，上胴部には指頭圧痕が並んで残る。568は内面の屈曲部に稜が形成される。569は頸部に工具痕が残るために，わずかに段を持つ。570は内外面ナデ調整である。

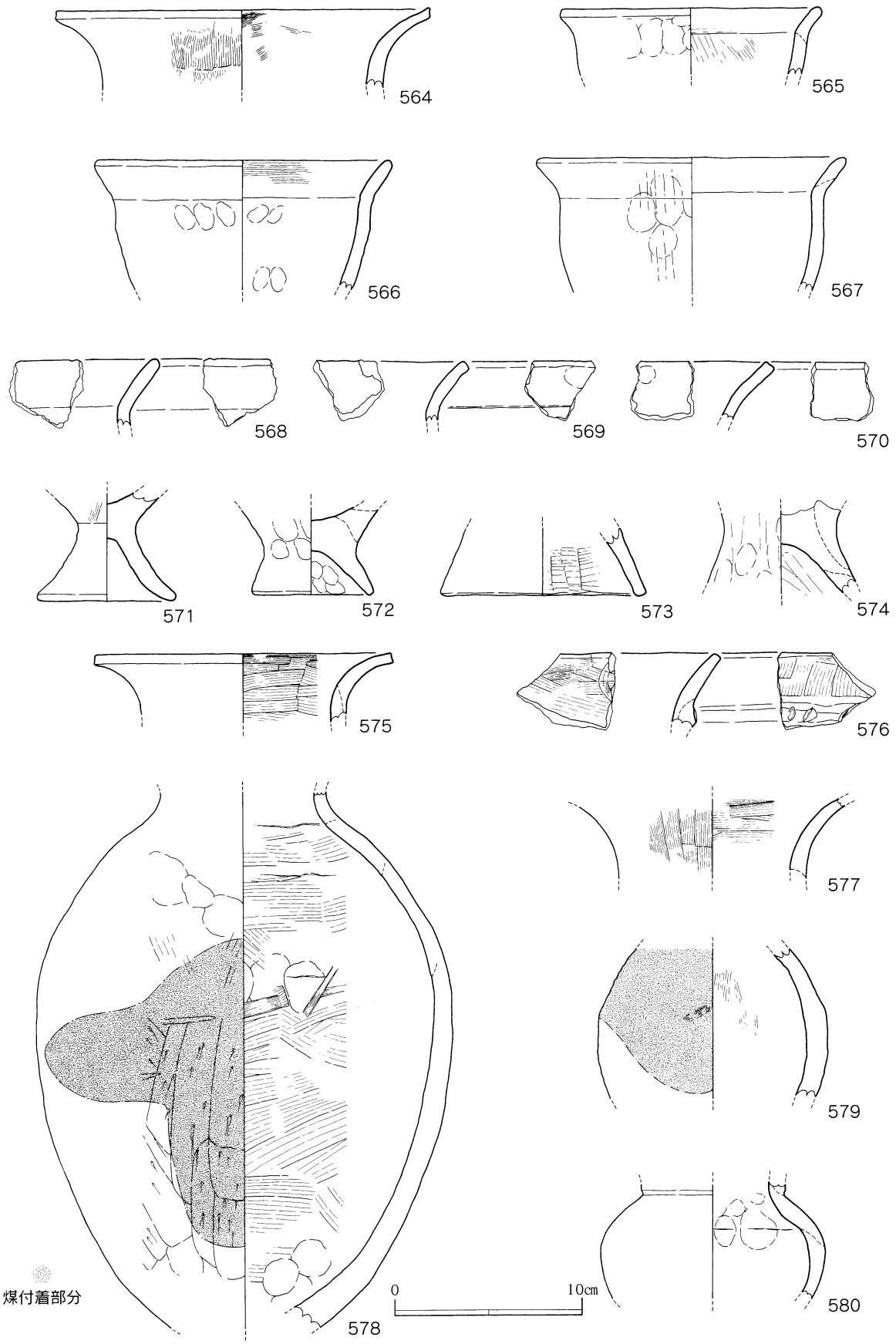
571～574は底部である。571は脚部の広がりが弱く，外面にハケ目がわずかに残る。572は直線的に開き，脚高が低い。内外面ナデ調整が施され，指頭圧痕が多く残る。573は直線的に開き脚端部は面取りされている。器壁は薄く，内面には連続的にハケ目調整が施されている。574は外面に板状工具による調整痕が明瞭に残り，器面に凹凸が見られる。内面には煤が付着している。

壺（第70図 575～580）

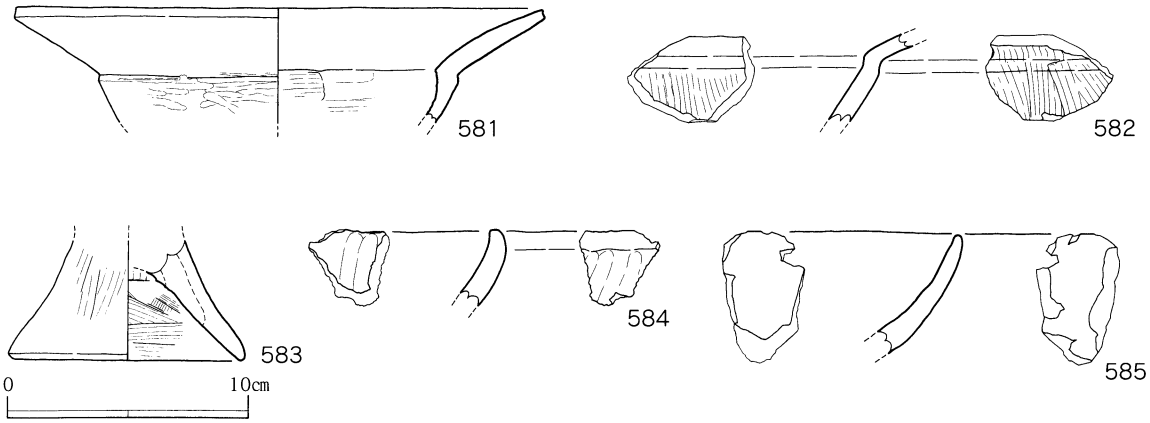
575は外反した口縁の端部がわずかに窪んでいる。内面は丁寧なハケ目調整が施されている。576の頸部には断面形が山形を呈する刻目突帯が施されている。内外面ハケ目後ナデ調整が施されている。577は頸部で内外面細かいハケ目調整が施されている。578は胴部で長


遺物出土状況
11.1m
C
C'
A
A'
B
B'
土坑1
土坑2
土坑3
土坑4
(No579)
(No567)
(No578)
炭化物
0
1m
11.1m
土層
Ⅰ 暗褐色粘質土 粘性が弱く5mm大の炭化物を多く含む。
Ⅱ 灰黄色砂質土 地山のⅡa層の土である。
Ⅲ 暗褐色粘質土 粘性が強くしまりがよい。5mm大の炭化物を少量含む。
① 最も古い炭化物の層。厚さ1cm
② 土坑の北側に広がる炭化物の層。厚さ3cm。
③ 土坑の南側に広がる炭化物の層。厚さ3cm。
完掘状況
P1
P2
P3
P4
P5
P6
ピットの埋土
暗褐色粘質土
粘性が弱くキメが細かい
しまりはよい

第69図　炉跡1



第70図　炉跡１出土土器（１）



第71図　炉跡１出土土器（２）

胴形をなす。外面は，下胴部から上方にケズリ調整が施され，内面はハケ目後ナデ調整が施されている。二次焼成を受けており，外面に煤が付着していることから煮炊き具として使用されていたと考えられる。579は外面全体が二次焼成のために剥落し，煤が付着している。わずかにハケ目が残るが器面が荒れているために不鮮明である。580は小型の壺と思われる。胴部は球形をなし，頸部との境に浅いヘラ描き沈線が施される。外面は丁寧なナデ調整が施され，内面は指頭圧痕が残る。

高坏（第71図 581～583）

581は直線的な口縁が外方に開き、口唇部は平坦で中央がわずかに窪む。外面は体部との境が屈曲し工具痕が多く残るために，低い段を持つ。内面は口縁部と体部の境に強い稜が見られる。口縁部は丁寧なナデ，胴部はハケ目後ナデ調整が施されている。582は内外面には丁寧なハケ目調整が施されている。583の脚部は裾広がりが弱い。内面はハケ目調整で，外面は磨滅が著しく，ハケ目がわずかに残る。

鉢（第71図 584・585）

584は口縁端部が内湾し，口唇部が先細りする。内外面に指頭圧痕が明瞭に残る。585の胴部は丸みを帯びて立ち上がる。丁寧なつくりで精製された胎土を使用し，焼成は硬質である。内外面の調整は磨滅のため不明である。

石鏃未製品（第72図 586）

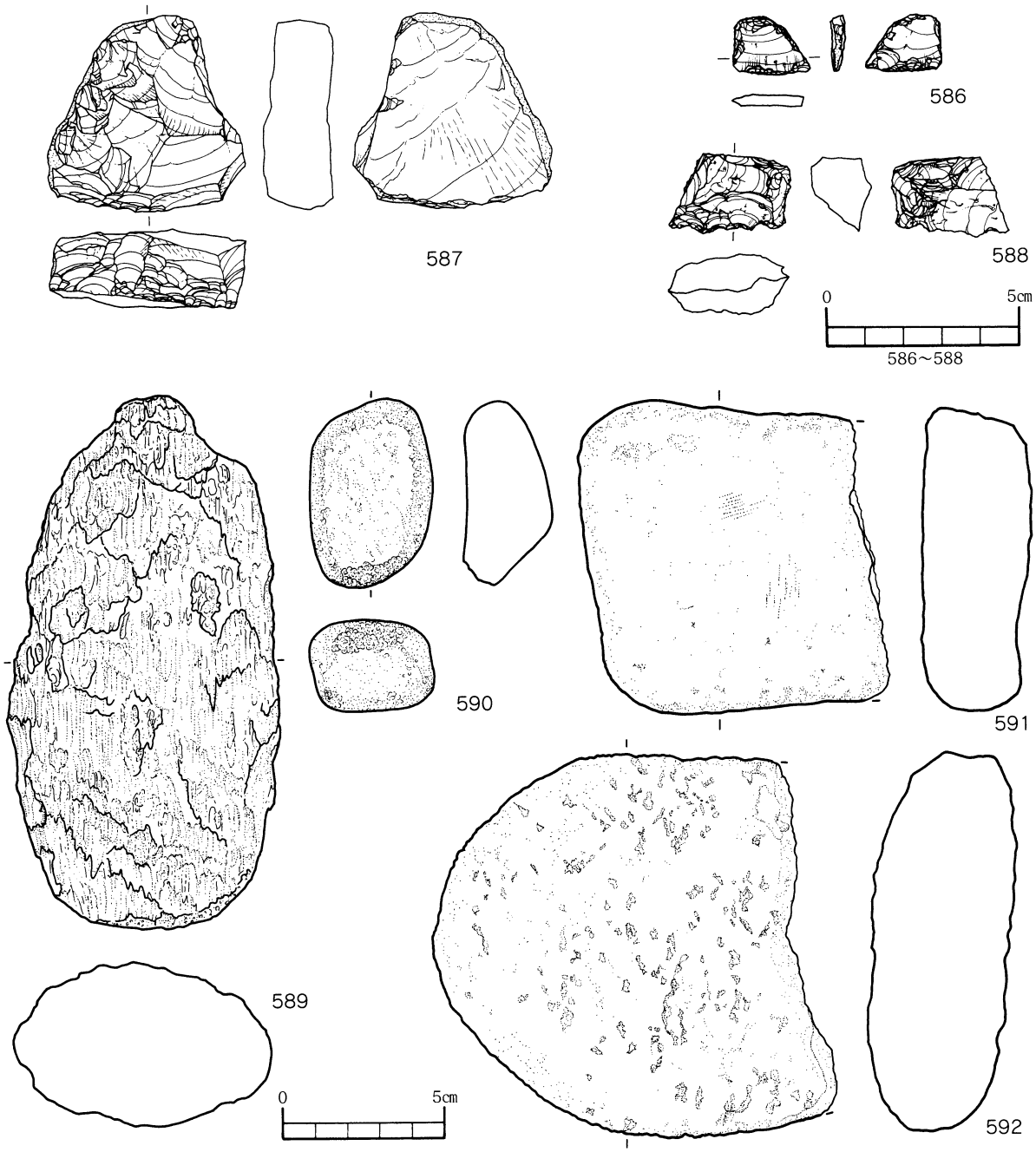
黒曜石剥片の縁辺に押圧剥離を加え，1辺を仕上げた後，全体の形を加工するところで放棄している。

スクレイパー（第72図 587・588）

587は玉髄を素材とし，一方向から打撃を加えて掻器状に仕上げている。588は肉厚の黒曜石製剥片の一方向から大振りの剥離を加えている。

軽石製品（第72図 589）

表面の風化が著しく，加工痕は明確ではないが，シンメトリーな形をしている。用途は不



第72図　炉跡１出土石器

明である。

敲石（第72図 590）

安山岩小礫の一端に潰れが観察される。

石皿（第72図 591・592）

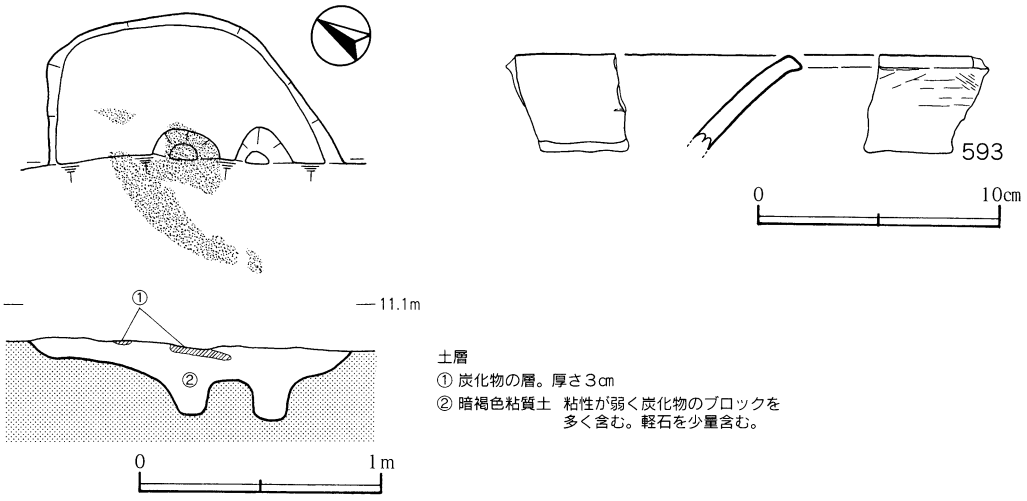
591は安山岩礫の平坦な面を利用している。特に中央付近の器面が細かく磨滅し，使用頻度が高かったことが窺える。しかし，窪むことはなく凸レンズ状になっている。

（7）炉跡２（第73図）

Ｂ－26区で検出され，西側は確認トレンチにより削平されているために平面形が半円形を呈している。炉跡の大きさは南北1.3m，東西0.6m，深さ14cmで，床面に２基のピットが並んで検出された。厚さ３ｃｍ程の炭化物の層は，埋土の上面で検出され，炉跡の中央部に不定形に広がっている。炉跡の周辺からピットは検出されなかった。埋土中から弥生終末の土器１点が出土した。

出土遺物

593は甕の口縁部である。緩やかに外反し，端部は平坦を呈する。口唇部は２ｍｍ程突出する。内外面ハケ目後ナデ調整である。



第73図　炉跡２及び出土遺物

第12表　炉跡１出土土器観察表　　（　）は復元径

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土	焼成	備考
70	564	弥生土器	甕	Ⅲ		内:浅黄色2.5Y7/4 外:にぶい黄橙色10YR7/3	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	(19.8)	－	－	石英、角閃石を微量に含む	良好	
70	565	弥生土器	甕	Ⅰ		内:黄褐2色.5Y5/3 外:浅黄色2.5Y7/4	磨滅	ナデ・ハケ目	(13.5)	－	－	石英を多く含む	良好	
70	566	弥生土器	甕			内:にぶい橙色7.5YR6/4 外:にぶい橙色7.5YR5/4	磨滅	ハケ目	(15.7)	－	－	石英、角閃石を所々に含む	良好	
70	567	弥生土器	甕			内:にぶい橙色10YR8/4 外:橙色7.5YR7/6	磨滅	磨滅	(16.3)	－	－	石英、角閃石を含む	良好	
70	568	弥生土器	甕	Ⅰ		内:にぶい黄橙色10Y7/3 外:にぶい黄橙色10YR6/4	ナデ	ナデ	－	－	－	石英、白い小石を所々に含む	良好	

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
70	569	弥生土器	甕	I		内:にぶい橙色7.5YR7/4 外:浅黄橙色7.5YR8/4	ナデ	ナデ	-	-	-	石英を所々に含む	良好	
70	570	弥生土器	甕	I		内:灰白色7.5YR8/2 外:にぶい黄橙色10YR7/4	ナデ	ナデ	-	-	-	石英、角閃石を含む	良好	
70	571	弥生土器	甕			内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:浅黄色2.5Y7/3	ハケ目・ナデ	ナデ	-	(6.9)	-	石英を微量に含む	良好	
70	572	弥生土器	甕	I		内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:浅黄色2.5Y7/2	ナデ	ナデ	-	(6.0)	-	石英を所々に含む	良好	
70	573	弥生土器	甕	I		内:にぶい黄橙色10YR6/4 外:浅黄橙色10YR8/3	磨滅	ハケ目	-	(10.2)	-	石英を所々に含む	良好	
70	574	弥生土器	甕	I		内:灰白色2.5Y6/2 外:にぶい黄橙色10YR6/4	板ナデ	ナデ	-	-	-	石英、角閃石を所々に含む	良好	煤付着
70	575	弥生土器	壺	I		内:橙色7.5YR7/4 外:にぶい橙色7.5YR6/4	口縁:磨滅 胴:ナデ	ハケ目	(15.9)	-	-	石英を多く含む	良好	
70	576	弥生土器	壺	I		内:浅黄色2.5Y7/3 外:にぶい黄橙色10YR6/4	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	-	-	-	石英を所々に含む	良好	
70	577	弥生土器	壷			内:黄橙色10YR8/6 外:にぶい黄褐色10YR5/4	ナデ・磨滅・削り・ハケ目	ハケ目・ナデ	-	-	-	石英を所々に含む	良好	煤付着
70	578	弥生土器	壷			内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:灰白色10YR7/1	ハケ目・削り	ハケ目・ナデ	-	-	-	石英を所々に含む	良好	
70	579	弥生土器	壷	Ⅲ		内:浅黄色2.5Y7/3 外:にぶい黄色2.5Y6/3	ハケ目	磨滅	-	-	-	石英、角閃石、金雲母を含む	良好	煤付着
70	580	弥生土器	壷	I		内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:浅黄色2.5Y7/3	ナデ	ナデ	-	-	-	石英、角閃石を所々に含む	良好	
71	581	弥生土器	高杯	I		内:にぶい黄橙色10YR7/2 外:にぶい黄橙色10YR6/4	ナデ	ナデ	(21.8)	-	-	石英、角閃石を微量に含む。赤色の小石を含む	良好	
71	582	弥生土器	高杯	I		内:浅黄色2.5Y8/3 外:にぶい黄橙色10YR7/2	ハケ目	ハケ目	-	-	-	石英を所々に含む	良好	
71	583	弥生土器	高杯	I		内:にぶい黄橙色10YR6/3 外:浅黄橙色10YR8/3	摩滅	ハケ目	-	(9.3)	-	石英、角閃石を所々に含む	良好	
71	584	弥生土器	鉢	I		内:にぶい黄褐色10YR5/3 外:にぶい黄橙色10YR7/3	ナデ	ナデ	-	-	-	石英、角閃石を所々に含む	良好	
71	585	弥生土器	鉢			内:にぶい黄褐色10YR5/3 外:明黄褐色10YR7/6	磨滅	磨滅	-	-	-	精製された胎土	良好	

第13表　炉跡１出土石器観察表

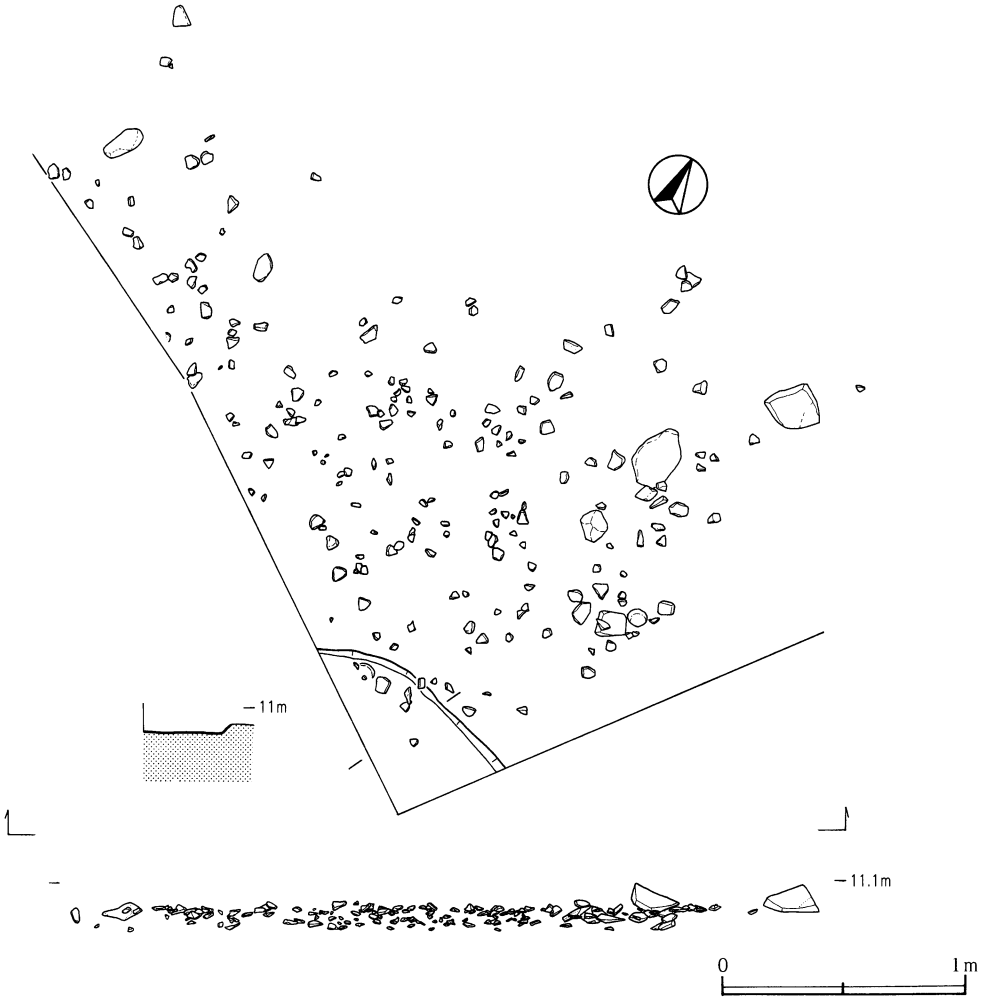
図番号	番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	備考
72	586	炉跡1	I	-	石鏃未製品	5.20	5.20	2.10	60.00	黒曜石（上牛鼻）	
72	587	A25 炉跡1	I	-	スクレイパー	1.40	2.00	0.40	63.40	玉髄	
72	588	炉跡1	I	248	スクレイパー	2.10	3.10	1.55	8.00	黒曜石（上牛鼻）	
72	589	A25 炉跡1	-	-	軽石製品	16.75	8.60	5.15	193.00	軽石	
72	590	炉跡1	-	-	敲石	5.80	3.90	2.90	88.00	安山岩	
72	591	A25 炉跡1	-	83	石皿B	8.90	9.60	3.50	548.00	安山岩	
72	592	炉跡1	-	342	石皿B	11.10	12.00	4.60	704.00	安山岩	

第14表　炉跡２出土土器観察表　　（　）は復元径

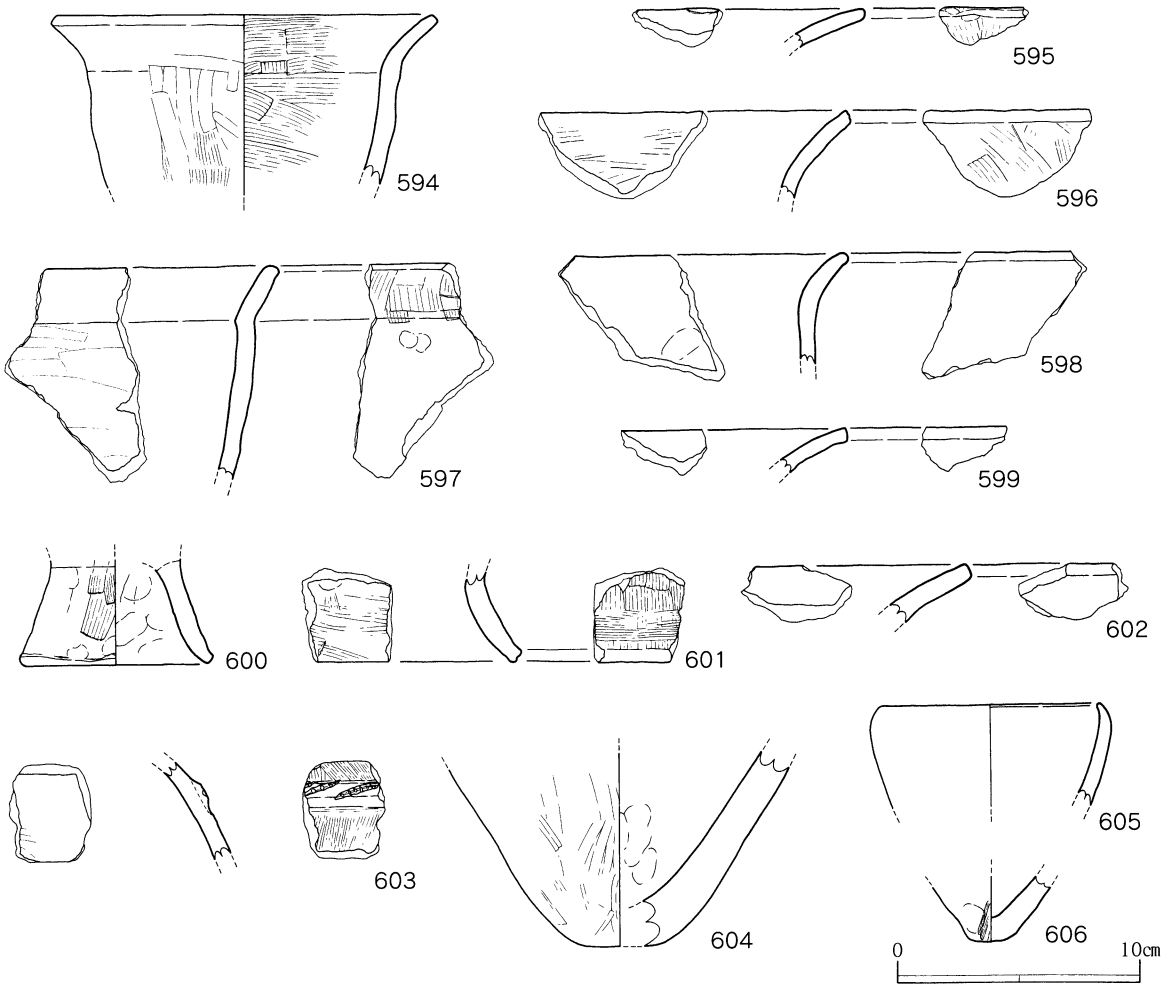
挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整 文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
73	593	弥生土器	甕			外:にぶい黄橙10YR7/3 内:灰白 2.5Y7/1	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ				1mm大の白い小石を多く含む	良好	

（8）土坑１（第74図）

Ａ－25区の壁際で検出された。II層上面近くで南北2.5m，東西３ｍの範囲に多くの遺物が集中して出土したため，遺物の見透し図を作成しながら遺構検出を繰り返し行った。結果的に，検出することができたのは，調査区南隅の浅い土坑であった。しかし土坑周辺の遺物集中区からは大型の石皿や磨石が出土し，さらに遺物の垂直分布図から幅３ｍ以上，深さ20ｃｍの遺構の掘り込みが推定さることから，これらの遺物は検出することができなかった竪穴住居跡に伴う可能性がある。検出された土坑の大きさは，南北0.76m，東西0.46m，深さ３ｃｍである。部分的な検出であったので，先述した竪穴住居跡に伴うものなのか単独で存在するものなのか明らかにすることができなかった。以上のことから遺物の説明については，土坑内のものと遺物集中区出土のものをまとめて行う。遺物集中区からは，弥生土器145点，石器５点が出土した。



第74図　土坑１遺物出土状況



第75図　土坑１出土土器

出土遺物

弥生土器18点，石器4点を図化した。

甕（第75図 594～600）

594はＩｂ類に該当する。口縁は緩やかに外反し，胴部は膨らみをもたず底部へと至る。内面はハケ目，外面はナデ調整が施されている。595の外面調整はナデ調整で、わずかにハケ目が残る。596は口縁部が緩やかに外反し口唇部は平坦である。内外面ハケ目後ナデ調整が施されている。597は口縁部が直線的で，頸部から口縁にかけてハケ目が施されているために，胴部との境に工具痕が残り低い段をもつ。内面はハケ目後ナデ調整が施され，口縁部と胴部の境には稜が形成される。598は口縁が緩やかに外反し，内外面ナデ調整が施されている。599は外面の口縁直下がわずかに窪んでおり，口唇部は平坦である。内外面ナデ調整である。

600・601は，底部である。600は器面が一部剥離している。内外面ナデ調整が施され，外面にハケ目がわずかに残る。601は脚端部が平坦で中央がわずかに窪む。内外面ハケ目調

整が施されている。

壺（第75図 602～604）

602は口縁部片である。口唇部は平坦で内外面ナデ調整が施されている。603は上胴部片で，刻目突帯が施されている。刻み目は斜方にやや長く柾目が残っており木製工具で施されたと考えられる。

604の底部は小さな平底から直線的に外傾して立ち上がっている。外面には工具痕が多く残る。

鉢（第75図 605，606）

605は口縁端部が内湾し，先細りする形態である。内面は横ナデが施されている。外面は器面が荒れている。

606は底部である。丸みを帯びた平底を呈し，内外面ナデ調整が施されている。外面には工具痕が明瞭に残る。

敲石（第76図 607・608）

607は片手で握れるほどの太さと重さの安山岩礫を利用しており，端部に敲打痕が認められる。608は敲石と磨石を兼ね備えている。

石皿（第76図 609）

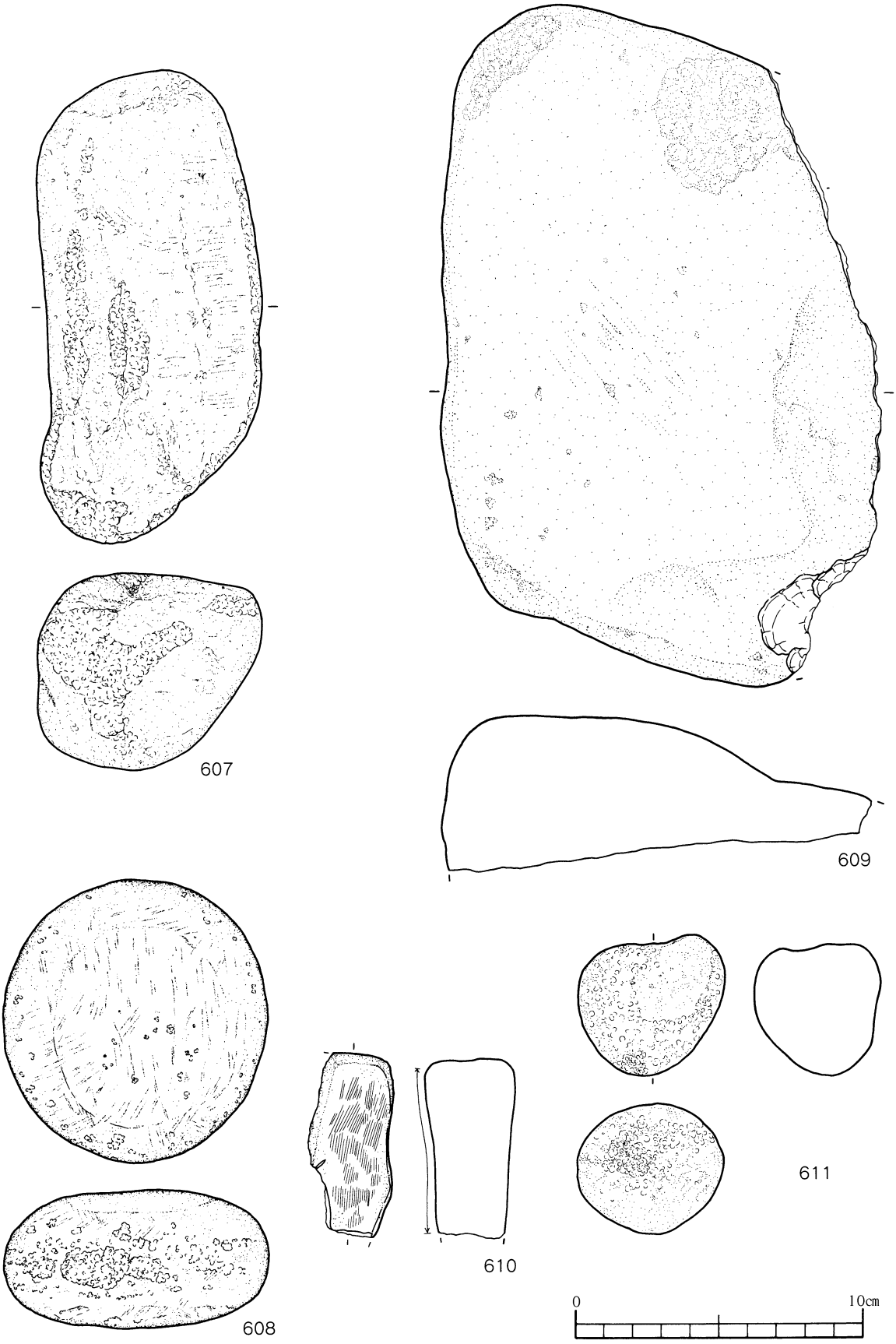
安山岩礫を使用している。

砥石（第76図 610）

角柱状の礫を用いている。全体的に表面が滑らかである。

第15表　土坑１出土土器観察表　　（　）は復元径

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
75	594	弥生土器	甕			内:にぶい橙色7.5YR7/4 外:橙色7.5YR6/5	口縁:横ナデ 胴部:板ナデ、ハケ目	ハケ目	(15.4)	-	-	石英、角閃石を所々に含む	良好	
75	595	弥生土器	甕	I		内:灰白色2.5YR8/2 外:灰白色10YR8/2	ナデ、ハケ目後ナデ	横ナデ	-	-	-	石英を所々に含む	良好	
75	596	弥生土器	甕			内:浅黄橙色10YR7/4 外:にぶい黄橙色10YR7/4	ハケ目後、横ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英、小石を所々に含む	良好	
75	597	弥生土器	甕	I		内:灰黄色2.5Y7/2 外:黄褐色10YR5/4	口縁:板ナデ 胴部:ナデ	口縁:横ナデ 胴部:板ナデ、横ナデ	-	-	-	石英、角閃石を含む	良好	
75	598	弥生土器	甕			内:にぶい黄橙色10YR6/4 外:にぶい黄褐色10YR5/3	横ナデ	横ナデ、ナデ	-	-	-	石英を含む	良好	
75	599	弥生土器	甕	I		内:淡黄色2.5Y8/4 外:浅黄橙色10YR8/4	横ナデ	ナデ	-	-	-	石英、角閃石を含む	良好	
75	600	弥生土器	甕			内:にぶい黄褐色10YR5/3 外:にぶい褐色7.5YR6/3	板ナデ、ハケ目	ナデ	-	(7.6)	-	石英、角閃石を含む	良好	
75	601	弥生土器	壺	I		内:橙色7.5YR7/6 外:浅黄橙色7.5YR8/6	ハケ目、横ナデ	ハケ目、横ナデ	-	-	-	石英を所々に含む	良好	
75	602	弥生土器	壺	I		内:にぶい橙色7.5YR6/4 外:橙色7.5YR7/6	ナデ	横ナデ	-	-	-	石英、角閃石を含む	良好	
75	603	弥生土器	壺	I		内:浅黄橙色10YR8/3 外:にぶい黄橙色10YR7/3	ハケ目 貼付突帯文の後刻み目	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英を多く含む	良好	
75	604	弥生土器	壺	I		内:黄灰色2.5Y6/1 外:浅黄橙色7.5YR8/4	ナデ、板ナデ	磨滅	-	(3.0)	-	石英、白い小石を所々に含む	良好	
75	605	弥生土器	鉢	I		内:橙色7.5YR7/6 外:にぶい黄橙色10YR7/3	口縁:横ナデ 胴部:ナデ	横ナデ	(9.0)	-	-	角閃石を微量に含む	良好	
75	606	弥生土器	鉢	I		内:浅黄橙色10YR8/3 外:にぶい橙色7.5YR7/4	ナデ	ナデ	-	1.5	-	石英を多く含む	良好	



第76図　土坑１・土坑７出土石器

（9）土坑

土坑２・３（第77図）

Ａ・Ｂ－26区で検出され，土坑３が土坑２を切っている。土坑３の大きさは，南北1.3m，東西1.72m，深さ50ｃｍである。平面形は不定形で東側は掘り込みの途中に小さなテラス部分をもち，底の方に向かって面積が狭くなる。土坑２は平面形が不定形で，掘り込みの西側は平坦面を2段形成し，平坦な床面に至る。土坑の大きさは南北1.5m，東西1.84m，深さ１ｍで土坑の中では最も規模が大きい。土坑２・３からは弥生土器146点が出土したが図化できるものはなかった。

土坑４（第77図）

Ａ－25区で検出され，南側を溝状遺構１によって切られている。平面形は楕円形に近いと思われ，床面に凹凸が見られる。検出された大きさは南北1.18m，東西0.58m，深さ18ｃｍである。土坑からは１点の弥生土器片が出土した。

土坑５（第77図）

Ａ－26区で検出された。平面形は楕円形で床面の東側は浅く落ち込む。断面形は皿状を呈し，深さは６ｃｍと浅い。土坑の大きさは南北0.48m，東西0.38m。遺物の出土なし。

土坑６（第77図）

Ａ－26区で検出された。平面形は楕円形で床面の北側には浅い落ち込みがみられる。深さは６～８ｃｍと浅く，床面は平坦である。土坑の大きさは南北0.4m，東西0.53m。遺物の出土なし。

土坑７（第77図）

Ａ－26区で検出され，平面形は不定形である。深さは12ｃｍ程で２段掘りとなっている。土坑の大きさは南北0.32m，東西0.3m。土坑からは石器が１点出土した。

敲石（第76図 611）

安山岩小礫の側縁に敲打痕が認められる。

土坑８（第77図）

Ａ－30区で検出された。東側を確認トレンチにより削平されている。土坑の大きさは南北0.43m，東西0.56mである。土坑からは22点の弥生土器片が出土した。

土坑９（第77図）

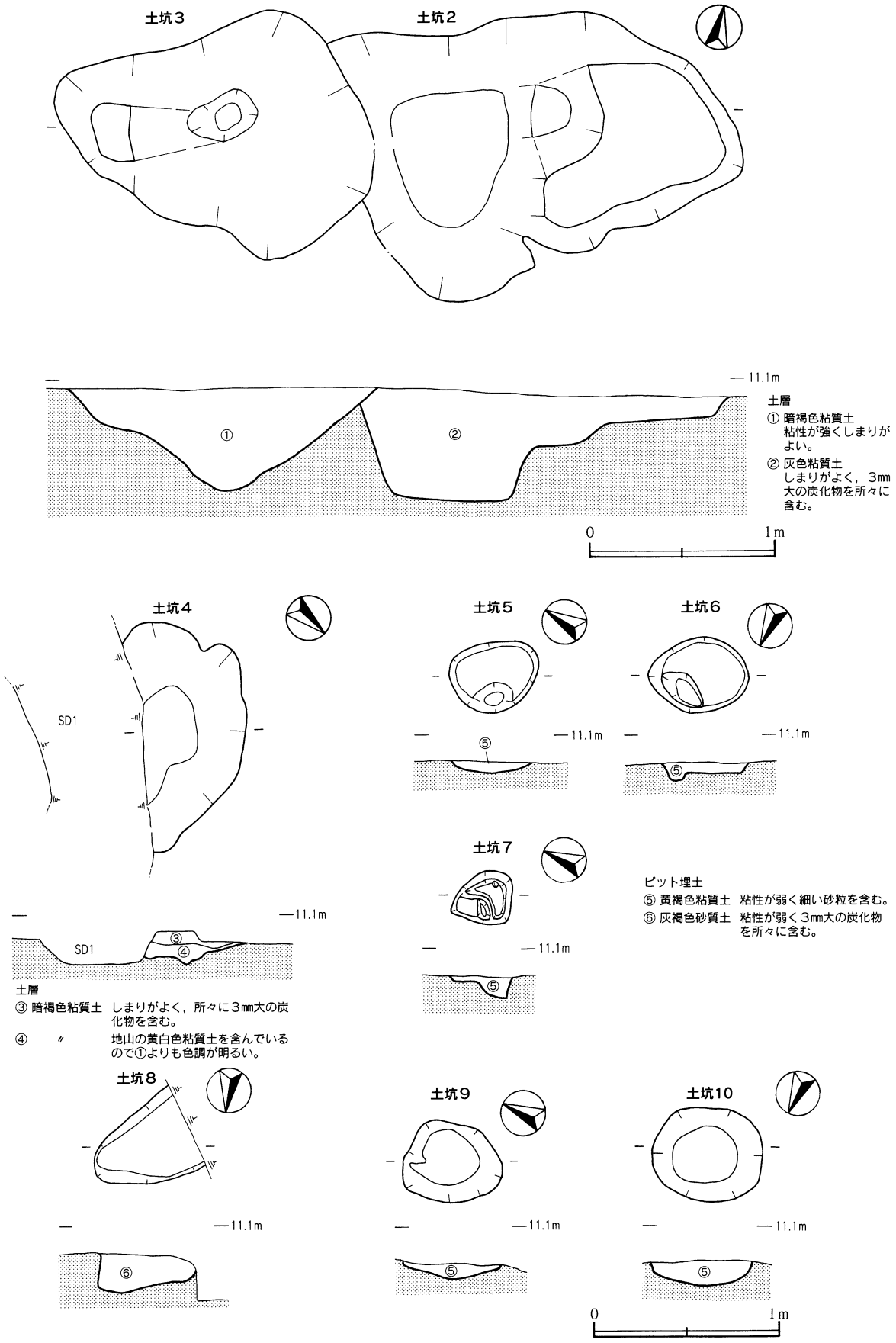
Ｂ－26区で検出され，平面形は楕円形である。深さは８ｃｍで床面は中央部に向かって深くなっている。土坑の大きさは南北0.51m，東西0.44m，深さ８ｃｍである。

土坑10（第77図）

Ａ－26区で検出された。平面形は円形で，土坑の大きさは南北0.5m，東西0.58m，深さ14ｃｍである。土坑からは遺物の出土なし。

（10）溝状遺構１

ＡＢ－25区で検出され，緩やかに弧を描きながら調査区を東西に横断している。検出された大きさは長さ7.5m，幅0.5mである。深さは10ｃｍ程で断面形は台形状を呈し，床面は丸みを帯びる。弥生土器18点，石器２点が出土した。


土坑3
土坑2
11.1m
①
②
土層
① 暗褐色粘質土
粘性が強くしまりがよい。
② 灰色粘質土
しまりがよく，3㎜大の炭化物を所々に含む。
0
1m
土坑4
SD1
11.1m
③
④
土層
③ 暗褐色粘質土 しまりがよく，所々に3㎜大の炭化物を含む。
④ 〃 地山の黄白色粘質土を含んでいるので①よりも色調が明るい。
土坑5
⑤
土坑6
土坑7
ピット埋土
⑤ 黄褐色粘質土 粘性が弱く細い砂粒を含む。
⑥ 灰褐色砂質土 粘性が弱く3㎜大の炭化物を所々に含む。
土坑8
⑥
土坑9
土坑10

第77図　土抗２～10

出土遺物

弥生土器（第78図）

弥生土器２点を図化した。612は甕の口縁部である。口縁部はわずかに器壁が厚くなり，口唇部が浅く凹んでいる。613は緩やかに外反する高杯の口縁部である。全体的に器壁が薄い。摩滅が著しく，調整は不明である。

石皿（第125図 1006）

扁平な安山岩を用い，一面を使用している。

敲石（第125図 1007）

折れてはいるが，棒状の礫の先端に細かな敲打痕が認められる。下から見たとき，楕円形の長径方向の擦り減り方が激しい。敲くと同時に擂り潰す動作もあり，擂粉木のような用途が考えられる。

第16表　土抗出土石器観察表

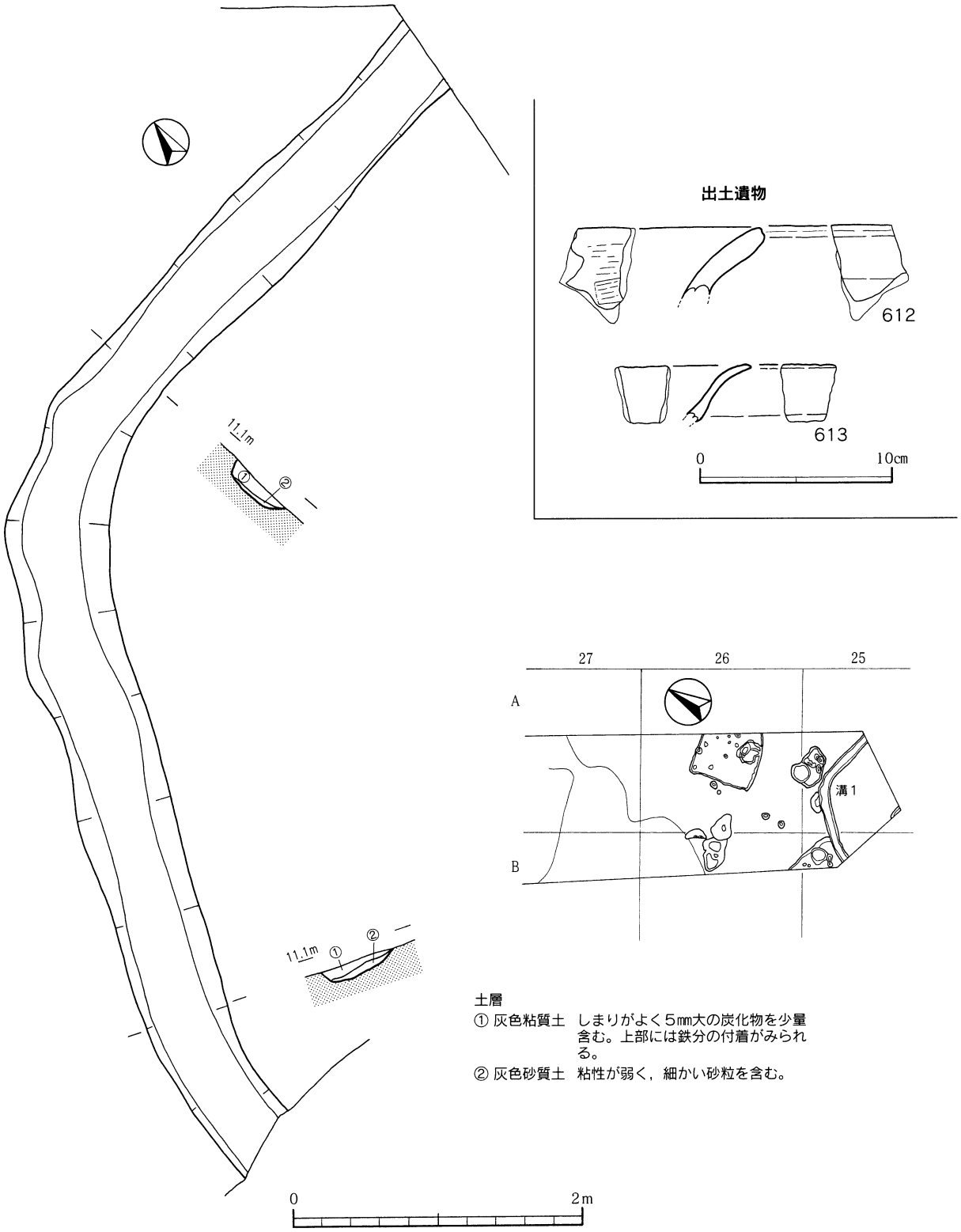
図番号	番号	出土区	層位	取上番号	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重さ g	石材	備考
76	607	A26 土坑1	－	23	敲石	16.30	7.60	6.90	1200.00	安山岩	
76	608	土坑1	－	100	磨石・敲石	9.90	9.30	4.80	666.00	砂岩	
76	609	土坑1	Ⅰ	15	石皿B	23.70	15.30	5.70	2600.00	安山岩	
76	610	土坑1	Ⅰ	80	砥石	6.40	2.80	3.10	68.00	凝灰岩	
76	611	土坑7	－	8	敲石	4.60	5.10	4.50	129.00	安山岩	

第17表　溝状遺構１　出土土器観察表

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様 外面	調整・文様 内面	調整・文様 口径	調整・文様 底径	調整・文様 器高	胎土	焼成	備考
78	612	弥生土器	甕	Ⅱ		外:にぶい黄橙 10YR8/1 内:灰白10YR8/1	口縁:ナデ 頸部:横ナデ	ハケ目後ナデ	－	－	－	角閃石，雲母，石英を含む	良好	
78	613	弥生土器	高坏	Ⅱ		外:浅黄橙 10YR8/4 内:灰白10YR8/2	摩滅	摩滅	－	－	－	砂粒を含まない精製された胎土	良好	

（11）自然流路１（第79図・巻頭カラー１）

２地点北部のＡ・Ｂ－21～24区にかけて検出された。本来は溝状遺構２と共にＶ層上面で検出すべきであったが，実際に検出することができたのはⅦ層上面であった。そのために，河床に近い砂土が堆積した下層部の調査を中心に行った。砂土の上位には粘質土が厚さ0.56ｍ堆積している。検出された長さは17.2ｍ，幅11.8ｍ，深さは0.3ｃｍであるが，本来の川幅は17.5ｍ，深さ0.7ｍ程である。河床の等高線から南側が上流，北側が下流である。自然流路の下層からは弥生土器1898点，石器137点，木製品233点が出土し，ハンノキ・イチイガシ・クスノキ・ヒョウタン・サルノコシカケなどの種実遺体も多く検出された。遺物を取り上げると５列の杭列を検出した（第79図下）。杭列は河床から20㎝上の砂質土から打ち込



第78図　溝状遺構1及び出土遺物

まれており河床の砂礫層で止まっているために杭の先端部がつぶれているものが多い。杭列は，芯持材を用いた丸杭と割材を用いた角杭によって構成されている。東側の杭列１～３は３列平行して並び，西側の杭列４・５も２列平行して打ち込まれている。各杭の間隔は狭く，杭列１では板材を渡している部分が１か所みられ，杭列４・５は間に丸太材が乗り、杭は横倒しになった状態で検出された。杭列は土層断面の観察から自然流路が砂土によって埋没し，水量がそれほど多くない段階で打ち込まれており，使用されている杭も小型のものが主体を占める。杭列が検出された砂土の上層には粘質土が堆積しており，自然流路が埋没する過程で沼沢地となったことが推察される。当初，杭列の性格については杭列の東側に木製品や，農具の未製品が集中して出土したことから木材の貯蔵施設の可能性を考えたが，規模が大きすぎることに問題がある。１つの可能性として，自然流路跡を利用した小規模な水田跡に伴う施設ではないかと思われる。

出土遺物

弥生土器108点，石器43点，木製品129点を図化した。

甕

Ｉａ類（第80図 614～620）

614は口径33ｃｍ，器高35.8ｃｍ，底径8.6ｃｍのほぼ完形品である。口縁部は歪みが大きく，断面三角形をなし，胴部との境は屈折するために強い稜が見られる。胴部はわずかに膨らみ、小さな脚部に至る。全体的に器壁が薄く、脚部の端は二次焼成のため赤褐色を呈している。外面の調整は口縁部が横方向の強いナデ，上胴部が丁寧なハケ目，下胴部はケズリ後ハケ目調整である。内面は口縁部がナデ，胴部はハケ目後ナデ調整が施されている。615は口縁が「く」字状に外反し，張り気味の胴部は器壁が薄い。外面はハケ目後ナデ，内面はナデ調整が施されている。616の口縁部は直線的で，内面に強い稜がつく。胴部は張りが弱い。外面はハケ目後ナデ，内面はナデ調整が施され工具痕が残る。内外面共に口縁部には指頭圧痕が多く見られる。617・618は口縁部が「く」字状に外反し，胴部はやや膨らみをもつ。外面はハケ目調整，内面は口縁部がハケ目，胴部はナデ調整が施されている。617は胴部に工具痕が多く残る。619は口縁内面と胴部との境の屈曲が強く，胴部は丸みを帯びる。外面はハケ目後ナデ，内面はナデ調整が施され指頭圧痕が多く残る。精製された胎土を使用しており，鉢の可能性もある。620の口縁部は直線的で，端部は丸くおさまる。内面の屈曲は強く稜をもつ。内外面ハケ目後ナデ調整で，外面には指頭圧痕が残る。

Ｉｂ類（第81～83図 621～647）

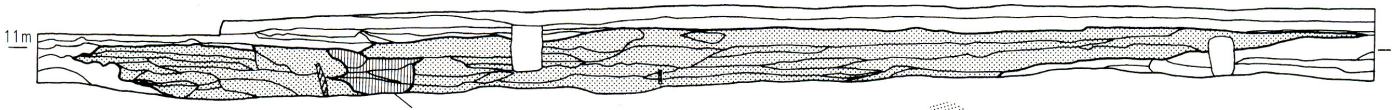
Ｉｂ類は口縁部の外反が弱く，胴部は張らずに底部に向かってすぼまるものである。内外面にハケ目調整が施されるものが多い。621，622は口縁端部が平坦で中央がわずかに窪む。621は上胴部に最大径があり，そこから底部に向かってすぼまる。全体的に器壁が薄く，外面には煤が付着している。外面胴部下半部は二次焼成のために器面が荒れ，黄橙色を呈している。内外面共にハケ目調整が丁寧に施される。622の胴部は膨らみをわずかにもつ。内外面ハケ目調整が施され，部分的に強くナデられているために指頭圧痕が残る。623は胴部が張り丸

木製品出土状況

第79図　自然流路１　（１/80）

完掘状況

自然流路１土層断面図（調査区東壁より）



自然流路１の埋土

10.4m
杭列２
杭列１
10.4m
10.3m
杭列３
10.4m
10.5m
10.3m
10.3m
10.4m
杭列５

みを帯びる。内外面ハケ目調整である。624は口縁部が緩やかに外反する。外面は頸部から上胴部にハケ目調整が施され，内面はハケ目後ナデ調整である。625・626は他に比べ口縁部の傾きが大きい。胴部はあまり張らず，底部へとすぼまる。内外面ハケ目後ナデ調整である。626は内面胴部にケズリ調整が施されている。627の口縁部は直線的で，胴部は膨らみをもたない。外面はハケ目，内面口縁部はナデ，胴部は幅広のハケ目調整が施されている。628は口縁部の器壁が薄く，胴部はわずかに張り底部に向かってすぼまる。外面はハケ目後ナデ，内面はハケ目調整である。629の口縁は緩やかに外反し、口縁部が先細りとなる。外面は頸部がハケ目，胴部はハケ目後ナデ，内面は口縁部がナデ，頸部から胴部はハケ目調整が施されている。630は口縁部が弱く外反する。外面は口縁部がナデ，胴部はハケ目調整で内面はハケ目後ナデ調整が施されている。631は厚みのある口縁部が緩やかに外反する。外面と内面口縁部には丁寧なハケ目が施されている。632は口縁部の外反が弱く，胴部は脹らみをもたない。内外面の口縁部は強い横ナデ，胴部はハケ目調整で，外面下胴部はケズリ調整が施されている。633の口唇部は平坦に形成され胴部は丸みを帯びる。調整は内外面はハケ目後ナデ調整である。634は他に比べ小型のものである。口縁部は外反し，胴部は底部に向かってすぼまる。内外面ハケ目後ナデ調整が施されている。635は口縁部が直線的で端部は平坦である。胴部はわずかに脹らみ，器壁が薄い。内外面ハケ目後ナデ調整が施されている。636は口縁部が外反し，胴部は底部に向かってすぼまる。内外面ハケ目調整が施されている。637は口唇部が丸くおさまり，胴部は緩やかに膨らむ。内外面共に口縁部がナデ，胴部はハケ目後ナデ調整である。638は口唇部が平坦で中央がわずかに窪む。頸部には接合痕が明瞭に残る。内外面ハケ目後ナデ調整が施される。639は口縁部が長く，器壁が薄い。頸部には工具痕が残りわずかに段がつく。内外面ハケ目後ナデ調整である。640は口縁部の先端に厚みがあり，端部は平坦で中央が窪む。外面はナデ，内面はハケ目後ナデ調整である。641・642は内面にケズリ調整が施されている。641は口縁部が緩やかに外反し，胴部はわずかに内傾する。外面はハケ目後ナデ，内面は口縁部がナデ，胴部はケズリ調整である。内面口縁部には３条の沈線が残る。642は口縁部が欠損している。外面はハケ目が丁寧に施され，内面は口縁部にハケ目，胴部はケズリ調整が施されている。643～647は口縁部が短く、外反が強いものである。胴部は張らずに底部へとすぼまる。内外面ハケ目後ナデ調整が施されている。647は上胴部に接合痕がみられる。644は下胴部に工具痕が残る。645・646は内面の下胴部にケズリ調整が施されている。647は内面にケズリ調整が施され，上胴部には「И」と描かれた線刻が残る（写真１）。

Ⅲ類（第83図 648，649）

648は口縁部が弱く外傾し，肩が張るために最大径が上胴部にある口径より胴部最大径が大きくⅠ・Ⅱ類に比べて胴部は丸みを帯びる。外面は丁寧なハケ目，内面は口縁部がハケ目後ナデ，胴部はケズリ調整が施される。649は口縁部に厚みがあり，端部が丸くおさまる。口縁部片の傾きから胴部は脹らみをもつ形態であると思われる。

No647の線刻

Ⅳ類（第84図 650～657）

Ⅳ類は大甕に該当する。

650～653の口縁部片は，直線的に外傾し平坦な口唇部はわずかに窪む。650は他と比べると厚みがあり，内面の屈曲が強く明瞭に稜が残る。内外面ハケ目が丁寧に施されている。651・652は外面が丁寧にナデられ，内面はハケ目後ナデ調整である。653は内外面ハケ目後ナデ調整で、内面は強くなでられ指頭圧痕が残る。654～657は上胴部に上方に湾曲した断面三角形の突帯がつく。654は口縁部の屈曲が弱く、内面の屈曲部に弱い稜がみられる。内外面丁寧なナデ調整が施される。655～657は口縁部が欠損している。655は内外面ハケ目後ナデ調整である。内面は強くナデられているために指頭圧痕が多く残る。656は内外面丁寧なナデ調整が施されている。657は胴部最大径が 推定26.4cmで内外面丁寧なナデ調整が施される。

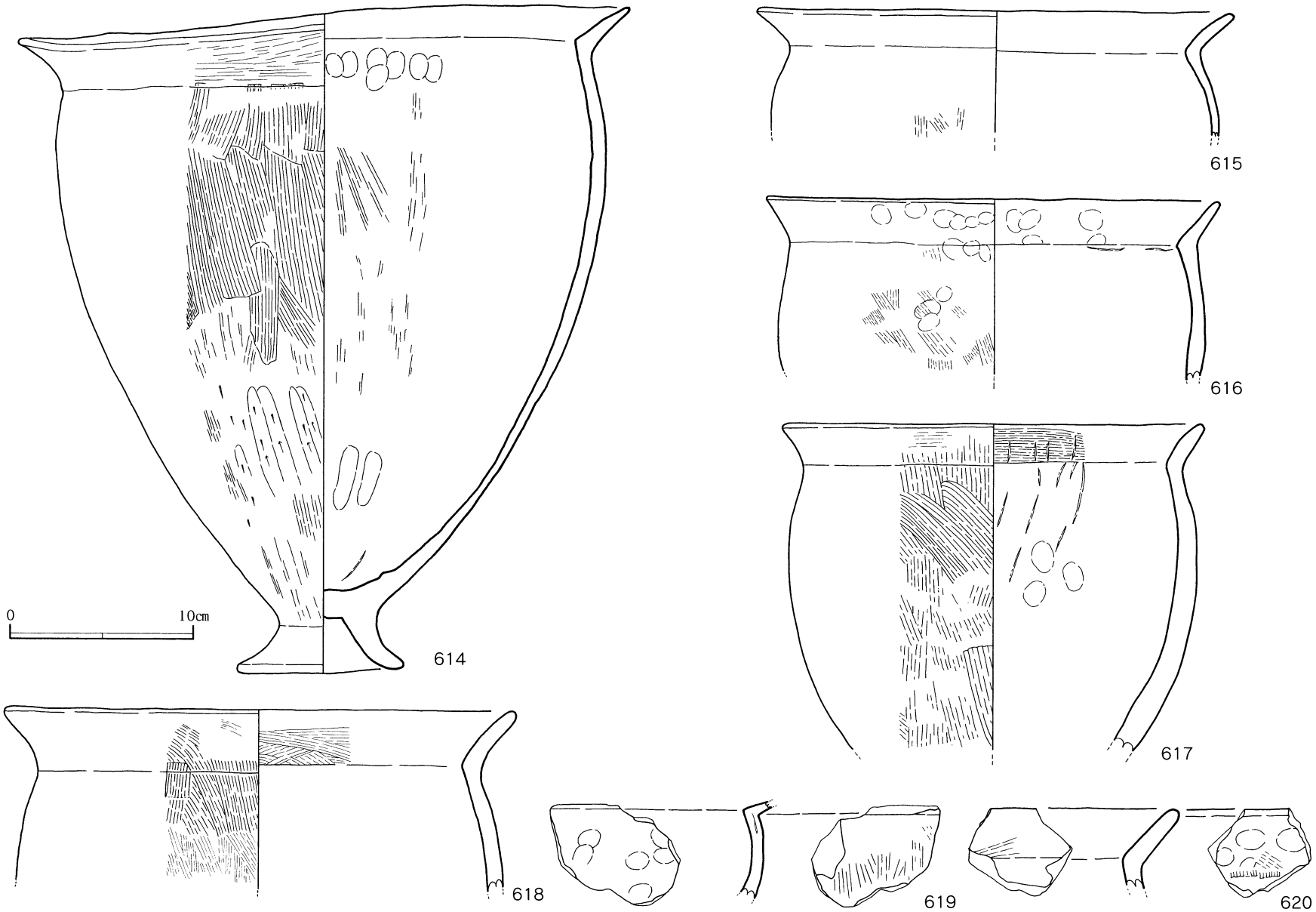
底部（第85図 658～677）

658～669は弱く外反しながら開き，脚高が低いものである。658・659は外面がハケ目後ナデ，内面はナデ調整が施され指頭圧痕が多く残る。内面には煤が付着している。660は内外面に細かいハケ目調整が施されている。661は内外面にハケ目後ナデ調整が施され，内面には工具痕が多く残る。662は外面に指頭圧痕が多く残る。外面はハケ目後ナデ、内面はナデ調整である。663は脚高が低い。外面はハケ目後ナデ調整で工具痕が残る。内面は強くナデられ指頭圧痕が多く残る。脚部内面には煤が付着している。664は脚部内面の天井部が凸状を呈している。外面はナデ，内面はハケ目調整である。665・666は外面にハケ目を施している。666は全体的に磨滅している。667は端部がナデにより面取りされている。調整は内外面ナデ調整。668は指頭圧痕が多く残る。670は接地面付近で弱く外反する。外面は磨滅しており、部分的にハケ目が残っている。671は外面にハケ目が施されるが多くはナデ消されている。672～667は直線的に開き，脚高が高いものである。多くは外面に縦方向のハケ目が施される。672は内外面ナデ調整が施され，下胴部は上方から下方に強くナデているため器面に凹凸ができている。673は外面がハケ目後ナデ，脚部内面には幅の広いハケ目が連続的に施されている。674は外面に丁寧なハケ目が施され，端部付近はナデ消されている。内面はハケ目後ナデ調整で工具痕が残る。胴部との境には接合痕がみられる。675は内外面ハケ目調整が施されている。677は器壁が薄く端部は面取りされている。外面がハケ目，内面はナデ調整が施されている。

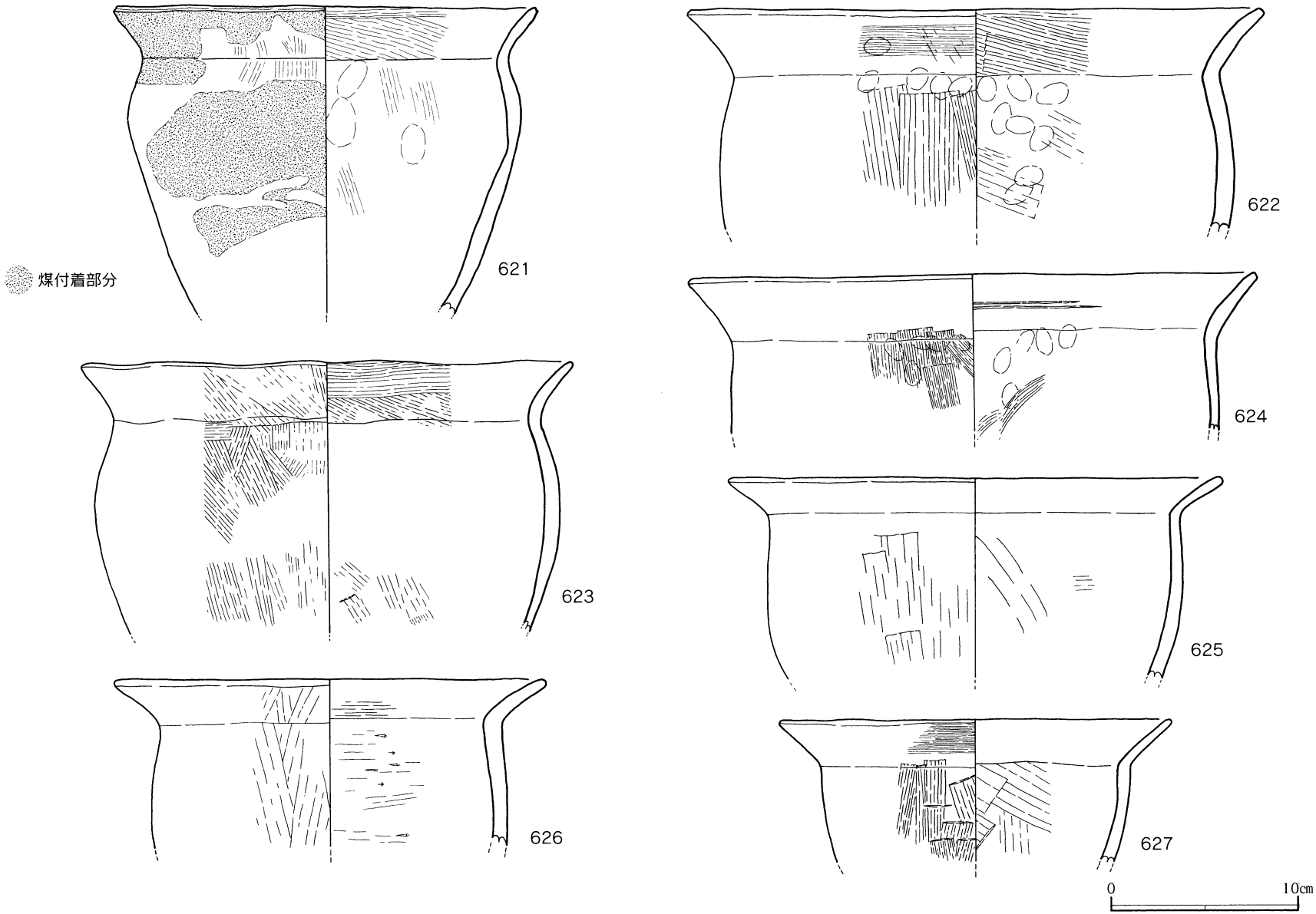
壺

Ⅰａ類（第86図 678～682）

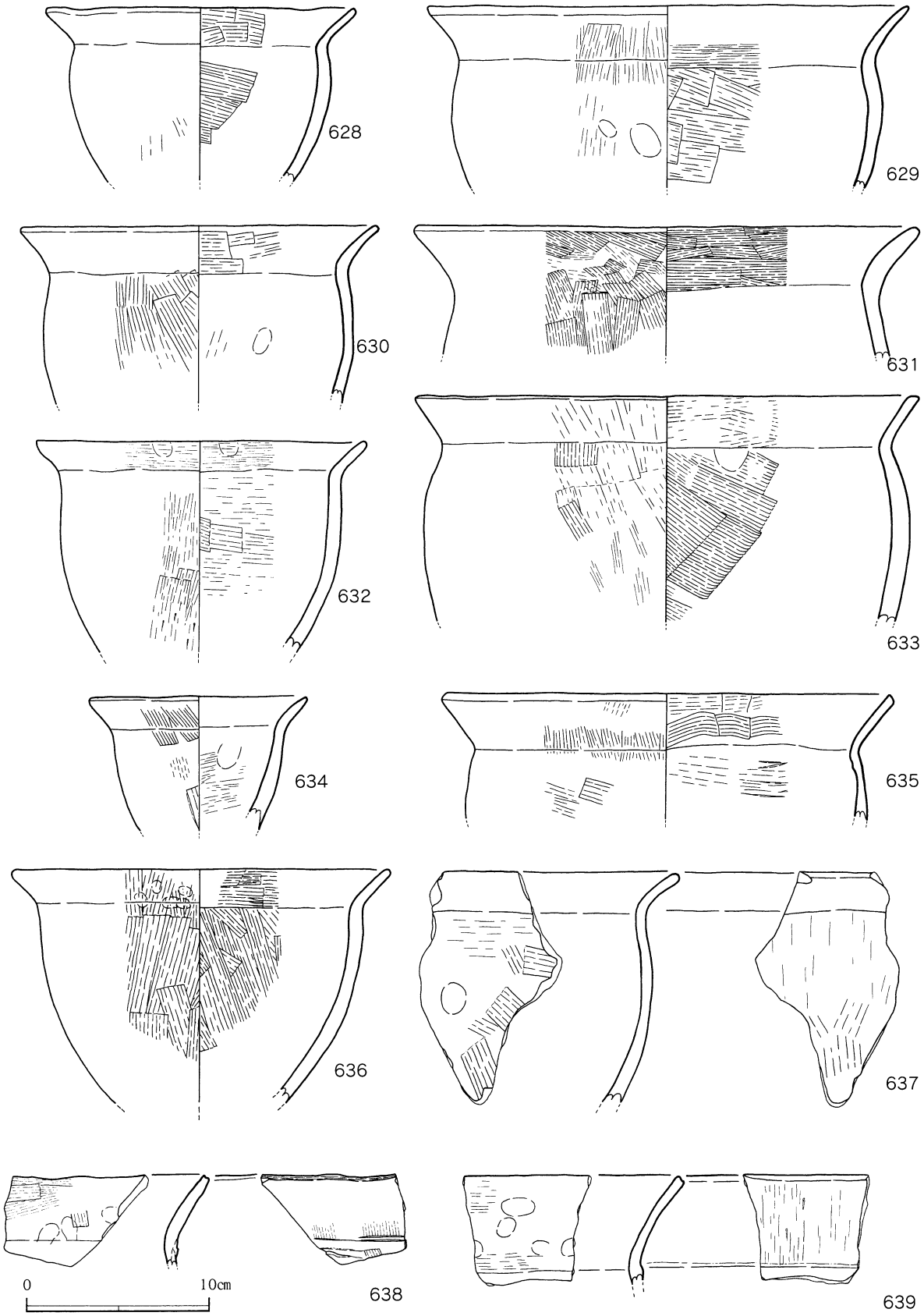
678は口縁部が「く」字状に外反し，胴部は倒卵形を呈している。底部は小さな平底である。胴部の中央には煤が付着しており、煮炊き具として使用されている。外面は口縁部がナデ，胴部はハケ目後ナデ，下胴部はケズリ調整が施される。内面は口縁部がハケ目後ナデ，内面はナデ調整である。679は弱く外反する口縁部の端部がわずかに下方に屈曲している。外面は口縁部がナデ，胴部はハケ目後ナデ，内面はナデ調整である。680は口縁



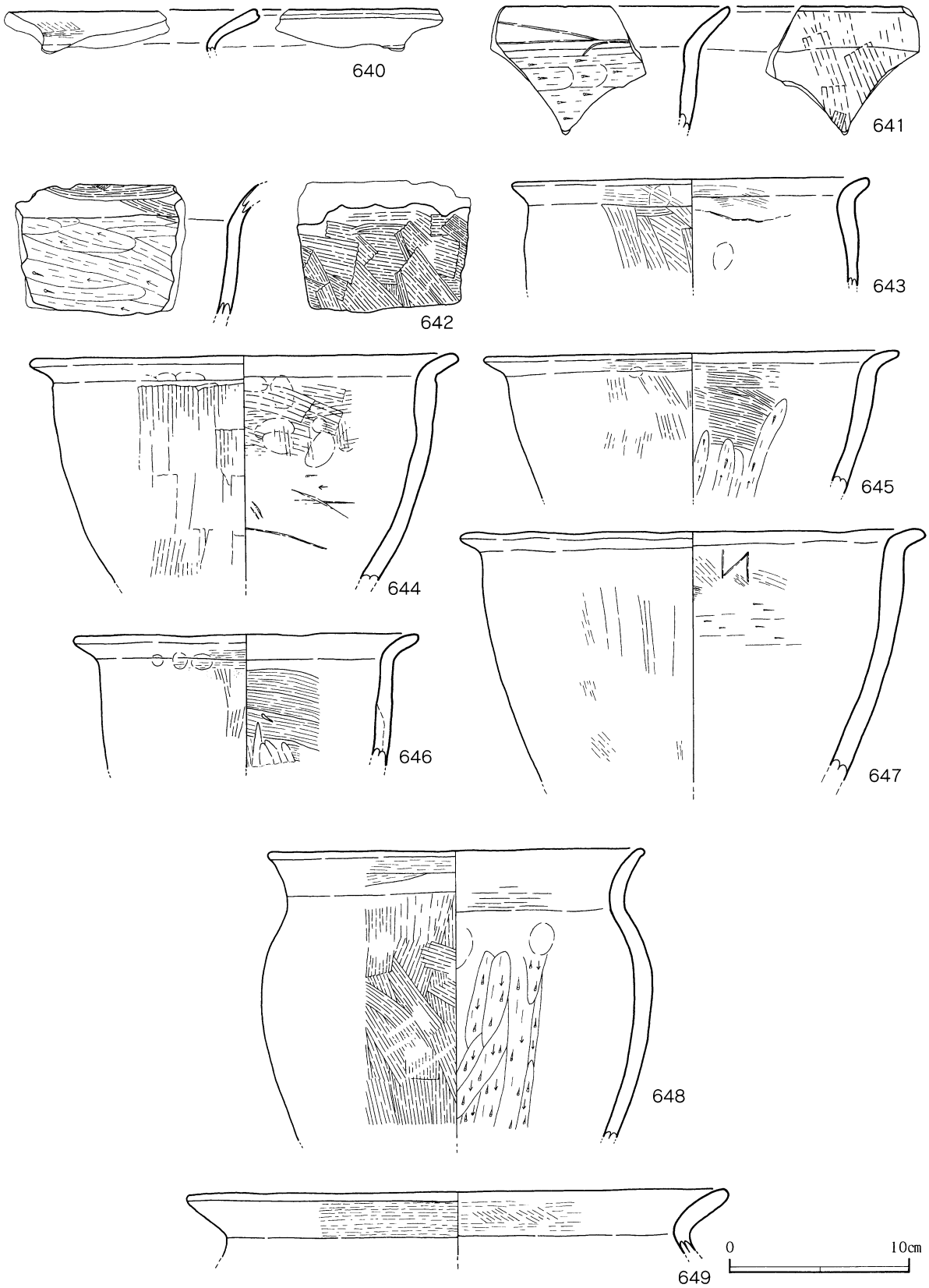
第80図　自然流路１出土土器（１）



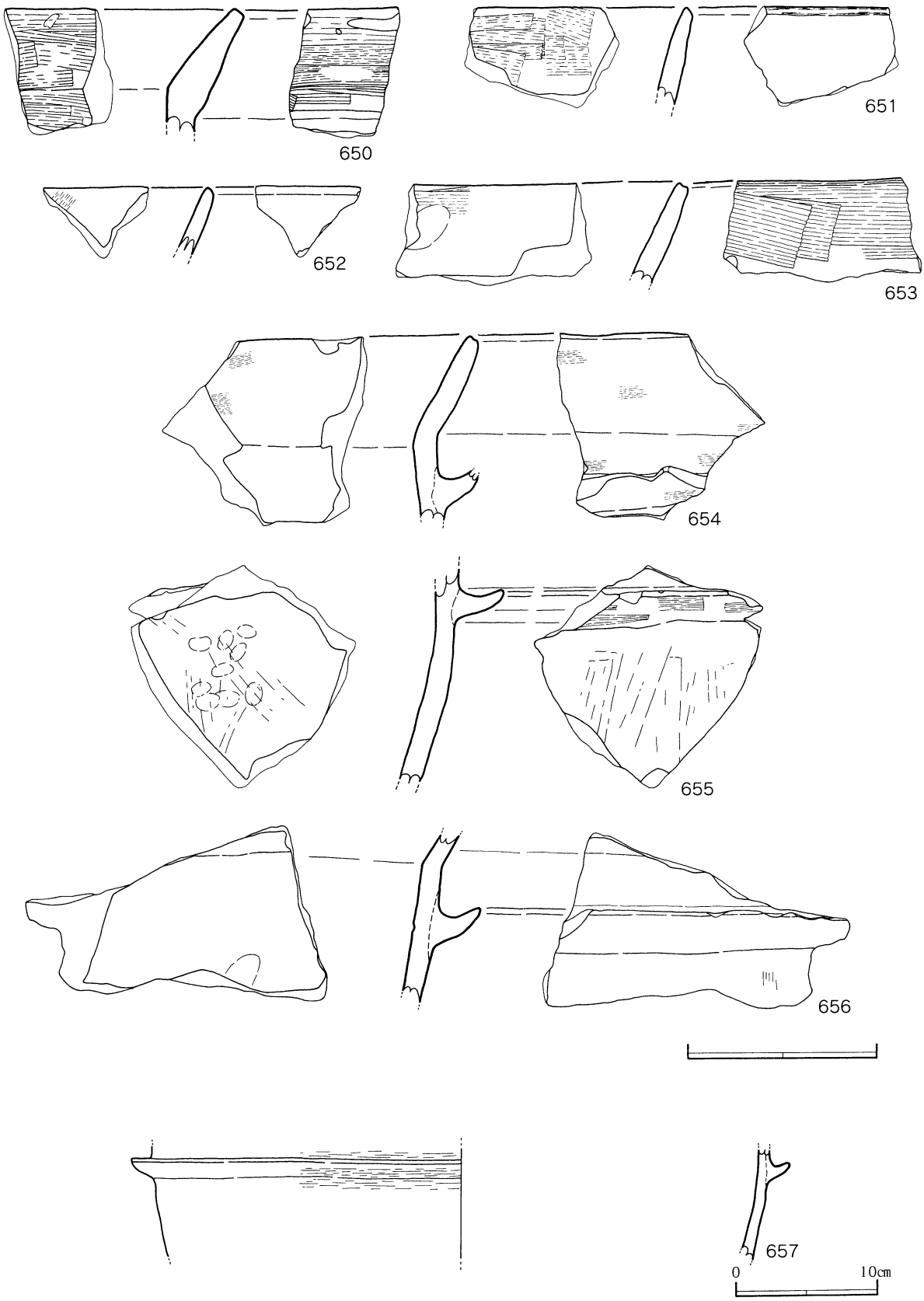
第81図　自然流路１出土土器（２）



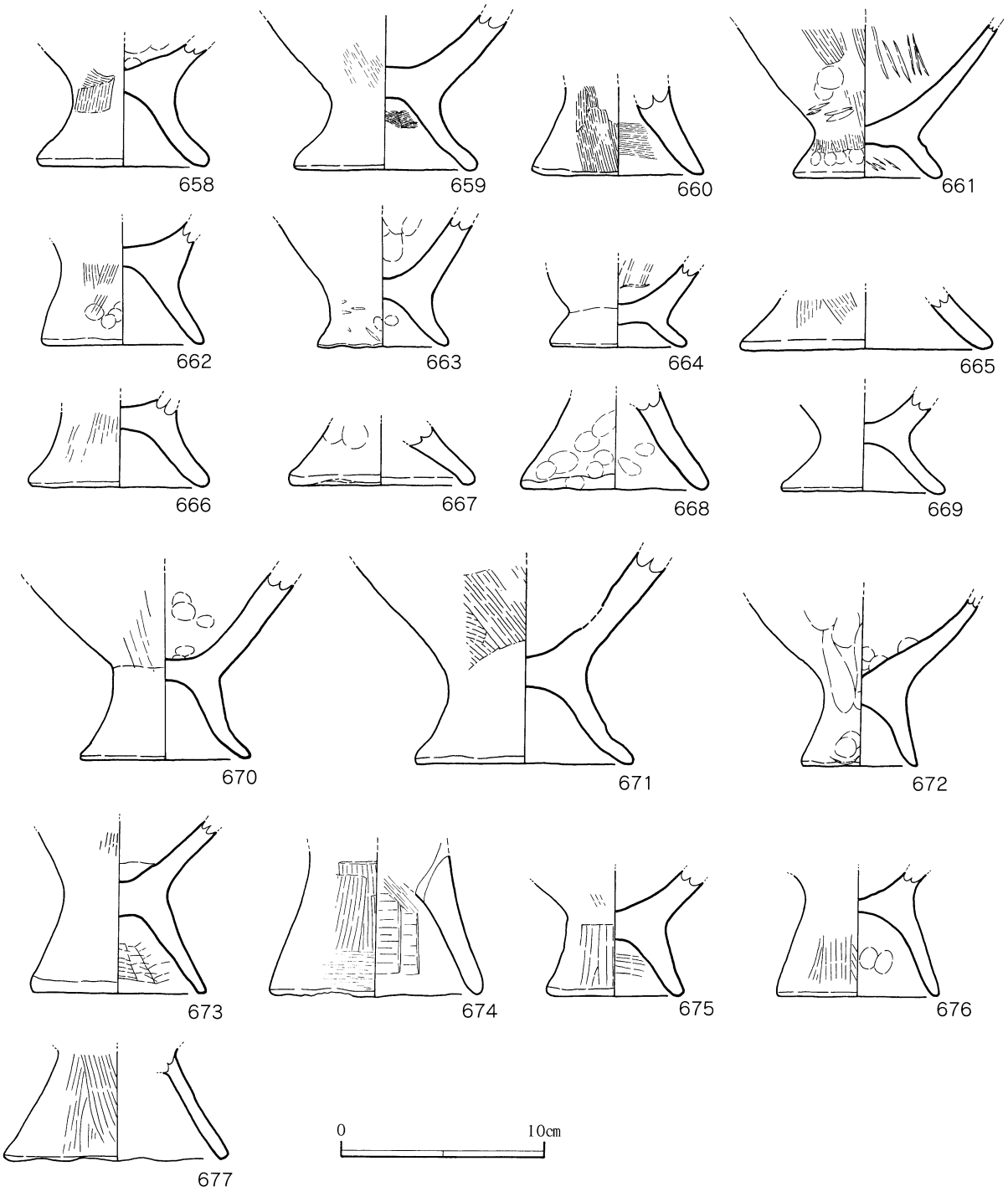
第82図　自然流路１出土土器（３）



第83図　自然流路１出土土器（４）



第84図　自然流路１出土土器（５）



第85図　自然流路１出土土器（６）

部が欠損している。外面の調整は磨滅のため不明。内面はナデが施され指頭圧痕が多く残る。681は口縁部が短く外反し，上胴部は撫で肩となる口縁部の器壁は胴部に比べ薄い。内外面ハケ目後ナデ調整で，内面上胴部には指頭圧痕が多く残る。682は短い口縁部が直線的に立ち上がり，端部が丸くおさまる。上胴部は撫で肩で内外面ナデ調整が施されている。

Ⅰb類（第86図 683～686）

683は口縁部が「く」字状に弱く外反し、上胴部付近に最大径をもつ。口唇部は浅く窪み、底部は小さな平底である。胴部中央には１条の刻目突帯文が施されている。刻目は柾目が確認されることから板状の木製工具で施したと考えられる。下胴部には破裂痕が残る。外面はハケ目，内面はナデ調整が施されている。684は胴部中央に２条の刻目突帯を施している。外面は丁寧なハケ目，内面は外面よりも細かいハケ目が施されている。685は外反する口縁部の内面がわずかに窪んでいる。口唇部は平坦で中央が浅く窪む。内外面丁寧なナデ調整が施される。686は口縁部の外反が強く，内面の屈曲部に稜がみられる。口唇部は平坦である。内外面ハケ目後ナデ調整を施している。

Ⅰ類（第87図 687～695）

687・688口縁部が緩やかに外反し，口唇部は平坦で中央がわずかに窪んでいる。687の外面はハケ目後ナデ，内面はナデ調整が施される。688は外面がハケ目後ナデ，内面は細かいハケ目調整が丁寧に施され頸部に指頭圧痕が並んで残る。689～691は口縁部が緩やかに外反し，端部が丸くおさまる。外面はハケ目後ナデ，内面はナデ調整である。689は外面に工具痕が残る。690は頸部の径が他のものより小さい。692は口縁部が緩やかに外反して開く。外面は口縁部がナデ，胴部がハケ目，内面にはハケ目調整が施されている。693は口縁部が短く外反する。内外面ハケ目後ナデ調整である。694・695は同一個体と考えられる。694は口縁部が外反し、胴部との境に断面三角形の突帯が１条施されている。外面は丁寧な細かいハケ目調整，内面はハケ目後ナデ調整が施される。内面は口縁の屈曲部から胴部にかけて器面の大部分が剥落している。695はしっかりした平底から直線的に大きく開いて立ち上がる。外面はケズリ調整が施され，内面は器面の剥落が著しい。

Ⅲ類（第87図 696・697）

Ⅲ類は上胴部に削りだしによる多重突帯文が施され、内外面に緻密なミガキが施されている。焼成も堅緻で、内外面黒色を呈し他の壺とは様相が異なる。

696は外傾する口縁部の端部が小さく横に開く。口縁部と胴部の境には削りだしによる突帯が１条廻る。外面と内面口縁部には幅２㎜の丁寧な磨きが施されている。外面口縁端部付近と胴部内面は横ナデが施される。697は削りだしによる粗雑なつくりの突帯文が13条残る。外面はミガキ調整，内面はナデ調整で指頭圧痕が多く残る。

Ⅳa類（第88図 698・699）

Ⅳa類は短く直線的な口縁が、外傾するものである。

698は内面の屈曲部に稜をもち、口唇部は平坦となる。内外面ハケ目後、ナデ調整である。699は口唇部が丸みを帯びている。外面はナデ調整，内面はハケ目後ナデ調整で工具痕が残

る。

Ⅳb類（第88図 700）

口縁部は短く先細りし，胴部は張りが強く丸みを帯びる。頸部の接合痕は浅い沈線状となる。外面は口縁部がナデ，胴部はハケ目，内面はハケ目後ナデ調整が施されている。焼成は硬質で丁寧なつくりである。

Ⅴ類（第88図 701）

免田式の壺の胴部片である。下胴部は強く屈曲しヘラによって描かれた浅く幅の広い下向きの重弧文が描かれ、弥生後期前半から中頃の特徴を残している。胎土は精製されたものを使用している。外面はミガキ，内面はナデ調整が施されている。

その他（第88図 702～711）

702は口縁部が弱く外反し、口唇部は平坦で ある。頸部には突帯文が１条施される。内外面ナデ調整である。703は口唇部が平坦で中央がわずかに窪む。内外面ナデ調整である。704は内外面ナデ調整である。精製された胎土を使用し，色調は橙色を呈している。705は内面の屈曲が強い。調整は磨滅のため不明である。

706は長頸壷の口縁部である。頸部から口縁部にかけてほぼ直立しており，口唇部には１条の沈線文が施されている。器壁が薄く、内外面ケズリ調整が施されている。

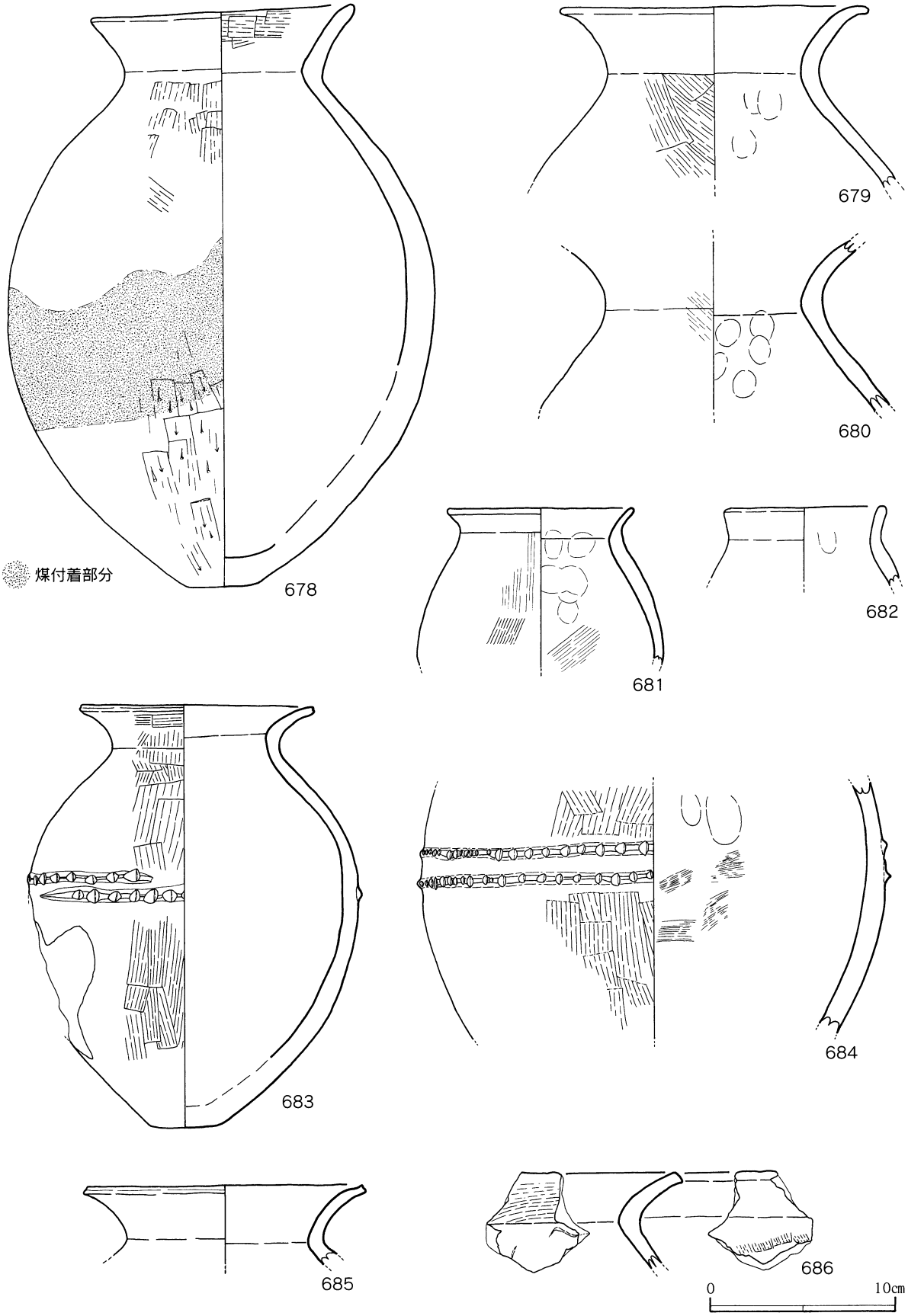
707～710は偏球形の胴部に多重の突帯文を施している。全て丁寧なつくりで、706の長頸壺の胴部である可能性がある。707は上胴部に７条の突帯文が施される。突帯文は削り出すことによってつくった可能性がある。下胴部には丁寧なハケ目が施される。708は上胴部に貼付突帯文を１条施す。外面にミガキ，内面はハケ目調整である。710は３条の貼付突帯文が残っている。

底部（第89図 712～716）

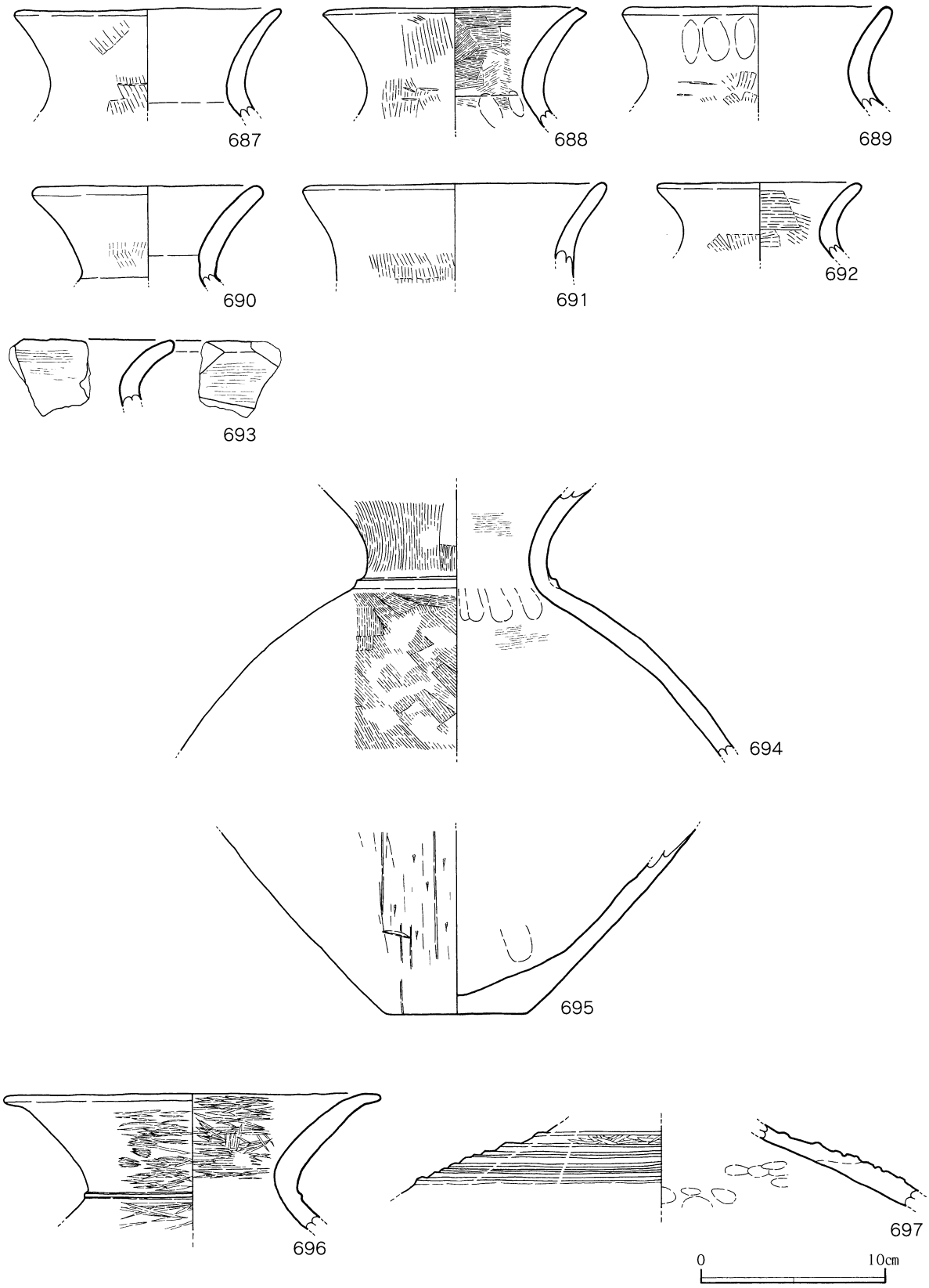
712～714は，平底から緩やかに曲線を描いて立ち上がる。712は底部内面が盛り上がり，内外面ハケ目調整が施されている。714は他に比べ底径が小さい。内面調整は胴部がタタキを意識した粗いハケ目、底は強いナデによって掻き取られている。715は砂粒を多く含み、外面はケズリ調整である。716は尖り気味の丸底で外面に煤が付着している。外面は板ナデが施され，内面はナデ調整で底部は掻きナデている。

鉢（第89図 717～723）

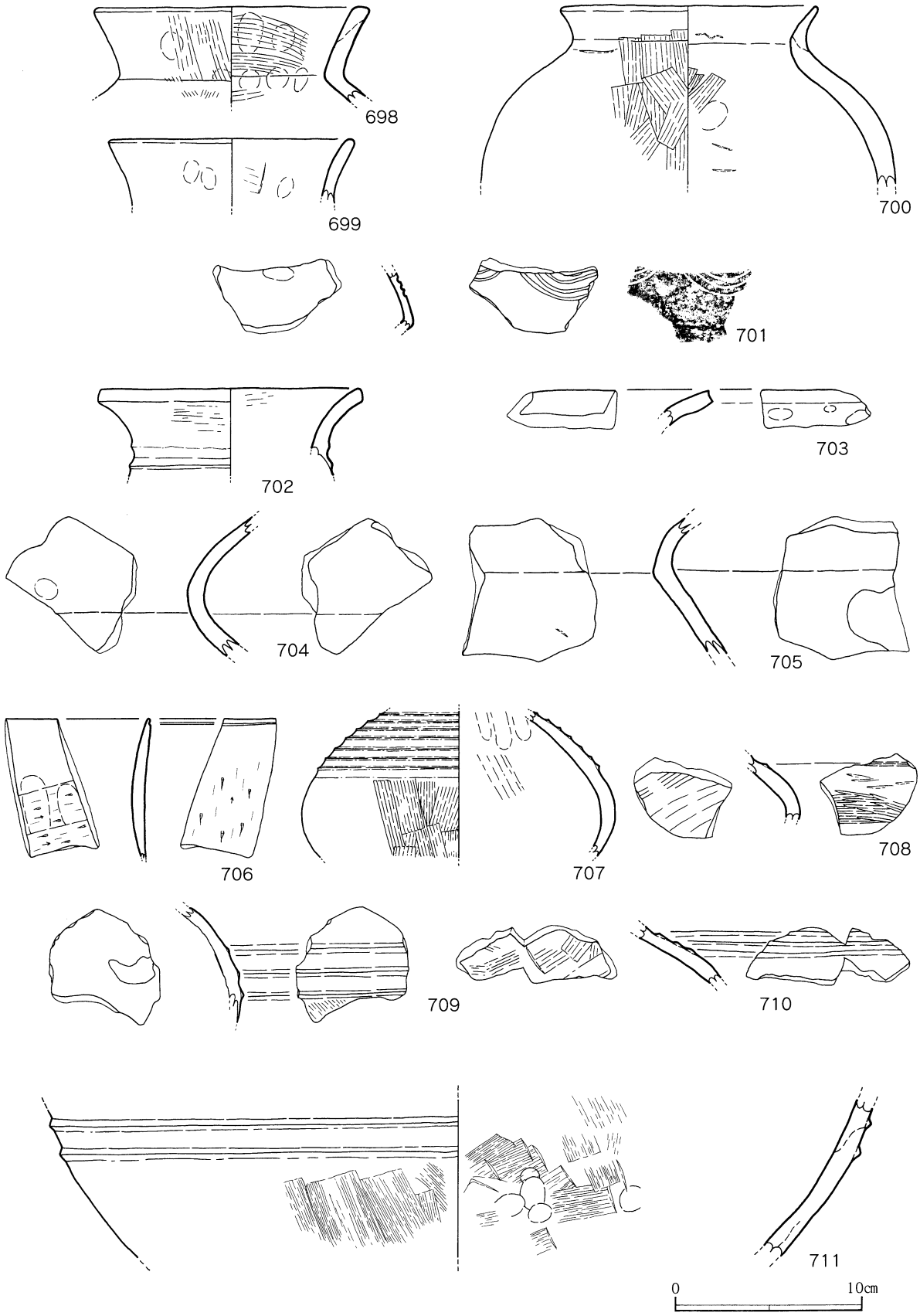
717は平底から直線的に体部が開く。内外面のハケ目は細かく，下胴部から底部はナデ調整である。718は丸底で，口縁部は直立し体部は丸みを帯びる。内外面ナデ調整である。719は口唇部が指頭圧痕のために歪んでいる。内外面に指頭圧痕が多く残る。720は口縁部が直立気味で，胴部は丸みを帯びる。口縁部はナデ，胴部はハケ目調整である。721の胴部は丸みを帯び、器壁が厚い。底部には脚台が付くと考えられる。外面はハケ目，内面胴部にはケズリ，下部はミガキ調整が施されている。全体的に粗雑なつくりである。722は口縁部が内湾している。外面には細かいハケ目が施され，内面はナデ調整で口縁部には工具痕が多く見られる。723は小型の鉢の底部と思われる。内外面ナデ調整で，内面には指頭圧痕が残る。



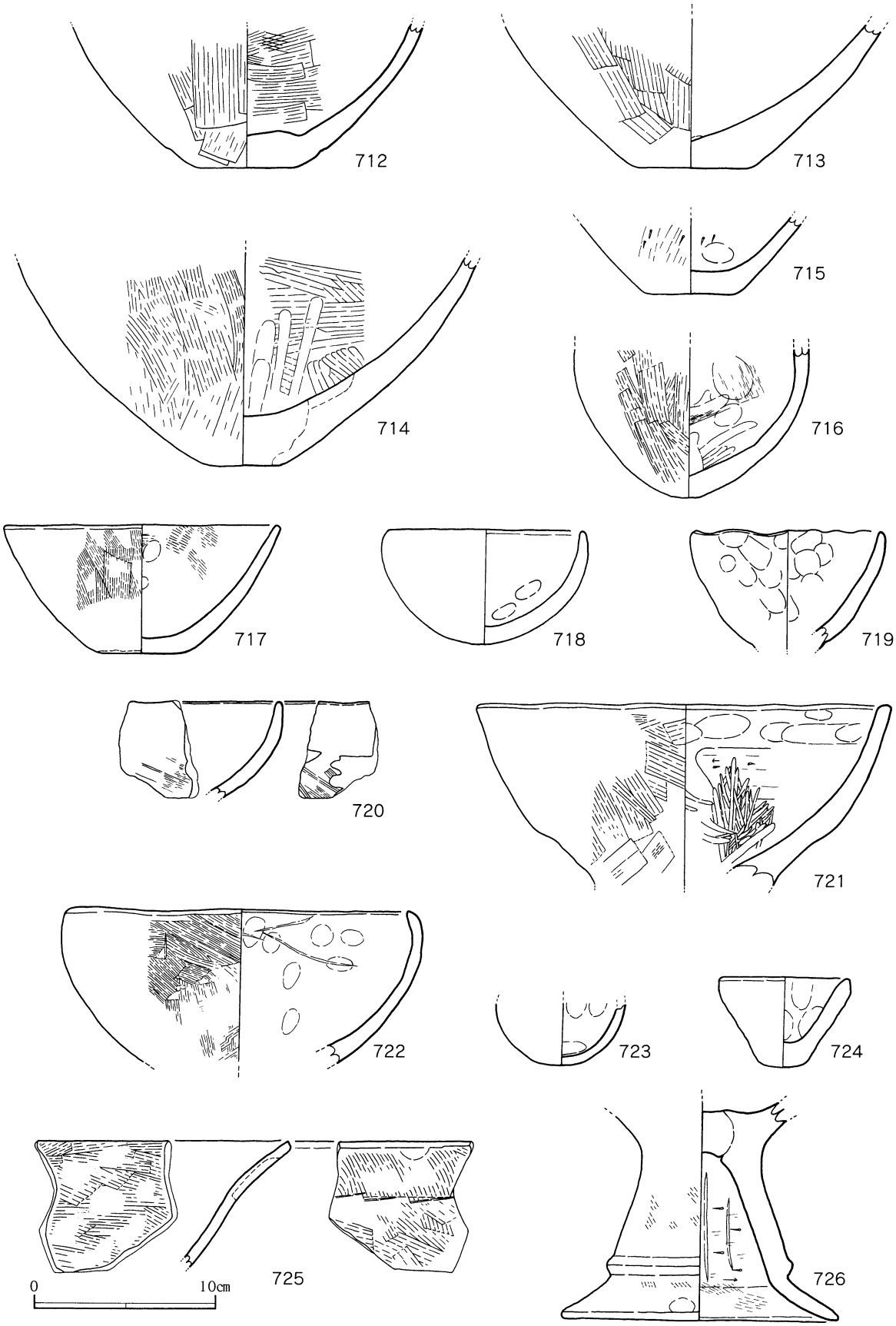
第86図　自然流路１出土土器（７）



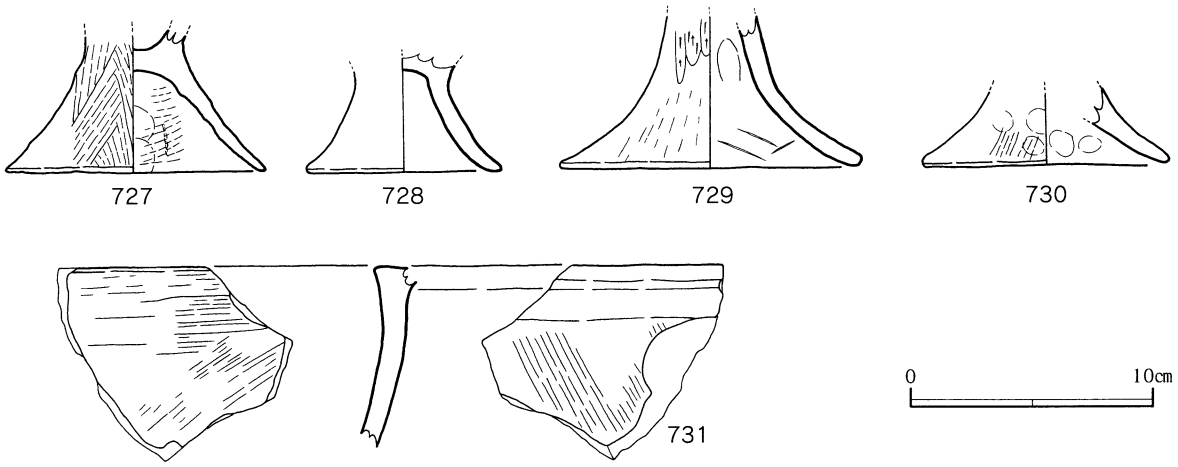
第87図　自然流路１出土土器（８）



第88図　自然流路１出土土器（９）



第89図　自然流路１出土土器（10）



第90図　自然流路１出土土器（11）

ミニチュア土器（第89図 724）

胴部は平底から直線的に開き、口唇部は丸くおさまる。内外面ナデ調整で内面には指頭圧痕が多く残る。

高坏（第89・90図 725～730）

725は体部である。口縁部は弱く外反し端部は平坦となる。口縁外面は上方へハケ目調整が施されるために体部との境に工具痕が並んで残る。内面はハケ目後ナデ調整である。器壁が薄く丁寧なつくりである。726～730は脚部である。726は脚部下部が屈折した後大きく外傾して開き、屈折部分に突帯文を廻らす。外面はハケ目後丁寧なナデ調整，内面は脚注部にケズリ調整が施されている。他に比べ丁寧な造りである。727・728は脚部の開きが弱いものである。727は内外面ハケ目調整が施され，内面天井部はナデられている。728は内外面ナデ調整である。精製された胎土を使用し、丁寧なつくりである。729は脚部が大きく開く。２次焼成を受けている可能性があり、羽口への転用も考えられ注意を要する。なお、楠元遺跡とほぼ同時期である鹿児島市武遺跡では古墳初頭頃の高坏を転用した羽口が出土している。730は外面がハケ目後ナデ調整である。

甕（第90図 731）

弥生時代中期初頭頃の入来式土器である。突帯は欠損している。

石鏃（第91図 732・733）

732はハリ質安山岩，733は黒曜石を素材とする凹脚鏃である。

スクレイパー（第91図 734・737）

大型の剥片を利用したもので，縁辺を刃部としている。

石核（第91図 735）

表皮が残る黒曜石を素材とし，各方向から剥離している。

楔形石器（第91図 736）

黒曜石を素材としており，一辺を平らにして使っている。

砥石（第91図 738・739）

738は安山岩製で両面が使用されている。739は細かな目をもつ砂岩を素材とし，両面が近接するほど窪むまで使い込まれている。

軽石製品（第91・93図 740・752・753）

740は直径１㎝の棒状の対象物を研磨してできたと考えられる溝が４条ある。752は軽石両面の中央部に何度か突き刺した様な痕跡がみられる。両面とも途中でやめていることから，中央部に突き刺すという行為そのものに意味があったのかもしれない。753は風化が著しく元来の形状や目的は解らない。

石斧（第92図 741～745）

741と745は肉厚な石斧で，敲打と研磨によって入念に仕上げられている。刃部が潰れるほど敲打痕が見られるので，石斧としての機能がなくなった後も敲打具として再利用している。742は蛇紋岩製の両刃の石斧である。743は刃部と側面の研磨面の色調が元の面と異なり，再研磨した様子が窺える。744は砂岩を素材とする両刃の石斧である。

磨石（第92・93図 746～751）

746は三面がやや平坦面となるものである。747は球形の礫を使用している。748はやや扁平な円礫を用い，両面は磨石として，側面は敲石として利用している。両面の中央部にはわずかな窪みもあり凹石としての機能もある。749は焼けて黒く焦げている。751は球形に近く，側面の敲打が著しい。

凹石（第94図 754）

砂岩製で両面がほぼ均等に窪んでいる。窪み周辺の磨滅も著しく，磨石としての機能も備えている。

敲石（第94図755～758）

いずれも安山岩の小礫を素材としており，一端に粗い打撃痕が残っている。

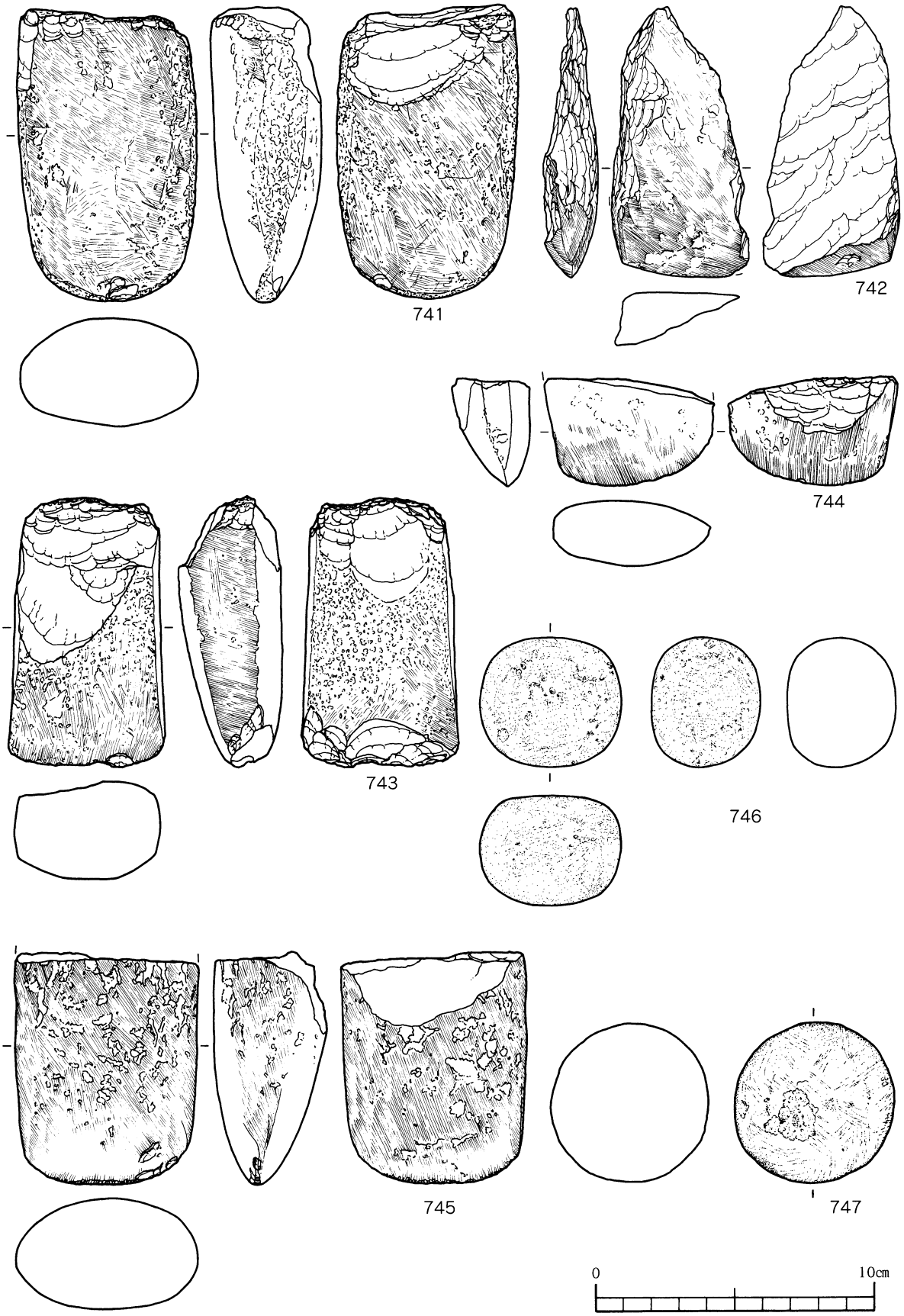
礫器（第95図761・762）

761は安山岩の主要剥離面は残し，裏面を各方向から剥離している。762は安山岩の剥片を利用し，縁辺に剥離を加えて刃部としている。

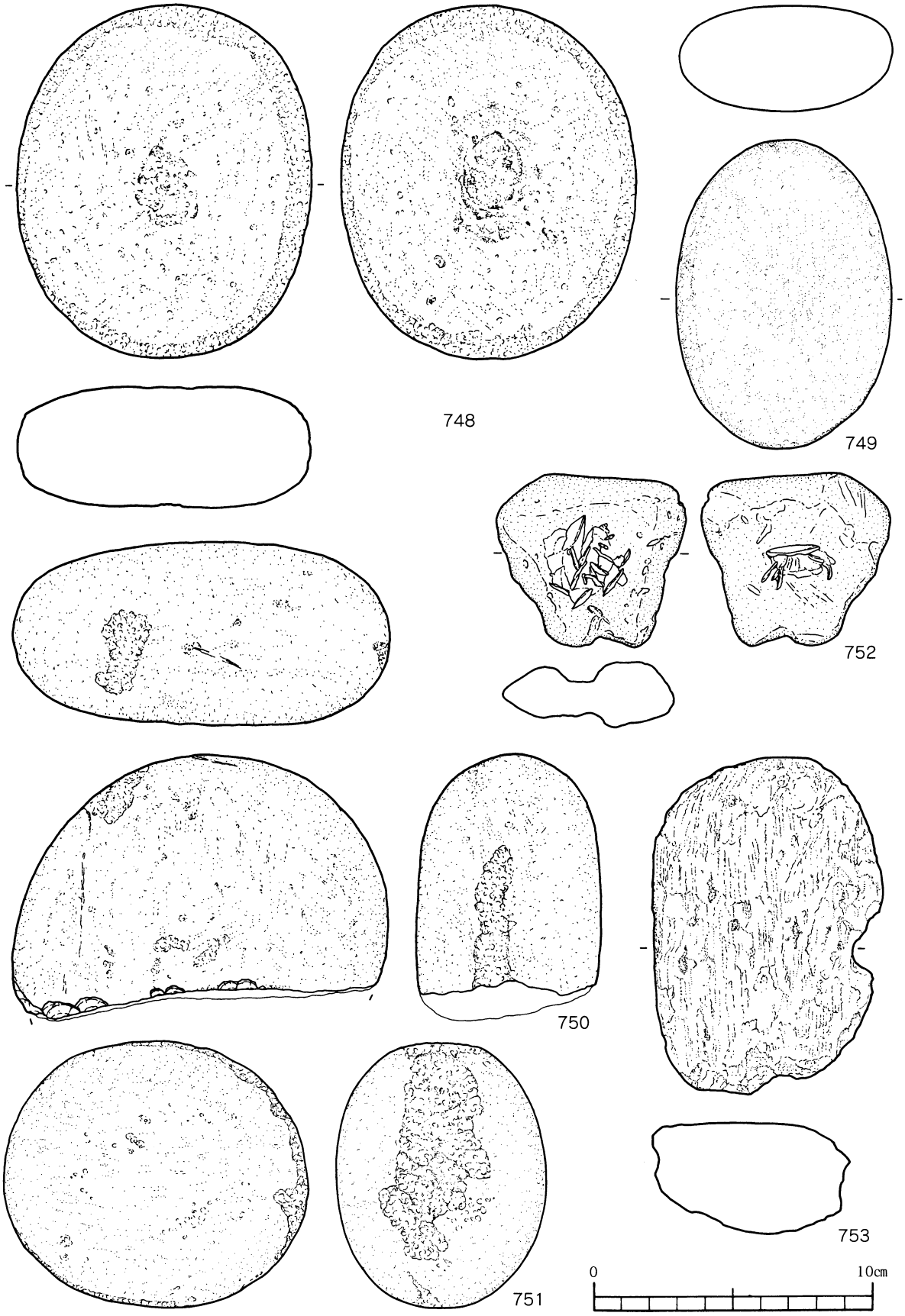
石皿（第94・第96～98図 760・763～775）

763・764は両方の平坦面を使用している。765は一コーナー部分の欠損品であるが，方形をした定形の石皿と考えられる。中央部が浅く窪んでいる。766は自然の窪んだ部分を利用したものである。767は楕円形をした定形の石皿の一部である。中央部はかなり使い込まれており，窪みも深い。768は目の細かな砂岩を素材とし，三面を使用している。三面とも凹レンズ状に窪んでいる。772は平坦な両面を使用している。片面はわずかに湾曲している。773は上面平坦部を使用しており，磨滅痕が著しい。774は安定感のある大きな安山岩を利用しており，使用面はほぼ平である。775・770・771も安山岩を素材とし，自然に窪んだ面を使用している。中央付近の磨滅が著しい。

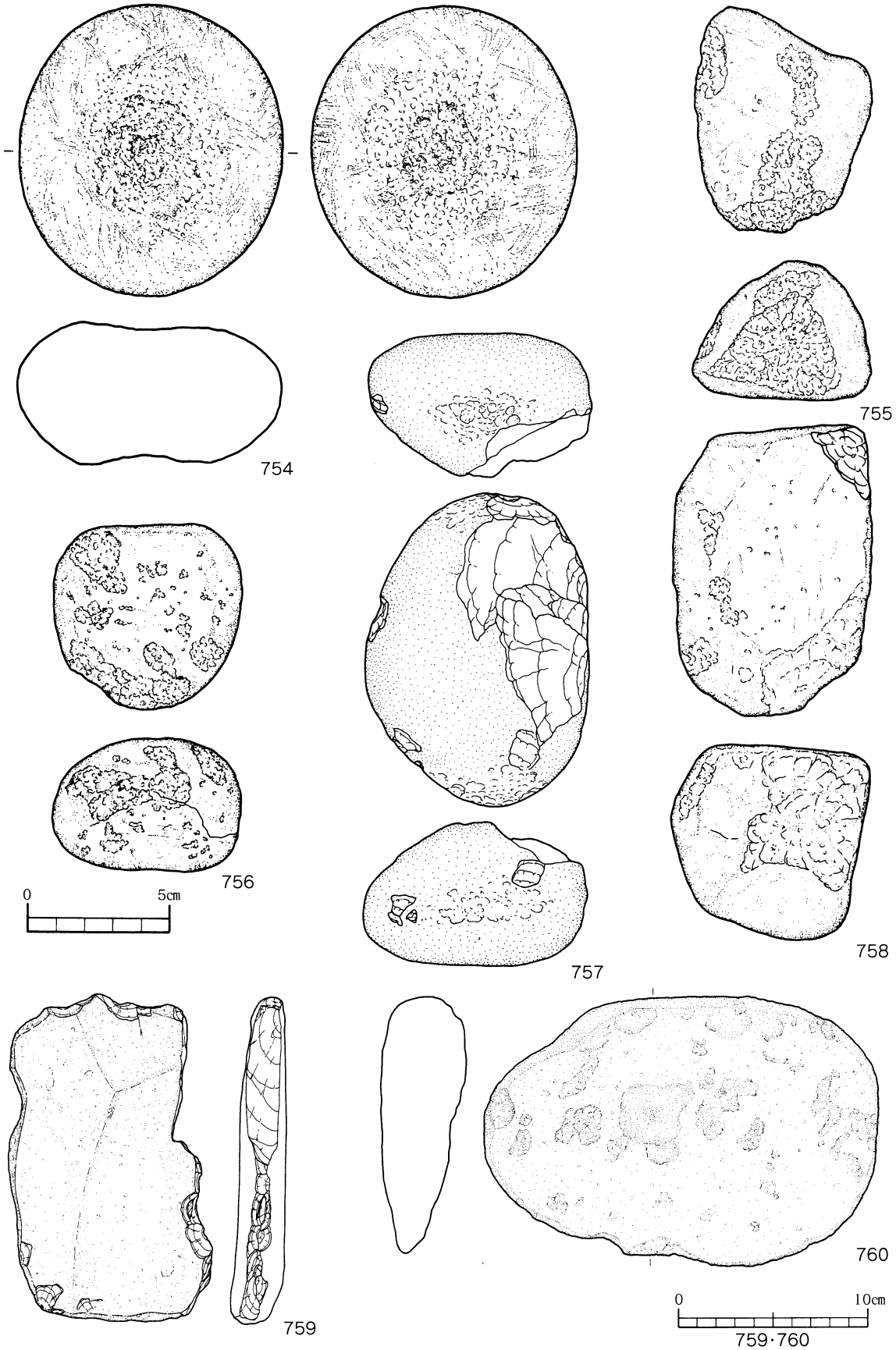
第91図　自然流路１出土石器（１）



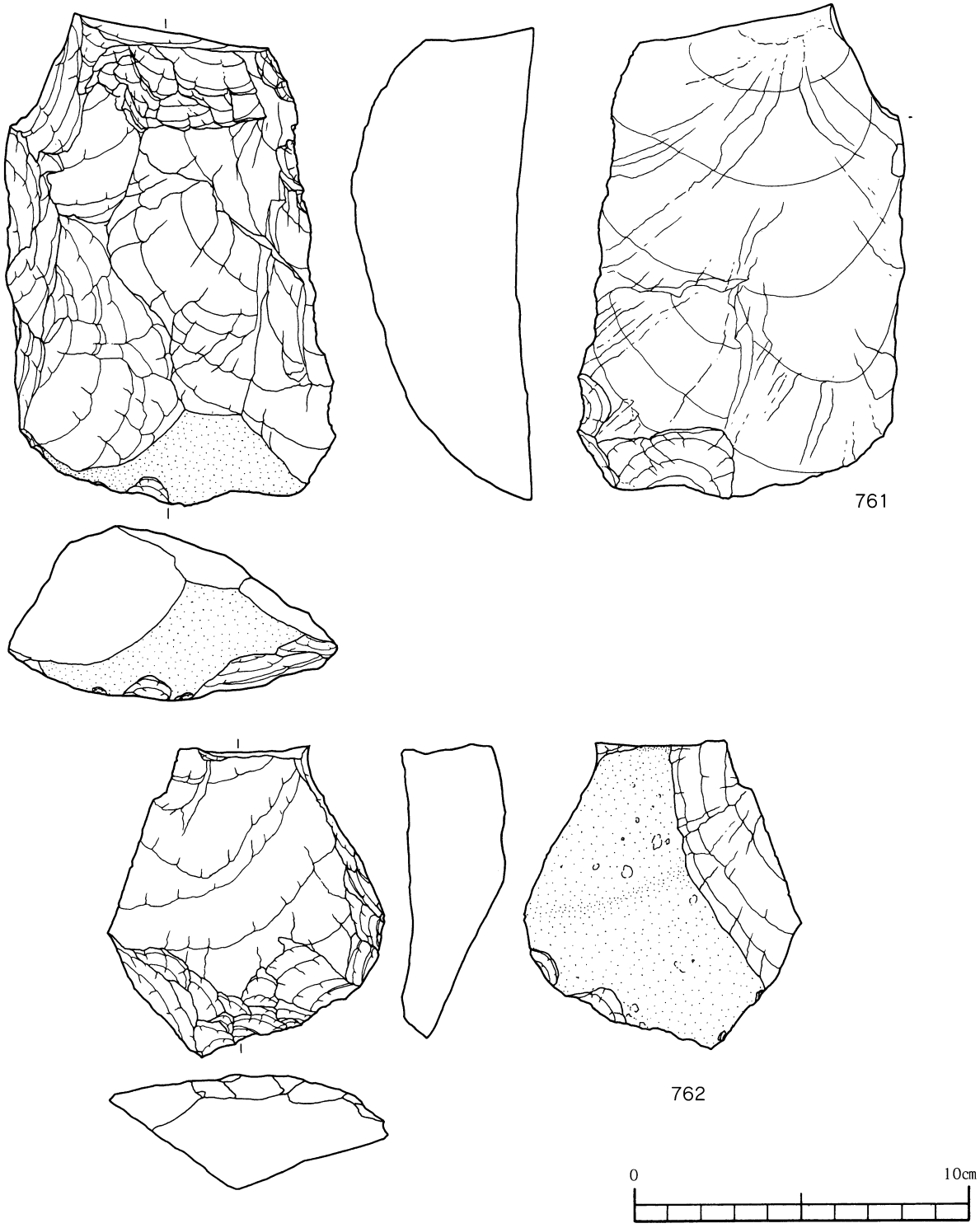
第92図　自然流路１出土石器（２）



第93図　自然流路１出土石器（３）



第94図　自然流路１出土石器（４）



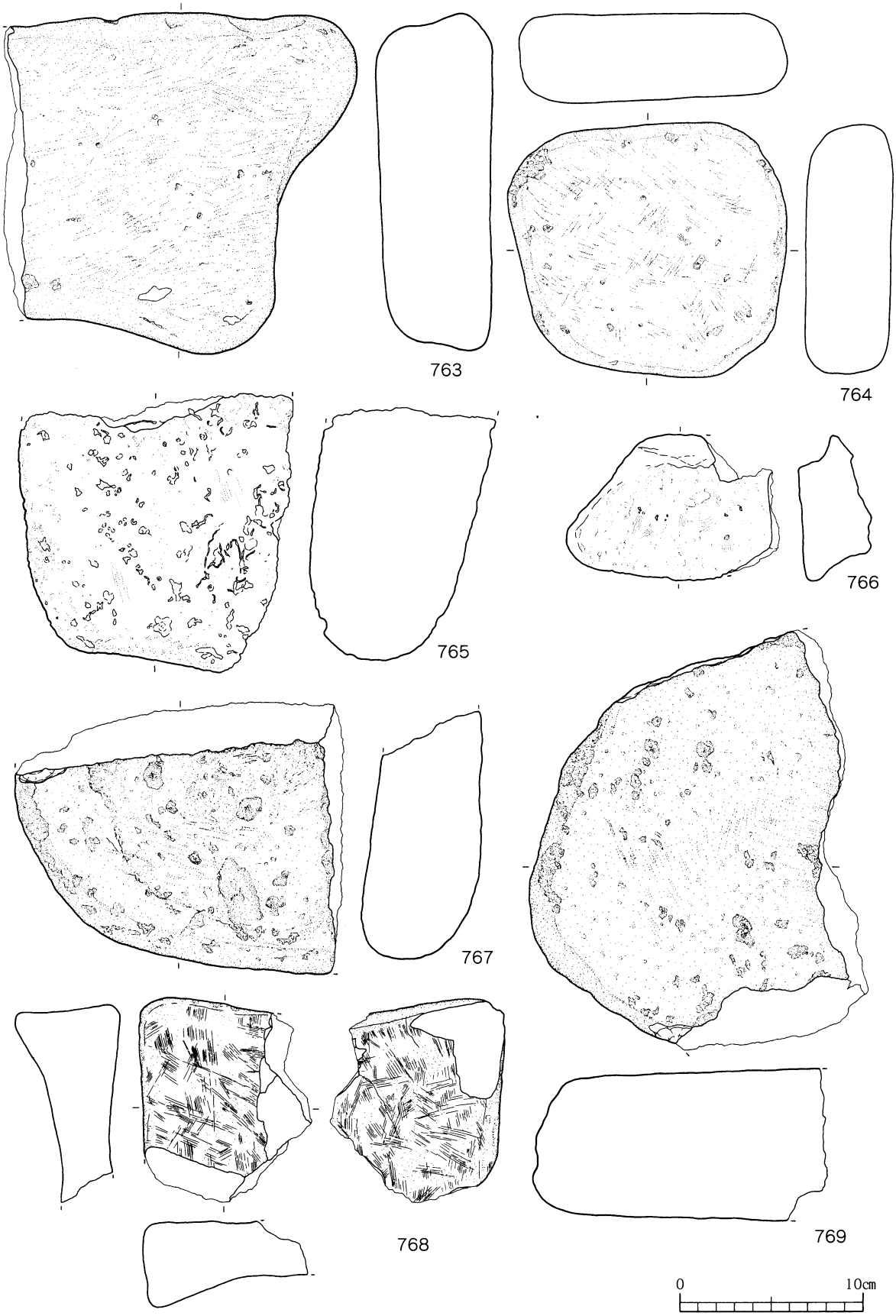
第95図　自然流路１出土石器（５）

木製品

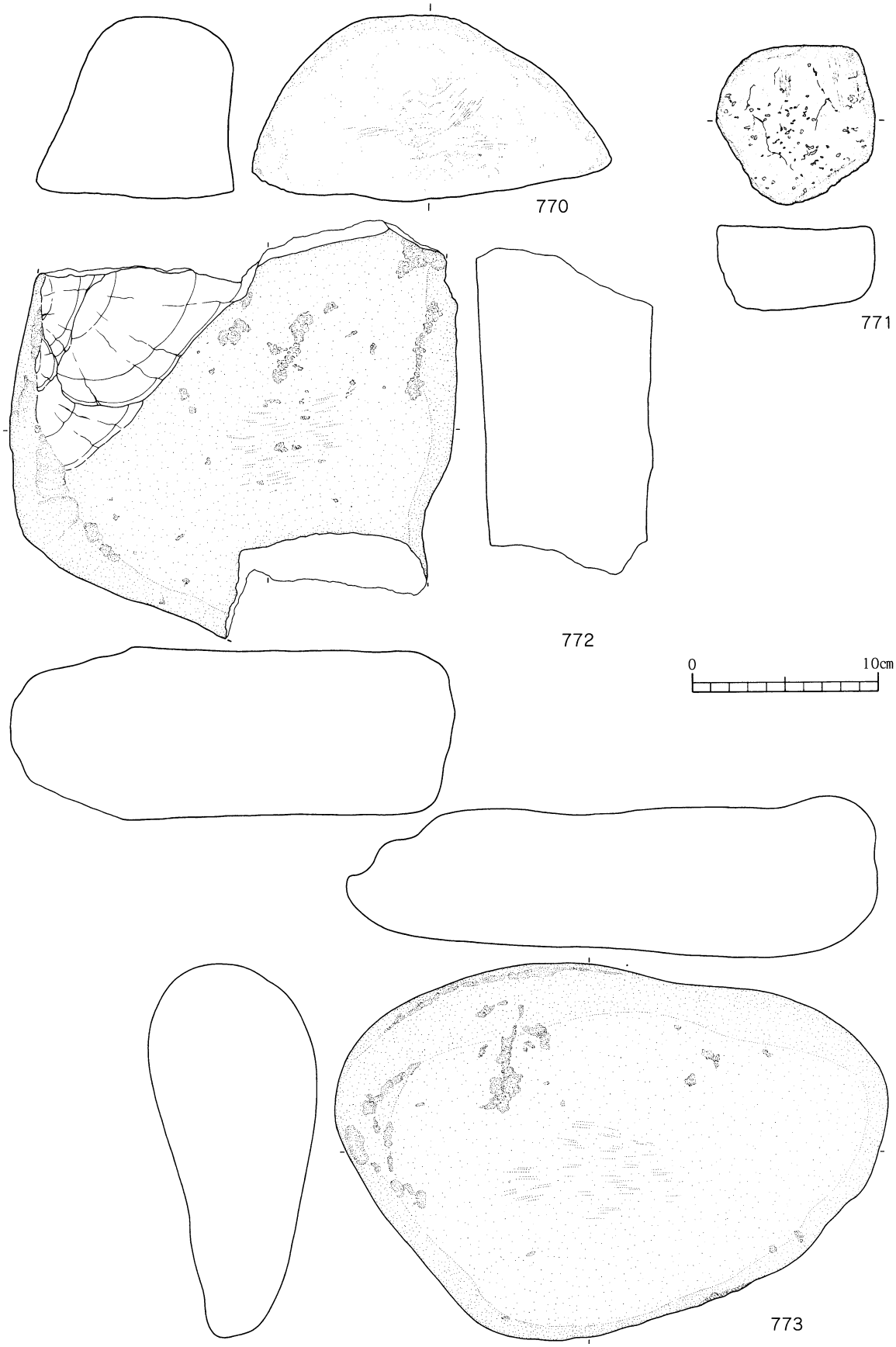
杭列１（第99図）

出土した杭３本を全て図化した。

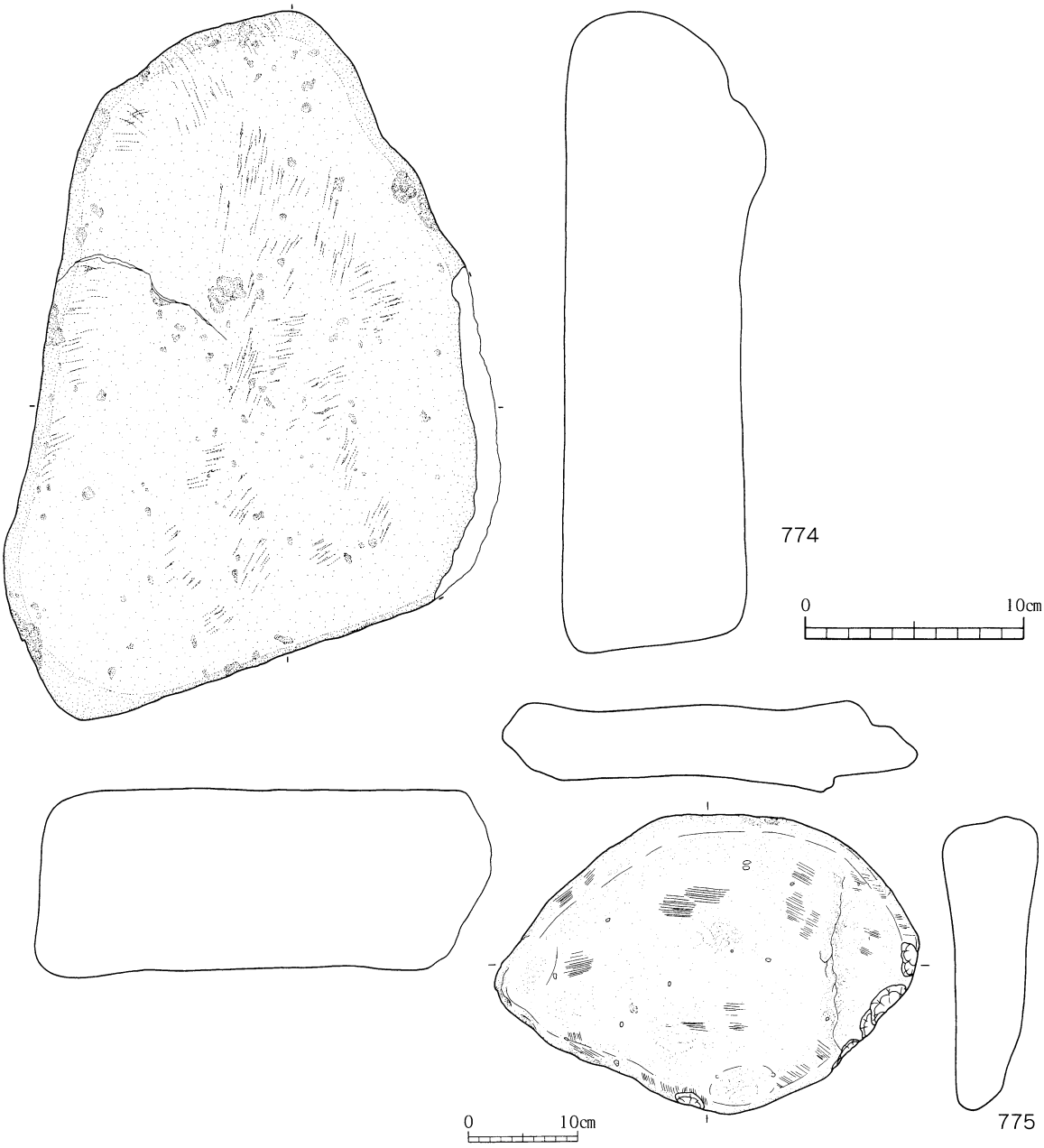
776はみかん割状の割杭で先端は多方面から加工されている。右側面には7.5ｃｍ×６ｃ



第96図　自然流路１出土石器（６）



第97図　自然流路１出土石器（７）



第98図　自然流路１出土石器（８）

ｍの範囲に圧痕が残っている。777は厚みのある板状の柾目材を利用した角杭である。先端の加工は右側面からのみ施されている。778は断面が三角形を呈する割材である。先端には砂粒が付着しており，側面は丁寧に削られている。776～778は，先端の摩耗が著しく加工痕の種類については不明である。

杭列２（第99・100図）

出土した杭24本を全て図化した。割杭と角杭によって構成され，杭列１・４に比べ小型の杭が多い。腐食が進んでいるためにほとんどが加工痕の種類を特定できない。

779～786は板状を呈する割杭及び角杭である。779・780は樹皮に近い部分を利用した板目材を利用している。779は片側のみ先端を加工している。780は上部が欠損しているがほぼ完形品である。783～786は板状の柾目材を利用している。先端の加工は，１面のみのために杭先の尖りが鈍い。784の先端は側面のみから加工されている。785は先端に加工が施されず分割材をそのまま杭としている。先端部は折れ曲がり右側面下部には，樹皮が残る。786は長さ21.6ｃｍの断面三角形を呈し、先端から離れるにしたがって薄くなる。

787～800はみかん割り材を利用した割杭である。787の先端は１面のみの加工で凸状刃こぼれ痕が残っている。787･789の先端は１面のみの加工でほとんど尖っていない。790は杭列２の中でも大型に属する。先端は１面のみの加工で摩耗のために加工単位を明確に観察することが出来ない。放射方向の２面は加工され，それ以外は無加工のために樹皮が残っている。791は先端に加工が施されていない。全体的に加工が粗雑で一部自然面が残る。794は欠損した杭の一部である可能性がある。796は右側面上部に長さ３ｃｍ，幅２ｍｍ程の工具痕が残っている。先端は潰れている。797の先端部は加工が施されていない。799の先端は摩耗し、左側面に樹皮が残る。800の先端はつぶれて砂粒が付着している。

801は芯持材を半裁し，杭としている。802は断面が方形状を呈する割杭である。先端は無加工で潰れている。

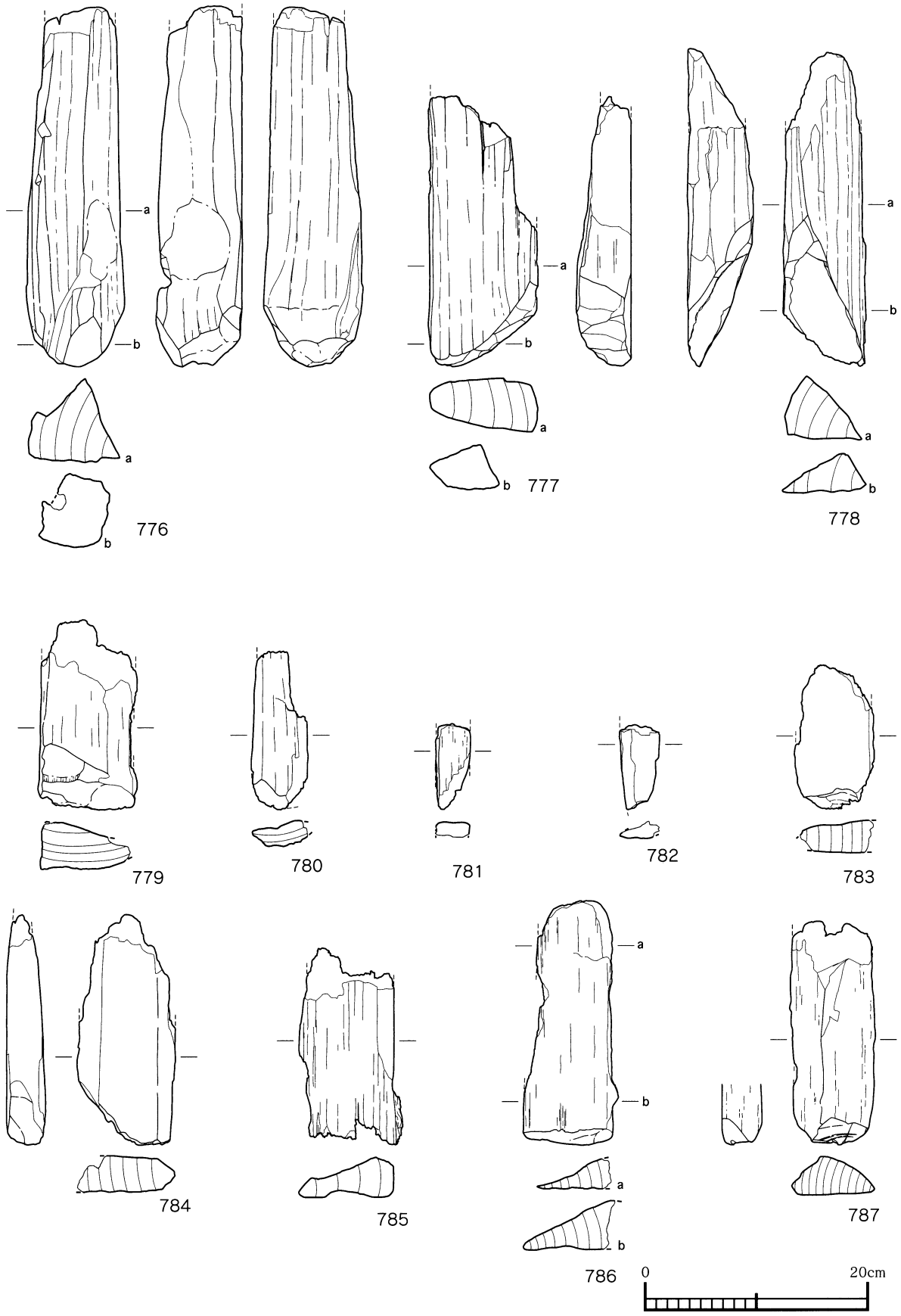
杭列３（第101・102図）

出土した杭28点中，27点を図化した。杭列３は小型の角材と丸杭によって構成されている。

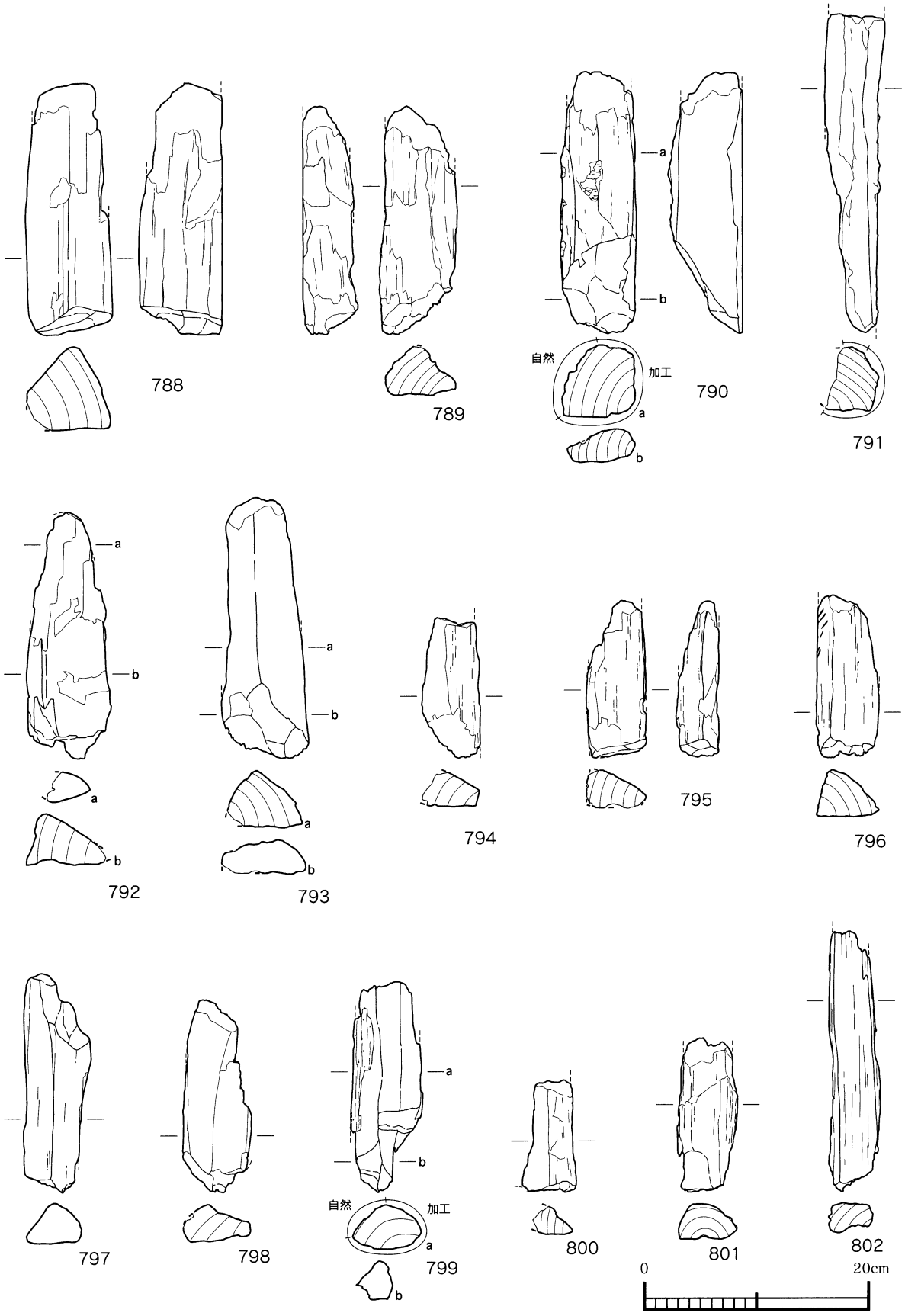
803～808は板状に加工された杭である。803は板目材を使用し，先端に加工は施されていない。804～808は柾目材を使用している。804は上端を一部欠損しているがほぼ完形に近い。杭の上部は側面が三角形を呈している。先端は側面一面のみの加工で，刃線痕が木端に覆われていることから加工の種類はＡ種刃線痕と考えられる。加工部には凸状刃こぼれ痕が残っている。806は厚さが1.8ｃｍと薄く押圧による浅い凹みが左側面付近に残っている。先端は潰れ，折れ曲がっている。

809～815は芯持材を利用した丸杭である。加工の種類は809～813がＡ種刃線痕，814はＢ種刃線痕の可能性がある。809の先端は一面の加工で、加工部の上部には工具痕が残り，先端は潰れている。813の先端は３面に加工され，凸状刃こぼれ痕がみられる。814の先端は一面のみ加工されている。加工部は摩耗しているために細かな区画稜線は残っていないが，加工痕幅が1.5ｃｍと狭く断面形が湾曲しない点や，刃線痕が木端に覆われずに段差となって残っていることからＢ種刃線痕の可能性が高いと考えられる。

816～829は断面が三角形に近いみかん割り状の割杭及び断面方形の角杭である。腐食が進んでいるために加工痕の残りは悪い。816は先端を２面に加工している。先端は潰れており加工の種類は不明。818・819は欠損した杭の一部と思われる。820の先端は無加工で，潰れて折れ曲がっている。821は長さ45.3ｃｍ，幅6.9ｃｍの割杭で，杭列３の中



第99図　杭列２（１）


788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
自然
加工
a
b
0
20cm

第100図　杭列２（２）

では大型の部類に属する。先端は多方面から加工されているが摩滅のために加工痕の種類は不明。822は長さ39.6ｃｍ，幅4.1ｃｍの断面方形を呈する角杭である。右側面付近には削り痕が残り，先端は右半分が欠損している。823は幅18.7ｃｍ，厚さ9.4ｃｍと厚みのある角杭である。断面方形に加工された杭の上部に加工痕がみられ，樹皮が残っている。先端は磨耗している。824は割杭で中央部から上部にかけて幅４ｃｍ，長さ６ｃｍの圧痕が残っている。827は断面が方形をする角杭である。先端は欠損しており，杭の中央部には圧痕が残る。丁寧に成形されていることから建築部材を転用した可能性がある。

杭列４（第103・104図）

32点中27点を図化した。丸杭，割杭，角杭によって構成され，杭列の中で最も出土数が多く大型の杭を含んでいる。また，杭ではないものの板状の木製品も含まれており本来は杭と組み合わさって遺構を構成していた部材の可能性がある。

830～832は板状に加工された杭である。830・831は樹皮付近を利用した板目材に近い材を利用した杭である。830の先端は片側のみから加工され，尖りは鈍い。831は先端に加工が施されていない。832は柾目材を利用した杭で，先端が潰れている。

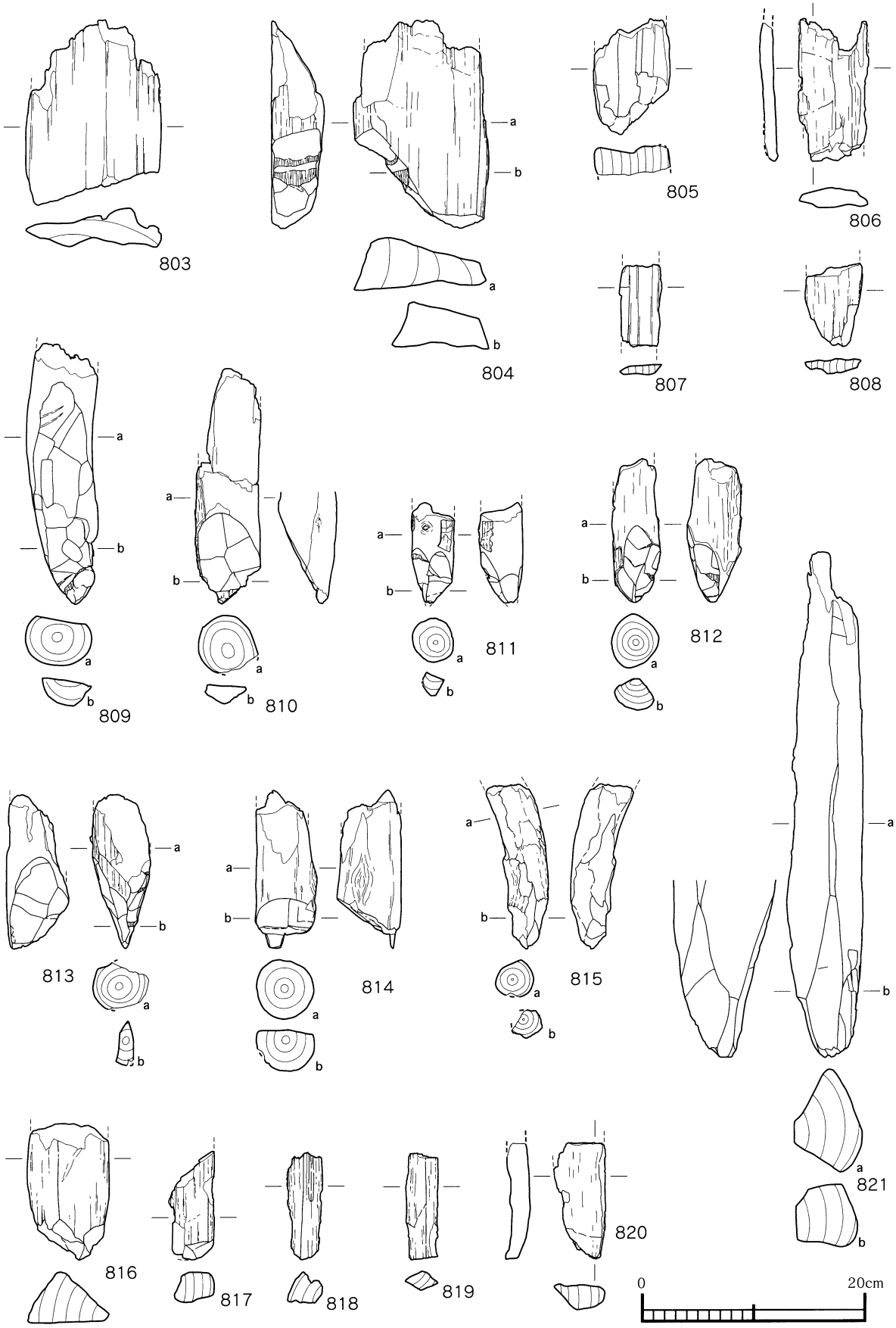
833～836は芯持材の先端を加工した丸杭である。加工痕の種類は833～835がＡ種刃線痕で836がＢ種刃線痕の可能性がある。833は先端を２面に加工し，加工部には凸状刃こぼれ痕が残る。834の先端は２面から加工され杭全体を樹皮が覆う。836は先端を２面に加工している。刃線痕が木端に覆われず，加工単位の断面形も湾曲していないことから，Ｂ種刃線痕の可能性がある。加工部に細かな工具痕が残る。

837～852までは，割杭及び角杭である。837は断面形が三角形状を呈する大型の割杭である。先端部の加工は１面で幅2.2ｃｍの刃線痕が多数重複している。磨耗のために加工単位は明らかでないが，刃線痕の幅が狭く木端に覆われていないことから加工の種類はＢ種刃線痕であると思われる。838は杭先が多方面から加工され，先端は潰れている。加工単位が複雑に重複し，加工の特徴が837と同様であるためにＢ種刃線痕であると考えられる。839は杭全体に樹皮を残している。加工の種類はＡ種刃線痕である。841の先端は平坦で，製材段階の切断面をそのまま杭先に利用したと思われる。842はみかん割り状の割杭である。杭は先端部から離れるに従って細くなり下部には圧痕が残されている。843・844の先端は１面のみの加工である。845は断面方向形の角杭で，先端は無加工である。849・850も断面が方形を呈する角杭である。849の先端は，４面から短く加工している。850は先端に加工が施されていない。851・852は断面が三角形状を呈するみかん割り状の割杭で，共に先端は無加工である。853・854は欠損した杭の一部と思われる。腐食が著しい。855・856は断面形が扇状で板状を呈する。厚みがなく先端部に加工が施されていないために杭ではないと思われる。共に，上端近く程厚みがなくなる。残存長は855が38ｃｍ、856が59.3ｃｍである。

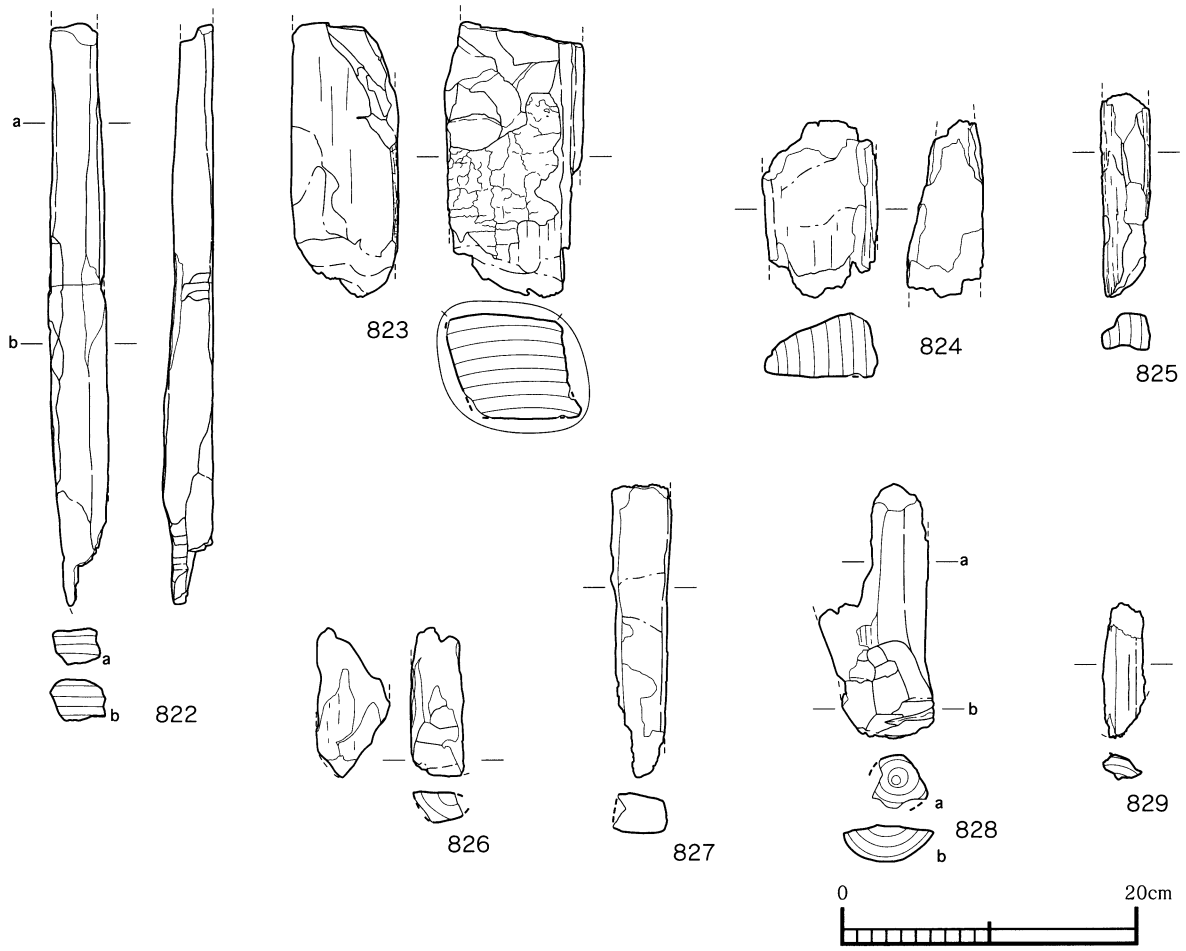
杭列５（第105図）

出土した６点中全てを図化した。

857はみかん割り状の割杭で，先端は３面に加工されている。無加工の部分には樹皮が残


803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
0
20cm

第101図　杭列３（１）



第102図　杭列３（２）

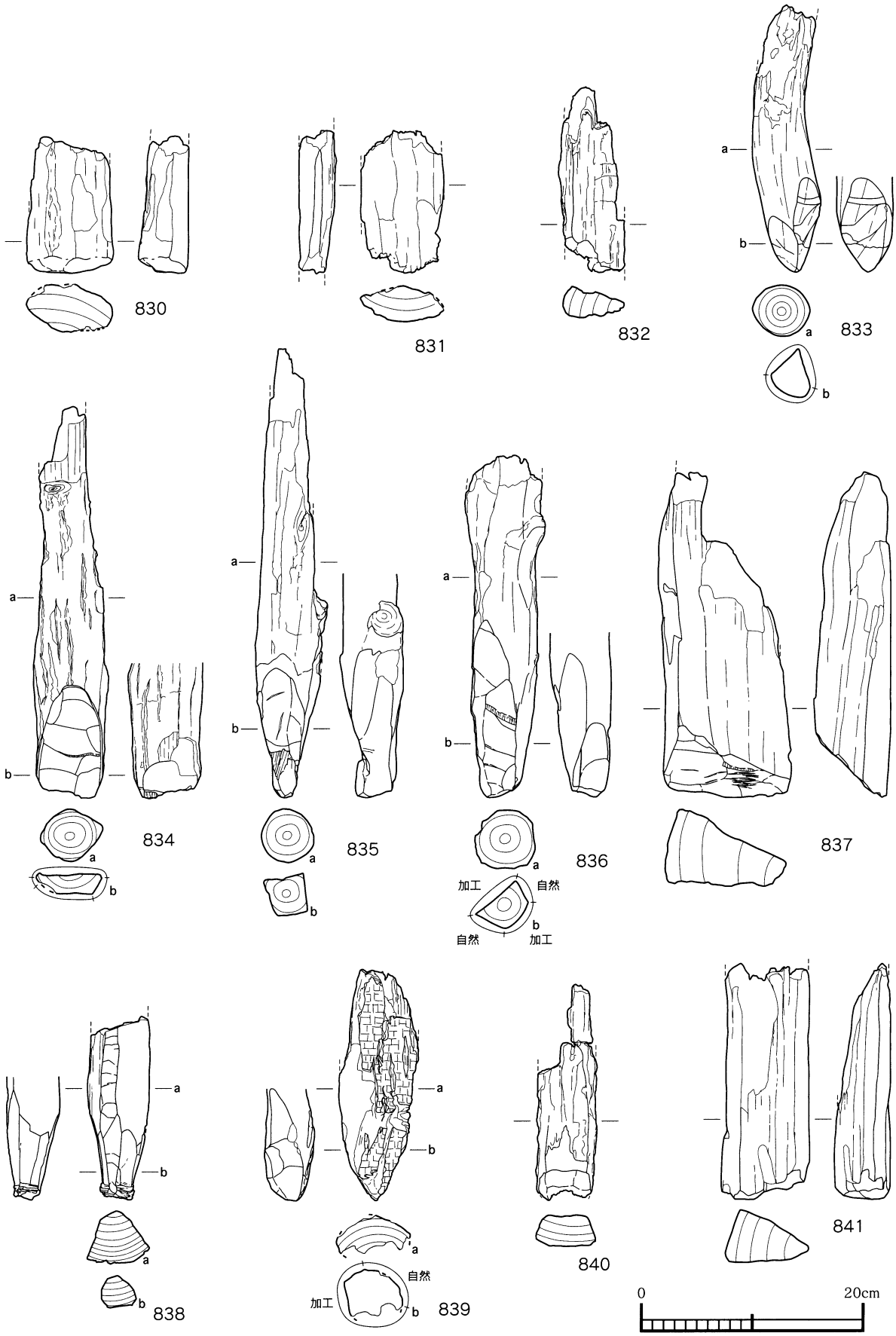
る。858～859は先端の加工がほとんど施されていない。862は全長52ｃｍ、幅７ｃｍ，厚さ1.4ｃｍの板目板である。欠損しているため，杭として使用されたかは不明である。丁寧に成形されているため，建築部材の転用品と思われる。

自然流路１出土木製品

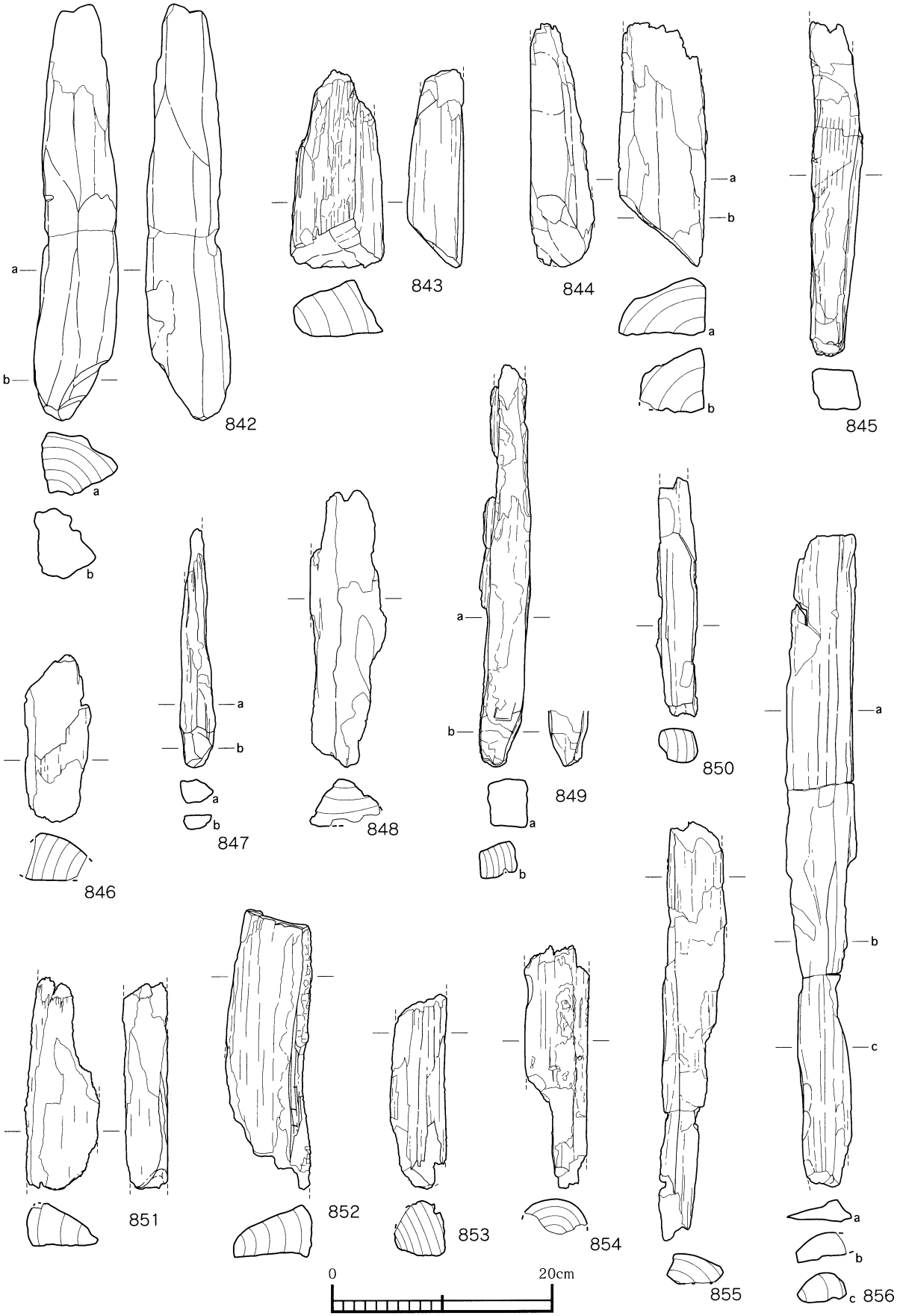
総数233点の木製品が出土した。木製品の大半は杭と製材片である。その中から用途が特定できるものと建築材の可能性があるもの42点を図化した。

鍬（第106図 863・865～867）

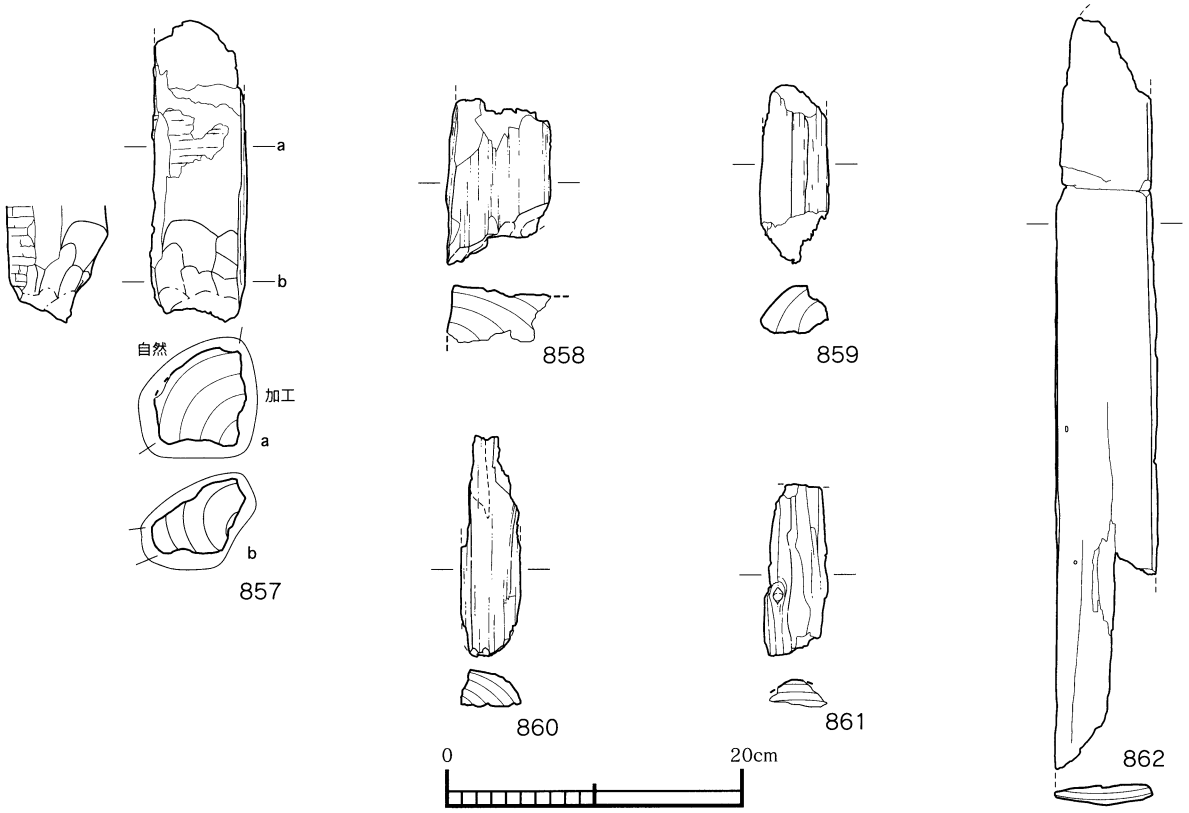
863は曲柄又鍬で，刃部の右側を欠損している。三又鍬で本来は刃部が三歯となるものである。全長は51.4ｃｍで軸部長5.5ｃｍ，刃部長45.9ｃｍである。軸部は短く断面形が“かまぼこ”形となり，軸頭は上端から５ｍｍ程削り残すことによって作られている。軸部と刃部の境は平面形，厚み共に明瞭に段を持ち，刀部の両側はほぼ平行して長く伸びると考えられる。刃部は断面形がかまぼこ形に近く，先端は使用による磨耗のために丸みを帯びている。注目されるのは，鍬身の中心に沿って軸部と刃部の２か所に浅い溝が掘られている。前者は



第103図　杭列４（１）


842
843
844
845
846
847
848
849
850
851
852
853
854
855
856
0
20cm

第104図　杭列４（２）



第105図　杭列５

長さ6.5ｃｍ，幅５ｍ，深さ３ｍｍの断面Ｖ字状を呈し、後者は長さ8,1ｃｍ，幅６ｍｍ，深さ２ｍｍ程である。刃部の中でも軸部に近い部分には長さ5.7ｃｍ，幅1.3ｃｍ程の加工痕が残っている。865は曲鍬の刃先部分である。先端が磨耗しており，863と同一のものである可能性がある。866，867は又鍬の刃部である。断面形は片面が平担で，もう一方の面が凸レンズ状に中央部が膨らみ，外側の縁辺部に向かって薄くなる。共に腐食が著しく加工痕は観察することができない。

組み合わせ鋤（第106図 864）

864は組み合わせ鋤と呼ばれる木製品の身である。半欠した身は先端に向かって緩やかに広がり、上部には縦5.5ｃｍ，横1.8ｃｍ以上の孔が開けられている。刃部先端の縁辺部には，長さ11ｃｍ，幅１ｃｍに渡って削られており鉄製の方形板刃先を装着した痕跡と思われる。断面形は両面とも平坦で縁辺部が薄くなり、刃部の先端は摩耗している。身に一対の孔を開けるものは鹿児島市鹿児島大学構内遺跡、都城市坂元Ａ遺跡、川内市京田遺跡で出土しており，本製品も同様の形態であると思われる。

鍬の柄（第106図 868）

868は枝分かれ部分を利用にしてつくられた膝柄である。幹を鍬身装着のための鍬台，枝を握りに仕上げている。残存している鍬台の装着面の大きさは長さ10.2ｃｍ，幅3.6ｃｍ，握りの直径は2.7ｃｍである。

農具未製品（第107～109図）

869は曲柄又鍬の未製品と思われる。軸部と刃部は別々の地点から出土しているが，同一の可能性がある。軸部は残存長19.6ｃｍ，刃部の残存長は75.6ｃｍである。軸部は上端近くで両側に小さく張り出し，刃部に向かって緩やかに広がる。欠損、腐食が著しい。刃部は左端の刃先が欠損している。軸部との境から緩やかに外側に広がり，刃部の両側は平行して長く伸びると考えられる。ホーク状になる刃部の長さは不揃いで，先端は粗く切断されている。断面形は両面とも平坦で不定形であることや、加工痕が863に比べ粗雑であることも製作途中であるためと思われる。870～873は羽子板状に加工された農具未製品である。全て柾目板である。870・871は板材の上部を「ハ」の字状に加工している。断面形は片面が平坦でもう一方の面が凸レンズ状に丸みを帯びる。側面は870の右側面を除き垂直に切断されている。幅2.4ｃｍ，長さ5.4ｃｍ程の加工痕が残っている。870は残存長83ｃｍ，最大幅17.4ｃｍ，厚さ３ｃｍで871は残存長84.6ｃｍ，最大幅22.8ｃｍ，厚さ3.7ｃｍである。872は右側面が上端から外側へ開き，そこから両側面が平行して下端へと伸びていく。断面形は，右側面側が薄くなるために三角形状を呈し，左側面が平坦となる。腐食のために加工痕は不明である。残存長67.4ｃｍ，最大幅23.4ｃｍ，厚さ4.8ｃｍである。873は接合しないが，隣接して出土したことから本来同一のものと思われる。上部は両側から加工され幅が狭くなっている。断面形は両面が凸レンズ状に膨らみ，両側面に向かって薄くなる。欠損や腐食が著しい。上部の破片の残存長は30.2ｃｍ，最大幅15.2ｃｍ，厚さ3.5ｃｍである。下部の破片は残存長13.8ｃｍ，最大幅12.6ｃｍ，厚さ3.8ｃｍである。

横鍬（第110図 874）

874は横鍬である。刃部は平刃となり，柄穴より上端は欠損している。右側面の加工痕は，２次加工の可能性がある。柄穴の最大直径は3.6ｃｍで，その周囲はわずかに隆起している。柄は刃部に対して直角に差し込まれたのではなく，55°程中心側に傾いて差し込まれたと思われる。着柄角度は左側を後面とした鈍角の場合で113°前後である。

丸木弓（第110図 875）

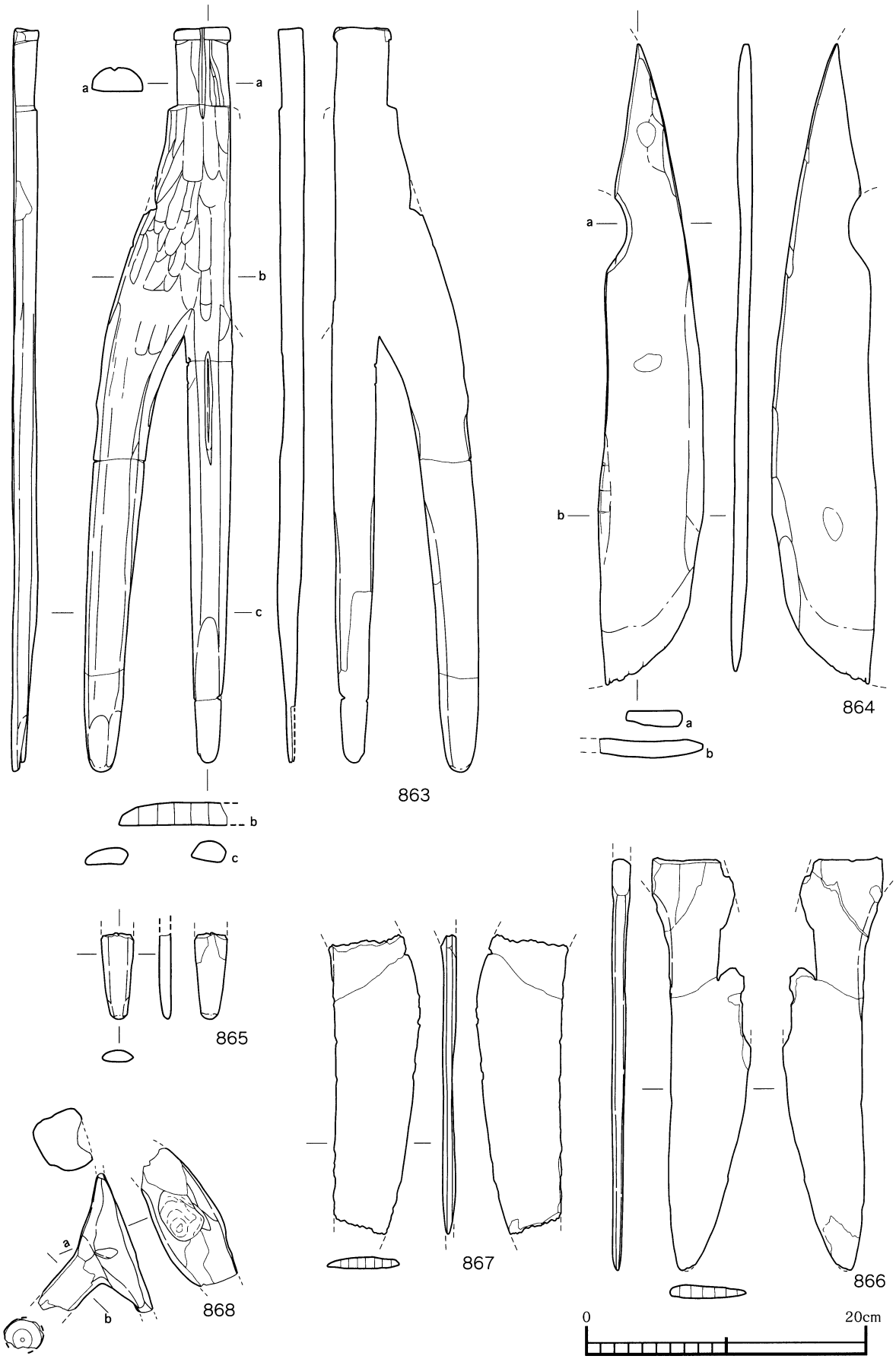
875は弓幹両端が欠損した丸木弓である。弓幹の周囲を丁寧に削った後，内彎面を幅1.1㎝程平坦に削っている。弓幹の大部分は炭化している。残存長50.2ｃｍ，最大幅2.6ｃｍ。

柄（第110図 876・877）

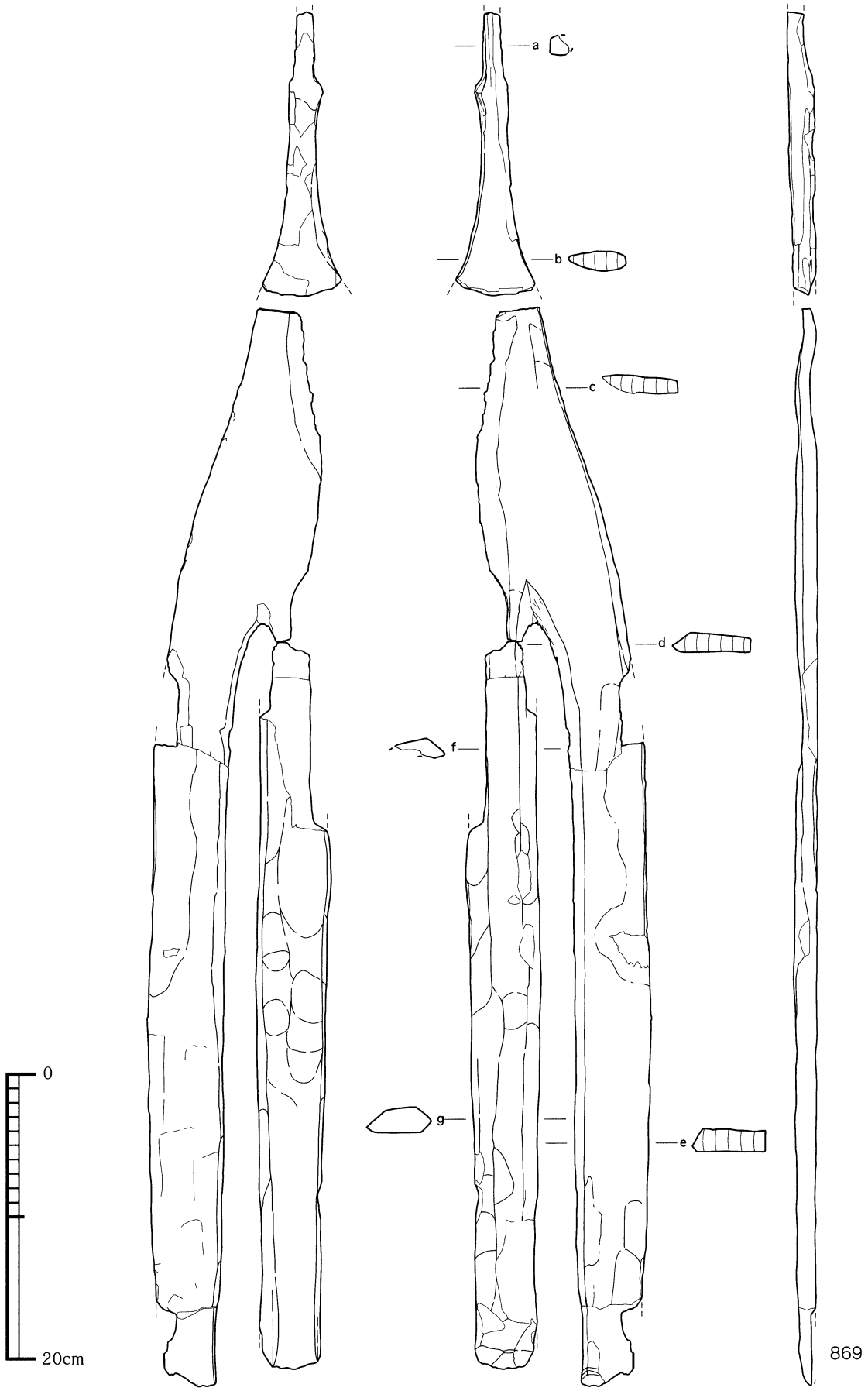
876は割杭を利用した柄である。断面形は円形で身に近い部分は幅が広くなり厚さが薄くなる。上面は丁寧に加工され，身に近い部分は炭化している。掘り棒の可能性が考えられる。877は芯持材を利用している。断面は円形で上面を丁寧に加工している。全体的に丁寧な加工は施されていない。

堀り棒（第111図 878）

878は平面形が楕円形で，踏み込むための肩が発達していないことから，掘り棒の身であると思われる。厚みは1.4ｃｍで断面形は片方が平坦に近く，もう片方が凸レンズ状に丸みを帯びる。先端は使用のため摩耗している。

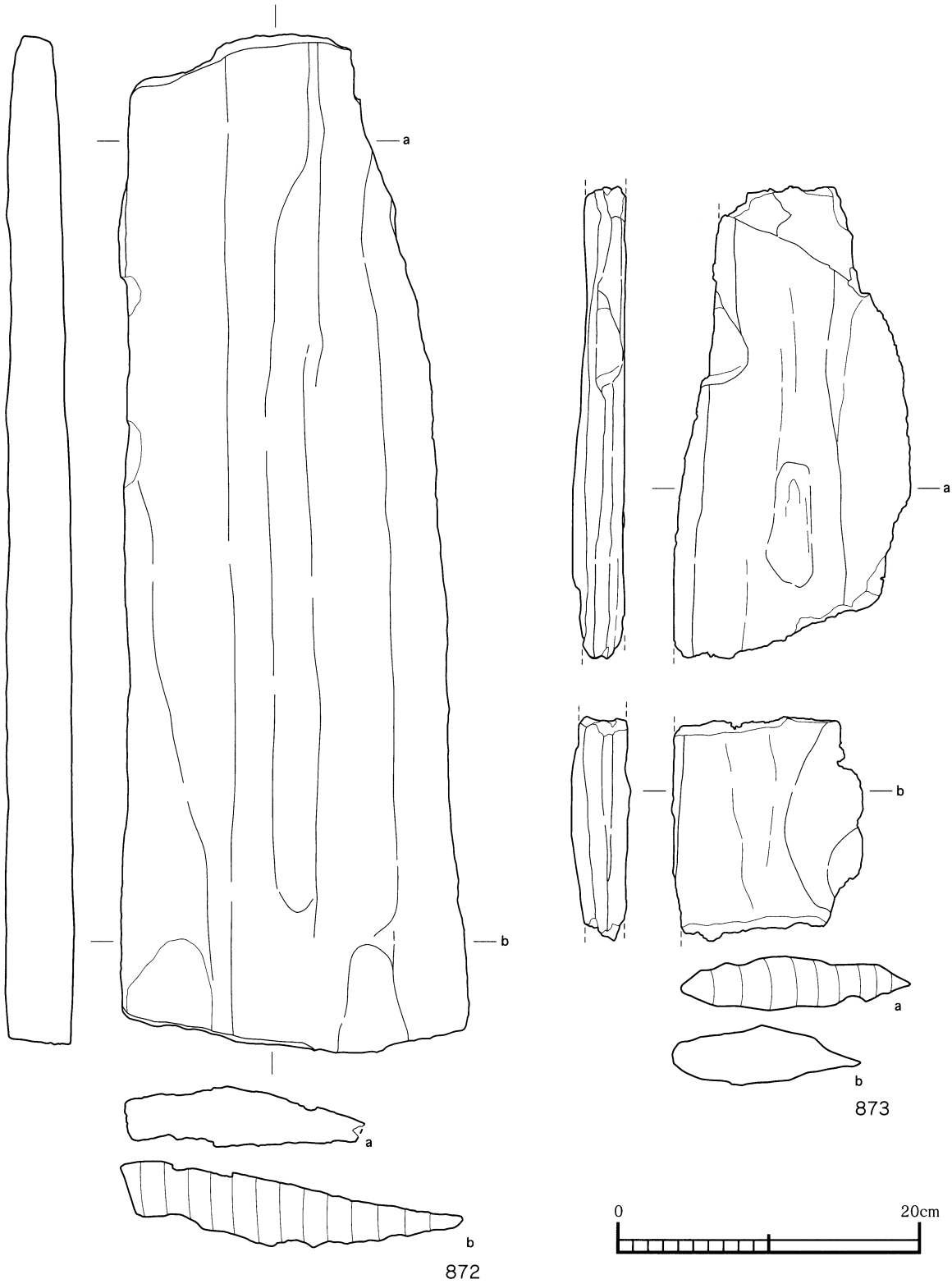


第106図　自然流路１出土木製品（１）



第107図　自然流路１出土木製品（２）

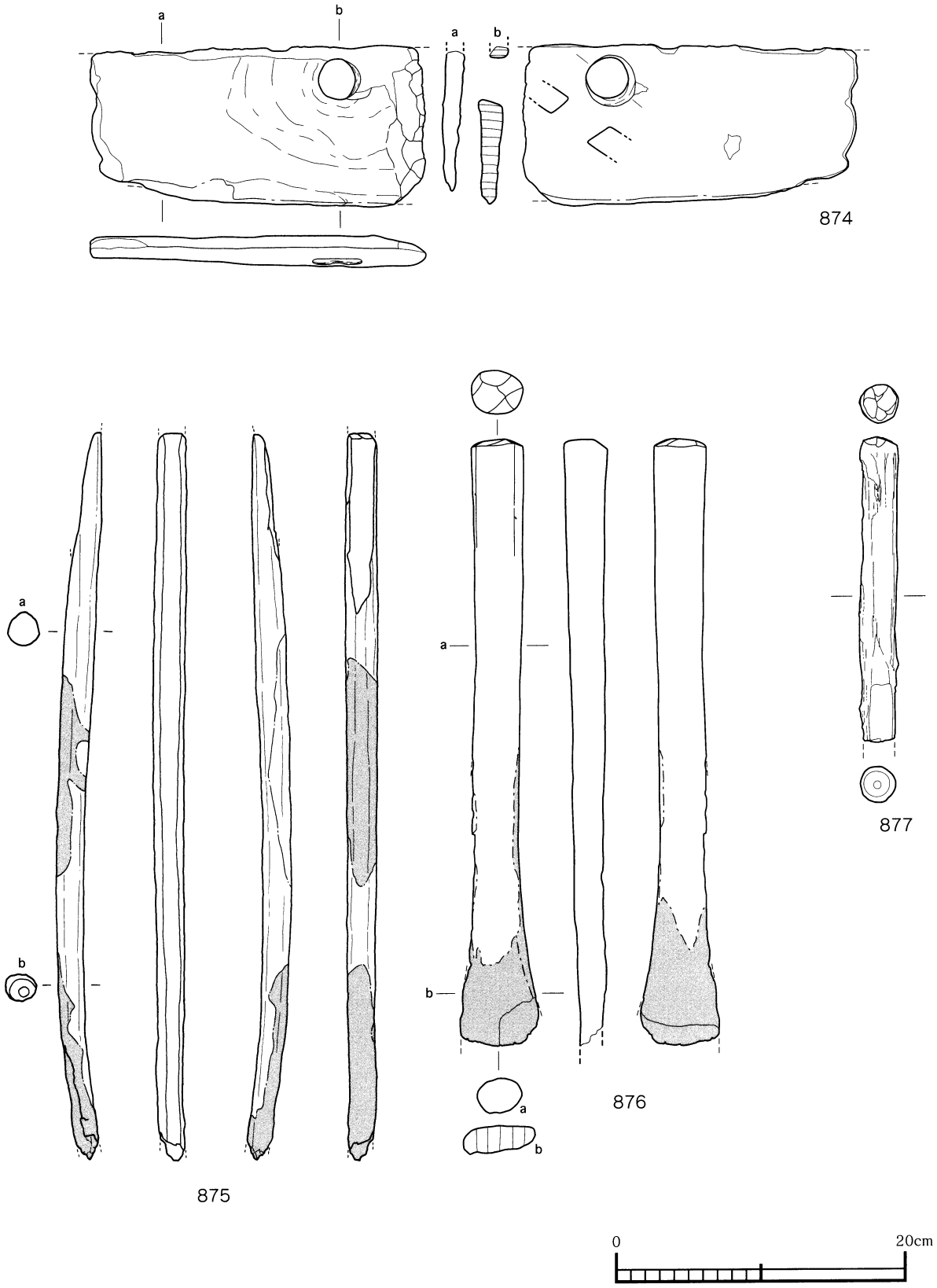
第108図　自然流路１出土木製品（３）



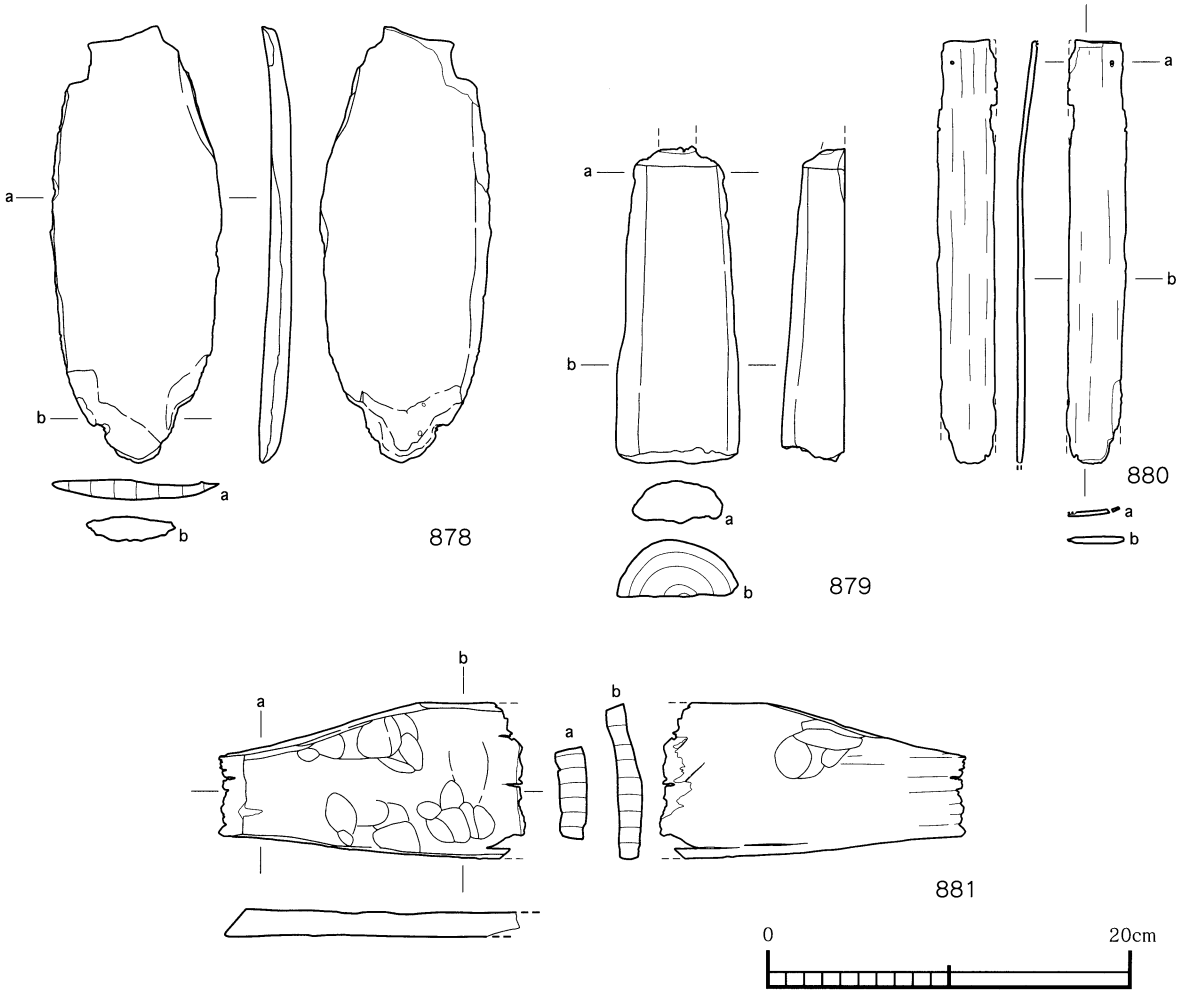
第109図　自然流路１出土木製品（４）

その他の木製品（第111図879～881）

879は芯持材を半裁しているが，加工と欠損のどちらであるかは不明。平面形は上端から下端に向かって幅が広がり，上面には幅２ｃｍ程の突起がつく。880は厚さ3ｍｍの薄い板材である。上部は折れ曲がっている。881は上下両端から中央にかけて浅く湾曲している。



第110図　自然流路１出土木製品（５）



第111図　自然流路１出土木製品（６）

織機の一部である腰当ての可能性が考えられる。

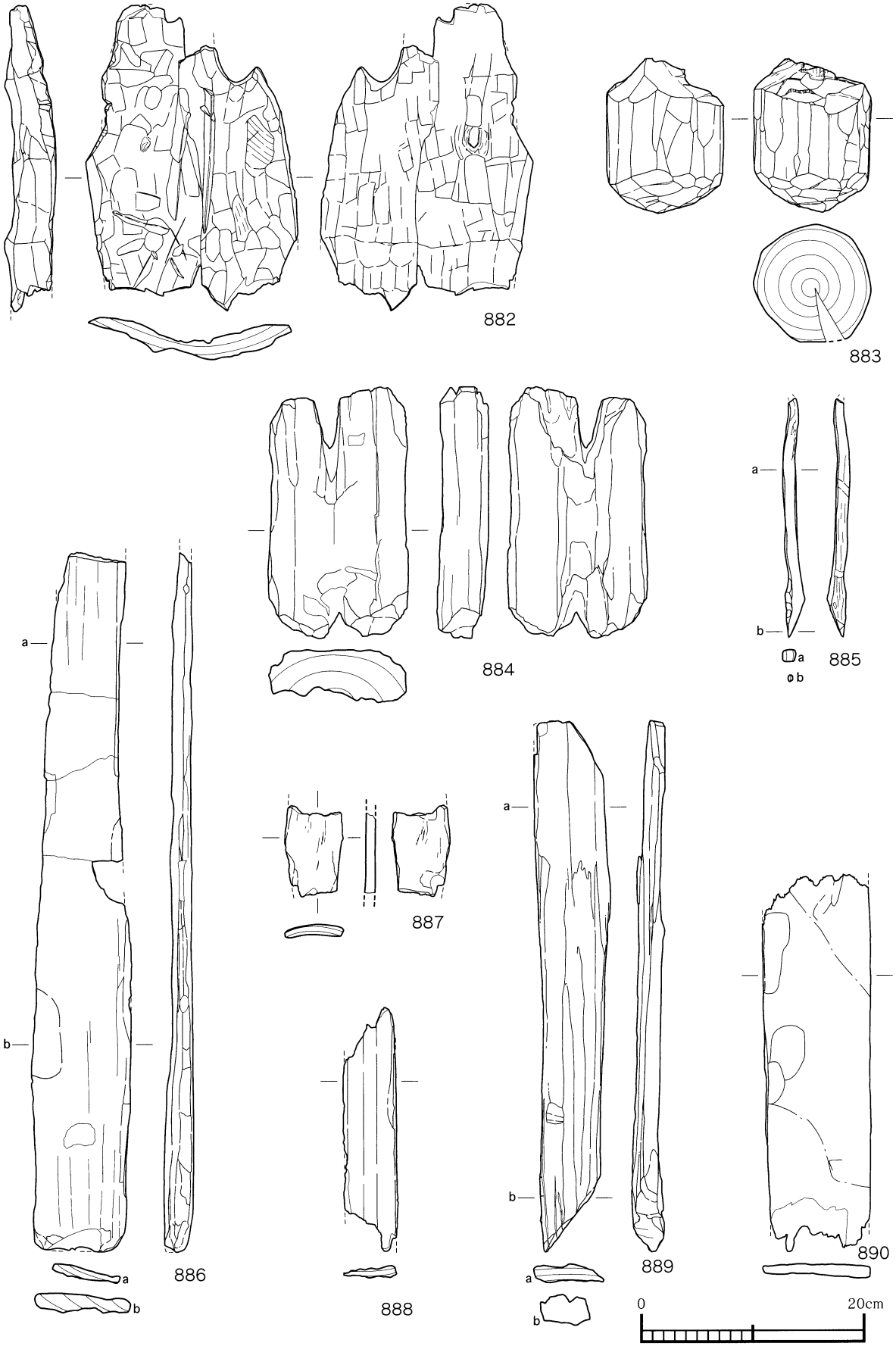
不明木製品（第112図 882～885）

882は板目材を利用している。平面形は不定形で断面は浅い皿形を呈している。両面に加工痕が多く残り側面は切断されている。883は直径10.5ｃｍの円柱状を呈し，多方面から縦方向に加工されている。両端は切断されており，Ａ種刃線痕が残っている。884同様木錘の可能性が考えられる。884は平面形が長方形を呈し，その両端は「Ｖ」字状の抉りが施されている。抉りの長さは上端が7.4ｃｍ，下端が2.2ｃｍである。裏面は両面の抉りに対応するように浅く凹んでいる。885は棒状の先端が加工され尖っている。断面は方形で全面に丁寧な加工が施されている。

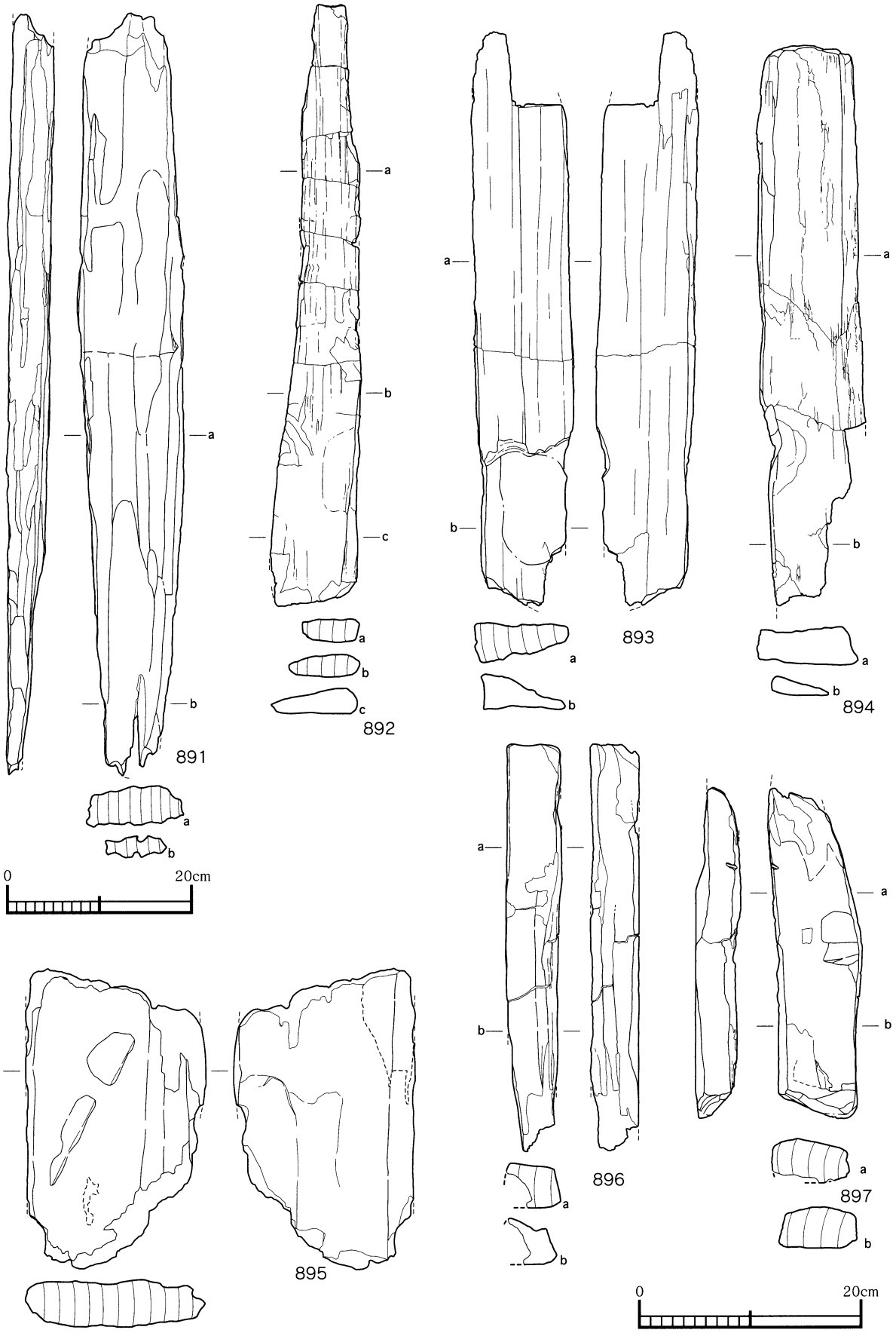
建築材の可能性がある木製品

板状木製品（第112・113図 886～895）

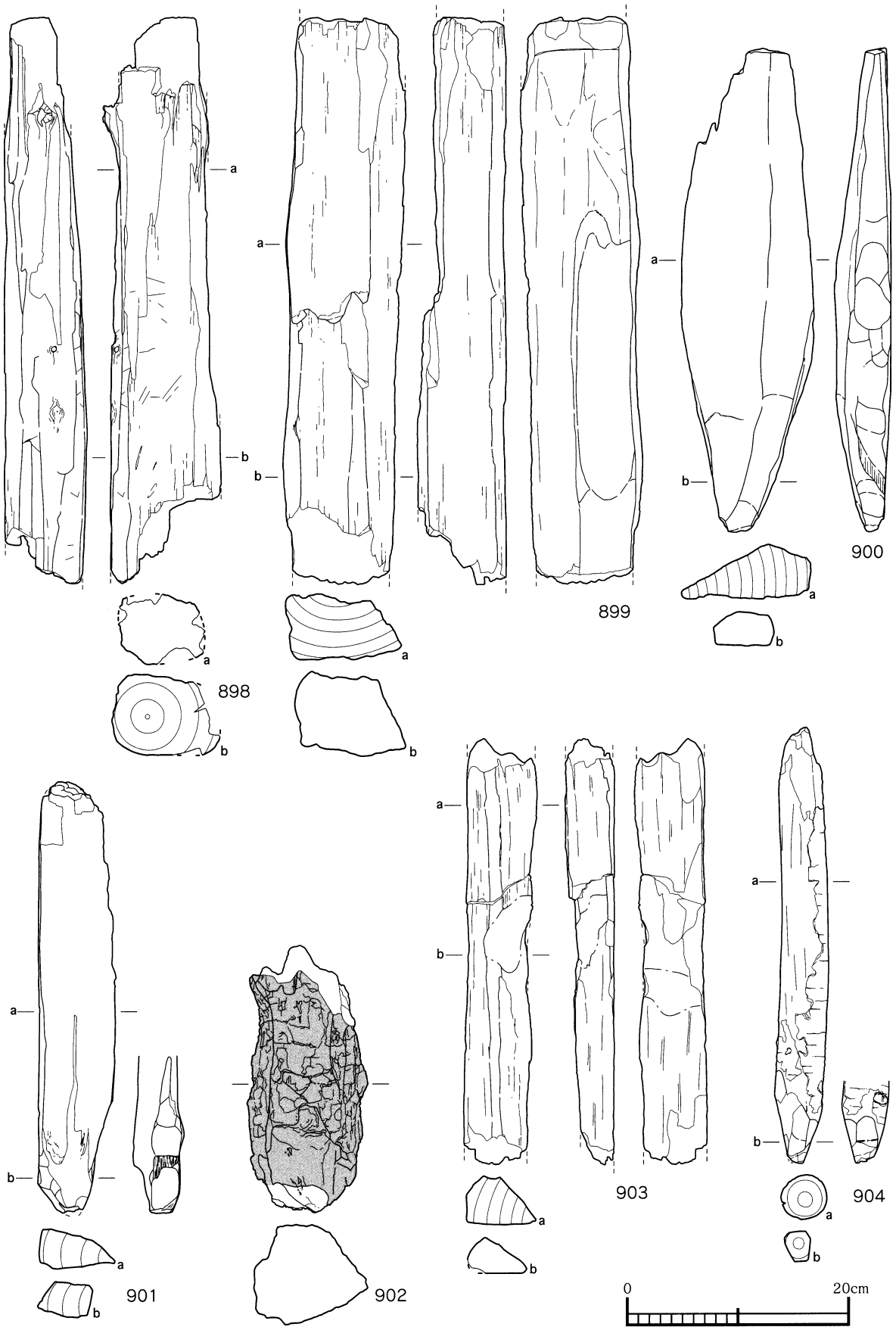
886～889は板目材である。886の先端は摩耗しており，杭として利用されている。左側面近くに圧痕がみられる。889の先端は右側面側から加工され杭として利用されている。上



第112図　自然流路１出土木製品（７）



第113図　自然流路１出土木製品（８）



第114図　自然流路１出土木製品（９）

端にも加工痕が残る。891～895は柾目材である。全体的に丁寧に成形されていることから建築材の転用と思われる。890は板材の中央部に圧痕が残っている。厚さが均一で全体的に丁寧な加工が施されている。893は上端から13ｃｍの部分が加工によって幅が狭く，厚さも薄くなり，その部分に圧痕がみられる。894は右側面下部に加工痕が残っている。895は厚み均一で丁寧に成形されている。表面は２か所炭化している部分があり，板材の中央付近には加工痕も残っている。腐食が著しい。

角材（第113・114図896～900･902･903）

断面方形の角材である。896の上端は垂直に切断され下部は欠損している。898は芯持材を方形に加工している。表面には工具痕が多く残る。899は割材を利用した大型の角材である。最大長51.2ｃｍ，最大幅11.9ｃｍ，厚さ7.7ｃｍ。900は先端を右側面から加工して杭

第18表　自然流路１出土土器観察表　　（　）は復元径

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
80	614	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰa	内:灰黄褐色10YR6/2 外:胴部～口縁 10YR1.7/1 底部:にぶい黄橙色 10YR5/3	口縁:横ナデ 上胴部:ハケ目 下胴部:削り後ハケ目 底部:ナデ	口縁:ナデ 胴部:ハケ後丁寧なナデ消し	33	8.6	35.8	石英，角閃石を多く含む	良好	
80	615	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰa	内:にぶい黄橙色 10YR7/2 外:灰黄色2.5Y7/2	口縁:ナデ 胴部:ハケ目の後ナデ	口縁:横ナデ 胴部:ナデ	(25.2)	－	－	角閃石	良好	煤付着
80	616	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰa	内:にぶい黄橙色 10YR7/3 外:灰褐色10YR6/2	口縁:横ナデ 胴部:ナデ	口縁:横ナデ 胴部:ハケ目の後ナデ消し	(24.6)	－	－	角閃石，石英(1mm大)を多く含む	良好	
80	617	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰa	内:灰色5Y6/ 外:にぶい黄橙色10Y7/2 1	口縁:ナデ 胴部:ハケ目	口縁:ハケ目 胴部:ハケ後ナデ消し	(23)	－	－	石英，角閃石所々に含む	良好	煤付着
80	618	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰa	内外:浅黄橙色10YR8/4	口縁:ハケ目 胴部:ハケ目	口縁:ハケ目 胴部:ナデ	(27.6)	－	－	石英(1mm2mm大)を多く含む	良好	
80	619	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰa	内外:にぶい黄橙色 10YR7/4	口縁:ナデ 胴部:ハケ目	ナデ	－	－	－	角閃石,石英を少量含む精製された胎土	良好	
80	620	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰa	内:褐灰色10YR6/1 外:黒褐色5YR2/1	口縁:横ナデ 胴部:ナデ	口縁:横ナデ 胴部:ハケ目	－	－	－	石英を多く含む	良好	
81	621	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:にぶい黄橙色 10YR6/3 外:黒褐色10YR3/1	ハケ目	口縁:ハケ目 胴部:ハケ目後ナデ	22.1	－	－	1mm大の石英,角閃石を含む 2mm大の小石を微量に含む	良好	
81	622	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:にぶい黄橙色 10YR7/4 外:灰白色10YR8/2	口縁:ハケ目後ナデ 胴部:ハケ目	口縁上部:ナデ 口縁下部:ハケ目 胴部:ハケ目後ナデ	(30.6)	－	－	2～3mm大の石英，長石，角閃石が多く含まれている	良好	
81	623	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:にぶい黄橙色 10YR7/2 外口縁胴部:黒褐色 2.5Y3/1 頚部:にぶい黄橙色 10YR6/3	口縁:ハケ目 胴部:ハケ目後ナデ	口縁:ハケ目 胴部:ナデハケ目	(25.8)	－	－	角閃石，石英を少々含む	良好	煤付着
81	624	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:にぶい黄橙色10 YR7/2 外:明黄褐色10YR6/6	口縁:ナデハケ目 胴部:ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	(30.2)	－	－	石英，雲母，角閃石を含む	良好	煤付着
81	625	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内口縁:灰黄褐色 10YR5/2 内胴部:にぶい黄橙色 10YR7/3 外:灰黄褐色10YR6/2	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナデ	口縁:横ナデ 胴部:ハケ目後ナデ	(26.8)	－	－	角閃石，長石を含む	良好	煤付着
81	626	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:にぶい黄橙色 10YR6/3 外:にぶい黄橙色 10YR7/3	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナデ	口縁:ナデ 胴部:削り後ナデ	(22.5)	－	－	1～2mm大の長石，角閃石を含む 1mm大の小石を微量に含む	良好	
81	627	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:暗灰黄色2.5Y5/2 外:灰黄色2.5Y7/2	ハケ目後ナデ	口縁:ナデ 胴部:ハケ目ナデ	(20.6)	－	－	角閃石，石英を少量含む	良好	
82	628	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:にぶい黄橙色 10YR7/3 外:にぶい黄橙色 10YR6/3	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	(16.6)	－	－	角閃石，1～2mm大の長石を少量含む	良好	

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
82	629	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:暗灰黄色2.5YR5/2 外:灰黄色2.5Y6/2	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナデ	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナデ	(25.6)	−	−	角閃石,雲母を含む	良好	
82	630	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:灰黄色2.5Y7/2 外:にぶい黄橙色10YR6/3	口縁:ナデ 胴部:ハケ目	口縁:ナデハケ目 胴部:ハケ目後ナデ	(19.2)	−	−	長石,角閃石	良好	
82	631	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:にぶい黄橙色10YR7/4 外:にぶい黄橙色10YR6/3.5	ハケ,目ナデ	ハケ目,ナデ	(26.8)	−	−	石英,角閃石を少量含む	良好	
82	632	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:にぶい黄橙色10YR5/3	口縁:ハケ目 胴部:ナデハケ目 下胴部:削り	ハケ目,ナデ	17.2	−	−	石英,角閃石を少量含む 1mm大の小石を微量に含む	良好	
82	633	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:灰白色2.5Y8/1.5 外:灰白色10YR8/2	ハケ目,ナデ	ハケ目,ナデ	(27.2)	−	−	2〜3mm大の石英を微量に含む 角閃石を含む	良好	煤付着
82	634	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:にぶい黄橙色10YR6/3 外:黄灰色2.5Y6/1	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナデ	口縁:ナデ 胴部:ハケ目	(11.6)	−	−	石英,雲母を含む	良好	
82	635	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:灰黄色2.5Y6/2 外:にぶい黄橙色10YR6/4	ハケ目後ナデ 胴部:ハケ目	ハケ目後ナデ	(23.8)	−	−	雲母,角閃石を少量含む	良好	
82	636	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:にぶい黄橙色10YR6/3 外:黒色2.5Y2/1	ハケ目	ハケ目	(20.4)	−	−	石英,角閃石を少量含む	良好	煤付着
82	637	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:黄灰色2.5Y6/1 外:灰白色10YR8/2	ナデハケ目	ナデ,ハケ目,横ナデ	−	−	−	角閃石,雲母を含む 1mm大の小石を含む	良好	
82	638	弥生土器	甕	Ⅱ	Ⅰb	内:灰黄色2.5Y6/2 外:灰黄褐色10YR5/3	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	−	−	−	石英,角閃石,雲母を含む	良好	
82	639	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内外:にぶい黄橙色10YR7/2	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	−	−	−	石英,角閃石を含む 1mm大の小石を微量に含む	良好	
83	640	弥生土器	甕	Ⅱ	Ⅰb	内:灰黄褐色10YR5/2 外:黒色2.5Y2/1	ナデ	ハケ目後ナデ	−	−	−	石英,雲母を少量含む	良好	
83	641	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:黄灰色2.5Y5.5/1 外:にぶい黄橙色10YR7/3	ハケ目後ナデ	ナデ,ヘラ削り	−	−	−	石英,角閃石を少量含む	良好	
83	642	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:灰黄褐色10YR5/2 外:灰褐色10YR6/1.5	ナデ,ハケ目	ハケ目,ナデ,削り	−	−	−	長石,角閃石,雲母を含む 1〜2ミリ大の小石を微量に含む	良好	
83	643	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内:にぶい黄橙色10YR6/4 外:黒色N2/	ハケ目	口縁:ハケ目 胴部:ナデ	(19.6)	−	−	石英,角閃石を含む	良好	煤付着
83	644	弥生土器	甕		Ⅰb	内:灰白色10YR8/2 外:にぶい黄褐色10YR5/3	ハケ目	削り後ナデ	(22.7)	(12.4)	−	石英,角閃石(1mm大)を多く含む	良好	煤付着
83	645	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内外:にぶい黄橙色10YR7/3	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナデ消し	口縁:ナデ 胴部:ハケ目,縦方向の削り	(11.5)	−	−	1mm大の石英,角閃石,砂粒が多くみられる	良好	
83	646	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内外:灰褐色7.5YR5/2	口縁:ナデ 胴部:ハケ目	口縁:ナデ 胴部:ハケ目	(19.2)	−	−	石英,角閃石を所々に含む	良好	
83	647	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅰb	内外:にぶい黄橙色10YR6/3	口縁:ナデ 胴部:ハケ目後ナデ消し	口縁:ナデ 胴部:ハケ目削り後ナデ	(25.4)	−	−	石英,角閃石(1mm大)を多く含む	良好	線刻
83	648	弥生土器	甕		Ⅲ	内:にぶい黄橙色10YR6/3 外:にぶい黄橙色10YR7/3	ハケ目,ナデ	ハケ目後ナデ,ヘラ削り	(20.2)	−	−	角閃石,長石,雲母,1mm大の小石を少量含む	良好	
83	649	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅲ	内:にぶい黄橙色10YR6/3 外:にぶい黄橙色10YR7/2	ナデ	ナデ,部分的にハケ目が残る	(29.6)	−	−	長石,雲母,角閃石を含む	良好	
84	650	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅳ	内:黄灰色2.5Y6/1 外:にぶい黄橙色10YR7/2	ハケ目,ナデ	ハケ目	−	−	−	石英,角閃石を含む	良好	
84	651	弥生土器	甕		Ⅳ	内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:橙色7.5YR7/6	ナデ	ハケ目後ナデ	−	−	−	1mm大の石英を微量に角閃石と雲母を含む	良好	
84	652	弥生土器	甕		Ⅳ	内:橙色7.5YR7/5 外:にぶい黄橙色10YR7/3	ナデ	ナデ,部分的にハケ目後ナデ	−	−	−	石英,角閃石,長石を含む	良好	
84	653	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅳ	内外:にぶい黄橙色10YR7/3	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	−	−	−	2mm大の石英を多く含む	良好	
84	654	弥生土器	甕	Ⅱ	Ⅳ	内:灰白色10YR8/2 外:にぶい黄橙色10YR7/3	ナデ	ナデ	−	−	−	石英,角閃石を含む	良好	

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
84	655	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅳ	内:にぶい黄橙色 10YR6/3 外:黄灰色2.5Y6/1	横ナデ, ハケ目 ナデ	ハケ目 , ナデ	-	-	-	石英を多く含む	良好	
84	656	弥生土器	甕	Ⅱ	Ⅳ	内:にぶい黄橙色 10YR6/3 外:橙色7.5YR7/5	ハケ目後ナデ	ナデ	-	-	-	石英, 角閃石を含む 褐色の小石を微量に含む	良好	
84	657	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅳ	内:にぶい黄橙色 10YR6/3 外:橙色7.5YR7/6	横ナデ, ナデ	ナデ	-	-	-	2mm大の石英, 長石, 角閃石を含む	良好	
85	658	弥生土器	甕	Ⅰ		内:黒色 外:にぶい黄橙色 10YR5/3	胴部:ハケ目 底部:ナデ	横ナデ	-	8.4	-	1mm大の石英, 角閃石を多く含む	良好	煤付着
85	659	弥生土器	甕	Ⅰ		内:黒色10YR2/1 外:褐灰色5YR6/1	底部:横ナデ 胴部:ハケ目	ハケ目後ナデ消し	-	(8.8)	-	石英(3mm大)角閃石(1mm大)を所々に含む	良好	煤付着
85	660	弥生土器	甕	Ⅰ Ⅱ Ⅲ		内:暗灰黄色2.5Y5/2 外:灰黄色2.5Y6/2	ハケ目	ナデ(部分的にハケ目が残る)	-	8.4	-	石英, 角閃石, 2ミリ大の砂粒を含む	良好	
85	661	弥生土器	甕	Ⅰ		内外:にぶい黄褐色 10YR5/3	胴部:ハケ目 底部:ナデ	ナデ(部分的にハケ目が残る)	-	7.2	-	カンラン石, 角閃石を所々に含む	良好	
85	662	弥生土器	甕			内外:にぶい黄橙色 10YR7/2	底部:ハケ目後ナデ	ナデ	-	8.0	-	角閃石, 石英, 白色砂粒(1mm大)を多く含む	良好	
85	663	弥生土器	甕	Ⅰ		内外:にぶい黄橙色 10YR6/3	ハケ目後ナデ	ナデ	-	6.0	-	長石,角閃石,石英, 砂粒を多く含む	良好	煤付着
85	664	弥生土器	甕			内:黒褐色7.5YR3/1 外:明褐色7.5YR5/6	胴部:ハケ目 底部:ナデ	板ナデ後ナデ消し	-	7.6	-	長石, 石英, 角閃石を所々に含む 1mm大の砂粒を所々に含む	良好	
85	665	弥生土器	甕	Ⅰ		内外:灰白色10YR8/1	ハケ目	ナデ	-	12.2	-	角閃石,石英を所々に含む	良好	
85	666	弥生土器	甕	Ⅰ		内外:にぶい黄橙色 10YR5/4 頭部内面:黒色 10YR1.7/1	ハケ目、磨滅	横ナデ	-	8.9	-	1mm大の石英,カンラン石角,閃石を多く含む 3mm大の小石を所々に含む	良好	
85	667	弥生土器	甕	Ⅰ		内外:灰黄色2.5Y7/2	横ナデ	横ナデ	-	9.0	-	角閃石, カンラン石, 石英を所々に含む	良好	
85	668	弥生土器	甕	Ⅰ		内外:にぶい黄橙色 10YR6/3	ナデ	ナデ	-	9.2	-	カンラン石, 石英, 角閃石, 輝石を所々に含む	良好	
85	669	弥生土器	甕	Ⅱ		内外:にぶい橙色 7.5YR7/4	ナデ	ナデ	-	(8.0)	-	角閃石,石英(1mm大)を多く含む 長石を所々に含む	良好	
85	670	弥生土器	甕	Ⅰ		内:暗灰黄色2.5Y4/2 外:にぶい黄橙色 7.5YR6/4	ハケ目、ナデ 底部:ナデ	ナデ	-	8.2	-	角閃石, 石英を多く含む	良好	
85	671	弥生土器	甕	Ⅰ		内:黒色10YR2/1 外:黄褐色10YR5/3	胴部:ハケ目 底部:横ナデ	ナデ	-	10.6	-	1mm大の石英, カンラン石, 角閃石を所々に含む	良好	煤付着
85	672	弥生土器	甕	Ⅰ		内:オリーブ黒5Y3/1 外:にぶい黄橙色 10YR7/2	ナデ	ナデ	-	5.5	-	角閃石,カンラン石を所々に含む 砂粒を多く含む	良好	
85	673	弥生土器	甕	Ⅰ		内外:にぶい黄橙色 10YR7/2	胴部:ハケ目 底部:横ナデ	胴部:横ナデ 底部:ハケ目	-	8.6	-	石英, 角閃石を所々に含む	良好	
85	674	弥生土器	甕	Ⅰ		内外:灰黄褐色10YR6/2	胴部:ハケ目 底部:横ナデ	ナデ後ナデ消し	-	10.2	-	角閃石,石英, 黒雲母を所々に含む 白粒を多く含む	良好	
85	675	弥生土器	甕	Ⅰ		内外:灰黄褐色10YR6/2	ハケ目	ナデ、ハケ目	-	6.6	-	角閃石, 長石を少量含む 1mm大の砂粒を含む	良好	
85	676	弥生土器	甕	Ⅰ		内:灰色2.5Y7/1 外:にぶい黄色2.5Y6/4	ハケ目	ナデ	-	8.0	-	角閃石, 石英を多く含む	良好	
85	677	弥生土器	甕	Ⅰ		内外:灰黄褐色10YR6/2	ハケ目	ナデ	-	(11.0)	-	角閃石, 石英を所々に含む	良好	
86	678	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰa	内外:にぶい黄橙色 10YR7/3	ハケ目、ナデ削り	ハケ目、ナデ	13.3	3.6	31.0	角閃石, 石英を多く含む	良好	煤付着
86	679	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰa	内:灰白色10YR8/2 外:にぶい黄橙色 10YR6/3	ハケ目、ナデ	ナデ	(16.0)	-	-	石英, 角閃石を多く含む	良好	

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
86	680	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰa	内:灰黄色2.5YR7/2 外:にぶい黄橙色10YR6/3	口縁:横ナデ、胴部:ナデ	口縁:横ナデ、胴部:ナデ	-	-	-	石英,角閃石を多く含む	良好	
86	681	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰa	内:にぶい黄橙色10YR7/4 外:にぶい黄橙色10YR7/3	口縁:横ナデ、胴部:ハケ目後ナデ	口縁:横ナデ、胴部:ハケ目後横ナデ	(10.0)	-	-	石英,角閃石の粒子を少量含む	良好	
86	682	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰa	内:にぶい黄橙色10YR6/4 外:にぶい褐色7.5YR5/4	横ナデ	ナデ	(8・6)	-	-	角閃石,長石,石英を所々に含む	良好	
86	683	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰb	内:にぶい黄橙色10YR7/4 外:にぶい黄橙色10YR6/3	ハケ目、ナデ	横ナデ	12.4	3.7	22.5	角閃石,長石を多く含む	良好	
86	684	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰb	内:にぶい黄橙色10YR6/4 外:灰黄褐色10YR4/2	ハケ目,ナデ	ハケ目,ナデ	-	-	-	石英,角閃石を多く含む	良好	
86	685	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰb	内外:灰白色10YR8/2	横ナデ	横ナデ	(14.6)	-	-	石英,角閃石を多く含む	良好	
86	686	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰb	内:灰褐色7.5YR5/2 外:にぶい褐色7.5YR5/3	口縁:横ナデ 胴部:ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英,長石,角閃石を所々に含む	良好	
87	687	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰ	内:灰白色10YR8/2 外:にぶい黄橙色10YR7/3	ハケ目後ナデ	ナデ	(14.0)	-	-	石英,角閃石を少量含む	良好	
87	688	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰ	内外:にぶい黄褐色10YR5/3	ハケ目後横ナデ	ハケ目後ナデ	(13.1)	-	-	石英を多く角閃石を所々に含む	良好	
87	689	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰ	内:灰白2.5Y7/1 外:にぶい黄橙色10YR7/2	ハケ目後ナデ	横ナデ	(14.0)	-	-	石英,角閃石が多く見られる	良好	
87	690	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰ	内:にぶい黄橙色10YR6/3 外:灰黄褐色10YR5/2	ハケ目、横ナデ	ナデ	(14.4)	-	-	角閃石を多く長石,石英を少量含む	良好	
87	691	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰ	内外:にぶい黄橙色10YR7/2	ハケ目	横ナデ	(15.6)	-	-	石英を少々含み角閃石を多く含む	良好	
87	692	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰ	内:にぶい黄橙色7YR/4 外:褐灰色10YR4/1	ハケ目、ナデ	ハケ目,ナデ	(11.0)	-	-	角閃石,石英を含む	良好	
87	693	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰ	内:にぶい黄褐色10YR5/3 外:褐灰色10YR4/1	ハケ目後横ナデ	ハケ目後横ナデ	-	-	-	石英,角閃石を含む	良好	
87	694	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰ	内:にぶい黄橙色10YR4/6 外:灰黄褐色10YR2/5	ハケ目	ハケ目後ナデ	-	-	-	1～2mm大の角閃石,石英があり	良好	
87	695	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅰ	内外:浅黄橙色10YR8/3	ハケ目後ナデ、削り	ナデ	-	7.6	-	長石,石英,特に角閃石が多く含まれる	良好	
87	696	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅲ	内:にぶい黄橙色10YR6/3 外:灰黄褐色10YR5/2	頸部に削り その下にヘラミガキ 口縁部横ナデ	ミガキ、横ナデ	(20.2)	-	-	石英,微細石を所々に含むが精製された胎土	良好	
87	697	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅲ	内外:灰黄褐色10YR6/2	ミガキ	ナデ	-	-	-	1～2mm大の砂粒をわずかに含むが精製された胎土	良好	
88	698	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅳa	内外:灰黄褐色10YR6/2	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	(14.6)	-	-	石英,角閃石を所々に含む	良好	
88	699	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅳa	内外:にぶい黄橙色10YR7/1	ナデ	ハケ目後ナデ	(11.6)	-	-	角閃石,石英を多く含む 2mm大の赤色の小石を含む	良好	
88	700	弥生土器	壷	Ⅱ	Ⅳb	内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:にぶい黄褐色10YR5/3	ハケ目、ナデ	ハケ目,板ナデ	(13.3)	-	-	角閃石	良好	
88	701	弥生土器	壷	Ⅰ	Ⅴ	内外:褐灰色10YR4/1	ナデ、ミガキ	ナデ	-	-	-	砂粒を含まない精製された胎土	良好	
88	702	弥生土器	壷	Ⅰ		内:褐灰色10YR4/1 外:褐灰色10YR5/1	ハケ目,横ナデ	ハケ目、ナデ	(14.0)	-	-	角閃石,石英を所々に含む	良好	
88	703	弥生土器	壷	Ⅰ		内:にぶい黄橙色10YR7/2 外:にぶい黄橙色10YR6/3	ナデ	ナデ	-	-	-	砂粒を含まない精製された胎土	良好	
88	704	弥生土器	壷	Ⅰ		内:にぶい黄橙10YR6/6 外:橙7.5YR6/6	横ナデ	摩滅	-	-	-	小石を含まない精製された胎土	良好	
88	705	弥生土器	壷			内外:灰白色2.5Y7/1	磨耗のため不明	磨耗のため不明	-	-	-	1mm大の角閃石,カンラン石,砂粒を含む	良好	

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
88	706	弥生土器	壷	Ⅰ		内:灰白色2.5Y8/1 外:灰白色5Y7/1	ナデ、削り	ナデ、ケズリ	-	-	-	石英，角閃石を含む	良好	
88	707	弥生土器	壷	Ⅱ		内:黒色N3/0.5 外:灰白色10YR7/2	ハケ目後ナデ	ハケ目、ナデ	-	-	-	1，2mm大の角閃石，石英がかなり見られ3mm大の小石が所々に見られる	良好	
88	708	弥生土器	壷	Ⅰ		内:黒褐色2.5Y3/1 外:灰白色10YR7/1	ミガキ、ナデ	ミガキ、ハケ目	-	-	-	2mm前後の長石が時々と，1mmの角閃石がみられる	良好	
88	709	弥生土器	壷	Ⅰ		内:灰色10YR7/ 外:褐灰色10YR6/	ナデ	剥落	-	-	-	石英を所々に含む	良好	
88	710	弥生土器	壷	Ⅰ		内:灰黄色2.5Y6/2 外:黒褐色2.5Y3/1	ハケ目	ナデ	-	-	-	石英を含む精製された胎土	良好	
88	711	弥生土器	壷	Ⅱ		内:黄褐色2.5Y5/3 外:黄灰色2.5Y6/1	ハケ目，横ナデ	ハケ目	-	-	-	長石,黒雲母，角閃石，1～2mm大の砂粒を含む	良好	
89	712	弥生土器	壷	Ⅰ		内:にぶい黄橙色10YR7/2 外:灰黄褐色10YR7/2	ハケ目	ハケ目,ナデ	-	5.0	-	角閃石,長石,石英を含む	良好	
89	713	弥生土器	壷	Ⅰ		内:にぶい黄橙色10YR6/4 外:にぶい黄橙色10YR6/3	ハケ目	ナデ	-	(6.3)	-	石英,角閃石，1mmの小石を多く含む	良好	
89	714	弥生土器	壷	Ⅰ		内:灰褐色7.5YR4/2 褐灰色7.5Y5/1 外:明褐灰色7.5YR7/1	ハケ目	ハケ目,ナデ	-	(4.0)	-	角閃石,石英を多く含む	良好	
89	715	弥生土器	壷	Ⅰ		内:にぶい黄橙色10YR7/2.5 外:灰黄褐色10YR4/2	板ナデ、削り	ナデ	-	4.3	-	石英,角閃石,白色粒を多く含む	良好	
89	716	弥生土器	壷	Ⅰ		内:にぶい黄橙色10YR6/3 外:にぶい黄橙色10YR7/4	ハケ目,板ナデ	ナデ	-	1.5	-	角閃石,雲母，1mm大の小石を少量含む	良好	
89	717	弥生土器	鉢	Ⅰ		内外:にぶい黄橙色10YR7/2	ハケ目,ナデ	ハケ目,ナデ	-	(6.2)	-	角閃石,石英を多く含む	良好	
89	718	弥生土器	鉢	Ⅰ		内:にぶい黄橙色10YR6/3 外:にぶい黄橙色10YR6/4	ナデ	ナデ	(10.6)	-	-	砂粒を含まない精製された胎土，角閃石,石英を微量に含む	良好	
89	719	弥生土器	鉢	Ⅰ		内:灰黄褐色10YR5.5/2 外:にぶい黄褐色10YR5/3	ナデ	横ナデ	(10.6)	-	-	石英,角閃石を多く含む	良好	
89	720	弥生土器	鉢	Ⅰ		内:にぶい黄橙色10YR6/4 外:にぶい黄橙色10YR7/4	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	-	-	-	角閃石,石英を含む	良好	
89	721	弥生土器	鉢	Ⅰ		内:にぶい黄橙色10YR5/3 外:黒褐色10YR4/1	ハケ目	ケズリ,ミガキ	(22.4)	-	-	石英,角閃石を所々に含む	良好	
89	722	弥生土器	鉢			内外:にぶい黄橙色10YR6/4	ハケ目	ナデ	(20.0)	-	-	石英,角閃石を含む	良好	
89	723	弥生土器	鉢	Ⅰ		内:にぶい黄橙色10YR6/4 外:明褐色7.5YR5/4	ナデ	ナデ	-	1.4	3.4	1mm大の石英を含む	良好	
89	724	弥生土器	ミニチュア土器	Ⅰ		内:明褐色7.5YR5/6 外:にぶい黄橙色10YR6/4	ナデ	ナデ	(7.0)	2.4	4.9	石英,角閃石を含む	良好	
89	725	弥生土器	高杯			内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:にぶい黄橙色10YR7/2	ハケ目	ハケ目後ナデ	-	-	-	1～2mm大の角閃石がみられる	良好	
89	726	弥生土器	高杯			内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:浅黄橙色10YR8/3	ハケ目後ナデ	横ナデ、削り	-	14.8	-	石英,角閃石を多く含む	良好	
90	727	弥生土器	高杯	Ⅰ		内:灰色5Y6/1 外:浅黄橙色10YR8/3	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	-	(10.6)	-	砂粒を含まない精製された胎土	良好	
90	728	弥生土器	高杯	Ⅱ		内外:にぶい黄橙色10YR6/3	ナデ	ナデ	-	8.0	-	砂粒をほとんど含まない精製された胎土	良好	
90	729	弥生土器	高杯	Ⅰ		内外:灰白色2.5Y7/1	ハケ目，削り後ナデ	ナデ	-	11.8	-	石英,角閃石を少量含む 1mm以上の小石を多く含む	良好	
90	730	弥生土器	高杯	Ⅰ		内外:にぶい黄橙色10YR6/4	ハケ目後ナデ	ナデ	-	(10.0)	-	石英,角閃石を多く含む	良好	
90	731	弥生土器	甕	Ⅰ		内:灰白色2.5Y8/1 外:灰白色2.5Y7/1	ハケ目，ナデ	ナデ	-	-	-	石英,角閃石を含む 1mm大の小石を少量含む	良好	

第19表　自然流路１出土石器観察表

図番号	番号	出土区	層　位	取上番号	器　種	長　さ　cm	幅　cm	厚　さ　cm	重　さ　g	石　材	備　考
91	732	自然流路1	－	27	石鏃	1.50	1.55	0.50	0.95	ハリ質安山岩	2地点北
91	733	自然流路1	－	46	石鏃	1.70	1.20	0.40	0.61	黒曜石	2地点
91	734	自然流路1	－	95	スクレイパー	7.15	6.82	1.88	60.00	頁岩	
91	735	自然流路1	Ⅰ	－	石核	3.10	4.50	1.60	11.00	黒曜石（上牛鼻）	
91	736	自然流路1	Ⅱ	－	楔形石器	1.93	1.72	1.01	6.51	黒曜石（上牛鼻）	
91	737	自然流路1	－	109	スクレイパー	6.45	9.30	1.82	91.00	安山岩	
91	738	自然流路1	Ⅱ	58	砥石	13.20	5.00	3.30	200.00	安山岩	
91	739	自然流路1	Ⅰ	100	砥石	8.00	7.50	2.40	116.00	砂岩	
91	740	自然流路1	Ⅰ	465	軽石製品	5.70	4.10	3.60	16.00	軽石	
92	741	自然流路1	Ⅰ	－	石斧	10.78	6.54	3.80	429.00	頁岩	
92	742	自然流路1	Ⅰ	64	石斧	9.80	5.00	1.80	82.00	蛇紋岩	
92	743	自然流路1　溝状遺構2	Ⅰ	150	石斧	(9.80)	5.70	3.70	320.00	ホルンフェルス	
92	744	自然流路1	Ⅰ	－	石斧	(3.90)	6.10	2.70	73.00	砂岩	
92	745	自然流路1	Ⅱ	73	石斧	8.30	6.70	4.20	347.00	砂岩	
92	746	自然流路1	Ⅰ	7	磨石	5.10	4.70	3.90	153.00	安山岩	
92	747	自然流路1	Ⅰ	81	石球	5.80	5.80	5.70	268.00	安山岩	
93	748	自然流路1	Ⅰ	－	磨石・敲石	12.80	10.70	4.40	978.00	安山岩	
93	749	自然流路1	Ⅰ	197	磨石	11.10	7.80	3.80	502.00	砂岩	
93	750	自然流路1	Ⅰ	30	磨石・敲石	8.80	13.50	6.60	1200.00	砂岩	
93	751	自然流路1	Ⅰ	194	磨石・敲石	11.10	9.60	7.60	1200.00	安山岩	
93	752	自然流路1	－	84	軽石製品	6.25	6.80	2.91	21.31	軽石	
93	753	自然流路1	Ⅰ	99	軽石製品	12.10	8.30	4.00	10.90	軽石	
94	754	自然流路1	Ⅰ	116?	凹石・磨石	10.40	9.40	5.00	746.00	砂岩	
94	755	自然流路1	Ⅰ	495	敲石	7.90	6.30	4.90	266.00	安山岩	
94	756	自然流路1	Ⅱ	106	敲石	6.60	6.75	4.70	264.00	安山岩	
94	757	自然流路1	Ⅰ	65	敲石	11.00	7.80	5.20	452.00	安山岩	
94	758	自然流路1	Ⅰ	－	敲石	10.20	7.00	6.80	770.00	安山岩	
94	759	自然流路1	Ⅰ	96	不明	17.10	10.40	2.70	608.00	安山岩	
94	760	自然流路1	Ⅰ	71	石皿B	20.73	14.24	4.65	1400.00	安山岩	
95	761	自然流路1	Ⅰ	99	礫器	14.70	10.00	5.20	814.00	安山岩	
95	762	自然流路1	－	813	礫器	9.30	8.50	3.40	214.00	安山岩	
96	763	自然流路1	Ⅰ	41	石皿B	19.25	18.50	6.70	3600.00	安山岩	
96	764	自然流路1	Ⅰ	172?	石皿A	15.30	13.90	4.90	1800.00	安山岩	
96	765	自然流路1	Ⅱ	210	石皿B	14.00	15.00	9.20	2500.00	安山岩	
96	766	自然流路1	Ⅰ	－	石皿B	7.90	11.60	4.30	447.00	安山岩	
96	767	自然流路1	Ⅰ	170	石皿A	18.00	14.75	7.10	2100.00	安山岩	
96	768	自然流路1	Ⅰ	202	石皿A	10.70	9.20	5.80	728.00	砂岩	
96	769	自然流路1	Ⅰ	28	石皿A	22.75	18.55	9.00	5100.00	安山岩	
97	770	自然流路1	Ⅰ	115	石皿A	19.30	10.00	10.90	2800.00	安山岩	
97	771	自然流路1	Ⅰ	6	石皿A	8.50	8.50	4.60	386.00	安山岩	
97	772	自然流路1	Ⅰ	－	石皿A	24.10	22.20	9.50	7600.00	安山岩	
97	773	自然流路1	Ⅰ	40	石皿A	29.68	20.05	9.20	7000.00	安山岩	
98	774	自然流路1	Ⅰ	91	石皿A	31.00	21.50	9.00	10750.00	安山岩	
98	775	自然流路1	Ⅰ	－	石皿B	38.00	27.00	8.00	11600.00	安山岩	
123	990	A22･23 溝状遺構2	－	187	石鏃	1.60	1.40	0.30	0.38	黒曜石（上牛鼻）	
123	991	A22･23 溝状遺構2	－	－	スクレイパー	3.90	4.70	2.30	10.00	ハリ質安山岩	
123	992	A22･23 溝状遺構2	－	217	スクレイパー	5.15	6.18	1.48	30.00	安山岩	
123	993	A22･23 溝状遺構2	－	124	石斧	10.50	6.20	3.40	218.00	頁岩	
123	994	溝状遺構2	－	－	軽石製品	7.20	4.80	3.10	22.00	軽石	2地点北
123	995	溝状遺構2	－	19	磨石	8.00	11.40	5.10	716.00	安山岩	
123	996	溝状遺構2	－	266	石皿A	11.40	8.10	3.30	514.00	安山岩	
123	997	溝状遺構2	－	－	石皿B	10.10	9.40	6.20	770.00	安山岩	
123	998	溝状遺構2	－	265	軽石製品	16.90	8.80	5.30	204.00	軽石	
124	999	溝状遺構2	－	－	石皿A	14.10	10.10	5.00	1100.00	安山岩	
124	1000	溝状遺構2	－	67	石皿A	26.30	13.65	16.10	6800.00	安山岩	
124	1001	溝状遺構2	－	238	石皿B	19.57	11.75	5.70	1400.00	安山岩	
124	1002	溝状遺構2	－	263	石皿B	33.60	17.30	10.10	5700.00	安山岩	
124	1003	溝状遺構2	－	29	台石	42.36	20.20	19.30	19.60	安山岩	
125	1004	溝状遺構2	－	271	石皿A	26.80	26.20	12.90	13800.00	安山岩	
125	1005	溝状遺構2	－	151	石皿B	28.60	26.60	14.20	13500.00	安山岩	
125	1006	溝状遺構1	Ⅰ	－	石皿A	10.70	11.40	3.60	616.00	安山岩	
125	1007	溝状遺構1	Ⅱ	－	敲石	4.20	3.55	1.80	37.00	砂岩	
125	1008	A27 溝状遺構3	Ⅱ	－	スクレイパー	5.70	3.60	1.95	38.67	黒曜石（上牛鼻）	

第20表　自然流路１出土木製品観察表

杭列1 ()は残存部の法量

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量(cm)			加工痕の種類	工具幅(cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
99	776	杭		(32.3)	A:8.3 B:6.2	A:7.5 B:6.5	不明	2.8		磨耗のために加工の状況不明	圧痕あり
99	777	杭		(24.3)	A:9.5 B:6.2	A:4.8 B:4.0	不明	3.0		右側面のみ加工	
99	778	杭		(27.5)	A:6.9 B:7.5	A:5.7 B:3.5	不明	2.1		正面側のみ加工。先端に砂粒が付着	

杭列2 ()は残存部の法量

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量(cm)			加工痕の種類	工具幅(cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
99	779	割杭		(17.1)	(8.6)	4.2	不明	不明		つぶれ	
99	780	割杭		(14.3)	(5.1)	2.3	不明	不明		磨耗	
99	781	割杭		(7.7)	3.1	(1.3)	不明	不明		磨耗	
99	782	割杭		(7.6)	(3.5)	(1.5)	不明	不明		欠損	
99	783	割杭		(12.9)	(7.2)	2.9	不明	不明		つぶれ	
99	784	割杭		(20.2)	(8.8)	3.4	不明	不明		一面に加工。先端つぶれ	
99	785	割杭		(17.6) (16.7)	9.3 8.5	3.6	不明	不明		加工施なし	
99	786	割杭		21.6	A:8.1 B:6.7	A:(4.4) B:(2.7)	不明	不明		一面に加工	先端磨耗
99	787	割杭		(20.0)	7.7	3.5	A種、湾曲	不明		凸状刃こぼれ痕が残る	
100	788	割杭		(23.5) (22.3)	7.9	7.4	不明	不明		一面に加工。ほとんど尖っていない	
100	789	割杭		(20.3)	6.9	4.4	不明	不明		一面に加工	腐食が著しい
100	790	割杭		(23.4)	A:6.5 B:6.0	A:6.5 B:3.0	不明	不明		一面に加工。磨耗	樹皮が残る
100	791	割杭		(28.8)	(5.4)	5.7	不明	不明		加工なし	樹皮が残る
100	792	割杭		(21.6)	A:3.9 B:7.1	A:2.7 B:4.6	不明	不明		つぶれ	
100	793	割杭		(23.1)	A:6.6 B:7.5	A:5.0 B:2.9	不明	不明		つぶれ	
100	794	割杭		(12.5)	(5.2)	(3.0)	不明	不明			欠損した杭の一部の可能性
100	795	割杭		(14.0)	5.3	3.4	不明	不明		一面に加工され，尖っていない	先端の磨耗
100	796	割杭		(14.4)	5.6	4.2	不明	不明		つぶれ	右側面に工具痕あり
100	797	割杭		(18.4)	6.0	3.6	不明	不明		加工なし	
100	798	割杭		(17.2)	6.1	3.3	不明	不明		つぶれ	
100	799	割杭		(18.7)	A:6.1 B:3.3	A:3.9 B:3.4	不明	不明		磨耗	樹皮が残る
100	800	割杭		(23.2)	4.6	2.6	不明	不明		つぶれ，砂粒が付着	
100	801	割杭		(13.7)	5.4	3.1	不明	不明		つぶれ	芯持材を半裁し使用
100	802	割杭		(10.0)	(4.8)	(2.5)	不明			加工なし	

杭列3 ()は残存部の法量

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量(cm)			加工痕の種類	工具幅(cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
101	803	板杭		(14.9)	12.2	3.5	不明	不明		加工なし	板目材を使用
101	804	板杭		17.5	A:11.8 B:8.7	A:4.7 B:4.2	A種、湾曲	3		一面に加工される	ほぼ完形品
101	805	板杭		(9.5)	6.8	(7.6) (2.6)	不明	不明		つぶれ	
101	806	板杭		(12.8)	6.3	1.8	不明	不明		つぶれ，折れ曲がる	圧痕あり
101	807	杭？		(7.4)	3.8	0.9	不明	不明			杭の一部か？
101	808	板杭		(7.4)	5.2	1.3	不明	不明		磨耗	
101	809	丸杭		(22.5)	A:5.9 B:4.4	A:4.4 B:2.5	A種、湾曲	3		一面に加工	
101	810	丸杭		(21.1)	A:5.5 B:3.3	A:5.1 B:1.7	A種、湾曲	2.8		一面に加工	樹皮残る
101	811	丸杭		(9.0)	A:3.7 B:1.9	A:3.9 B:2.1	A種、湾曲	2.5		3～4面に加工	樹皮残る

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量(cm)			加工痕の種類	工具幅(cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
101	812	丸杭		(12.9)	A:4.3 B:3.5	A:4.8 B:2.8	A種、湾曲	2.2		2面に加工	樹皮残る
101	805	板杭		(9.5)	6.8	(7.6) (2.6)	不明	不明		つぶれ	
101	806	板杭		(12.8)	6.3	1.8	不明	不明		つぶれ，折れ曲がる	圧痕あり
101	807	杭？		(7.4)	3.8	0.9	不明	不明			杭の一部か？
101	808	板杭		(7.4)	5.2	1.3	不明	不明		磨耗	
101	809	丸杭		(22.5)	A:5.9 B:4.4	A:4.4 B:2.5	A種、湾曲	3		一面に加工	
101	810	丸杭		(21.1)	A:5.5 B:3.3	A:5.1 B:1.7	A種、湾曲	2.8		一面に加工	樹皮残る
101	811	丸杭		(9.0)	A:3.7 B:1.9	A:3.9 B:2.1	A種、湾曲	2.5		3～4面に加工	樹皮残る
101	812	丸杭		(12.9)	A:4.3 B:3.5	A:4.8 B:2.8	A種、湾曲	2.2		2面に加工	樹皮残る
101	813	丸杭		(13.6)	A:5.0 B:1.8	A:(4.2) B:4.0	A種、湾曲	3		3面に加工	凸状刃こぼれ痕残る
101	814	丸杭		(14.2)	A:5.2 B:5.3	A:5.4 B:3.6	B種、湾曲無	1.5		1面に加工	先端磨耗
101	815	丸杭		(14.6)	A:3.8 B:2.7	A:3.3 B:2.4	不明	不明		腐食	
101	816	割杭		(12.2)	7.4	4.6	不明	不明		2面に加工か？腐食	
101	817	角杭		(8.5)	4.1	2.7	不明	不明		全体的に腐食	
101	818	杭の1部？		(9.6)	3.2	2.8	不明	不明			
101	819	杭の1部？		(9.5)	2.9	1.7	不明	不明			
101	820	割杭		(10.4)	4.7	2.3	不明	不明		加工が施されず，つぶれている	
101	821	割杭		(45.3)	A:6.1 B:5.5	A:9.2 B:5.5	不明	不明		多面に加工。磨耗している	
102	822	角杭		(39.6)	A:3.3 B:3.9	A:2.5 B:2.8	不明	不明		右半分欠損，加工痕あり	右側面近くに削痕あり
102	823	角杭		(17.5)	18.7	9.4	不明	不明		つぶれ・摩耗	樹皮残る
102	824	割杭		(12.0)	7.7	4.3	不明	不明		つぶれ	圧痕あり
102	825	割杭		(13.8)	3.4	2.5	不明	不明		磨耗	
102	826	丸杭		(10.1)	(3.6)	2.1	不明	2.8		2面に加工	腐食が著しい
102	827	角杭		(19.9)	4.1	2.7	不明	不明		欠損	全体的に丁寧な加工
102	828	丸杭		(17.2)	A:3.7 B:6.1	A:(3.6) B:2.4	不明	不明		1面に加工	樹皮残る
102	829	杭？		(9.2)	(2.9)	1.7	不明	不明		磨耗	

杭列4 ()は残存部の法量

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量(cm)			加工痕の種類	工具幅(cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
103	830	割杭		(12.4)	7.8	4.3	不明	不明		一面に加工され，尖っていない 磨耗している	板状
103	831	割杭		(12.9)	7.4	4.1	不明	不明		加工なし，つぶれている	板状
103	832	割杭		(16.7)	6.0	2.7	不明	不明		つぶれ	板状
103	833	丸杭		(23.5)	A:5.1 B:3.5	A:4.6 B:4.3	A種、湾曲	2.8		凸状刃こぼれ痕あり 2面に加工	
103	834	丸杭		(35.4)	A:5.7 B:6.0	A:4.7 B:1.8	A種、湾曲	3.2		2面に加工	樹皮が残る
103	835	丸杭		(40.5)	A:4.7 B:4.0	A:4.8 B:3.4	A種、湾曲	2.8		4面に加工。磨耗している	
103	836	丸杭		(30.7)	A:5.4 B:4.6	A:5.2 B:4.2	B種、湾曲無	3		2面に加工	
103	837	割杭		(29.3)	12.0	6.9	B種、湾曲	2.2		1面に加工	
103	838	割杭		(16.5)	A:5.6 B:3.1	A:4.6 B:2.7	B種、湾曲	2.2		多方面から加工・つぶれている	加工単位が重複
103	839	割杭		(20.9)	A:6.6 B:5.2	A:(2.7) B:(4.0)	A種、湾曲	2.5		一部欠損	樹皮が残る
103	840	割杭		(19.4)	5.5	2.8	不明	不明		1面に加工・つぶれ	
103	841	割杭		(21.3)	7.9	4.7	不明	不明		加工は施されず平坦・つぶれ	

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量(cm)			加工痕の種類	工具幅(cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
104	842	割杭		37.8	A:6.9 B:5.4	A:5.7 B:6.1	不明	不明		磨耗	圧痕あり
104	843	割杭		(18.0)	8.5	5.1	不明	不明		1面に加工・つぶれ	
104	844	割杭		(19.7)	A:7.9 B:5.8	A:5.2 B:5.5	不明	不明	クリ	1面に加工・つぶれ	BP 2,050±30
104	845	角杭		(30.5)	4.7	3.6	不明	不明		加工なし	
104	846	杭？		(15.0)	(6.0)	4.2	不明	不明		欠損	
104	847	割杭		(21.5)	A:2.9 B:2.6	A:2.0 B:1.2	不明	不明		1面に加工	
104	848	割杭		(25.1)	7.1	(4.3)	不明	不明		欠損	
104	849	角杭		(36.6)	A:3.6 B:3.5	A:4.3 B:2.9	不明	不明		短く4面に加工・磨耗	
104	850	角杭		(21.7)	3.7	3.0	不明	不明		加工なし	
104	851	割杭		(19.3)	6.9	3.8	不明	不明		無加工・つぶれ	
104	852	割杭		(24.0)	7.7	4.5	不明	不明		無加工	腐食が著しい
104	853	杭？		(17.7)	5.1	5.0	不明	不明		欠損	腐食が著しい 杭の一部か？
104	854	杭？		(22.0)	5.9	(3.1)	不明	不明		欠損	腐食が著しい 杭の一部か？
104	855	板材		(38.0)	5.0	2.7	不明	不明			上下欠損
104	856	板材		(59.3)	A:6.0 B:4.6 C:4.5	A:2.0 B:2.0 C:2.6	不明				上下欠損

杭列5 ()は残存部の法量

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量(cm)			加工痕の種類	工具幅(cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
105	857	割杭		(19.5)	A:6.2 B:6.4	A:6.7 B:4.7	不明	不明		3面に加工	樹皮が残る
105	858	角杭		(11.3)	(7.1)	(3.8)	不明	不明		つぶれ	
105	859	杭？		(12.2)	4.7	3.2	不明	不明		欠損	杭の一部か？
105	860	割杭		(15.0)	4.0	2.45	不明	不明		つぶれ	上部は炭化している
105	861	杭？		(11.7)	4.3	1.85	不明	不明		欠損	杭の一部か？
105	862	板材		(52.0)	7.0	1.4	不明	不明		加工痕は残っていないが， 丁寧に成形されている	建築材の可能性

出土遺物 ()は残存部の法量

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量(cm)			加工痕の種類	工具幅(cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
106	863	曲柄又鍬		51.4 軸部 長5.5 刃部 長45.9	A:3.5 B:7.6 C:3.0	A:1.7 B:1.6 C:1.1	不明	1.3		幅1.3cm，長さ5.7cmの加工痕が残る。 丁寧な加工	浅い溝が2か所みられる
106	864	組合せ鋤		(46.0)	A:3.9 B:7.5	A:1.1 B:1.1	不明	1		幅1cmの加工が先端に 近い部分にみられる。	方形板刃先を装着した 痕跡が残る
106	865	又鍬		(6.2)	鍬台 3.6 握り 2.7	0.8	不明	不明			先端磨耗
106	866	又鍬		29.1	5.6	1.0	不明	不明		腐食のために不明	
106	867	又鍬		(21.4)	6.5	0.8	不明	不明			腐食が著しい
106	868	曲柄		鍬台 (10.2) 握り (4.5)	鍬台 3.6 握り 2.7	鍬台 3.7	不明	不明			
107	869	曲柄又鍬		軸部 (19.6) 刃部 (75.6)	A:1.3 B:4.2 C:5.0 D:5.5 E:6.2 F:3.5 G:4.5	A:1.3 B:1.4 C:1.4 D:1.4 E:1.6 F:(1.3) G:1.8	不明	2.2		刃部に幅2.2cm，長さ3.5cmの加工痕あり	軸部と刃部は同一 ものである可能性
108	870	農具木製品		83	A:9.9 B:17.5	A:2.6 B:3.0	不明	2.4		幅2.4cm，長さ5.4cmの加工痕が残る	

出土木製品 ()は残存部の法量

挿図番号	遺物番号	器種	層	法量(cm)			加工痕の種類	工具幅(cm)	樹種	先端の加工	備考
				長さ	幅	厚さ					
108	871	農具木製品		84.6	A:15.8 B:22.8	A:2.8 B:3.7	不明	不明		不明	
109	872	農具木製品		67.4	A:15.8 B:22.7	A:4.0 B:4.8	不明	不明		腐食のため不明	
109	873	農具木製品		下 (13.8) 上 (30.2)	A:15.4 B:12.5	A:3.5 B:3.8	不明	不明		腐食のため不明	
110	874	直柄横鍬		23.1	A:10.9 B:9.8	A:2.0 B:1.5	不明	不明		右側面を加工(2次加工の可能性)	
110	875	丸木弓		(50.2)	A:2.0 B:1.8	A:2.2 B:1.8	不明	不明		全体的に丁寧に成形	両端は欠損し 炭化している
110	876	柄		(41.9)	A:3.1 B:5.4	A:2.4 B:1.8	不明	不明		腐食のため不明	炭化している部分あり
110	877	柄		(21.1)	2.8	2.5	不明	不明		腐食のため不明	
111	878	掘り棒		(23.7)	A:9.3 B:4.7	A:1.1 B:1.3	不明	不明		摩耗のため不明	先端は磨耗
111	879	不明品		(17.2)	A:4.8 B:6.7	A:2.3 B:3.1	不明	不明		腐食のため不明	
111	880	不明品		(23)	A:2.9 B:3.2	A:0.3 B:0.4	不明	不明			緩やかに折れ曲がる
111	881	不明品		(16.7)	A:4.9 B:8.5	A:1.5 B:1.7	不明	2.2		幅2.2cm×2.4cm程の加工痕が残る	腰あての可能性
112	882	不明品		27.5	18.9	2.1	不明	1.5		1.5×3.7cm程の加工痕が全面に残る	工具
112	883	不明品		13.8	10.4	10.5	A種、湾曲	2.6		多方面から加工	柱材の可能性
112	884	不明品		22.5	12.5	4.8	不明	不明		両端に抉りあり	裏側浅く凹む
112	885	不明品		21.4	A:1.1 B:0.4	A:1.1 B:0.6	不明	不明		全面を丁寧に削る	先端は光る
112	886	板材		(62.6)	A:6.1 B:8.7	A:1.0 B:1.8	不明	不明		右側面に削り痕あり	圧痕あり
112	887	板材		(8.1)	(5.2)	1.2	不明	不明			板目材を使用
112	888	板材		(21.8)	4.9	1.1	不明	不明			板目材を使用
112	889	板杭		(47.6)	A:6.3 B:4.4	A:1.6 B:2.7	不明	不明		1面に加工	建築材の可能性
112	890	板材		(33.4)	9.6	1.1	不明	不明		丁寧に成形される	建築材の可能性
113	891	板材		(82.2)	A:10.5 B:6.5	A:4.4 B:2.3	不明	不明			建築材の可能性
113	892	板材		(54.2)	A:5.2 B:6.4 C:7.7	A:2.1 B:2.0 C:2.3	不明	不明			厚さが均一である
113	893	板材		(51.6)	A:7.6 B:8.4	A:3.2 B:3.5	不明	不明		下部を一段細く加工する	圧痕あり
113	894	板材		(50.0)	A:9.1 B:5.0	A:3.4 B:1.7	不明	不明		両側面の一部に加工痕残る	
113	895	板材		(27.0)	16.4	4.3	不明	1.5		板状に丁寧に削りだされている	炭化している
113	896	角材		(36.6)	A:4.4 B:(2.3)	A:4.0 B:4.1	不明			上面は平坦に加工 下部欠損	
113	897	角杭		(29.7)	A:6.9 B:7.0	A:3.7 B:3.9	不明			つぶれている。3.2×2.9cmの加工痕あり	
114	898	角杭		50.1	A:(7.4) B:(8.7)	A:5.9 B:7.1	不明			表面に工具痕が多く残る	建築材の転用品
114	899	角材		51.2	A:10.4 B:10.0	A:5.9 B:7.7	不明	不明		摩耗のため不明	建築材の可能性
114	900	割杭		(43.7)	A:12.0 B:5.5	A:4.9 B:3.1	B種？	2		側面を一面に加工。 加工単位が複雑に切り合う。	建築材の可能性
114	901	割杭		(39.0)	7.0	3.2	不明	2.5		3～4面に加工	
114	902	角材		24.0	10.9	8.9	不明	不明		全体に炭化しているため不明	柱材？
114	903	割材		38.4	A:6.3 B:5.4	A:4.4 B:3.2	不明	不明			正面，側面，裏面に 圧痕が残る
114	904	丸杭		39.3	4.8	A:4.9 B:4.1	A種、湾曲	2		4面に加工	上端も加工される

としている。902は割材を利用した角材で，全面が炭化している。上端は欠損し，下端は丸みを帯びている。903はみかん割り状の割材である。正面，側面，裏面に圧痕が残っている。901は割杭，904は丸杭である。

(12) 溝状遺構２（第115図）

AB－21・22区で検出され，自然流路１が完全に埋没した後に，自然流路の中央部に沿って掘削されている（第79図断面図）。自然流路１同様，検出することができたのは下層部の⑤層部分の砂利層のみである（第115図土層断面図）。検出された溝状遺構の大きさは長さ16.3m，幅0.5～２m，深さ15cm程で，床面には平面形が不定形である３基の土坑が検出された。溝は，土層断面の観察から，幅1.3m，深さ0.6m程で断面形は台形であったことがわかる。溝状遺構の下層には鉄分を多く含む砂利層（⑤層）が堆積しており，水路として使用されていたことがうかがえる。遺構には総数63本の杭が伴っている。杭は東側から５つのグループに分けることができる。A～C地点では北側の壁面沿いに検出され，各地点の距離は４m程である。特にB・C地点の壁沿いの杭は南側へ傾き，遺構内の杭は垂直に打ち込まれている。さらに，杭列付近は溝状遺構が外側へ張り出している。D・E地点では溝状遺構全体に杭列が広がり，B・C地点の杭列と同様に北壁沿いの杭が南側へと傾いている。溝状遺構と同時期と推定される周囲の土壌のプラントオパール分析・花粉分析から溝状遺構と３地点の間に水田跡が存在したことが指摘されている。溝状遺構が水路であるとすれば，A～C地点の杭列は溝状遺構と微高地の間に存在した水田跡の取水口に伴う施設と考えられる。さらに，D・E地点の杭は水路全体の水量を調節する井堰などの遺構に関わる可能性が考えられる（第115図下）。杭の中には上端を加工しているものがあり，他の部材と組み合わさり上部構造をもつ可能性がある。各地点の杭列は丸杭，割杭，角杭が，規則的に配置されるのではなく混在している。杭と土器や木製品の出土状況について特筆すべき箇所は見あたらなかった。

弥生土器2820点，石器45点，木製品86点が遺構内全体から出土した。遺物は⑤層の上面から集中して出土し，レベル差がないことから短期間で廃棄されたと思われる。また，No943の壺の埋土からムギ類と同定された種子が１点検出された。

出土遺物

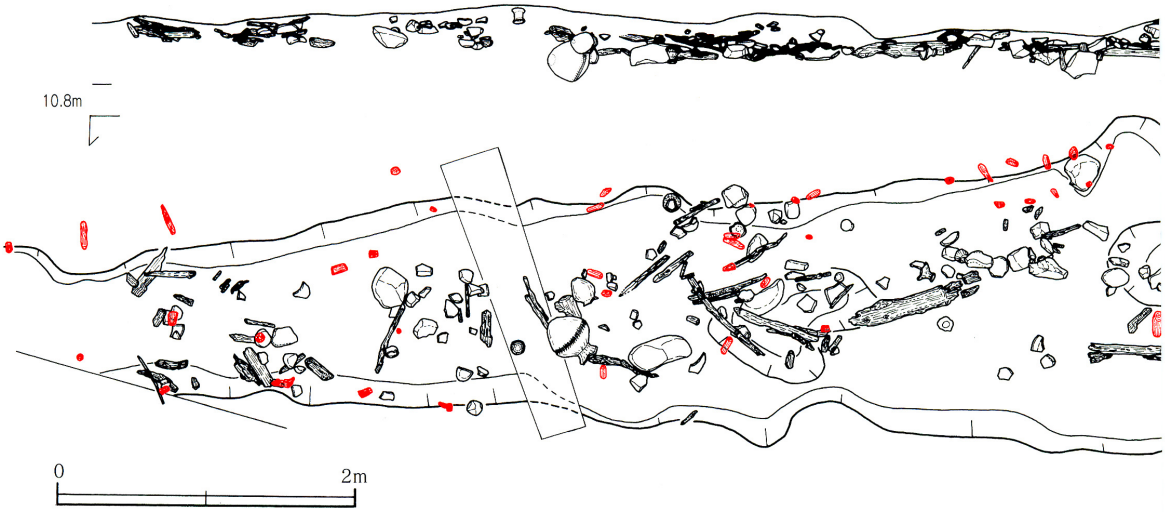
弥生土器184点，石器19点，木製品49点を図化した。

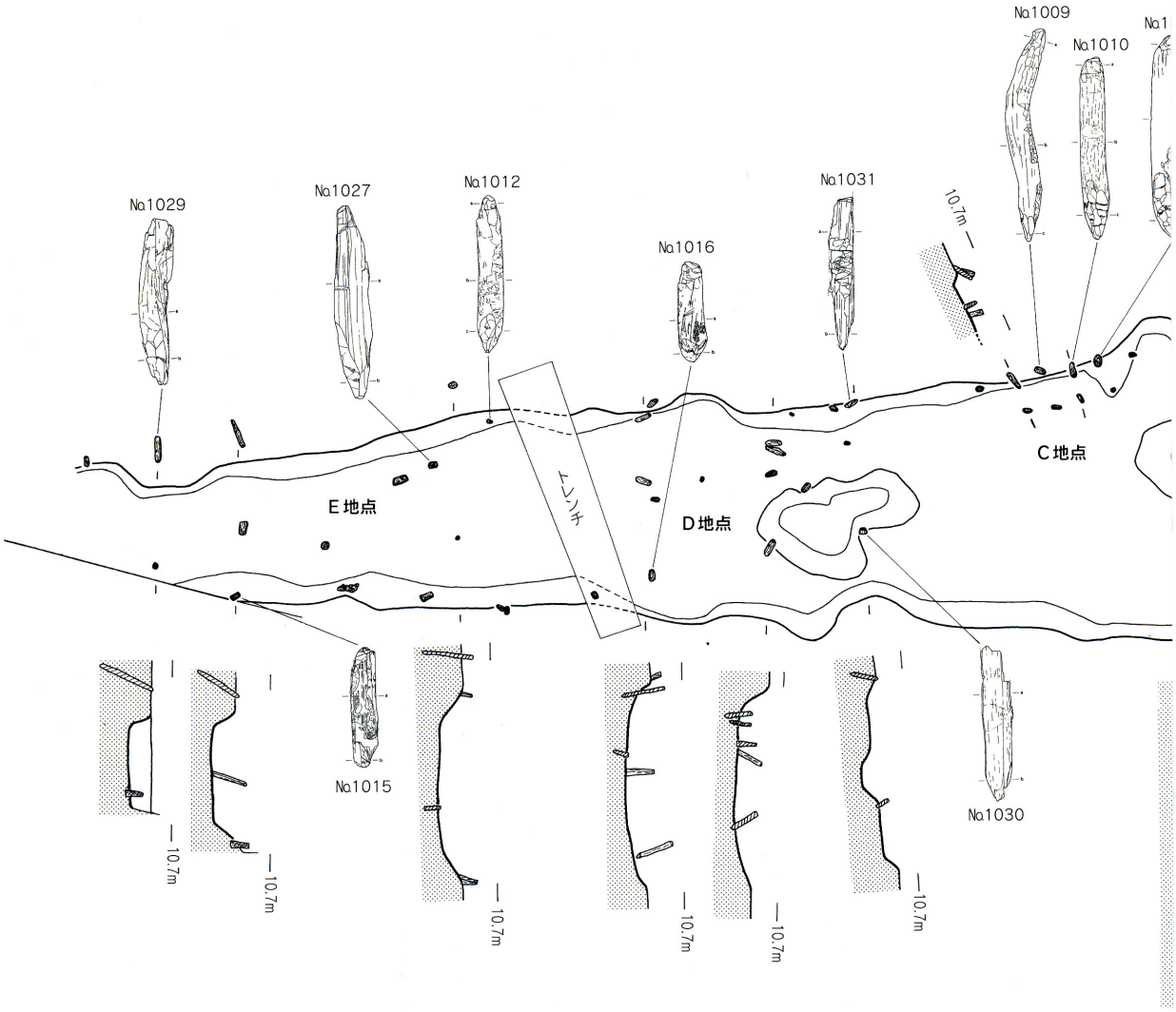
甕

溝状遺構２は，自然流路１では見られなかった型式であるＩｃ類が主体を占める。

Ｉｂ類（第116図 905～907）

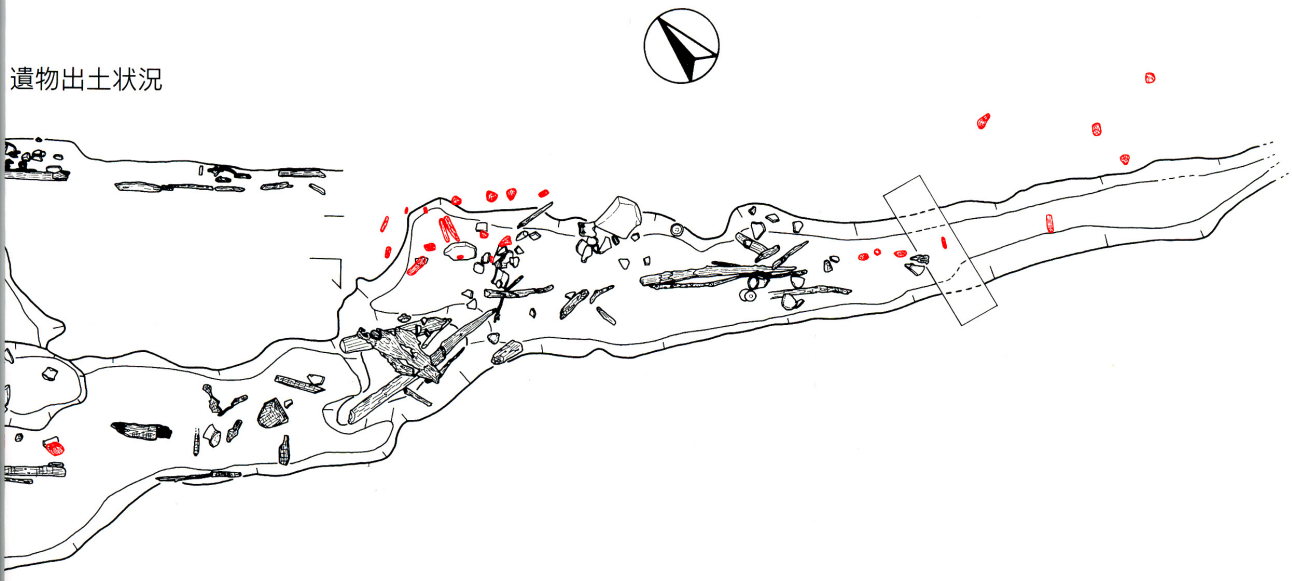
905は口縁部が短く外反し胴部は張らずに底部に向かってすぼまる。外面胴部にはタタキのような粗いハケ目が施され，内面胴部はハケ目，口縁部はナデ調整が施され指頭圧痕が並んで残る。906は口縁部外反して開き，口縁部の器壁が胴部に比べ薄い。内外面ハケ目後ナデ調整が施されている。907は口縁部が外反し，口唇部は平坦である。胴部はわずかに膨らみ低部に向かってすぼまる。外面はハケ目が施され，部分的に強くナデられている。内面は口縁部がハケ目，胴部はケズリ調整である。


10.8m
0
2m

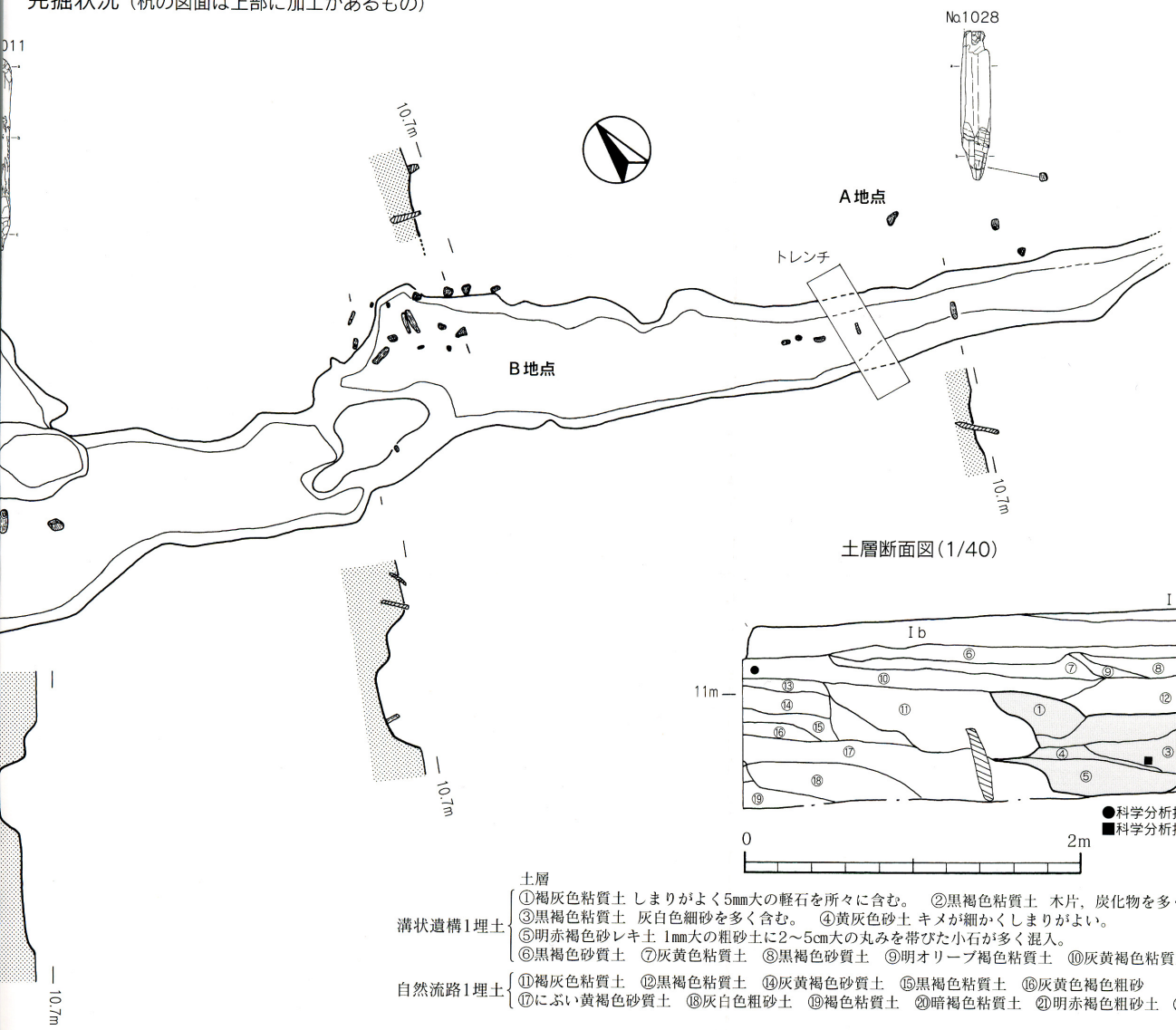

No.1029
No.1027
No.1012
No.1016
No.1031
No.1009
No.1010
No.1
10.7m
C地点
D地点
E地点
トレンチ
No.1015
No.1030
10.7m

第

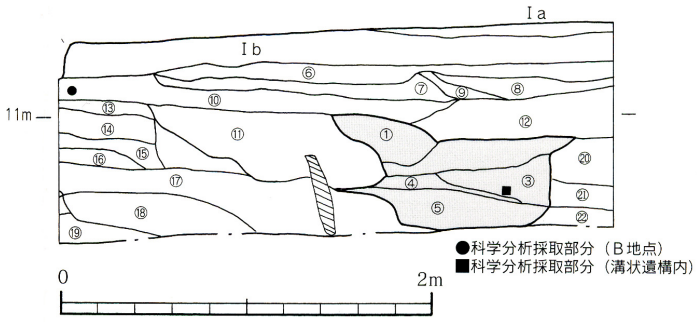
遺物出土状況



完掘状況（杭の図面は上部に加工があるもの）



土層断面図（1/40）



土層

溝状遺構1埋土
①褐灰色粘質土 しまりがよく5mm大の軽石を所々に含む。 ②黒褐色粘質土 木片，炭化物を多く含む。
③黒褐色粘質土 灰白色細砂を多く含む。 ④黄灰色砂土 キメが細かくしまりがよい。
⑤明赤褐色砂レキ土 1mm大の粗砂土に2～5cm大の丸みを帯びた小石が多く混入。
⑥黒褐色砂質土 ⑦灰黄色粘質土 ⑧黒褐色砂質土 ⑨明オリーブ褐色粘質土 ⑩灰黄褐色粘質土 ⑬褐色砂質土

自然流路1埋土
⑪褐灰色粘質土 ⑫黒褐色粘質土 ⑭灰黄褐色砂質土 ⑮黒褐色粘質土 ⑯灰黄色褐色粗砂
⑰にぶい黄褐色砂質土 ⑱灰白色粗砂土 ⑲褐色粘質土 ⑳暗褐色粘質土 ㉑明赤褐色粗砂土 ㉒黒褐色砂質土

115図 溝状遺構２（１/50）

Ⅰc類（第116・117図 908～923）

Ⅰb類に比べ口縁部が直立に近く，器壁が薄い。施文方法はいわゆる「かきあげ口縁」と呼ばれる技法を使用している。また，溝状遺構2において主流となる型式である。

908・909は口縁部が長く緩やかに外反する。頸部から上方へ縦方向のハケ目が明瞭に残り，胴部との境に段を持つ。908は全体的に器壁が薄く，胴部は張らない。909は口縁部にハケ目が二重に施され，胴部との境に段が2つ付く。910は口縁部が「く」字に外反する。頸部で屈折し胴部は外傾して開く。内外面ハケ目後ナデ調整が施されている。911は口縁部が直線的に外傾し，口唇部は平坦で中央に窪みをもつ。胴部は内傾している。外面口縁部から上胴部には煤が厚く付着しており，口縁部と胴部の境には工具痕が強く残る。内面はハケ目後ナデ調整が施され，頸部に指頭圧痕が残る。912～914は口縁部が直線的に外傾し，端部は平坦で中央が窪む。912は内外面ハケ目後ナデ調整が施され，内面には工具痕が多く残る。913は器壁が薄い。外面はハケ目後ナデ，内面はナデ調整である。914は胴部が下方で屈曲し，器高が低くなると思われ，鉢である可能性がある。外面はハケ目，内面はナデ調整が施される。915は口縁部が「く」字に外反し，端部が平坦である。内外面ハケ目調整である。916は口縁部が外反し，器壁が薄い。内外面ハケ目後ナデられている。917は直線的に外反している。内外面ハケ目後ナデられ，外面は部分的に強くナデているために器面が凹み，指頭圧痕が残る。918～920は直線的に外反し，端部は平坦である。919・920は内外面丁寧にハケ目が施されている。918は外面に「≦」と描かれた線刻が残る。921は口縁部が直線的に外反し，口唇部には1条の沈線が施されている。胴部はややふくらむ。外面は器面が荒い。922は口縁部が緩やかに外反して開く。内外面ナデ調整が施される。923は緩やかに外反し，端部が平坦である。外面はハケ目後ナデ，内面はナデ調整が施されている。

No918の線刻

Ⅱ類（第117図 924・925）

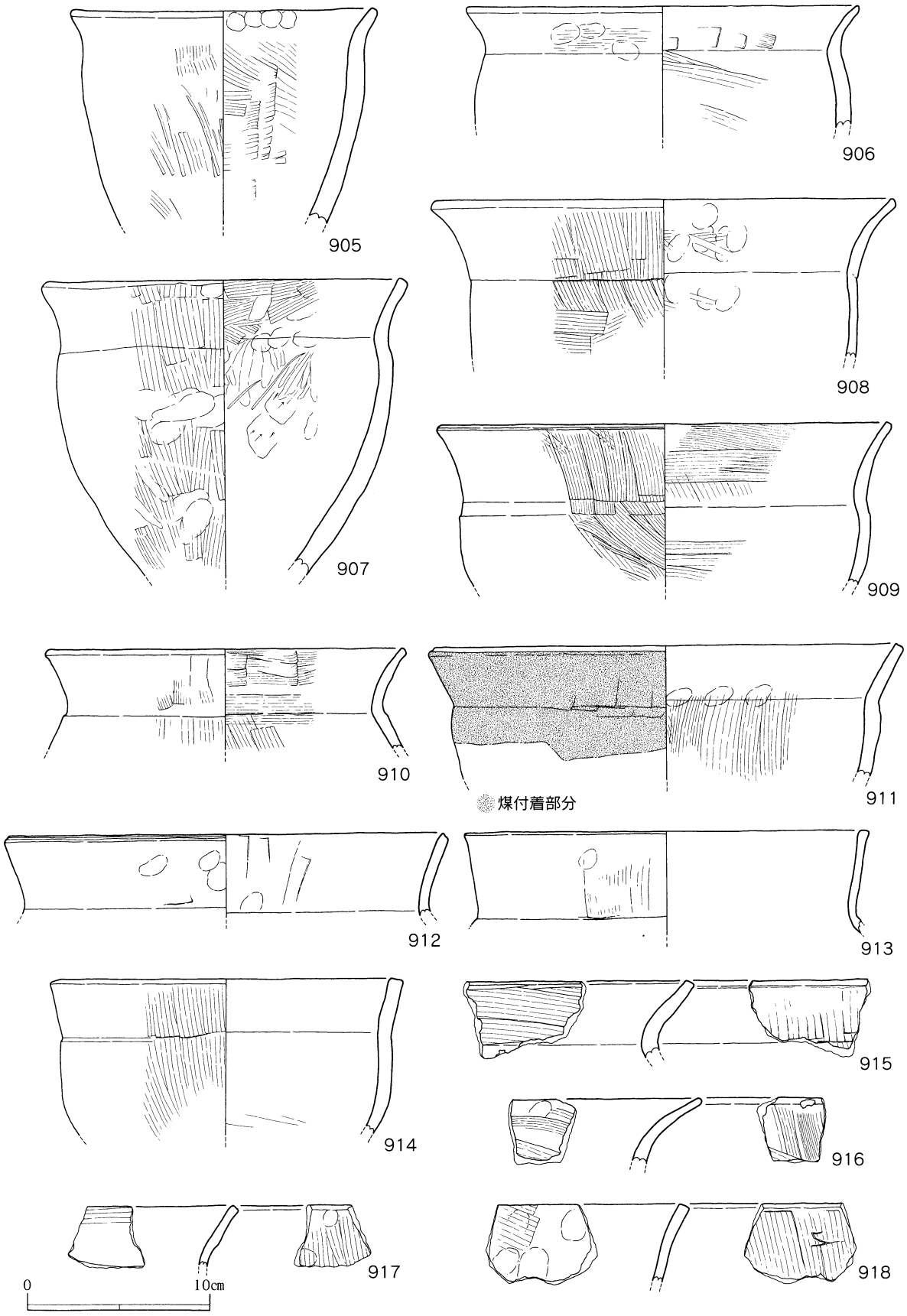
924は屈曲した上胴部から内傾して立ち上がり，口縁部は直立している。胴部は底部に向かってすぼまり，低く小さい底部は弧状に開く。口縁部はナデ，上胴部は板ナデ後ナデ，胴部は強くナデられている。脚部はナデで指頭圧痕が多く残る。内面は丁寧にナデ調整が施され，鉄分が付着しているため黄褐色をしている。925は口縁部が長く直線的に外傾する。肩が張り，上胴部には稜が付く。胴部は二次焼成のために荒れており，調整は不鮮明である。外面口縁部と内面はハケ目，下胴部にはケズリ調整が施されている。

Ⅲ類（第117図 926・927）

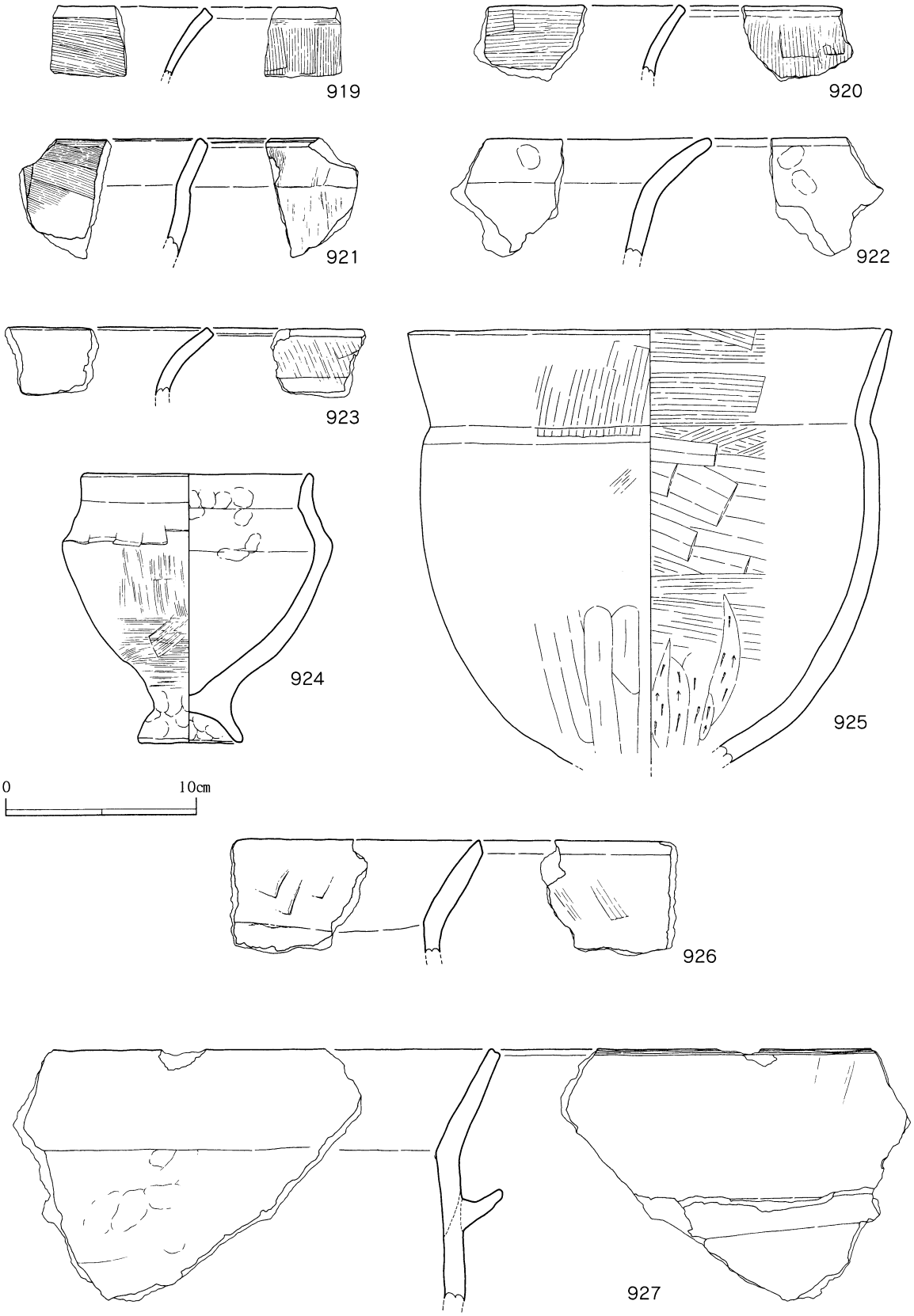
926・927は「く」字状に外反する直線的な口縁で，端部は平坦である。屈曲がやや強く，内面に稜がつく。926は内外面ハケ目後ナデ調整が施されており，工具痕がわずかに残る。927は上胴部に上方に湾曲した断面三角形の突帯が付く。内外面丁寧なナデ調整が施されている。

底部（第118図 928～942）

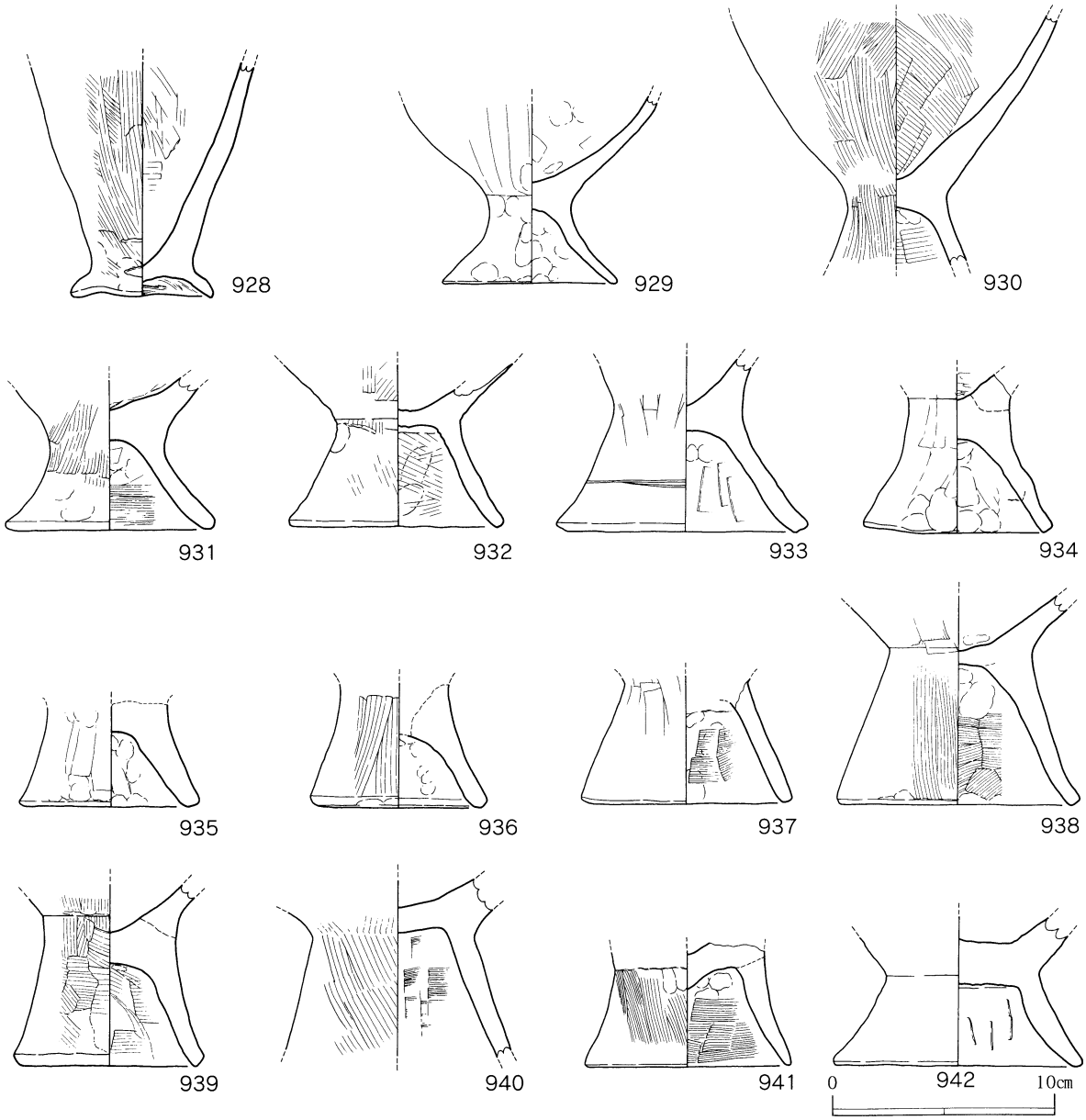
928は弧状に開く低い底部から直線的に胴部へと外傾して立ち上がる。胴部は内外面丁寧なハケ目，底部はナデ調整を施している。929は丸みを帯びた下胴部がすぼまり底部へ至る。内外面



第116図　溝状遺構２出土土器（１）



第117図　溝状遺構２出土土器（２）



第118図　溝状遺構２出土土器（３）

共に板ナデ後ナデ調整を施している。脚部はナデられ指頭圧痕が多く残り，器面に凹凸が残る。930は直線的に外傾した脚部から胴部が広がって立ち上がる。内外面ハケ目が丁寧に施されている。931～933は緩やかに湾曲して広がる。933は外面に1～2ｍｍ幅の沈線が１条廻っている。内外面板ナデ後ナデを施している。器壁はやや厚くしっかりとしたつくりになっている。934・935は直線的に開く。外面は板ナデ後ナデ，内面はナデ調整である。934は端部が面取りされている。強く板ナデを施しているために器面に凹凸があり，粗いつくりになっている。936は緩やかに外側に湾曲して開く。外面は丁寧なハケ目，内面はナデ調整である。937～940は直線的に開き，端部が面取りされている。937は器壁が薄い。外面は板ナデ後ナデ，内面は細かいハケ目

が施されている。938・939は内外面ハケ目が丁寧に施されている。940は端部が欠損している。外面は丁寧なハケ目，内面は細かいハケメが連続的に施された後にナデられている。941はわずかに外反しながら開き，底部内面の天井部は脚部との境を強くナデているために凸状を呈している。942は胴部と脚部の境が屈曲して台形状をなし，肥後地方特有の形態である。内面天井部は平坦にナデられている。

壺

Ⅰb類（第119図 943・944）

943は口縁部が「く」字に外反し，端部は丸くおさまる。胴部は少し張り気味で，平底である底部へすぼまるように至る。内外面共にハケ目調整が施してあり，外面にはケズリ調整を施した跡がわずかに残る。944は胴部が張らず，底部は丸底である。外面はハケ目後ナデ，内面はケズリ調整が施されている。

Ⅱ類（第119図 945）

945は口縁部が頸部から直線的に立ち上がり，上部で大きくひらき，端部は丸くおさまる。頸部から張り出した胴部には，断面方形を呈した２条の突帯が廻り，工具により２本同時に１ｍｍ幅の刻目が施されている。底部は尖り気味の丸底を呈している。外面はハケ目，内面はハケ目後ナデ調整が施され，指頭圧痕が多く残る。

口縁部（第119・120図 946～950）

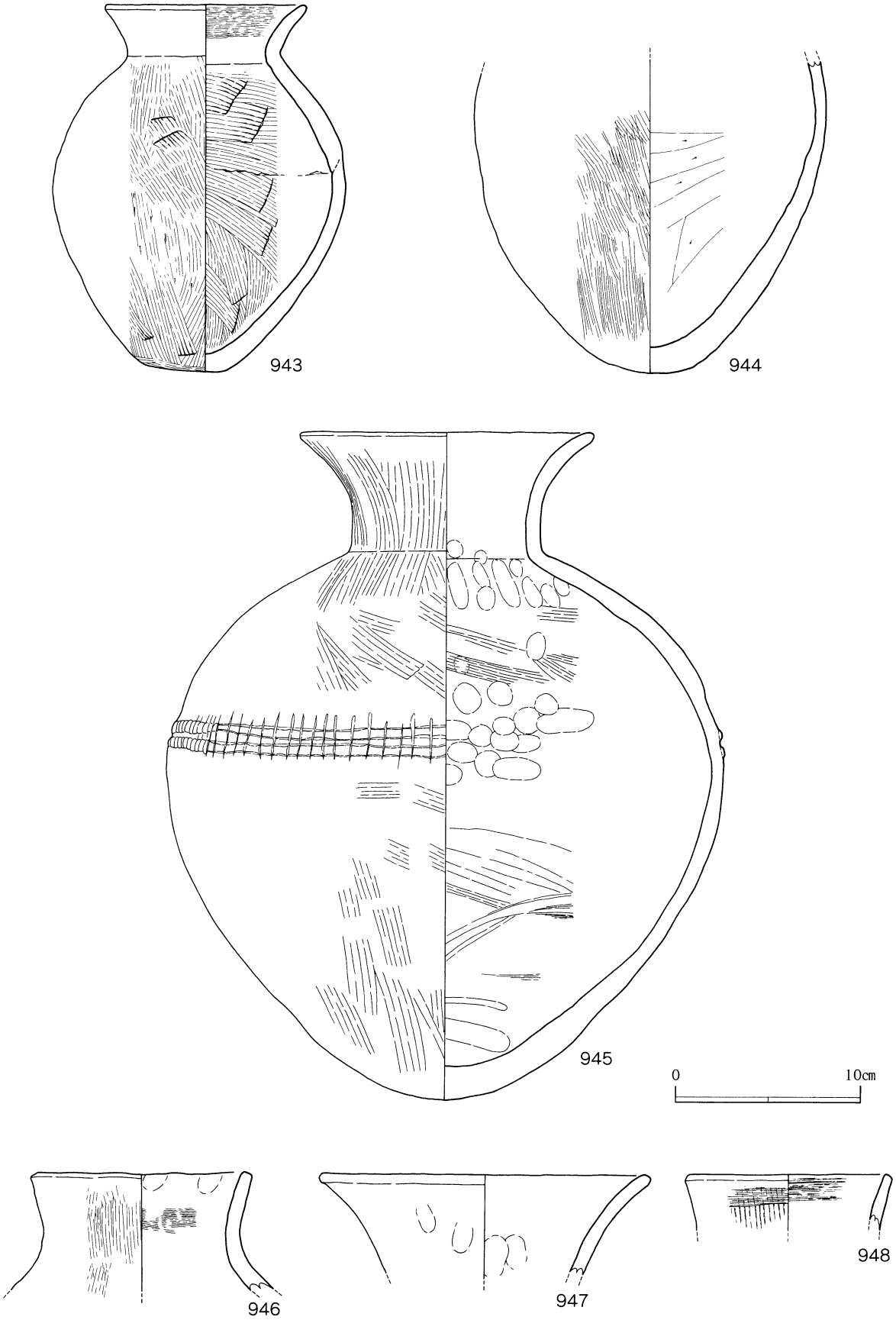
946は直線的に外傾し，端部は平坦である。内外面ハケ目後ナデ調整である。947は大きく外反する。948は口縁部が直線的に外反している。外面はハケ目が施され上方には強い横ナデが施される。949は大きくに外反し，口唇部は平坦で中央がわずかに窪む。外面はハケ目後ナデ，内面はナデ調整である。950は直線的に外傾し，器壁が薄い。内外面ナデ調整が施され，指頭圧痕が明瞭に残る。

底部（第120図 951～955）

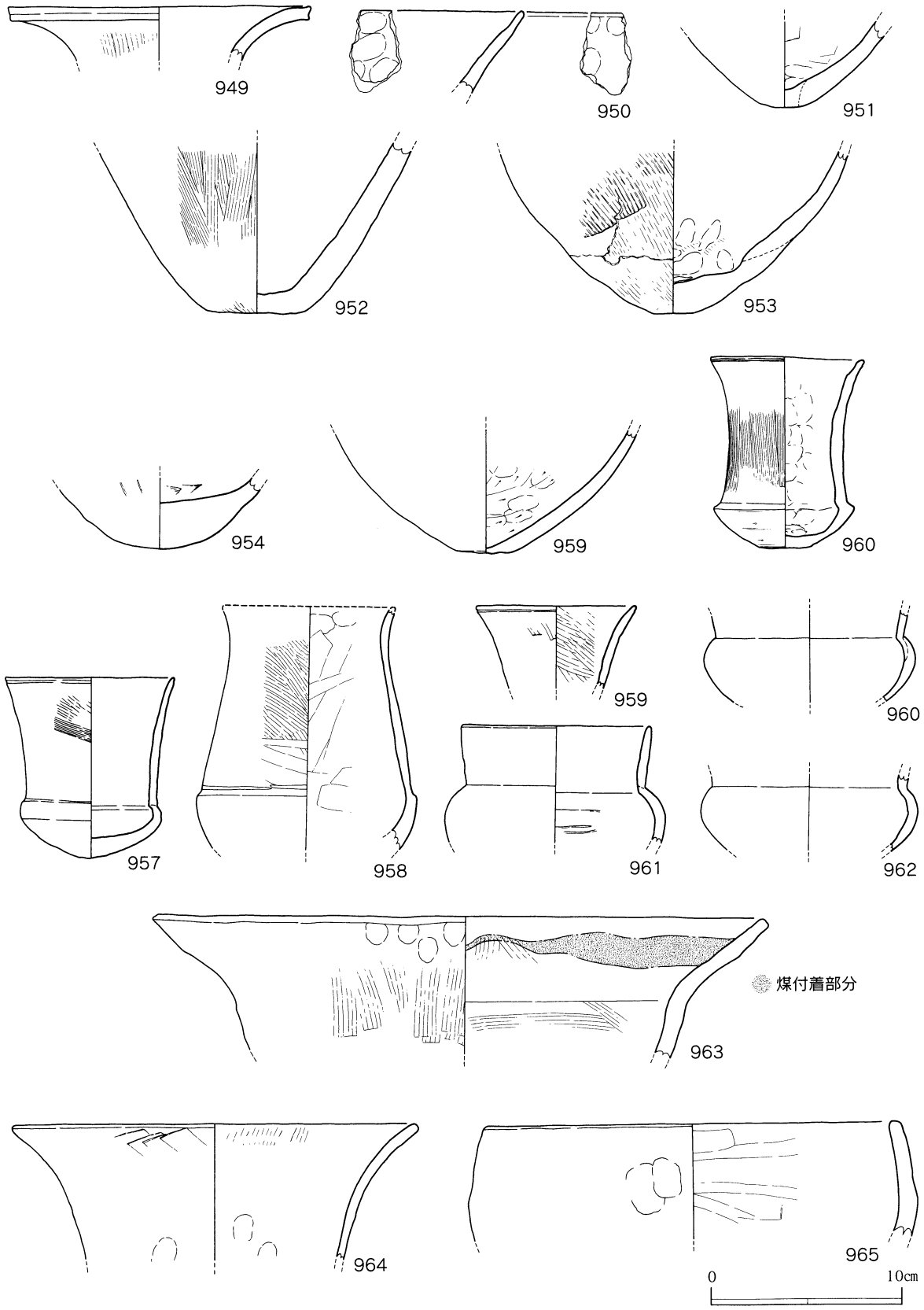
951・953は丸みを帯びた平底である。953は外面にハケ目調整が施されているが，調整は粗く器面に凹凸が残る。952は平底で底部から直線的に開きながら胴部へ立ち上がる。外面はハケ目が丁寧に施されている。954は丸底である。内外面ハケ目後ナデ調整を施し，内面には工具痕がわずかに残る。955は器壁が薄く丸みを帯びた平底である。内面にはケズリ調整が施されている。

小型丸底壺（第120図 956～962）

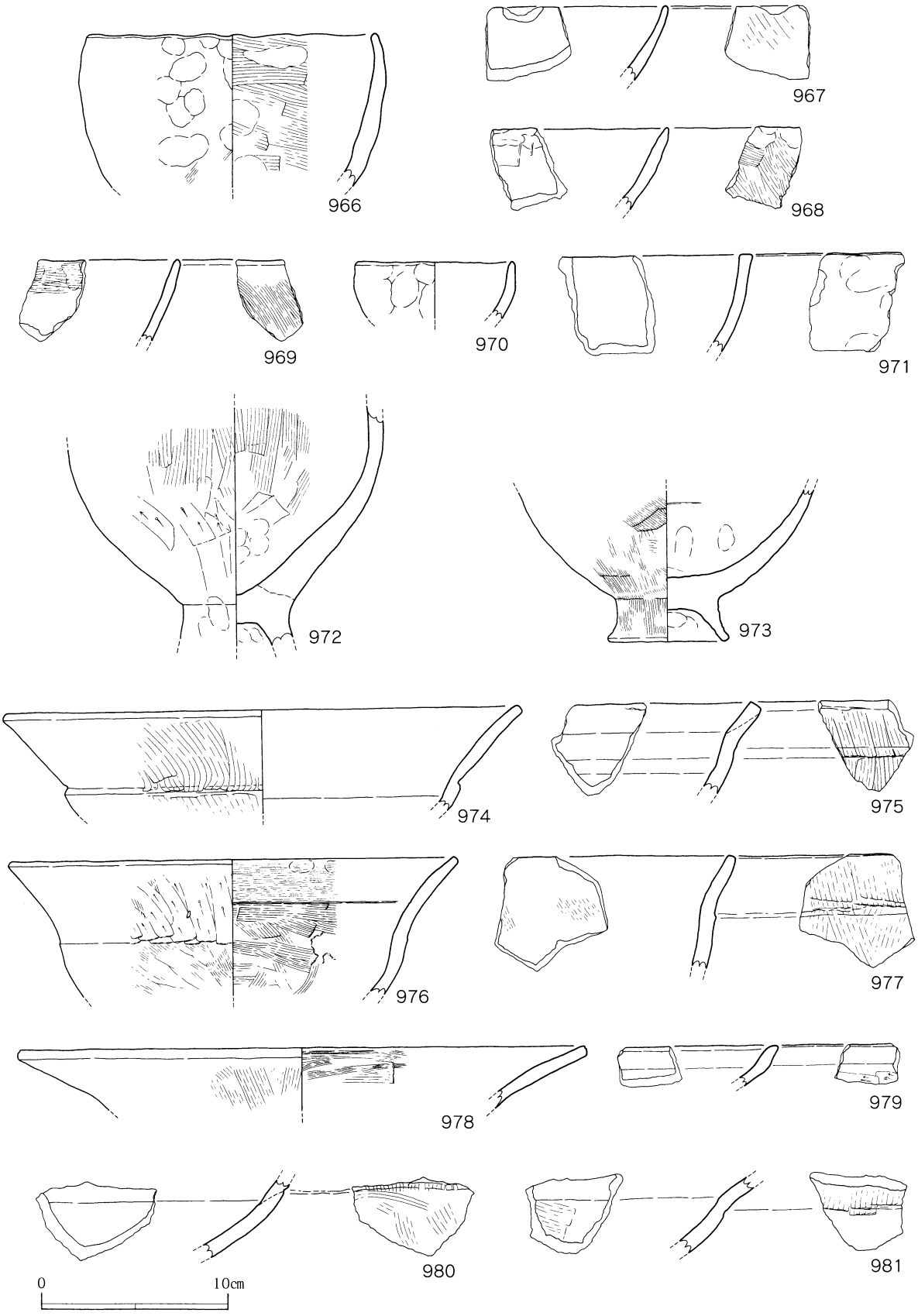
956は口縁部が外反して開き，頸部は内傾する。頸部にはハケ目が丁寧に施され，胴部はケズリが施されている。957は口縁部が外傾して開く。頸部はしまり，胴部は丸みを帯びて尖り気味の底部に至る。外面口縁部はハケ目後ナデ，胴部と内面はナデ調整である。958は口唇部と底部が欠損している。口縁部は緩やかに外反し，頸部は内傾している。胴部との境には１条の沈線を持ち，段が付く。胴部は丸味を帯びる。外面口縁部はハケ目が丁寧に施され，胴部はナデである。内面は板ナデが粗く施されている。959は外反して広がる。口縁端部付近には浅い沈線が１条施されている。外面はハケ目後丁寧なナデ，内面は幅広のハケ目調整である。960～962は口縁部が短く，直線的に外傾する。頸部で締まり，胴部は丸く内湾する。外面は丁寧にナデ調整が施される。961は板ナデ後調整が施され，内面胴部には工具痕が残る。225と227は同一個体である。



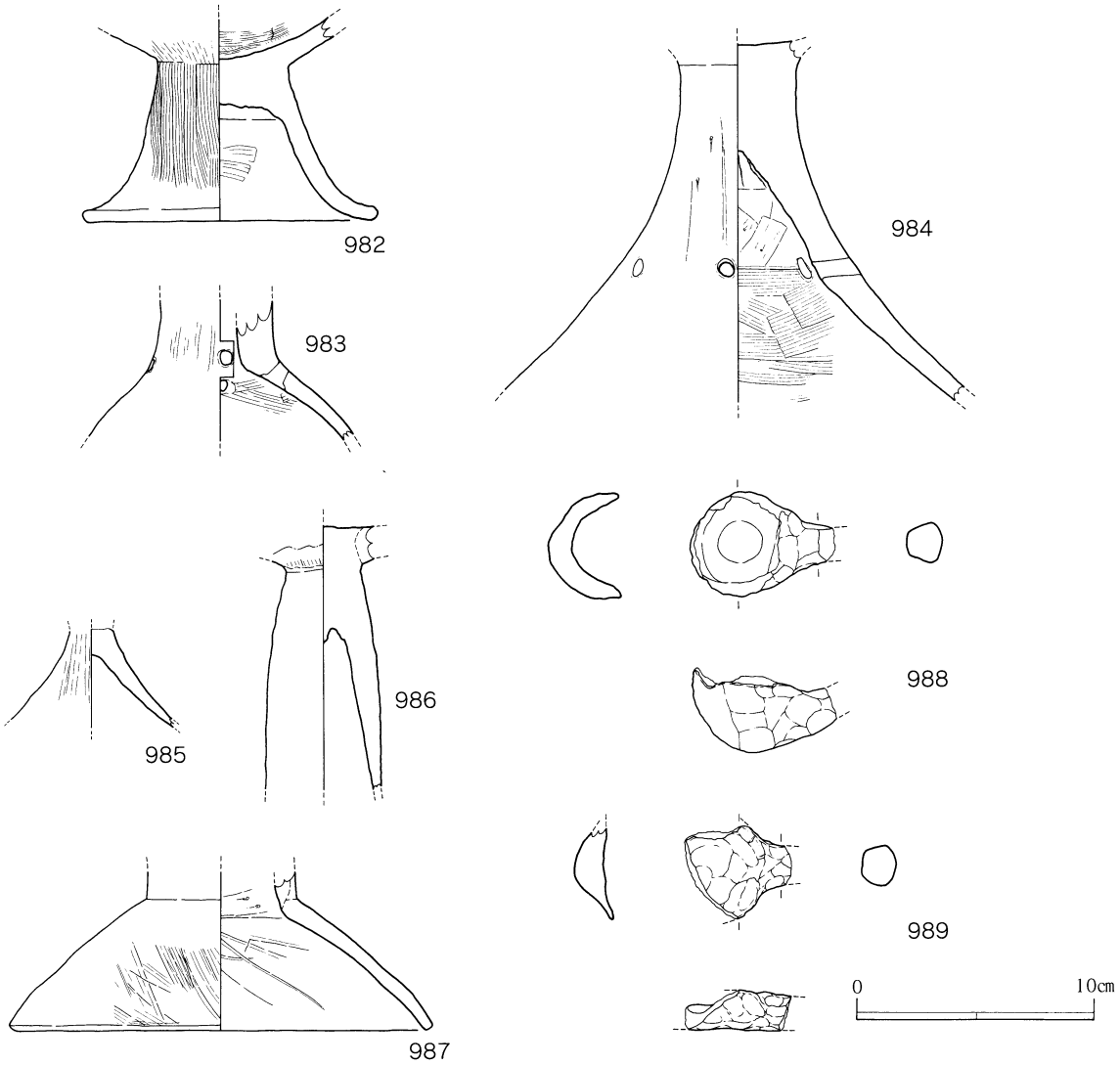
第119図　溝状遺構２出土土器（４）



第120図　溝状遺構２出土土器（５）



第121図　溝状遺構２出土土器（６）



第122図　溝状遺構２出土土器（７）

鉢（第120・121図963～973）

963・964は口縁部が大きく外反して開くものである。963は口縁端部が平坦で器面が粗い。内面には煤が付着している。964は器壁がとても薄い。外面は板ナデ後ナデられており工具痕が多く残る。内面はハケ目後ナデ調整である。965～967は口縁部が内湾している。965は外面がナデ，内面は板ナデ後ナデ調整である。966は外面がナデ，内面はハケ目後部分的に強くナデ調整をしている。965，966は外面を強くナデているため器面に指頭圧痕が残り凹凸がある。967は胎土が精製されている。外面は薄くハケ目が残る。968は外傾して広がり，先細りする。外面はハケ目，内面はハケ目後ナデ調整で工具痕が残る。969は緩やかに外傾している。内外面はハケ目後ナデ調整である。970は口縁部が湾曲した胴部から直立している。内外面ナデ調整で，指頭圧痕が多く残る。971は口縁部がわずかに内湾し，口唇部が平坦である。器面が粗い。972は胴部がすぼまるように直線的に開く脚部に至る。外面下胴部はケズリ後ナデ調整が施され，破裂痕が残る。973は胴部が丸く，脚部は緩やかに開く。外面は細かいハケ目調整が施され，内面のナデ調整は丁寧である。

高坏（第121・122図 974～987）

974は口縁部が直線的に外反し，頸部は屈折し，稜が強く付く。調整は丁寧に施され，外面はハケ目，内面はナデである。975・977は口縁部が外反する。外面には丁寧なハケ目調整が施れ，胴部との境には段が付く。976は，外面口縁部にケズリ調整が見られ，その形状から鉢である可能性がある。978は口縁部が大きく外傾する。979は口縁部が直立気味で，胴部にはケズリ調整が施されている。980・981は頸部から胴部の破片である。頸部で屈折しており，稜が残る。

982～987は脚部である。982は緩やかに外傾し，裾部で大きく開く。外面には丁寧なハケ目調整が施されている。983は直立する脚柱部から弧状に裾部が開く。裾部上方には円形透孔が4孔施されている。984は裾広がりに大きく開く。脚部中央に円形透孔が6孔施されている。985は緩やかに外反してひらく。内外面ナデ調整である。986は円筒状の脚柱部で，上端部にハケ目調整が施されている。987は柱状の脚部から屈折をもって弧状に広がる裾部である。端部は面取りされている。内面脚柱部にはケズリ調整が施されている。

匙状土製品（第122図 988・989）

988・989は手づくねの土製品である。988はやや深めの頭部から斜め上方に柄が付く。989は皿状の頭部から直行して柄が付いている。器面全体には指頭圧痕が多く残る。

第21表　分類別弥生土器出土一覧表

	甕					壷						小型丸底壷	高坏		
													口縁	脚部	
分類	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	不明	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	不明			透孔有り	透孔無し
1号竪穴住居跡					1						1				
2号竪穴住居跡	5				2	1					1				
炉跡1	6				1	1					5		2		
土坑1	4			2							2				
自然流路1	34		2	8		9		2	3	1	10		1		5
溝状遺構2	19	2		2		2	1				5	7	8	2	4

石鏃（第123図 990）

良質な黒曜石を素材とし，正三角形状の端正な形に仕上げてある。基部の抉りも深く，脚部先端も鋭利に形づくる。

スクレイパー（第123図 991・992）

991は気泡を多く含むハリ質安山岩の剥片を利用し，一方向から大ぶりの剥離を行って刃としている。992は安山岩の薄い剥片縁辺に連続した剥離を加えている。

石斧（第123図 993）

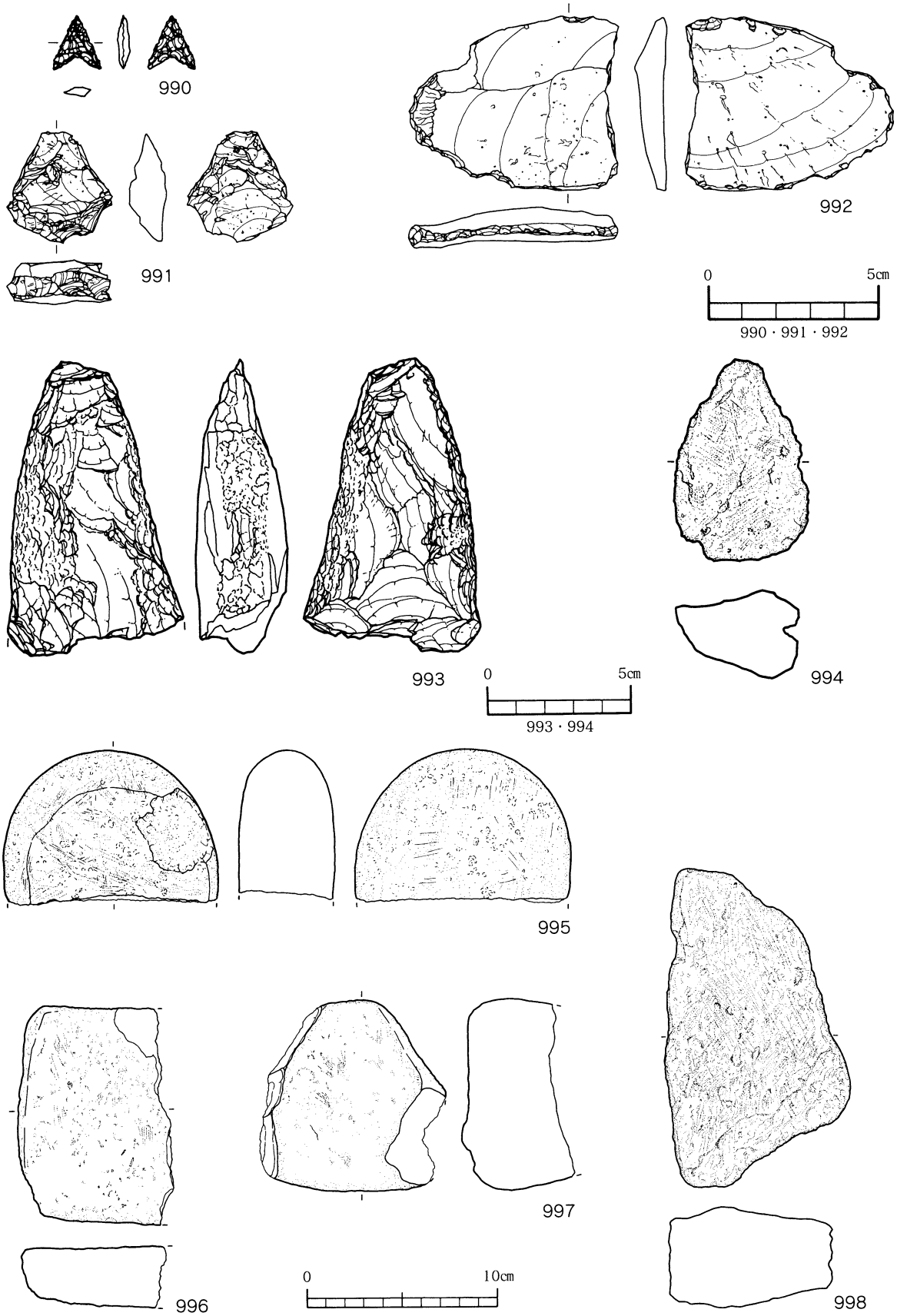
剥離を加えて大まかに形をつくった後，入念に敲打している。敲打面よりも剥離面の方が広いことから，製作途中で折れた可能性もある。

軽石製品（第123図 994・998）

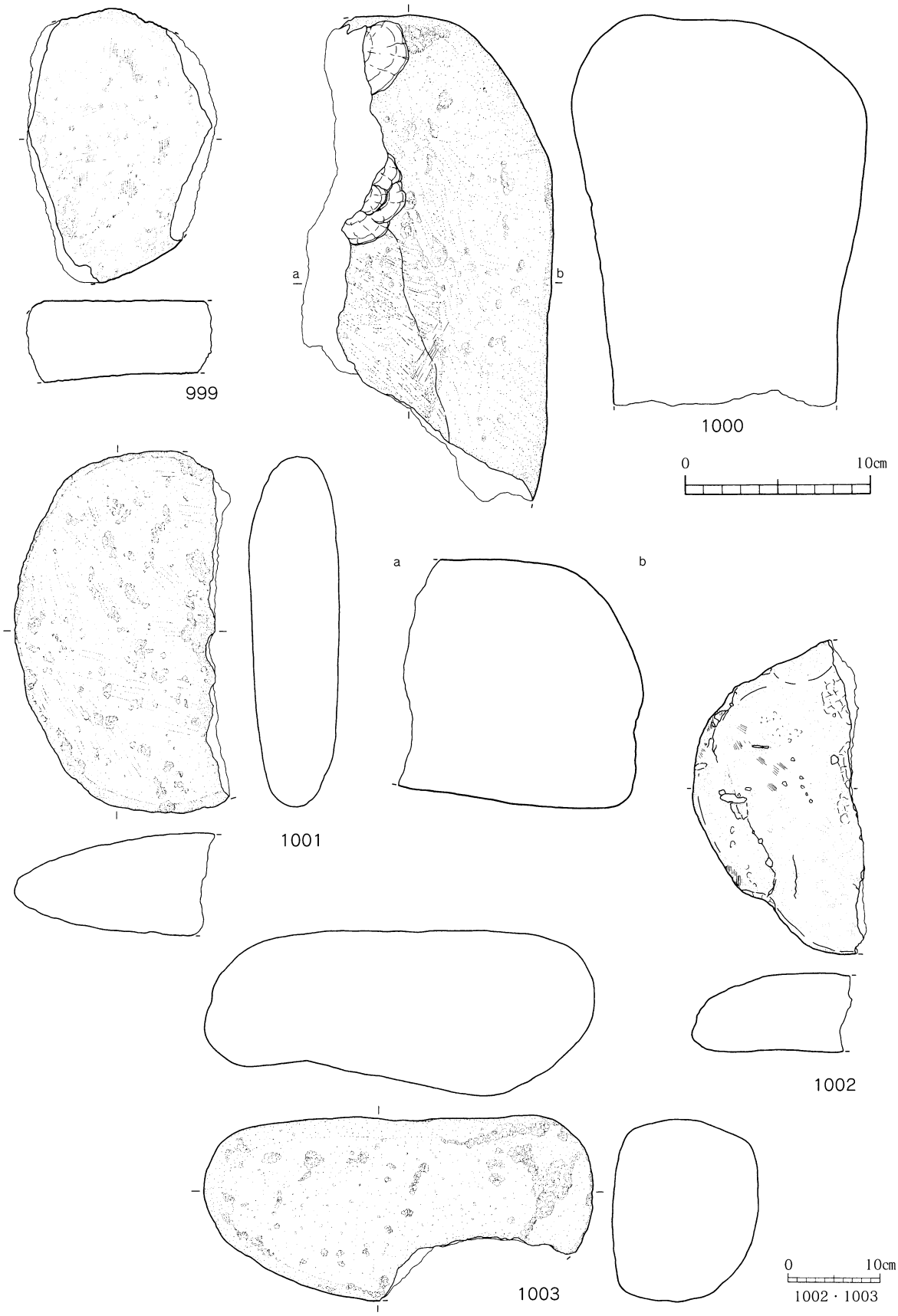
形状も擦痕もはっきりせず，用途は不明である。

磨石（第123図 995）

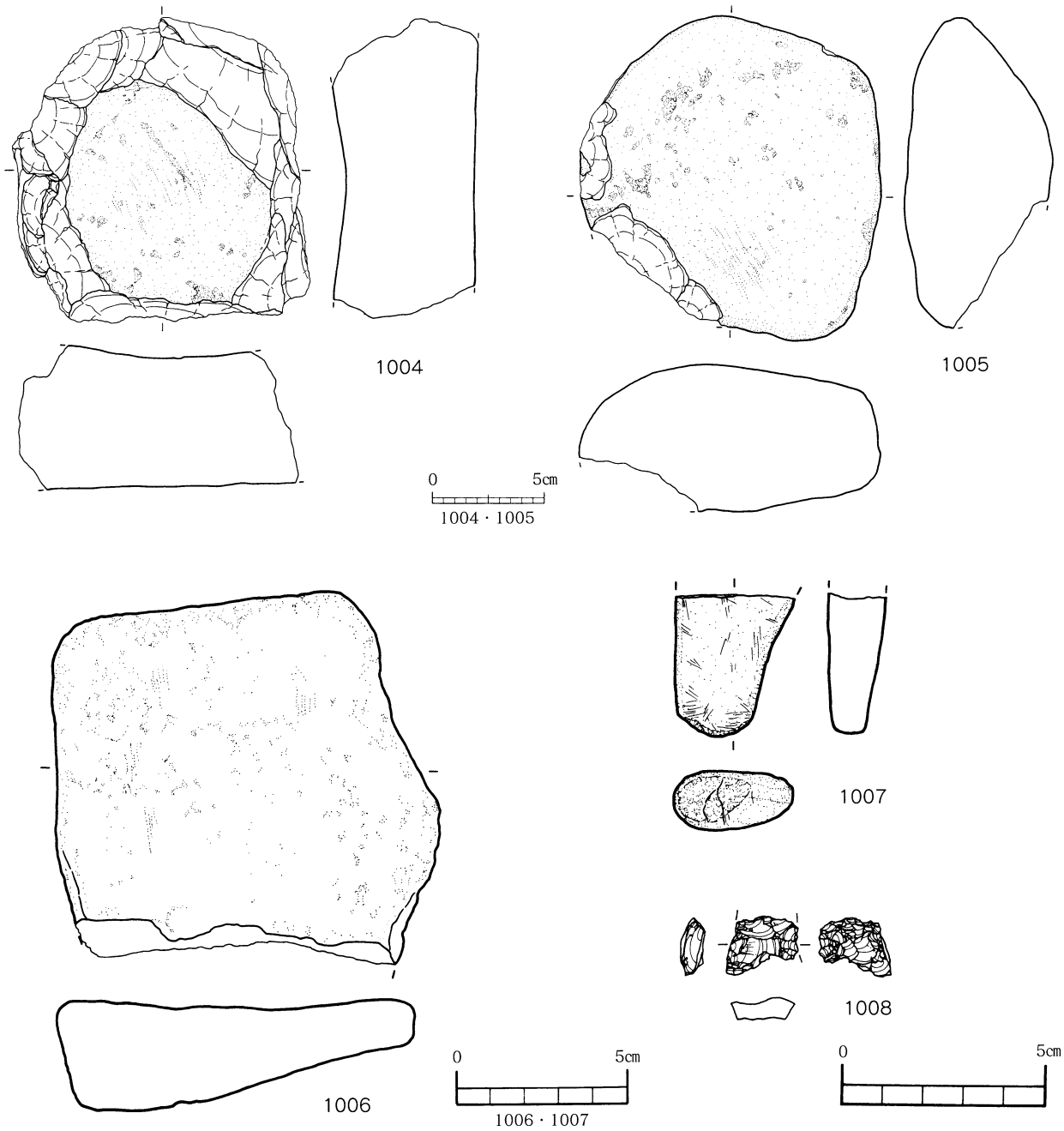
花崗岩を素材とするもので，全体的に磨られている。



第123図　溝状遺構２出土石器（１）



第124図　溝状遺構２出土石器（２）



第125図　溝状遺構２出土石器（３）

石皿（第123～125図 996・997・999～1002・1004・1005）

996は手の平にのる方形の安山岩礫の平坦面を使用している。997は自然の凹凸面の一部に使用痕が観察できる。この部分はやや黒味を帯びる。1004は周縁が風化しており形がはっきりしないが，定形的な石皿と考えられる。皿面は湾曲し，使用による磨滅も著しい。1005は皿状とは逆に凸レンズ状にふくらみをもつものである。水辺で皮や衣類をもみ洗いするための石としても考える必要がある。

溝状遺構内出土杭列（第127～130図）

63本中39点を図化した。杭列は大型の丸杭，角杭，割杭によって構成され，杭の多くは

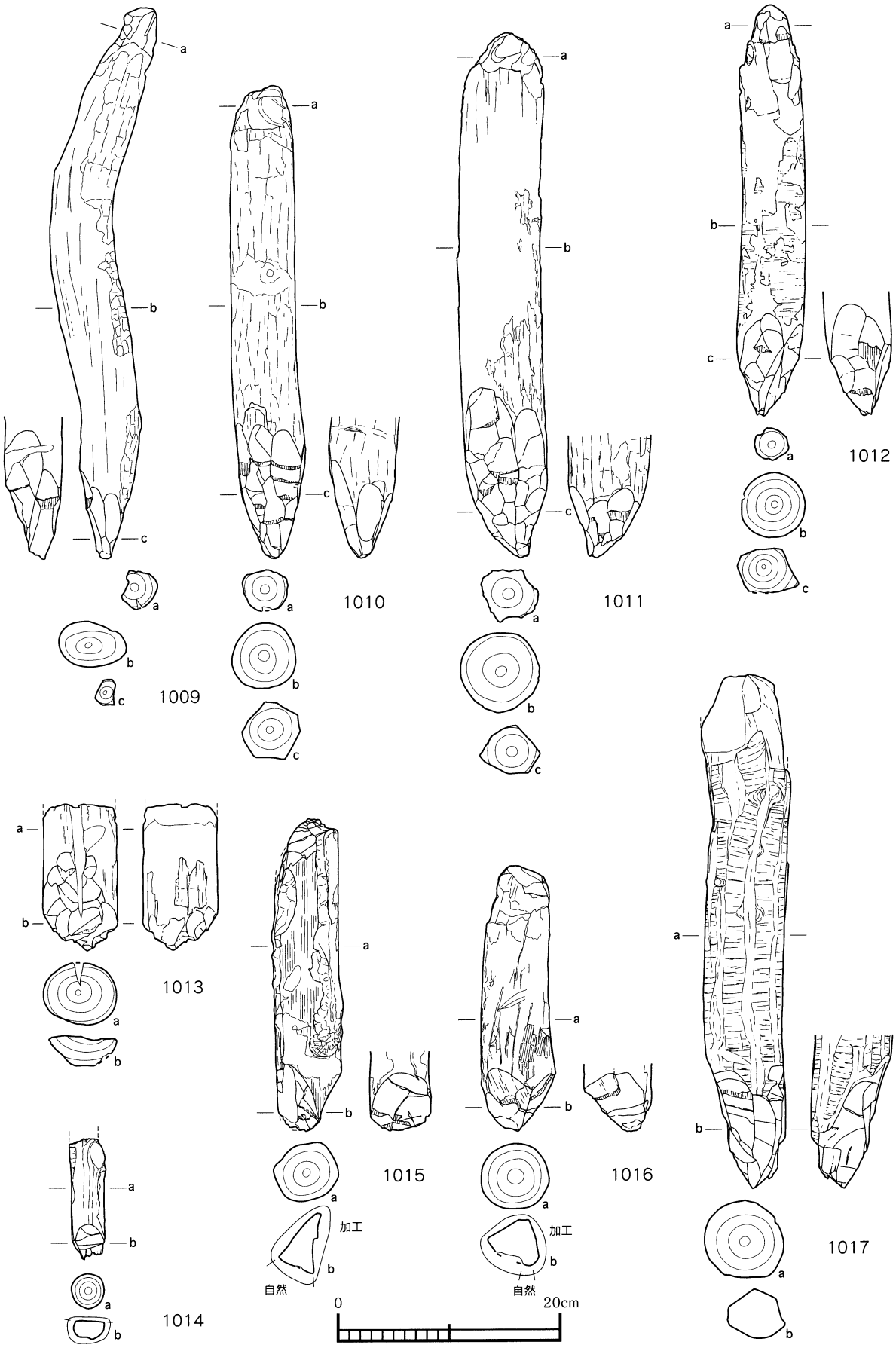
先端の加工が複数の方向から行われるために鋭く尖っている。加工痕の種類はほとんどがA種刃線痕である。

丸杭

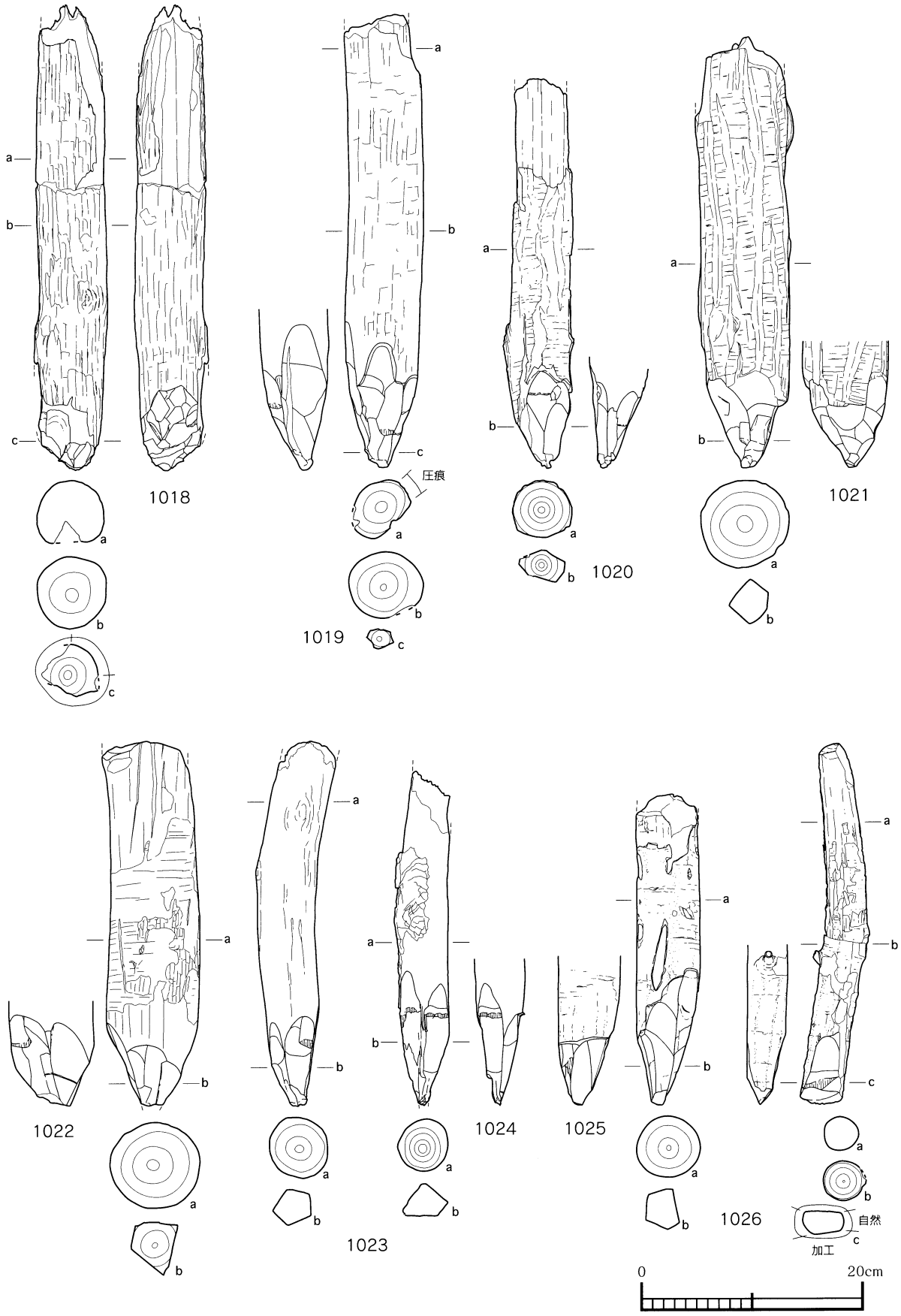
1009～1026は芯持材を利用した丸杭で，全て表面には樹皮が残っている。1009～1012は杭の上端を細く削り出しており，他の部材と組み合わせて使用していた可能性がある。1009は杭の先端を５面に加工し，加工部には凸状刃こぼれ痕が残っている。削り出された杭の上端にも加工痕が残る。1010の杭の上面は打ち込まれた際に平坦になったと思われる。先端は多面から加工され，凸状刃こぼれ痕が顕著にみられる。1011の上部は加工のために先細りする形態である。先端は加工単位が複雑に切りあい，凸状刃こぼれ痕，刃端痕が確認できる。1012の上部は加工によって上端が細くなっている。摩耗のために上端の加工単位は不明である。先端は４面に加工されている。1013の先端は２面，1014の先端は片側１面の加工である。1015・1016の上部は削り出されている可能性がある。共に先端の加工部には，刃端痕，凸状刃こぼれ痕が残る。1018の先端は多方面から加工されているために加工単位が複雑に切りあっている。1019は上部の右側面に圧痕が残り先端は５面に加工されている。1021は先端を５面に加工している。加工幅が3.5ｃｍと大きく加工部には刃端痕が残る。1022は最大直径8.2ｃｍの大型の丸杭である。先端部は４面に加工され，刃端痕が残っている。1026の先端は２面に加工され，加工部の両側面には樹皮が残っている。

角杭・割杭

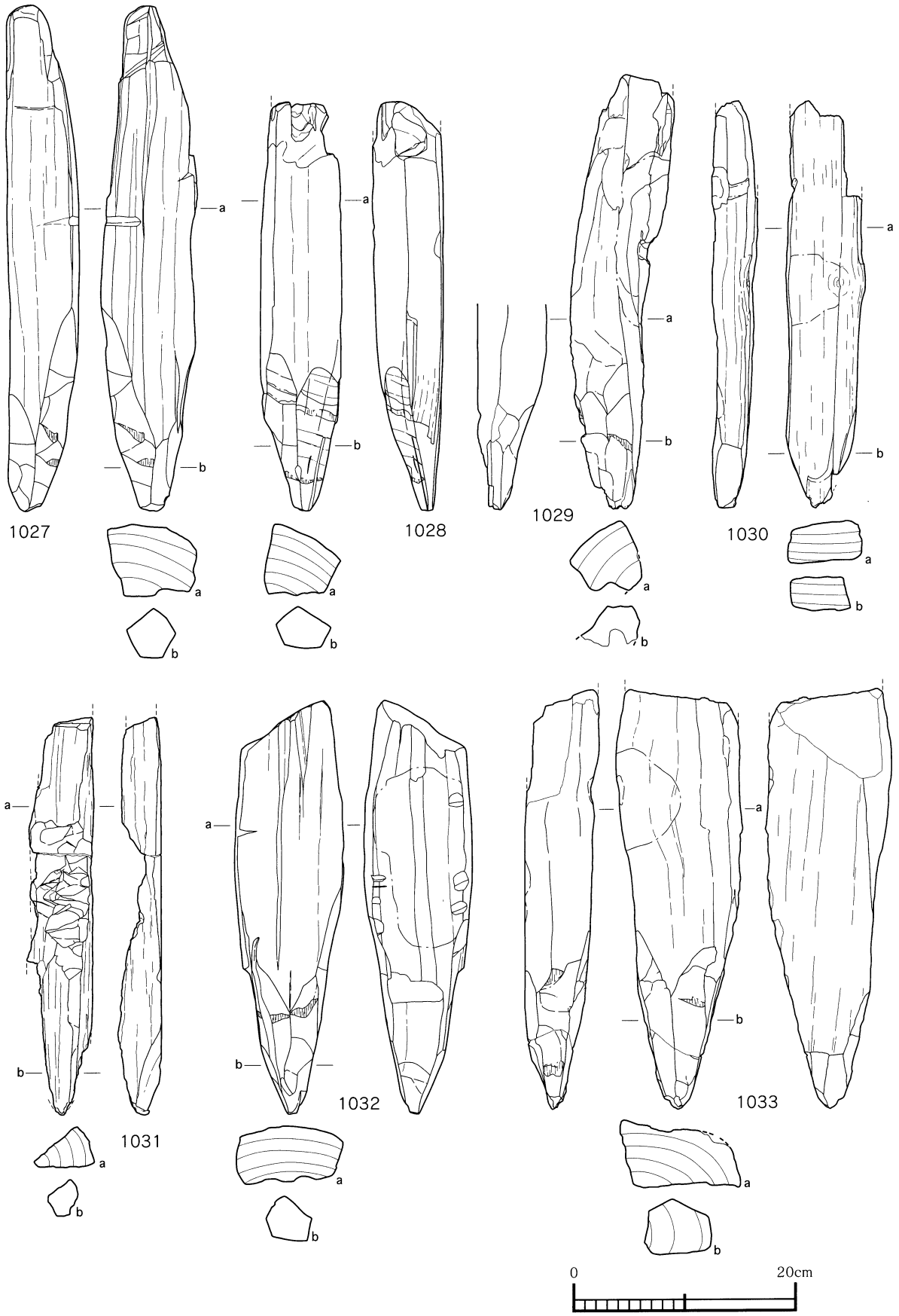
1027～1047は角杭及び割杭で，建築材を転用したものも含まれている。1027～1033は杭に加工や，圧痕が残っているものである。1027は長さ45.6ｃｍ，最大幅8.1ｃｍの角杭である。上端から約６cmは断面方形に一段細く削り出されている。先端部は４面に加工されている。建築部材の転用品と思われ，杭上部の加工が転用される以前，以後のどちらのものであるかは不明である。1028は杭の正面と側面の上部２か所に略方形に近い穴が開けられている。穴は貫通せず，内面は丸みを帯び，面を整えて成形していない。大きさは正面の穴が横２ｃｍ×縦3.4ｃｍ，深さ1.5ｃｍ，側面の穴が横2.8ｃｍ，縦4.7ｃｍ，深さ1.7ｃｍである。先端は加工単位が明瞭でなく，木端に覆われていない刃線痕が多く残ることから加工の種類はＢ種刃線痕と思われる。1029はみかん割り状の割杭で右側面中央に幅1.5ｃｍの方形を呈する穿孔が施され，その周囲は押圧によって浅く凹んでいる。1030は断面方形の板目材を利用した角杭である。左側面には幅1,1ｃｍの穿孔が施され正面中央に圧痕が見られる。丁寧に加工された角材であることから建築材の転用品と思われる。1031はみかん割り状の割杭である。杭の中央部を縦方向に14ｃｍ程削り込んでいる。加工部には，複雑に加工単位が切り合っており，刃線痕も多く残る。1032・1033は建築材を利用した大型の角杭で，共に圧痕が残っている。1032は板目材を利用した角杭で杭の中央部に16ｃｍ×８ｃｍの圧痕が残っている。先端は５面に加工され，刃端痕が残っている。1033は杭の上部に９ｃｍ×5.5ｃｍの範囲で圧痕が残っている。1034～1039は板状を呈し，先端の加工が他の杭に比べ施されていないものである。1034はみかん割り状の木材を利用し，先端は潰れている。1036･1037は柾目材を利用したものである。1038・1039は樹皮付近を利用した板目材を使用している。



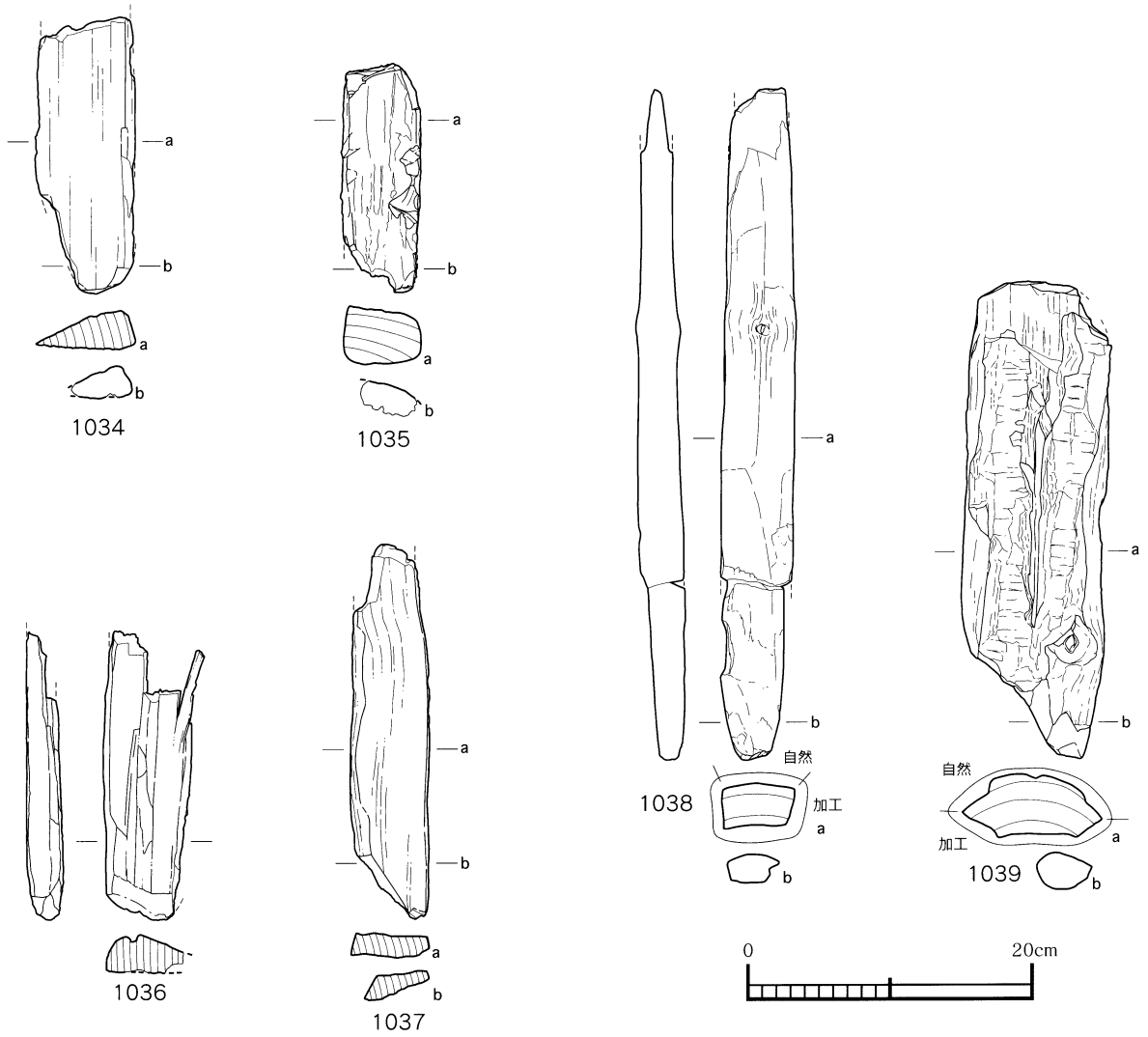
第126図　溝状遺構２内杭（１）



第127図　溝状遺構２内杭（２）

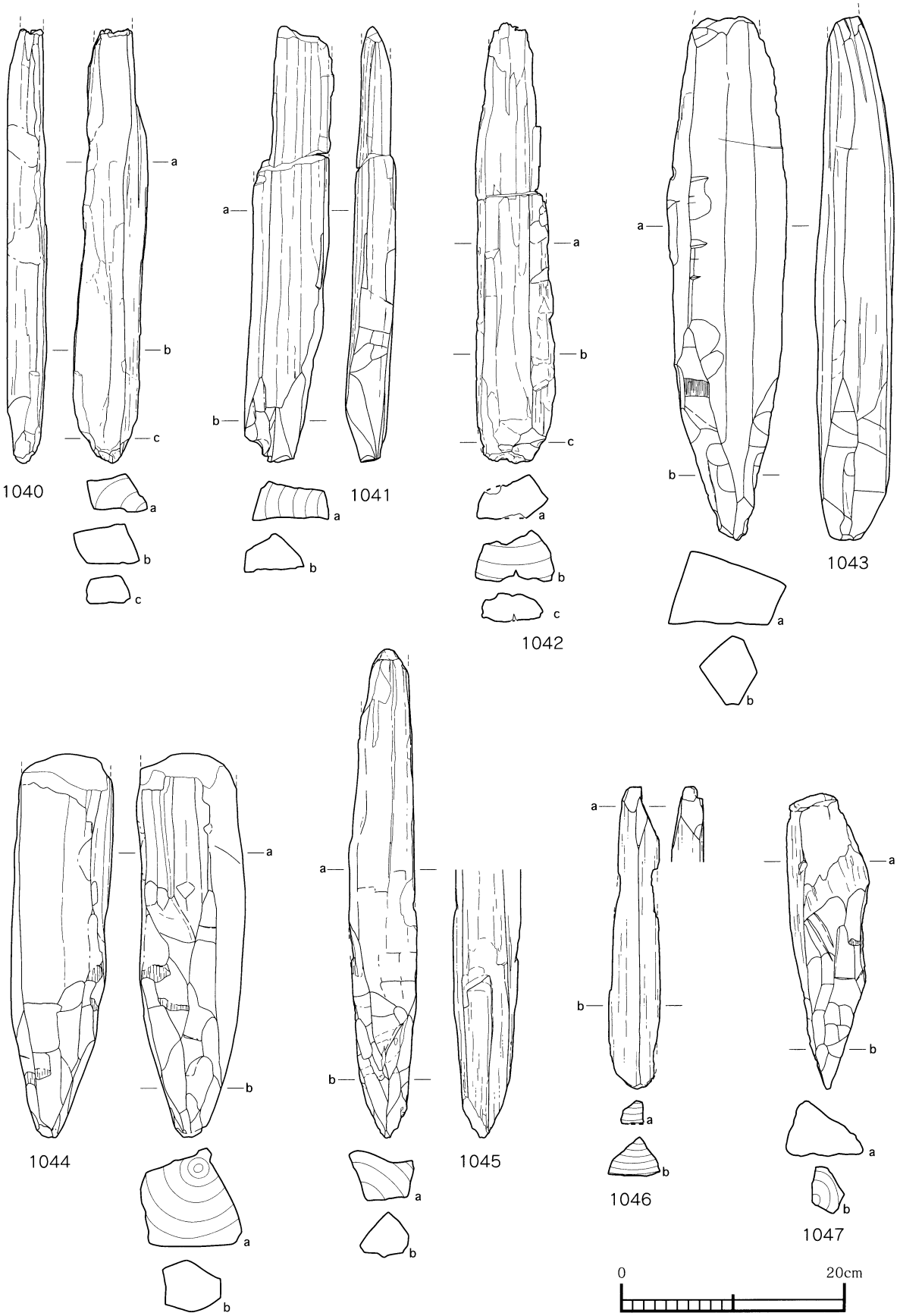


第128図　溝状遺構２内杭（３）

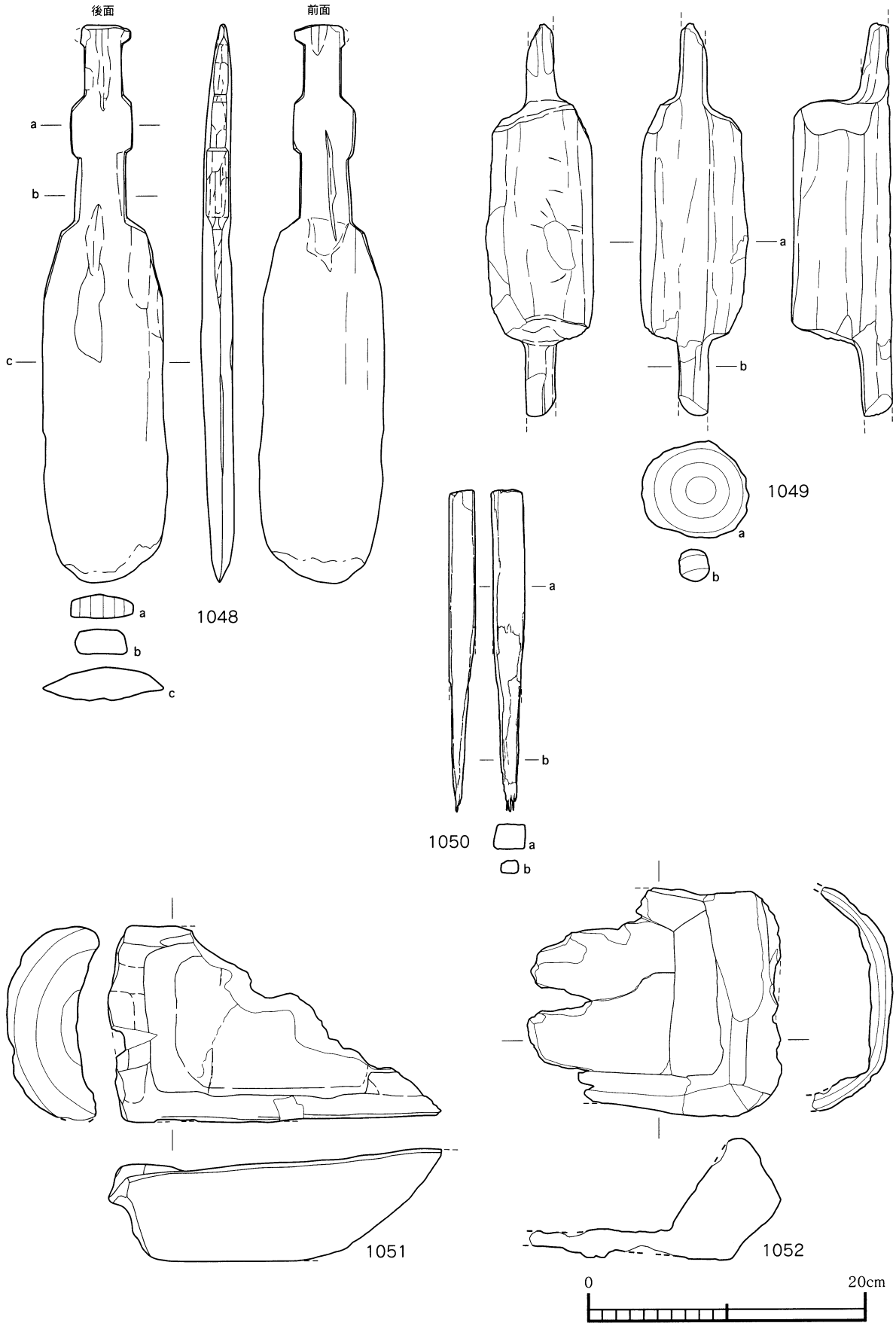


第129図　溝状遺構２内杭（４）

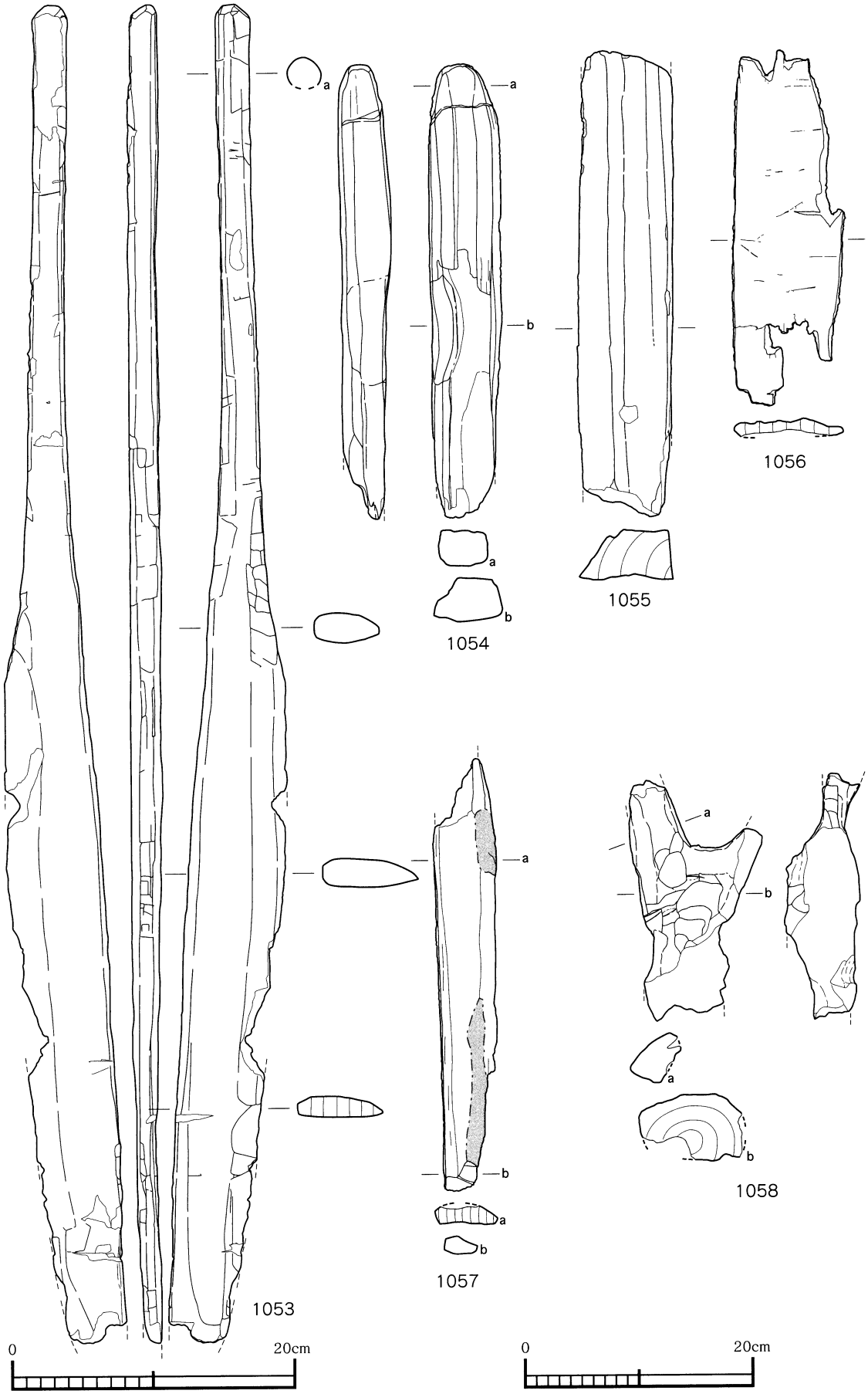
1039の上端には切断の際の加工痕が残っている。先端は１面のみの簡単な加工が施されている。1040～1047は割杭及び角杭である。1040は右側面に２か所圧痕が残っている。先端の加工は粗雑である。1041は断面方形の角杭である。先端は２面に加工され，刃端痕が残っている。1043は残存長47.4ｃｍ，最大幅10.8ｃｍの大型の角杭である。杭の上部は先端に比べ厚さが薄く上端には加工痕がみられる。全体を丁寧に削りだしていることから建築材の転用品と思われる。1044は芯持材を利用した大型の角杭で，建築材の転用品と思われる。最大厚は9.3ｃｍで，右側面に圧痕が２か所残っている。1046は断面が三角形を呈するみかん割り状の割杭である。先端は未加工で潰れている。上端は３面に加工されている。1047の先端は，縦方向に短い加工単位が複雑に切りあい，数回に渡り加工されている。加工幅は2.5ｃｍで，断面がかなり湾曲している。刃線痕が木端に覆われていないことからＢ種刃線痕と思われる。杭の上端は平坦となっている。



第130図　溝状遺構２内杭（５）



第131図　溝状遺構２出土木製品（１）



第132図　溝状遺構２出土木製品（２）

溝状遺構２　出土木製品

総数23点の木製品が出土した。大半は製材片や用途不明の木材片であった。その中から農具や容器など12点を選び図化した。

曲柄平鍬（第131図 1048）

軸部長13.7ｃｍ，刃部長26.1ｃｍ，全長は39.8ｃｍである。軸頭は幅１ｃｍ程両側へ張り出し外側に向かって薄くなる。軸部の中央両端は長さ４ｃｍ，幅１ｃｍ程外側へ張り出している。軸部の断面形は後面が丸みを帯び，前面は平坦で両側面は垂直に加工されている。刃部との境には小さな肩をもち，明瞭に区画され，そこから刃部両側が平行に伸びる。後面には鍬身の中心に沿って軸部と刃部の２か所に浅い凹みがみられる。前者が長さ7.5ｃｍ，幅１ｃｍ，深さ３ｍｍ，後者が長さ6.5ｃｍ，幅1.2ｃｍ、深さ２㎜である。また，軸部の前面にも長さ8.2ｃｍ，幅５ｍｍ，深さ２ｍｍの溝状の凹みが残っている。さらに，刃部と軸部の境は浅く凹んでおり，鍬台に装着した際の圧痕と考えられる。刃部の先端は後面の左側が特に摩耗しており、左利きの人が使用したと思われる。

容器（第131図 1051,1052）

1051・1052は芯持材を半割して刳り抜き製作している。1051は左側の短辺に厚さ１ｃ

第22表　溝状遺構２出土土器観察表　　（　）は復元径

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様 外面	調整・文様 内面	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	法量(cm) 器高	胎土	焼成	備考
116	905	弥生土器	甕		Ⅰa	内:浅黄色2.5Y7/3 外:にぶい黄橙色10YR7/4	口縁:横ナデ 胴部:ハケ目後横ナデ	ハケ目後横ナデ	(16.1)	－	－	石英，角閃石を多く含む	良好	
116	906	弥生土器	甕		Ⅰa	内:にぶい黄橙色10YR7/2 外:にぶい黄橙色10YR6/3	ハケ目，横ナデ	ハケ目，ナデ	(21.3)	－	(6.4)	角閃石，石英を含む	良好	煤付着
116	907	弥生土器	甕		Ⅰa	内:黒色10YR2/1 外:灰白色10YR8/2	ハケ目後ナデ	ハケ目，ナデ，削り，ミガキ	(19.0)	－	－	石英を多く含む	良好	煤付着
116	908	弥生土器	甕		Ⅰc	内:淡黄色2.5Y8/3 外:灰黄色2.5Y7/2	ハケ目後ナデ	ナデ	(24.9)	－	－	石英を所々に含む	良好	煤付着
116	909	弥生土器	甕		Ⅰc	内:灰黄褐色10YR6/2 外:灰黄褐色10YR5/2	ハケ目後板ナデ	ハケ目，横ナデ	(24.2)	－	－	石英を多く含む	良好	煤付着
116	910	弥生土器	甕		Ⅰc	内:にぶい橙色7.5YR7/4 外:浅黄橙色10YR8/4	口縁:横ナデ 胴部:ハケ目後横ナデ	ハケ目後ナデ	(19.2)	－	－	石英，角閃石を含む	良好	
116	911	弥生土器	甕		Ⅰc	内:灰白色2.5Y7/1 外:黄灰色2.5Y4/1	板ナデ	口縁:横ナデ 胴部:ハケ目	(25.1)	－	－	石英，角閃石を所々に含む	良好	煤付着
116	912	弥生土器	甕		Ⅰc	内:にぶい黄橙色10YR7/2 外:にぶい黄橙色10YR7/3	ハケ目，ナデ，板ナデ	ハケ目，板ナデ	(23.7)	－	(4.2)	石英を多く含む	良好	
116	913	弥生土器	甕		Ⅰc	内:灰黄褐色10YR6/2 外:灰白色10YR7/1	ハケ目後板ナデ	横ナデ，ナデ	(21.4)	－	－	石英を含む	良好	
116	914	弥生土器	甕	Ⅱ	Ⅰc	内:灰黄色2.5Y7/2 外:にぶい黄橙色10YR7/3	ハケ目	ナデ	(17.9)	－	－	石英，角閃石を所々に含む	良好	
116	915	弥生土器	甕		Ⅰc	内:灰白色10YR8/2 外:浅黄色2.5Y7/3	ハケ目	ハケ目，横ナデ	－	－	－	石英を多く含む	良好	
116	916	弥生土器	甕		Ⅰc	内:褐灰色10YR5/1 外:にぶい黄橙色10YR6/3	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	－	－	－	石英を多く含む角閃石を所々に含む	良好	
116	917	弥生土器	甕		Ⅰc	内:灰黄褐色10YR6/2 外:褐灰色10YR6/1	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	－	－	－	石英，角閃石を含む	良好	
116	918	弥生土器	甕		Ⅰc	内:灰白色10YR7/1 外:褐灰色10YR6/1	ハケ目	ハケ目	－	－	－	石英を所々に含む	良好	
117	919	弥生土器	甕		Ⅰc	内:灰白色2.5Y8/2 外:浅黄色2.5Y7/3	ハケ目	ハケ目	－	－	－	石英を微量含む	良好	
117	920	弥生土器	甕		Ⅰc	内:灰黄褐色10YR6/2 外:灰白色10YR8/2	ハケ目	ハケ目	－	－	－	石英を多く含む	良好	
117	921	弥生土器	甕		Ⅰc	内:にぶい黄色2.5Y6/3 外:浅黄色2.5Y7/3	板ナデ	ハケ目	－	－	－	石英を多く含む	良好	
117	922	弥生土器	甕		Ⅰc	内:浅黄色2.5Y7/3 外:灰黄色2.5Y7/3	ナデ	ナデ	－	－	－	石英，角閃石を所々に含む	良好	
117	923	弥生土器	甕		Ⅰc	内:灰白色2.5Y7/1 外:黄灰色2.5Y6/1	ハケ後横ナデ	ナデ	－	－	－	石英，角閃石を含む	良好	

挿図番号	遺物番号	種別	器種	層位	分類	色調	調整・文様		法量(cm)			胎土	焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高			
117	924	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅲ	内:灰黄褐色10YR6/2 外:褐灰色10YR6/1	口縁:横ナデ 胴部:工具ナデ,ナデ	横ナデ	(11.7)	5.1	14.0	石英,角閃石を多く含む	良好	
117	925	弥生土器	甕	Ⅰ	Ⅲ	内:明褐色7.5YR5/8 外:口縁部　黒色2.5Y2/1 胴部:にぶい黄橙色10YR6/3	ハケ目	ハケ目 胴部下部:ヘラ削り	(24.9)	-	-	石英,角閃石,1mm大の小石を含む	良好	
117	926	弥生土器	甕		Ⅳ	内:にぶい黄橙色10YR7/2 外:浅黄橙色10YR8/4	ハケ目後ナデ	ハケ目後板ナデ,ナデ	-	-	-	石英を微量含む	良好	
117	927	弥生土器	甕	Ⅱ	Ⅳ	内:灰黄褐色10YR6/2 外:にぶい黄橙色10YR7/3	横ナデ,ナデ	ナデ	-	-	-	石英,角閃石を含む	良好	
118	928	弥生土器	甕			内:灰黄色2.5Y7/2 外:灰黄色2.5Y7/2	ハケ目,ナデ	ハケ目後ナデ,ナデ	-	(6.2)	-	石英,角閃石を所々に含む	良好	
118	929	弥生土器	甕			内:灰白色2.5Y8/2 外:灰白色5Y8/2	工具ナデ,横ナデ	工具ナデ後ナデ	-	(7.7)	-	石英,角閃石,長石を含む	良好	
118	930	弥生土器	甕			内:灰白色10YR7/1 外:にぶい黄橙色10YR7/4	ハケ目,ハケ後ナデ	ハケ目	-	-	-	石英,角閃石を含む 白い小石を多く含む	良好	
118	931	弥生土器	甕			内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:にぶい黄橙色10YR6/3	ハケ目,横ナデ	ハケ目	-	8.9	-	石英,角閃石を含む 白い小石を多く含む	良好	
118	932	弥生土器	甕			内:にぶい橙色7.5YR7/3 外:灰白色7.5YR8/2	ハケ目後ナデ	板ナデ,ハケ目	-	9.2	-	石英を所々に含む	良好	
118	933	弥生土器	甕			内:にぶい黄褐色10YR5/3 外:にぶい黄橙色10YR6/4	工具ナデ	ナデ,工具ナデ	-	10.2	-	石英,角閃石を多く含む		
118	934	弥生土器	甕			内:灰黄色2.5YR7/2 外:灰白色10YR8/2	板ナデ後ナデ	ナデ	-	8.0	-	石英,角閃石を所々に含む	良好	
118	935	弥生土器	甕			内:灰白色10YR7/1 外:にぶい黄橙色10YR7/2	板ナデ後ナデ	ナデ	-	7.1	-	石英を多く含む	良好	
118	936	弥生土器	甕			内:褐灰色10YR5/1 外:灰白色10YR8/2	ハケ目,ナデ	ナデ	-	7.2	-	石英,角閃石を所々に含む	良好	
118	937	弥生土器	甕			内:浅黄橙色10YR8/3 外:灰白色2.5Y8/2	板ナデ後ナデ	ハケ目	-	8.8	-	石英を所々に含む	良好	
118	938	弥生土器	甕			内:にぶい黄橙色10YR6/4 外:にぶい黄橙色10YR6/3	ハケ目,ナデ	ハケ目,ナデ	-	10.2	-	石英を多く含む	良好	
118	939	弥生土器	甕			内:にぶい黄橙色10YR7/2 外:灰白色10YR7/1	ハケ目,ハケ後ナデ	ハケ目,ナデ	-	7.9	-	石英を微量に含む	良好	
118	940	弥生土器	甕			内:灰黄褐色10YR6/2 外:にぶい黄橙色10YR7/2	ハケ目	ハケ目後ナデ	-	-	-	石英を含む	良好	
118	941	弥生土器	壷		Ⅰa	内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:灰黄褐色10YR6/2	ナデ,ハケ目,ハケ後ナデ	ハケ目	-	8.9	-	石英を所々に含む 白い砂粒を微量に含む	良好	
118	942	弥生土器	壷		Ⅰa	内:灰白色10YR8/2 外:灰黄褐色10YR6/2	ナデ,横ナデ	板ナデ後ナデ	-	10.8	-	石英を多く含む	良好	
119	943	弥生土器	壷		Ⅱ	内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:浅黄橙色10YR8/4	口縁:横ナデ 胴部:ハケ目,削り後ハケ目	ハケ目	10.7	4.5	19.8	石英,角閃石を含む	良好	
119	944	弥生土器	壷			内:灰白色10YR8/2 外:灰白色2.5Y8/2	ハケ目後1部ナデ,ナデ	ヘラ削り,ナデ	-	4.7	-	精製された胎土	良好	
119	945	弥生土器	壷			内:灰黄色2.5Y7/2 外:灰白色2.5Y8/2	ハケ目,ナデ	ハケ目後ナデ	(16.0)	-	35.9	角閃石,石英を含む		
119	946	弥生土器	壷			内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:にぶい黄橙色10YR7/4	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	11.2	-	-	精製された胎土	良好	
119	947	弥生土器	壷			内:灰白色2.5Y7/1 外:灰黄色2.5Y7/2	横ナデ,ナデ	ナデ	(17.5)	-	-	石英,角閃石を含む	良好	
119	948	弥生土器	壷			内:灰黄褐色10YR6/2 外:にぶい黄橙色10YR7/3	ハケ目後横ナデ,ハケ目	横ナデ,ナデ	(11.6)	-	-	石英,角閃石を多く含む	良好	
120	949	弥生土器	壷			内:にぶい黄橙色10YR7/4 外:にぶい黄橙色10YR7/3	ハケ目後ナデ	横ナデ	(15.8)	-	-	石英を多く含む 角閃石を微量含む	良好	
120	950	弥生土器	壷			内:にぶい黄橙色10YR6/3 外:灰白色10YR8/2	ナデ	ナデ	-	-	-	石英,角閃石を含む	良好	
120	951	弥生土器	壷			内:にぶい黄橙色10YR7/2 外:灰白色10YR8/2	ナデ	板ナデ後ナデ	-	2.7	-	石英,角閃石を所々含む	良好	
120	952	弥生土器	壷			内:にぶい黄橙色10YR7/2 外:にぶい黄橙色10YR7/3	ハケ目,ハケ後ナデ	ナデ	-	4.0	-	石英,角閃石を所々含む	良好	
120	953	弥生土器	壷			内:灰黄色2.5Y7/1 外:にぶい黄橙色10YR7/2	ハケ目,ヘラ削り後ナデ,板ナデ	ハケ目,ナデ	-	-	-	石英,角閃石、長石を所々含む	良好	
120	954	弥生土器	壷			内:灰黄色2.5Y7/1 外:灰白色2.5Y7/1	ハケ目後ナデ	ハケ目板ナデ,ナデ	-	-	-	石英を多く含む	良好	
120	955	弥生土器	壷			内:にぶい黄橙色10YR7/3 外:にぶい黄橙色10YR7/4	ナデ	ナデ,ヘラ削り	-	3.0	-	石英,角閃石を所々含む	良好	